昭和五年八月廿五日印刷
昭和五年八月廿九日發行

上製 新井石禪全集 第十卷

著作權者 髀雲晩成
編纂者 山田靈林
發行者 飯野政晴
東京府北豐島郡中新井一九五四番地
印刷者 加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二番地
印刷所 加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所内
新井石禪全集刊行會
電話芝(四)一四八六番
振替東京四五四三二番

（製本 菊池製本所）

【は】

【ひ】

【ふ】

【へ】

【ほ】

【ま】

【き】

【く】

【け】

【こ】

新井石禪全集 禪樹茶話篇 索引

【や】

【ゆ】

【よ】

【り】

【れ】

【わ】

【な】

【に】

【ね】

【の】

【は】

【ひ】

【た】

【ち】

【つ】

【て】

【と】

【す】

【せ】

【そ】

【さ】

【し】

【き】

【く】

【け】

【こ】

新井石禪全集 隨感隨想篇 索引

【い】

【う】

【お】

【か】

と言はれ、病勢の漸長なる時、只一度「痛く無いでも無い」と仰せになつた。是れ全く八十年來克己的修養を積まれたる氣力の致す所であらう。

要するに禪師の禪師たる最高美點は、辯才に非ず、學藝に非ず、文彩に非ず、技巧に非ず、只々平常心是道なる所にある。禪師の渾身渾心は實に是れ大乘の機軸にして萬世の典型であります。

ぬ。詩偈の草稿などは多くは古き包み紙に認められた程である。

又、行持の堅固なることは青年の時代よりして一點の非難を受くる餘地もあらせられなんだ。又、慈愛の深かりしことは大海の宏深なるが如くであつたから、小兒も猶ほ懐くといふ程に御優美いところがあつた。嚴正にして侵すべからざる所に溫柔にして得も言はれぬ愛敬の徳を備へさせられた。その禪風に至つては、曾て棒喝を弄せず機鋒を露さず、故に一見して禪なきが如く、再見すれば禪界に入るが如く、仔細に參じ去れば欲界と禪界との外に超然として宇宙の大精神に觸るゝの感がある。

而して、詩偈の如きは毫も推敲を費さず、紛飾を加へず、洒々落々、脱體の露現である。然も其の間に道味の津々たるものありて、一誦再讀益々甘露を飲むが如き感じがする。大正三年十二月豆州熱海御靜養「歳晩」の題にて

幻齡八十一年冬、志氣猶如㆓雪裡松㆒、慚愧常虚㆓住山席㆒、隔㆑雲遙拜吉祥峰

此の一篇を拜誦するも禪師の御道念の極めて御親切なることが窺はれるではないか。

禪師は奇特を好み神通を愛するといふこと無く、承陽大師の所謂日々の行持を尊重せられました。其の精力の絶倫なる、毎夜或は端坐し或は讀書し、殆ど一日をも空ふしたまふことは無かつた。多少の病を感ぜらるゝことがあつても、更に苦しいとか痛いとか仰せられたことが無い。御最後の時の如きは、數病倶發の狀態なりしが、苦痛を訴へられしことは一度も無い。僅かに御尋ねに及ぶと『なんとも無い』

禪師は天性に聖質を備へたまひ、度量は海の如く、心操珠の如く、行持金鐵の如く、慈愛甘露の如くであつた。度量の寛洪をいへば平生喜怒ともに色に現はすこと無く、侍僧に不行屆きあるとも未だ一回も高聲に叱咤したまふことは無かつた。明治二十七年の秋、東京に大震災ありし時、禪師は書見せられて居りしが、左しもに猛烈な震動に遇はれても殆ど知らざるが如く、唯だ讀みかけの書を御手に持ちながら、頭を擧げて天上を見て居られただけであつた。

又、曾て對口瘡を發した時、赤十字病院長橋本綱常先生が診治既に手遲れとなれりと言はれた程でありしが、一言も痛苦を訴へらるゝことが無かつた。大手術を行うた時、御氣分如何と伺ひしに、「切らぬ前より樂ぢや」と一言仰せられたのみで、平癒まで幾十日の間、晝夜端坐のみして居られました。尤も、禪師は平時と雖も外出などをせられぬ。或人が「猊下は運動したまはずや」と伺ひしに「私は運動せざるを以て運動とす」と答へられました。

又、御心操の堅固にして優美なることは實に肉身の大菩薩である。寢室に在りても、公界に在りても、少しも禮式の上に變動は無い。表裡なく、内外なく、八面玲瓏明珠の玉盤に轉ずるが如くであられました。殊に物に對する行儀の綿密なることは恐れ入つたものである。その一例を擧ぐれば、新聞一枚でも、紙一切でも、キチンと整齊して一微塵も疎末にはせられぬ。何れの御親化の時にも、御出立の間際には必ず手洗鉢に鈎してある手拭を親ら奇麗に洗はるゝのが例であつた。塵紙一枚でも決して疎略にはなさら

然るに、悲い哉、御衰弱刻々に加はりて、七日の夕刻よりは彌々昏睡の狀態に陷らせられ、八日に至りて益々昏睡の度を增し、九日の午前九時過には全く御重態となられました。そこで、一旦芝の永平寺出張所不老閣へ御移りを願うたが、禪師は昏睡の儘何等の御苦痛も無く、午後零時四十分といふに遂に涅槃の雲に匿れさせたまうたのである。彌々御最後と見るや、御山及出張所職員、徒弟、隨徒、並に杉浦嘉七、宏園子氏等の信徒が御枕邊を圍繞しけるに、禪師は微かに眼を開き、左の御目より御涙を流されたるまゝ御臨終を遂げられたのは、全く永訣を告るの御思召であられしならんと思はれて、轉た悲涙の滂沱たるを覺えたことである。末松謙澄子爵は之を聞て

飛レ錫乘レ杯遍二遐邇一、淚痕一滴了二生涯一、娑婆八十二年夢、覺作曹溪彼岸花。

禪師一滴の淚は化して天下萬民の淚と爲り、宗の異同に論なく、擧國皆な哀悼の誠を捧げざるは無い。

御遺骸を留むること三日、御面貌實に生ける如くであつた。十三日午後、萬年山青松寺に於て密葬を營み、其の夜、桐谷にて荼毘の烟りとなし、十四日遺骨を收め、十六日午前八時東京を發し、名古屋布池町奉安殿に一泊、十七日の夜福井に赴き孝顯寺に於てまた一泊、至る處未曾有の盛大なる送迎を受け、十八日午後一時本山に御安着、直ちに妙高臺に奉安せられました。

博士來りて耳の御手當に及びたり。古川主治醫も立合ひ、監院以下の職員も枕頭に侍して居りし。

禪師は眼を開いて左右を熟視し、迂拙等を指しつゝ『もう駄目であらう、破れた家のクスクリ造作は役に立たぬ、壽命があらば百までも儲からうが、大概いくまいから却て手を引いたが宜しからう、老衲の知る所は此の程度迄も知つて居る……』と仰せられたが、その語調には凛乎たる所があつて、其の御言葉の底には何となく津々たる妙味あるかに感ぜられて、迂拙等は半ばは笑ひ半ばは涙に暮れたのである。午前十時頃、仰臥のまゝ慨然と『耕雲種月、八十二年、脫落々々、一箭離弦』といへる遺偈を口誦せられ、前監院弘津說三師に代書せしめられた。それよりは殆ど半睡の狀態であつた。迂拙が『御氣分は如何』と筆記して御目にかけしに『好くも無し惡くも無し』と御答へなされ、『御腹は痛みますか』と尋ね上げしに『痛くないでも無い』との御答であつた。

六日も、午後には御元氣づき、篤信の人々が潜かに病室に入りて御脈を拜せしに、禪師は眼を開いて之を認められ『まだ死なぬが追付死ぬだらう、其の時はまた知らせるから安心して居るが好い』などゝ仰せられた。御意識の明瞭なることは殆ど平日に異ならず、且つ入澤・青木・金杉の三博士來診して、『禪師の心臟は普通人の三倍もある、當り前ならば迚も生きて居る身體では無い、然るに年來痼疾となつて健全にて活動して來られた御身であるから、今後の處も確然と判斷は出來ぬ』と言はれ、且つ經過の頗る良好なることを告げられた程であるから、確かに今一度は御全快を見ることが出來やうと思うて居た。

大正四年の一月を迎へられ、三日四日と經つ中に全身に水氣を催ふされしゆゑ、十一日、宗務院事務始めに臨場せられ、引續き曹洞大學の授業始めに御臨みの後、曾て北海道函館の篤信家杉浦鏡華氏が特に芝二本榎圓福寺境内に建設せる不老閣に御移りを乞ひ、切に入澤博士と主治醫古川誠助氏の診療を御勸め申上げたるに、幸にして日一日と快方に赴かれたのである。十七日には赤坂陽泉寺の入佛法會に御應請あられしが、是ぞ最後の御親化とは誰しも思ひ寄らぬことであつた。

二十日の午後に至り、俄かに耳聾せられしかば大に驚き、早速、斯道の大家醫學博士金杉英五郎氏の診療を乞ひしに、輕微なる中耳炎なりと診斷せられ、三周間位にて全治すべしとの意見であつた。成る程、格別の御痛みも無く、經過も洵に順調であられしゆゑ一同は大に安心して、二十六日、曹洞大學青年會の承陽大師降誕會と、二十七日の本山出張所吉祥講とには御親化御見合せを願ひしも、つまり中耳炎の爲めに繃帶を施されて居たからであつた。

二月に入りて醫士は御經過の日増しに良好なることを告げしかば、專ら御全快の日の至るを待ち居りしに、四日の夕刻、藥石を召上りて後約四十分間を經て、突然激烈なる胃腸の御煩ひに罹られた。古川主治醫及び醫學博士高木兼二氏・入澤博士は相前後して倉皇來診し、急性胃腸加答兒と斷じ應急の手當を施されました。其の夜は、出張所職員一同、圓福寺に馳付け徹夜看護に努めたり。五日の朝に至りて胃腸も稍や調ひ元氣も頗る回復せられたるも、如何せん御衰弱甚しくして、自然身體も自由ならず、時に金杉

國に多くあられたが、中に就て越後の國が一番化緣が深かつた樣に思ふ。明治六年の冬、能登國昌樹寺の戒會に應請せられたのが戒師を勤められた最初であつた。而して大正三年十月、名古屋禪芳寺が戒師の勤め收めである。此の四十三年間に戒師を勤められた數が三百五十餘會で、禪師より菩薩戒を受けたる戒弟は約三十萬人、因緣血脈を拜受せし者の數は凡そ百萬人以上はあるであらう。又、新地建立や法地開闢の寺院より拜請せられて其の寺の開山となられた箇處は十二ケ寺餘もあるのである。桃李言はずして下自ら蹊を成すの理で、毫も自ら求めたまふこと無くして、是の如き廣大なる御化緣のありしといふは實に不思議と申さねばなりませぬ。

末後の一着

禪師は前に述べたる如く、本山に御親董（住職すること）あられしより二十五年一貫して無間斷に親く敎化を致かれ、その元氣の旺盛なる、身體の健康なるは驚くべき程でありしが、大正三年の冬より豫ての持病なる心臟がとかくに思はしからざりしかば、十二月の初め、醫學博士入澤達吉氏を聘して健康診察を乞ひしに、心臟及び脈管に疾病ある爲め脚部に水氣あることを發見せられた。そこで相當の御手當を施し、且つ轉地を勸められたれば、歲末まで豆州熱海にて靜養して歸京せられた。多少御衰弱の模樣はありしも、御元氣は相變らず頗る宜しかつたのである。

定められた。又、三十八年五月には眼藏會を本山に開き、適當の講師を選任して正法眼藏を提唱し、一般道俗の參聽を許され、是れ亦年々の定例と致されました。三十九年には總持寺貫首大圓玄致禪師と御協議の上、宗憲以下宗門百般の法規を御改正になり、大に綱紀の伸張を御圖り下された。四十二年九月二十日には大正天皇が皇太子殿下にておはしまし、御見學の爲め北陸御行啓の因を以て鶴駕を本山に枉げさせられ、御駐輦三四時間、その際禪師の御先導にて徧ねく諸堂を御巡覽遊ばされ、斜ならず御滿足あらせられた。其の外、禪師の御盛業と御偉勳とは到底筆紙に盡すことは出來ませぬ。禪師の本山に住せらるゝこと前後二十五年、本山歷代の貫首中第二位の御永住であらせられます。その間、年々歲々各地方の懇請に應じて御親化の爲め一年中の大部分は御巡錫遊ばされたのである。曾ては滿洲より樺太までも御巡化下されました。

元來、本山永平寺は明治維新の際、境内地の外は全分上地せられたれば、至つて骨山であつて、一時は伽藍の維持にも苦む程の悲境に陥つたこともある。然るに、禪師の御代になりて田地二十餘町歩を新添して香積の資に充てられ、山林も亦百餘町步の多きに達し、殊に數年前より植林を經營し永遠の維持法を立てられ、山門を賑はしたまふこと甚だ廣大である。

禪師は殊に衆生緣に富ませられて、青年の時代より道俗に景慕せられ、まだ雲水の時分ですら相當の隨徒があつたのである。明治六年、四十歳の冬より西堂や戒師の請に應ぜられた。其の化緣も初めの中は北

徳院に赴き、禪師の懇請するに死を以てせられた。禪師は其の熱望に餘儀なく、本山六十四世の後董貫首たることを承諾せられたのが九月十二日で、御年は五十八歳であらせられた。其の後間も無く、宗内に意外の紛擾が起り、前後四年に渉りて頗る混亂を極めたるも、禪師は常に公平寛大の量を以て宗門百年の長計を講じ、遂に鎮静を見ることゝなりました。そこで明治二十八年一月管長の職に就かれ、其の年五月二十七日には、明治天皇より性海慈船禪師の徽號を勅賜せられた。翌日、晋山開堂の大禮を擧行せられて本山未曾有の盛況を呈しました。

三十四年には大本山總持寺貫首直心浄國禪師と御協議の上、一宗の大會議を開き、宗門の制度を改善し、大に教學振興の道を御開き下された。三十五年は高祖六百五十回大遠忌に相當するを以て、廣く化を全國に募りて佛殿・僧堂及び瑞雲閣を改築し、諸堂に大修繕を加へ、宿坊を新築し、佛器・法器・什具等を新調せられ、本山の莊嚴を一新し、山門興隆の佳運を開かれました。而して、同年四月十八日より三周間大遠忌報恩法會を奉修せられたるに、閤國の道俗雲の如く聚會し、詣する者日に一萬人以上と注せらる。その事遂に天聴に達し、畏れ多くも明治天皇は特別の思召を以て、高祖眞前に「承陽」と大書せる勅額を賜はれました。之より先き、本山布教師を全國に特派して高祖大師の遺訓を宣揚せられしかば、到る處に吉祥講は組織され、團體參拜は催され、その化風遐邇に洽く徳光は中外に耀き渡つたのである。

三十七年四月二十三日、本山に於て報恩授戒會を啓建せられてより年々之を修行し、本山永久の恒規と

四十二歳の時、金澤天德院活宗和尚退隱しその後住たらんことを懇請せられた。禪師は其の同情の厚きに感じて遂に點頭せられた。四月二日を以て晋山の式を擧げられたが、これより禪師の德風は遠近に漲り、會下の禪侶は常恒百名を下らず、夏冬ともに諸方の請待を受け、天下の人は齊く海內隨一の舊叢林として推賞するに至つたのである。併し奕堂禪師に盡さるゝ孝順の德は益々親密にして、明治十二年八月二十四日、同禪師の御遷化まで終始一貫して御補導なされました。

明治二十一年二月、兩大本山に於て宗門法式の改正と統一とを企てられ、禪師を該委員長に任ぜられた。禪師は幾度か辭退せられたるも聞屆られざるを以て、餘儀なく東京に出で、滯在八箇月にして法式の改正を大成し、洞上行持軌範を編製せられました。禪師は安政三年に江戸を辭してより、皇政維新後、江戸を東京と改めて非常なる大變事ありしにも拘はらず、未だ一度も東京に來らず、三十三年目に漸く昔の江戸に來られたのである。此の一事を見るも、禪師が如何に名利の巷に近かず、超然として古風を操持せられたかゞ偲ばるゝではありませぬか。

本山中興の偉勳

明治二十四年、大本山永平寺貫首眞晃斷際師御退休の後、禪師は全國末派寺院の公選にて後董に推されしに、禪師は固く之を辭退せられた。そこで、今の永平寺の西堂福山默童老師が末派の意志を代表して天

し、陽泉寺天瑞白龍和尚の室に入りて嗣法し、釋尊八十一代の祖位を御繼承なされました。白龍和尚は得度の師秦門和尚の法嗣にて禪師の師兄に當るのでありしが、得度師既に圓寂せられしゆゑ、改めて師資の緣を結ばれたのである。之より先き、幾多の尊宿より歸入を勸められしも、禪師は固く辭退して、師兄の法を繼がれたるは、全く師恩に報答する至情の深きに依るものと思はれる。

元治元年三月五日には大本山總持寺にて轉衣せられ、同月十九日、京都に參内して御綸旨を拜戴せられた。慶應三年十月、三十四歲にして首て金澤の龍德寺に住職せられたが、在寺の日は殆ど無い位で、常に奕堂禪師に近侍して接化を弼け院事を總監せられたのである。

明治三年、奕堂禪師は大本山總持寺に獨住一世として貫首の席を董されました。奕堂禪師は大本山住職を命ぜられし時、天德院に御歸りになつて、大不機嫌であつて、中々御請にならなんださうである。禪師は始終奕堂禪師の侍者を勤められ、奕堂禪師の信任は非常なもので、如何なる事でも禪師の爲された事には容喙せられなんださうだ。尤も、禪師には御自分の隨徒も澤山あられたので、時々四方より請待を受けて出合せらるゝことも數々ありしも、奕堂禪師に對する補導の務めは缺かせらるゝことは無かつたのである。

明治六年四月、金澤永龍寺の懇請を受けて轉住せられ、その夏、結制を修行して盛に宗風を擧揚せられた。尋で石川縣曹洞宗教導取締を命ぜられ、大に地方教導の發展に御盡瘁あらせられた。明治八年の春、

人畜の死傷、無慮幾十萬、それが爲めに八百八街は宛然たる大叫喚の地獄となつたのである。その時は恰も吉祥寺愚禪和尚の授戒會中で、而も懺悔の晩で、禪師も隨喜衆の一人であつたのである。幸にして怪我もせられなんだが、此の時、轉變無常なる人生の狀態を目擊せられて感慨無量であらせられたものと見え、翌年の正月に斷然東都を辭して錫を奕堂禪師の輪下に掛けらるゝことゝなつた。最初相見の時に、自然に感應道交すること恰も承陽大師が天童禪師に見られた時の樣であつたらうと思ふ。禪師は此の時より眞に大修行底の人となられたのである。

奕堂禪師は近代の巨匠であつて、行持の嚴正なる、接衆の辛辣なる、天下の人は其の名を聞た許りでも畏れた程である。禪師は斯る秋霜烈日の如き爐韛裡に投じて、朝參暮請、暫時も措くことなく勇猛精進せられました。奕堂禪師は膂力衆に優れ威氣世を壓する程であつたが、至つて少食な御方であつた。禪師は熟々之を見て深く感ぜられ、自ら節食を誓ひ、如何なる場合にても大食はせまじ、應量器ならば一杯、次鉢ならば二椀を超えじと定められた。此の節食法は全生涯を通じて嚴守せられました。況や僧堂裡の工夫辨道の如きは全く古の高僧碩德の道を求め、禪に參ぜられしにも勝して、實に雲兄水弟の好典型を示されたのである。

安政四年の秋に、奕堂禪師は加賀金澤天德院に轉住せられたが、禪師は常恒近侍して暫くも離れたまふことは無かりしといふ。萬延元年、二十七歲の夏、天德院にて首座職を務め、此の年八月、名古屋に歸省

ら和漢の學を修められた。此の一事を見ても、如何に禪師が青年の時よりして、志操行持の拔群であらせられしかゞ察せらるゝではありませんか。

修養と化導

安政元年、禪師二十一歳の時、名古屋の萬松寺住職に請ぜられても辭退して點頭せられなんだ。大法和尚といふ人から勸められて、その頃、上州前橋の龍海院にて大叢林を開いて居らるゝ奕堂禪師に隨身せんものと志して、始て江戸表に出られたが、一應は江戸の學寮の樣子を知り置かんものと思ひ、先づ駒込吉祥寺の學寮に掛錫せられた。

その時代に外神田御玉ケ池に漢學の塾を開いて居られた東條文藏、號を一堂と稱した名高い先生の處に通うて漢學を修修せられた。塾生は事に侍や財產家の子供計りでありしかば箒一本持つ術も知らず、從つて便所などの穢雜が如る甚しい。禪師は苦々しきことに思ひ、半歳許りの間、通學の度毎に人知れず便所を掃除し洗水鉢の水を替へられた。塾頭の江崎五郎通高(後に姓を那珂と改められた方)が之を知りて非常に感心し、此の事を塾生に告げて、それからは塾生をして交代で便所の掃除をせしめられたさうである。

翌安政二年には近代稀な、有名なる江戸の大地震があつて、三十餘箇處から火災を起し、家屋の潰倒、

嘉永二年、禪師十六歳の時、法兄たる名古屋禪芳寺膺拳和尚の示寂に遭うて歸省せられ、その後は後住たる正道和尚を輔佐して二ヶ年許り同寺に安居せられた。此の時の禪芳寺は非常の貧院にてありしかば、禪師の御辛勞は殆ど想像も及ばぬ程であつた。毎日〳〵御飯を焚たり水を汲まれたり、御米の無い時は應量器を持して伊藤や大丸に行て點心を貰ふのが例であつた。おまけに日天托鉢というて毎日の樣に朝の中は市街に托鉢せられた。其の頃、旭町に菴原先生と稱する漢學者があつたが、御日中過には其處に往て漢學を修められた。自分の小遣ひ錢などは厘毛も冗費せず、多少の餘りがあれば大須の觀世音境内に赴き放魚などを購うて放生の業を修められたと申すことです。

嘉永四年よりは處々方々を遍參して、多くの師家に就て研鑚の功を積まるゝこと、約五箇年許り、此の間、卽ち嘉永五年に越前大本山永平寺に於て開祖承陽大師の六百回大遠忌を勤められた。禪師は正道和尚に隨侍して大遠忌に赴き初中後とも熱心に勤められた。此の大遠忌は非常に盛大なものであつて、日本全國より幾千人の僧侶が集り、さしもに廣き本山の境内も殆ど僧侶を以て埋められた程であつた。その中でも禪師は一際邁れて威儀整齊、起居端正、殊に毫も雜談戯論の樣子なく、暇あれば諸堂を巡覽して、額面でも聯でも苟も文字あるものは盡く句双紙に寫して居られた。

名古屋の富豪森本善七氏が熟々禪師の行狀を見て之れ凡人にてはあらじと思ひ、自ら求めて面會して其の志を聞き、進んで禪師の學業を資くることゝなりました。これより禪師は森本家の一室に在りて專

多郡大谷村豊田富吉の第二子として御誕生あらせられた。栴檀は二葉より香ばしく、母の懐に抱かれて居る頃より誰れ教ゆるとも無く「唵摩訶〱」といふのが癖であつた。終に他の兒童は禪師を呼ぶに「唵摩訶」の名を以てするに至つた。又、幼年の頃より腥き物が大嫌ひであつた。母は養生の爲めにとて潛かに汁椀の底に魚肉を容れ其の上に野菜を盛りて與ふることもありしに、禪師は幼稚ながらも母の好意に背かざる爲め、野菜物のみを食し、魚類は人目に觸れぬ樣にソツと後の川に棄て、お椀は幾度も水にて洗ひ淨められた。母は後に至りて氣が付き、それより肉類を與ふることを斷念したさうである。此の逸話を聞くに付ても、禪師が天成に、性情が淳厚であり、思想が堅固であり、且つ自然に佛弟子たるべき性質であられしことが解るでは無いか。

月日に關守なく、禪師は七歳の春を迎へられ、曾てより出家の志切なる者ありしも父母の許を受くること能はざりしが、その志は益々強固となり、遂に逃るが如くに生家を出で、名古屋大光院泰門和尚の膝下に投じて漸く沙彌となることが出來た。而して翌天保十二年三月十二日出家の式を了じ僧寶の列に伍し、始めてその素懐を遂げられたのである。それより師僧の左右に侍して晝夜を分たず御修行を勵まれしが、弘化四年の夏、禪師十四歳の時、泰門和尚は紀州に應請の歸途、伊勢山田町の信徒の宅にて、急病を發して御遷化なされた。孝心故と深き禪師は悲歎遣る方なく涙の中に葬儀も畢り、伊勢飯高郡殿村大福寺月定和尚に隨侍し約二年許り修學の功を積まれました。

である。

性海慈船禪師

誕生と發心

一代の師表禪門の偉人として闔國人の尊敬歸崇する所たりし、曹洞宗大本山永平寺貫首勅特賜性海慈船禪師は、大正四年一月以來、少惱を示されけるが、二月四日の夜病驟かに革まり、遂に九日午後零時四十分を以て泊然として圓寂に歸したまへり。啻に禪門の一大不幸であるのみならず、實に是れ我が帝國に取りての大損害といはねばなりませぬ。併し無常憑み難きは浮世の習ひ、釋尊猶ほ雙林の烟を免れたまはず、死生命あり、如何なる人と雖も定業は逃るゝに由なし、徒らに沒き跡を悲み歎くともその甲斐はあるべからず、唯だ此の上は禪師の御本懷を體續して、その御慈慮に順がひ奉るのが報恩供養の第一義であらうと思ふ。依て茲に聊か禪師御一代の概要を述べて、その御高德の一端を紹介に及ぶ考であります。

抑も禪師は諱を悟由と稱し、號は大休、別に六湛道人とも號せられた。天保五年正月元日、尾張國知

香がするときは、汁にも御平にも口をつけず、胡麻味噌で食事を済ますといふ風であつた。温厚柔和の中にも、朝の勤めやなにかには頗る氣早やな處があつて、侍僧などがグヅ〳〵して居ると、隨分、痛棒を與らるゝこともあつた。餘りに正直過ぎて、事によると人の話を過信する樣なこともあつた。

此の柔和なる本師が、機鋒峻嶮にして近傍し易からざる奕堂禪師と水乳の如く和合して居られたは不思議な樣であるが、永平寺貫首環溪禪師は『奕堂禪師は鐵砲の樣な御氣性である。如禪和尚は幕の樣な方である、鐵砲は固形物に當れば猛烈であるが、幕に當ると其の威力も減少せられる樣なもの』といはれたことがある。

吾人、幸にして佛祖の兒孫として如實の法門に入り、今生後世の大安心を得る所以のもの、皆な本師の洪恩に非ざるは無い。此の恩容易に報ずるに由なく、只當に日々の行持、其の報謝の正道なるべしの家訓に則とりて、生々世々、精進不退ならんことを期してゐる。玆に聊か本師德行の一端を述べ、報謝の誠を披瀝した次第である。

予は明治二十二年三月十八日、二十八歳の時、父を失なひ、二十三年十一月九日、二十九歳の時、本師の遷化に値ひ、三十六年七月二十三日、四十一歳の時、母に別る、指を屈すれば、昨年は父の三十三回忌に相當し、本年は本師の三十三回忌、母の歿後また二十一年となる。光陰箭の如し、報恩の行持亦未だ萬一を充たすこと難し、自ら顧みて慚愧少なからず、今後、益々行持の正道に精進せんと期するのみ

又、本師雲游の折、偶々江戸麻布の某寺に監寺たりしが、本堂燒失して再建せざるを憂ひ、信徒に謀りて殿堂を造立し、自ら千部法華を嚴修せられた。檀那が其の德に歸し、後住に請ぜんとしたが本師は義を以て之を辭せられた。その法華塔は今猶ほ存すといふ。

本師は壯年の頃、佛道修行力增進の爲め、成田不動尊に歸し一七日の斷食を修し、終身不動尊を瞻仰せられた。後に成田不動尊の分體を梁川に勸請し、今猶ほ多數信者の歸依する所である。又、觀音大士を尊信し、明治十二年の頃、西國・秩父・坂東に準じて、百體觀音を伊達・信夫兩郡の間に安排して、參詣の便に供し、發菩提心の因緣を勸發せんとて、自ら詠歌を作り、遂に其の願望を圓成せられた。東京に於ける天台宗の碩學、故多田孝泉師は隨喜の餘り左の歌を贈られた。

如禪禪師道俗の爲めに詠歌をあつめ觀音大士に結緣
せしめたまふことのいととふとさを隨喜しまつりて

おもひきやかゝる貴ときひじりびと今のうき世に猶ほいますとは

本師は、專ら禪風の擧揚に努め居られたが、禪餘、詩を賦し歌を詠じて自ら樂まれた。尤も詩歌ともに毫も推敲を弄せず、全く自然の調であつた。書道には頗る通じて居られた。又、非常に健康で、七十歳以上になつても、木履を穿て五里を距る福島に往復せらるゝ程であつた。晩年に至りても、雲水生活その儘で、衣食とも極めて枯淡であつた。長道中などには、拵器に胡麻味噌を容れ、旅館にて器物などに腥い

恩・文翁・亘海と併せて四人であつた。未聞法の弟子に鐵舟・信禪・寛龍・覺禪等があつたが、信禪を除きて外は皆な予の法嗣として健在す。獨り亘海のみ幾年の後、遷化せしは甚だ遺憾の極みである。

稽古の大道人

本師は、一言にしていへば稀に見る稽古の道人にして、而も亦眞に正直、且つ無我の衲僧であられた。柔和温厚にして行持の綿密なることは、殊に後世の好典型と思はれる。三十歳の時、事に因りて大に感ずる所あり、自ら生々世々を盡して陰功を累積せんと誓ひ、且つ一大願を起し「智は德に勝つべからず、德の本は慈仁に在り、我が宗の雲兄水弟にして、東海を行脚する者、皆な函根の嶮嶺に難む。願くば、三島の地に於て雲衲を接待し、併せて駿豆の民衆を敎化せん」とて、豆州修善寺温泉に於て三島の山口老人に遇ひ、其の賛成を得て同町に一草庵を建て、春秋解間には必ず同地に至り、自ら衆を率ひて托鉢し、雲衲をして拜宿點心せしむること三十五年餘の久しきに及んだが、明治維新に至り百度改革の爲め、遂に之を廢止せられた。之が爲めに、三島町を中心として俗弟子の數一千を超え、故山口餘一氏等の如きは、本師を崇敬すること父母の如くであつた。明治に至り、其の舊蹟の滅せんことを恐れ、駿河國駿東郡長泉村へ、平僧地稲昌寺を法地に昇格し、本師を請じ、法地開闢の開山に戴きて紀念の道場となし、今尚ほ法孫を以て寺門を護持して居る。

に行持し、以て乃祖の家風を宣揚せよ」と仰せられた。

十一月三日より口常に大悲咒を誦したまひ、隣室に香華を備へ、法弟・隨徒及び首座等の來るあれば、必ず法華經を讀誦させた。一巻、二巻、一品、又は二品、各々其の志に任せ、而して多少の遺金を與へられた。七日午後、筆を呼んで字を書し、大衆一同を招集して大悲神咒を誦ぜしめ、白無垢を掛け、涅槃衣を重ね、自ら嘻々として笑ひ『あゝ立派な御葬式が相濟みたり』と、誦經二時間餘に亘つた。夜に入りて、予を枕頭に近づけて『血脈不斷なれよ』と囑し、間も無く昏睡に陷いり、九日の朝七時三十分、一點の苦痛もなく、泊然として入寂せられたのである。

滅後は、門末昌源寺立花孝年和尚監寺職を務め、十五日、能本山貫首楳仙禪師を拜請して荼毘式を嚴修し、陸前國角田町長泉寺道悟和尚を奠湯師に、岩代國川俣町頭陀寺天眞和尚を奠茶師に聘した。會葬者萬を以て數へ、喪を弔する者、殆ど海內諸國に及び、越本山貫首琢宗禪師は之を悼みて『北國の法幢倒る』と仰せられた。本師末後の句あり。

誓願金鐵、眞光現前、如々不動、常樂安禪

遺命に依り嶽尾泰忍和尚を後席に請じた。和尚は三十年來の知己なるを以て、直ちに應諾して遺志を滿足せしめられ、山門益々興隆し、化風彌々伸展した。本師大寂定中の滿足は如何ばかりであらう。

本師は、最初より算すれば約四十五人の徒弟ありしも、或は早世し、或は轉師し、遷化當時は予と達

運なりとの願力に依り、進退動靜、總て大衆に一如し、堂裏に於ては諄々たる垂誨・晝夜無間斷であつた。二十二年六月五日、新僧堂開單式を擧げられ、その盛況は未曾有と稱せられた。

楳仙禪師の上堂せらるゝや、本師は白槌師に請ぜられた。本師は其の時痔病に侵され、猶ほ病苦を忍びて勤行に出ようとされるので、予は心配の餘り、强て之を御止めしたところ、本師は『殘餘の身、斃れなば卽ち止むのみ、何ぞ些子の苦痛を厭はんや』とて遂に出勤なさられた。十月五日滿期、本山にては輕勤をとの勸めがあつたが之を辭退し、後任は紀伊國木下の安樂寺嶽尾泰仙和尚であつたもので、その親しき間柄であることを非常に喜ばれて三松閣を辭し、途中、武州淨春院に寄錫して栗川に歸られた。

御遷化の前後

明治二十三年夏、東京に赴き、下谷龍谷寺に於ける楳仙禪師の戒會に敎授師を勤め、尋て各地を行化して歸山せられたが、是れより法身自然に老衰加はり、九月下旬より床上の人となられた。けれども、猶ほ心を山門の興隆に注ぎ、十月初め、檀頭に衣資百金を渡與して屋根の改修を囑せられ、同月廿日、臨終の近きを知り、始て遠近に病を報ぜしめられた。

予は報に接して大に驚き、廿六日に歸省して晝夜看護の勞を執つたことである。予の、歸省して本師に謁するや、親しく予の手を執りて『山僧の遷化近きに在り、後事甚だ容易ならず、只當に翼々如として如法

に於て、本師が發願主でありし因縁を以て總持寺後堂に任じ、十月より僧堂接衆を懇囑せられた。本師は最早七十八歳の頽齢なるを以て、再三之を辭退したが、懇命益々切なるものがあつて、本師は深く感激し、放身捨命の覺悟を以て任に赴かれた。且つ本師は自ら『此の行、或は再來せざらんか』といつて、接近者には遺物を配付して、斷然、晩年の行脚を打せられた。予は、時に淨春院に住し、埼玉縣第一號教導取締と專門支校教師とを兼任してゐたが、萬事を代理者に托し、宗務當路者の允諾を得て、本師に隨侍することゝなり、文翁・梅林の二僧亦近侍の任に當ることゝなつた。十月廿日、興國寺を發し、上州・信州を經て、廿八日、總持寺に到着せられた。首途に當りて

遠慕僧堂霜雨秋、四員主伴赴能州、汽車人力任時世、擬得優游大白牛

等の吟あり、能本山に着するや。

能國洞宗大本山、僧堂新築鎭禪欄、吾來瓦子扣門戸、龍象豁開第一關

驀然欲入總持門、退歩承當徹本源、修證一如恭順去、須酬佛祖大悲恩

等の作あり、又、新築僧堂に入られし時、歡喜の餘り

何人發願建僧堂、普蓋禪師慈忍光、佛祖單傳眞正法、即今復古再榮昌

の偈があつた。

十一月の初め、西堂職に任ぜられたが、本師は全く、本山を以て埋骨の道場となすことを得ば無上の幸

は既に寂を示したるを以て、七月一日、和尚卒哭の日に於て晋山上堂の禮を行なはれた。

明治六年五月、永平寺環溪禪師の特命を奉じ、岩手・福島兩縣を巡教し、同月、權中講義に任ぜられ、七年四月、福島縣教導取締に任ぜられ、尋で本宗專門支校教師を拜命し、十七年には權少教正に任ぜられ、十九年十月福島縣總教會講授となる。興國寺、往年火災後、未だ本堂の建立ができなかつたので、之が再建を企て、私財百五十金を投じ、檀信の熱心なる助力を得、明治十六年十二月起工し、十九年の始めに竣工、依て四月六日より入佛供養及び授戒會を修行した。

本師は到る處、一般信徒の諷誦に便する小印刷本を製して、之を頒施せられたが、興國寺にても率先、縮刷大藏經を請じ、且つ多くの印施に努められける。

大本山に僧衆を提撕せらる

明治十五年の秋、能本山貫首楳仙禪師、興國寺門葉横田村東光寺戒場に臨まるゝや、本師は教授師を勤め、朝參の因み、談偶ゝ總持寺僧堂の未だ再建せられざるに及び、禪師、感慨に堪へられざるものゝやうであつた。本師は禪師に對し「世尊の指さす所、梵刹立ろに成る、慧日未だ沒せず何ぞ慨きたまふべけん」といひつゝ、直ちに百金を禪師に獻じ「是れ某の一莖草のみ」と申されたので、禪師微笑して之を受け、是より再建の事業に着手せられた。明治二十一年の春落成し、九月、假開單式を行なはせられ、是

村森巖寺に移轉し、隨處に化門を恢張した。

武藏國北葛飾郡幸松村淨春院は隨意地にして梅室禪師の道場、數百戸の檀徒を有する古叢林であつたが、安政五年八月、伽藍全燒後、住持、其の人を得ず、荒廢の極に達した。萬延元年四月、時の法類にして關三刹の上首なる總寧寺靈道和尙は、特に本師に復興の大事を懇囑せられた。本師は固より一身を以て道に捧ぐるの決意であつたから、直ちに之を諾して彼地に赴いたが、芒草境に塡ちて一椽の膝を容るべきなく、之を二三の檀徒に謀るも、從前の經驗に懲りて毫も歡迎の色がない。本師は益々精進力を皷して、敎ふるに佛祖の眞敎を以てしたから、檀徒の人々も漸く其の誠意に感じて、態度一變、忽ちにして信徒雲の如くに集まり、數年を經ずして輪奐たる大殿堂を建造し、舊債を償却して法器什具を調へ、恩光遐邇に輝き、二十七世中興開山として今猶ほ法燈綿々としてゐる。

明治四年、總持寺獨住第一世奕堂禪師の懇命を奉じ、能州本山に上り春秋二期接化を補翼し、明治五年八月には奥州及び北海道の巡回布敎を命ぜられ、奥州全體を巡錫せられた。

翌年三月、興國寺廿一世俊林和尙、老を告げて退休せんとし、特に、本師に囑して後席を襲がせようとした。同月七日、門末及び檀徒惣代等が淨春院に來りて之を請じ、本師はその切々の情に感じ、四月二日、遙に興國寺に至り、俊林和尙の病床に趨つて諾意を表し、一方、嗣子今飯田本翁を擧げて淨春院に後住たらしめ、五月十五日、退院上堂、十六日、武州を發し、廿三日、興國寺に着した。俊林和尙

いふ師僧があります。師資の恩義、何ぞ必ずしも其の根の利鈍と資財の豊乏とを論じませうや」と答へ、遂に天保八年六月十六日、二十七歳の時、師僧の室に入て嗣法相續を了ぜられた。時に師僧は寶藏寺隱居の身であつたが、本師より嗣法を賜はれた時、涙を流し「吾が汝を得たるは雛鶏の鳳子を産ずるが如し」といふて歡喜踊躍せられたさうである。

隨處に法輪を轉ぜらる

天保九年五月、二十八歳にして武藏國比企郡上横田村輪禪寺に首先住職し、同年六月大本山總持寺に於て轉衣式を了じ、八月には前記の寶藏寺に移轉せられた。

天保十五年八月、上總國夷隅郡佐貫村大聖院へ轉住し、弘化四年十月、武藏國多摩郡吉祥寺村月窓寺に移轉せられた。當時、此の地方は、一般に佛教漸く信仰が乏しかつたので、本師は檀信徒を誘掖して諄々敎へを垂れ、各自に心經を授けて、徐ろに禪風を擧揚せられた。吉祥寺村の安藤七郎、荻窪村の小俣金兵衛・小俣鎌藏等の諸氏は、日々、數十町の路を遠しとせずして、參禪に勵み、安藤氏の如きは率先して心經講を組織し、化風頓に遠近に擴がり、關東稀有の佛敎聚落を現出した。其の遺澤は延て今日に及び、一般信者までが、恰も慈父の如くに景慕するに至つた。

嘉永二年夏、三十九歳にして法幢を建立せられた。住山約七年にして嘉永六年四月、上總國市原郡海保

省悟し、恰も桶底を脱するが如し、進んで來應の背を撫するや來應、叱して曰く『這の禪和子』、師乃ち拜を設けて退いた。此の事あつて以來、機鋒縱橫、隨處無礙にし去ることができるやうになつた。此の茅鎌子の話といふは。

昔、支那の南泉禪師、一日、山に在て作務す、僧あり過ぎて問ふ『南泉の路何れの處にか去る』、師鎌子を拈起して云く『我が這の鎌子三十文錢に買ひ得たり』、僧曰く『鎌子三十文に買ふことは問はず、南泉の路何れの處に向てか去る』、師曰く『我れ如今使ひ得て正に快なり』

といふのである。本師は此の話頭に於て大知見を開發し、來應の懸記を受け、自ら正快道人と號し、又は茅鎌子と稱した。

洞門和尙の會下には禹禪といふ禪者あり、本師と與に洞門下の二禪と稱して一衆より畏敬せられた。此の間、奕堂禪師と斷金の交はりを結び、互に苦行を勵み、或は日中一食を打し、或は雪霜の軒に坐し、或は常坐不臥を行じ、志氣益ゝ堅牢であつた。

天保六年の夏、二十五歲にして下野國田沼町種德院に於て首座職に任ぜられた。禪山和尙は、時に上總國望陀郡下根岸村寶藏寺に住せられたが、骨山（貧乏寺）にして生計頗る艱むだ。爲めに、本師は師僧の窮乏を察して、一錢の補助をも受けず、却て歸省每に草鞋錢を呈して師僧の衣資を補はれた。

關西の知識方は、交々、本師を招て法嗣たらしめんとしたが、本師は堅く辭して『私には禪山和尙と

く、二十七歳の秋に御別れするまで、前後十六年の間、教養の恩、撫育の恩は、山よりも高く、海よりも深く、生生世世を盡すとも、その大恩を報じ盡すことは出來まいと思はれる。

本年は、恰も三十三回忌の追恩法會を營むことになつたので、本師の略歴を述べ、有縁の人々にも其の道德の一端を御紹介致したいと思ふ。

出家求道

本師は、文化八年一月一日、武州比企郡横田村新井藤三郎の次男として御誕生なされた。幼稚の頃より英敏衆に超え、且つ佛法を慕ふの志深く、文化十年十月五日、僅か三歳にして同村輪禪寺瑞淵禪龍和尚に投じて出家せられた。後、龍禪和尚の圓寂に遇ひて、其の嗣、壽翁禪山和尚の徒弟となられたが、師僧に事ふること至誠慇懃、如何なる命令にも曾て違背することが無かつた。

十五歳の頃、大に衝天の志を發し、師僧の許しを受けて遍參行脚の途に上り、初め美濃國武儀郡下有知村龍泰寺來應和尚の輪下に投じ、辨道六星霜、後に信濃國松本市全久院洞門和尚の爐鞴に參じて修行三周年、奕堂禪師や彌梢和尚などと同參で、倶に琢磨の功を競はれた。殊に、奕堂禪師とは道交最も厚く、殆ど兄弟の如くであつた。

曾て來應和尚に參ずると、來應和尚は示すに「南泉茅鎌子」の話を以てせられた。此の時、忽然として

鐵眞如禪先師

三十三回の忌辰に當りて

我が本師鐵眞如禪大和尚は、御遷化以來、既に（大正十一年までに）三十三回の星霜を經られた。師恩の甚大なることは、父母の洪恩にも比すべく、精神的には、それにも勝る無上の大恩を被むつて居るのである。

予は、本師末後の道場たる臥龍山興國寺の所在地、福島縣伊達郡梁川町なる檀徒の家に生れ、夙縁の致す所か、父母及び祖母に伴なはれて、十歳位の頃より御寺に出入し、御寺を以て最も愉快なる娯樂場と思ひ、御佛を拜したり、雲水達と共に御經文の御稽古をしたり、本師の膝下に趨りて、御菓子を戴いたりすることが、非常に嬉しく感じたことであつた。それが入道の因緣となつて、明治八年十二月十九日、十二歳にして、得度を受けて剃髪染衣の身となつたのである。

左右に侍すること足懸け五年の後、東京に遊學したが本師の恩寵に浴することは何んに喩へんやうも無

石の志氣を磨し金剛の願力を振ひ、遂に明治四十四年十一月五日を以て移轉遷座の式を擧げ、爾來益々事業の進行を圖り、既に今日の如く七八成の奏效を見るに至れり。其の偉業偉績は實に空前にして、且つ絶後なるべし、眞に本山の中興として洪徳を萬世に傳ふべきものである。

然るに禪師は常に本山役寮に向ひ「山僧が滅後、山僧の事業を頌揚して中興などの尊號を稱してはならぬ。移轉再建の偉業を起して之れが經營を進めたるものは、決して山僧の力にあらず、實に闔宗一萬四千餘箇寺の末派、及び其の檀徒信徒の誠信扶翼の恩力に依るものである。本山の事業は卽ち末派道俗の事業である。山僧は單に貫首とし、其の天職を奉じたるに過ぎぬ。若し山僧に對し中興などの嘉號を附しては、一般道俗に對して甚だ無禮である。故に斷じて斯かることをしてはならぬ」と懇々遺言せられたさうである。

衲が後席を繼ぐに當りて、なぜ中興開山に勸請せぬかといふ聲をも聞いたが、右申した次第で躊躇して居る譯である。併し、そこに故禪師の大なる信念と謙譲の美徳とが窺はれて、如何にも景仰措く能はざるものがある。それに就ても今後一層、本山の事業を大成し、鎭護國家の效績を現はして故禪師の御遺志に副ひ、闔宗道俗の御扶翼に答へたきものである。

れ實に接得の妙機を把捉せられたものである。

大圓玄致禪師を憶ふ

本月（大正十一年十二月）十六日は、早や故大圓玄致禪師の三年忌を迎ふることゝなつた。光陰矢の如く、故禪師御遷化以來、既に二十ケ月を經過し去つた。往時を追憶し現時を觀察するに感慨實に無量である。殊に本月五日は當本山が能州より鶴見へ移轉したる紀念日である。

回顧すれば明治三十一年、當本山が思ひ懸けざる大火災に遇ひ、全殿堂を擧げて烏有に歸して了うた。その當時の貫首は法雲普蓋禪師でありしが、多年本山の整理と興隆とに滿身の努力を拂はれたる、玄致禪師の落膽と憂愁とは果して如何計りであつたらう。併し、宗門あることを知て己れあることを忘れ、唯だ本山をのみ念うて我身を顧みたまはざる禪師は、奮然として再興の大志願を發し、鎭護國家てふ曩祖の本誓に基きて、破天荒の大擧たる移轉再建の壯擧を企て、幾多の艱難を冒し、殆ど身命を賭して、遂に之を斷行せられたのである。幸に闔宗道俗の絕大なる翼賛助成を得られたるも、その起業當時は、殆ど空手にして經營に着手せられたれば、其の艱難苦勞は果して如何計りにてありつらん。禪師の勇猛精進は鐵

て呵責せられ、非常に嚴厲であつた。だが、師は五十歳に達せずして示寂せられたほどで、幾分身體も尩弱でありしと見え、晩年には自分だけは足袋を穿きて草鞋をつけられた。奕堂禪師は壯年血氣の時でありしかば、潜かに其の柔弱を嫌ひ、或時、雪路托鉢に出られる際玄關に坐して之を送りながら「今日はなか〳〵嚴寒でありますから、もう一足足袋をお穿きなされては如何」と皮肉つた。來應師は默々として、穿きたる足袋を脱ぎ素足にて出懸けられた。我が先師は之を見て、御氣の毒に感じたと物語られたことがある。

一日、禪機に誇りて天下無敵と自稱する老雲水が相見を求め、眞直に進前して拜を設けず、傲然として「金毛の獅子出で來る、乞ふ師一接」と進問した。來應師は前卓の陰に隱れた。小柄の身體であつたから、身を隱すには都合が宜かつた。老雲水も一寸まごついて、早速は二の句が出なんだ。すると來應師は、ひよつくり顔を出し微笑を帯びて、「果然として野干鳴」と勘破した。其の態度、其の語氣、既に此の老雲水を一口に吞却し去るの概があつたので、老雲水、通身汗を流して、低頭禮拜して敎へを乞うたそうな。

來應師が禪堂に臨むや、大衆、坐久成勞して睡魔に襲はるゝ場合でも、聖僧前に卓立して手に警策を拈じて「暫時も在らざれば死人に如同す」と高唱せられると、其の聲凛々として堂の内外に透徹した。滿堂の大衆は此の一語を聞くと、全身緊張して、睡魔を散じ疲勞を忘れ、修行力十倍するを覺えたとある。是

向てか去る』、泉曰く『我れ今使ひ得て正に快なり」といふ公案である。

我が先師、應師の巾瓶に侍す、一日、應師問ふ『南泉茅鎌子の話、汝作麼生か會す』、我が先師曰く『世尊に密語あり迦葉覆藏せず』、應師曰く『未在更に道へ』、我が先師直ちに應師の背後に至りて雙肩を按摩す、應師笑て曰く『如是々々』、是より茅鎌子と號し、又は正快道人と稱した。

奕堂禪師は、我が先師に長すること七歲、而も氣宇豪邁、峻機、踞地獅子の如し。先師は、溫厚柔軟、和氣人に薫す、其の性質全く相反するにも拘はらず、親密なること兄弟の如し。後年、瀧谷琢宗禪師之を評して曰く『奕堂禪師の威氣は鐵團の如し、如禪老漢の資質は幔幕の如し、鐵團飛び來るも幕に當れば力消す』と。

奕堂禪師、來應下に在りて久しく典座に任じ、日中一食を修すること三年、我が先師も之に倣ひたるが一年にして息みたり。『吾れ遂に奕師に及ばず』とは予の先師より聞く所であつた。

來應禪師は身長高からず、軀幹大ならざりしも、其の風彩威嚴ありて音聲巨鐘の如し。乍入の雲衲相見の拜を設くるや、直ちに一喝す、聲雷霆に似たり。多くの雲水辟易せざるは無し。その態度を一瞥して其の僧の見處と落處とを驗辨せられた。

又、來應師は時々大衆と與に托鉢に出られた。寒中でも、素足素草鞋で、師は錫杖を携て最後に立ち、衆中、聊かでも列を紊したり行儀の整はぬ者があると、人家無き處にて其の者を呼出し、大衆面前に

ルヌ氏の法華經英譯東方聖書大集第廿一卷に『力ある禁呪、巫詛、藥草、惡鬼、起屍鬼、身命を害するものの等、觀世音を念ずる時、彼等は其の來りたる本處に廻歸せん』とあり、又、燉煌出土の古寫經に依れば、羅什譯法華經にも「彼卽轉還去」とある。旨を記されたり。ケルヌ氏の譯にして誤りなしとせば意義最も明瞭にして、還着於本人も「本處に還着せん」の意であらうと思ふ。或は本處を本人と誤寫せしものにはあらずやとも思はる。井上先生の御注意と渡邊先生の御檢討に依り、平生の疑團を氷解し大に法悦を感じたりき。

來應禪師の禪機

師は文政の頃、美濃の甲刹龍泰寺に住して禪風を擧揚し、奕堂禪師などは其の爐鞴より出づ。予の師僧如仙老漢も其の會下に在りて、奕堂禪師と同參でありしが、南泉茅鎌子の話に於て大事を了じて師の印可を得た。

其の話頭は、南泉一日茅を刈る、僧あり問ふ「南泉の路甚麼の處に向つて去る」、南泉手裏の鎌子を指して曰く、「這箇の茅鎌子三十文錢にて買ひ得たり」、僧曰く「茅鎌子の事は便ち問はず、南泉の道甚麼の處に

十七品の添品妙法蓮華經である。此の內、普通の法華經と添品法華經とは大同小異である。獨り正法經は全然譯語を異にして、觀音經の如きも光世音普門品と題し長行のみありて偈文は無い—は普門品の全部が普通の法華經と大體に同譯で、偈文中では還着於本人の一句だけが『彼卽轉廻去』卽ち彼れ卽ち轉廻し去らんとなつて居る。原書に照したならば、果して何れの譯語が正當なりや否やを知らざれど、菩薩の悲願力より見て、彼卽轉廻去の譯は如何にも合沓かと思はるゝ。

轉廻し去るとは、呪詛も毒藥も害を加ふること能はざるのみならず、加害者も害意を捨てゝ本處に還るの意、又は大悲の功德力は加害者をして惡意を飜へし、悔悟歸善せしむるといふ意とも見ることが出來るであらう。尤も、今更、羅什の譯語を訂正するの要は無かるべきも、普門示現の妙智力は、怨家にまでも勝功德を與へたまふものと見て仰信すべきものなるべし。

彼の模象記に『邪は正に勝たず慈能く凶を制す、今正しく觀音大悲の神力を以て自然に還着すること、譬へば血を含みて天に噴けば還て已れが身を汚し、頭を將て火に觸るれば反て已れが額を焦すが如し、然るを期せずして然り、觀音罰を彼れに加ふるに非ず而して行人亦た心を起して彼の還着を願ふべきにあらず』云云とあるも、一應承認すべき道理がある。

其の後、井上先生は再び來訪せられ、其處に於て此の偈の意義を說きし時、渡邊海旭師が自分も一應調査して見るべしと言はれ、間も無く、其の結果を書き贈られしとて示されけり。それを拜見すると、ケ

法華經觀世音普門品には、觀世音菩薩の與樂拔苦の神通無礙なることを示し、無畏を說き、三十三身應化の妙用を述べ、更に偈文に於て能救世間苦の狀態を敷衍闡詮せられてある。念彼觀音力の功德は菩薩の智慧方便に依りて重々無盡であるが、その偈文中、「咒詛諸の毒藥、身を害せんと欲する所の者、彼の觀音の力を念ずれば、還りて本人に着かん」とある。此の「還着於本人」の五字に就て、古來相當に議論がありしものと見ゆる。

文相の上から見れば、茲に惡意を懷ける人の爲めに、或は咒詛を以てし、又は毒藥を以てして害せられんとする場合にも、一心に觀世音菩薩に慈悲力を念願し讃仰せば、其の功德力に依りて、其の害は還りて惡人の身に歸すべしといふ意である。曾て東坡居士が此の偈文を見て「觀音の慈悲は怨親平等である、念彼觀音力の爲めに惡人それ自身が災禍を招ぐとせば、是れ平等大悲の願力に矛盾するものならずや」とて、居士は還着於本人を「兩家總無事」卽ち双方とも總て無事なるを得んと改めたしと申されたとある。東坡の意譯としては其の譯語が餘りに拙劣のやうであるから、固より信を措くことは出來ぬが、還着於本人の語は誤解を生じ易いやうにも思はれる。

此の程、井上角五郎先生が御訪ねの時に此の御話があつたので、異譯の法華經を拜覽せしに、添品妙法蓮華經―大正新脩大藏經には法華經三譯を載せてある、第一は普通に受持讀誦する鳩摩羅什譯七卷（又は八卷）二十八品の法華經、第二は西晉竺法護譯十卷二十七品の正法華經、第三は隋闍那崛多譯七卷二十

い。――他に求めて得た歡樂は忽ちに失はれるけれど。

人間に惠まれてゐる大精神の偉力を十分に發揚し、愛の力、慈悲の力で、不平や不滿を包んでしまつて、そこに歡喜妙樂の生活を開展することは、とりも直さず自分といふものを飽くまでも擴げ大きくする所以である。禪にこれを『隨處に主となる』といつてゐる。その時その時、その物その物に成り切つて、無理の無い自由な愉快な生活を營むことは、自分といふものを仕事そのものに打ち込んでしまふことである。所謂『聖人に己なし』といふ佛の行をそのまゝに行ふことである。

我れといふ眼から見ると、『隨處に主となる』ことは、どこまでも我れを大きくしてゆくことの樣に見え、『聖人に己なし』といふ行り方は、どこまでも我れを無くしてしまふことで、全く相反する事の樣に見える。が、結局は同じことで、齊しくこれ菩薩道の生活である。人々はその器量に應じ、好みに從つて、どちらでも大に行るがいゝ。徹底的に行るがいゝ。そこに歡喜妙樂が味はれて來る。深く掘るほど、清い甘い泉が湧き出て來る。

普門品の偈「還着於本人」

ある。不用意に見ると、その愛は餘りに弱々しく見えるかも知れぬが、そこに却つて無限の強さがある、無限の大きさがある。道ならぬことをしむけられて憤然として起つことは、小人もこれを能くする。道ならぬことをしむけられて、却つて、その人を憐れむことは、餘程の大人でなくては出來ない。その持てる精神力を極度に發揮したものである。

さはれ、我等は修養未だ熟せず、大人たらんと欲して、未だ大人たり得ず、人間の大精神を十二分に發揮せんと欲して、未だ發揮し得ざるものである。それ故にこそ、不平をいふまいと思うても不平をいひ、不滿を抱くまいとしても不滿を抱くのが我等の常だ。此處に於いてか、先聖はまた我等のために、別に不平不滿退治の便法を示し置かれた。

「流れに隨つて性を認得せよ」といふ一語が即ちそれである。物は皆な佛の惠みを十分に受けてゐる。進化論に隨へば、何もかも進化の道を辿つてゐるのである。その時その時、その物その物に成り切つて、無理をせぬ樣にしてゐさへすれば、ひとりでに、誰れも彼れも向上し進歩し榮達する。その時その時、その物その物に成り切らぬから障礙が出來る。障礙は病である、不快である。成り切つてさへゐれば、常に愉快である。愉快であるから、成績が擧る。成績が擧るから、猶々愉快である。所謂歡喜の日が續けられる。妙樂の味が身心に沁みわたる。かうした歡喜は、妙樂は、われ自らが生み出すものであるから、決して失ふ心配はない。宛も掘り當てられたる泉の如く、汲めば汲むに隨つて湧き、湧き湧きて盡くる時が無

い、住めないといふことゝそのことではあるまい。食へないのが癪だ、住めないのが癪だといふその癪であらう。さらばその癪を捨てよ――放捨せよ。癪を放捨すれば、腹がすいては、押し戴いて御飯を喰べ、疲れては手足を伸してのび〳〵と寢る、さういふ和樂の生活が開かれるであらう』と。

その放捨といふのは、例へは着てゐる着物を脫ぎ捨てゝ樂になるといふのでなく、着てゐる着物を十分に着こなす意味である。衣服は着こなされぬ時には窮屈であり不格好である。着こなしさへすれば、自由であり、似合ひもする。ぴつたりと體について來るからだ。

不平放捨の禪的方法は正しくそれであつて、不平を外に捨て去るのではない、不平を内に取り入れてしまふのである。精神の偉大なる力で、愛の力で、慈悲の力で、不平を抱きしめてしまふのである。癪のこりを溶してしまふのである。

釋尊が御在世中のことであつたが、摩揭陀國の王子阿闍世といふ人が大逆心を起して、父王頻婆沙羅を牢屋に押込めて無禮の極を盡し、時には御膳も差しあげないばかりか、王妃韋提希が腋に蜜を藏し、獄屋に入つて王にすゝめ、王の飢渴を救うたといふので、阿闍世は韋提希をも押込めてしまふといきまいた。それほど王を惡み苦しめた。然るに、王は少しも阿闍世を憎まず、益々厚くこれを愛し、ひとり暗い牢屋で、只管に阿闍世の幸運を神に祈つたといふことがある。

頻婆沙羅王のこの精神、この態度、これは實に不平放捨の佛敎的方法、禪的方法として理想的のもので

といへば蚯蚓よりも蛆虫よりも弱い。が、また強いといへば金輪際強い。肉體は弱いが精神は強い。この精神の強さは何物にも壓倒されない。その大きいことをいへば天地萬物を抱き込んでしまふ。その久しきをいへば千古に亘つて不滅である。この偉大な力のある精神によらずして、我等は一體何によらうとするのであるか。

「宗教の生活」とは、言ひ換へれば、我等が偉大なる精神力を十二分に發揮する生活である。この生活には不平といふものが無く、不滿といふものが無い。この生活は常に歡喜に滿ち妙樂に滿たされてゐる。

斯くいへば又「何を馬鹿な、婆々談議は止めて貰いたい」といふ人があるかも知れぬ。が、我等はその人に向つて、胸に手をあてゝ靜かに考へて貰ひたい。「何を馬鹿な」と腕を鳴らしてゐるその時、その人の自己は何處にゐるか。「何を馬鹿な」と呶鳴つてゐるものが、その人の本當の自己であるか、それを先づ靜かに考へて貰ひたい。呶鳴つてゐるのは本當の自己ではなくして、癪だとか、馬鹿らしいとかいふものに囚はれた自己ではあるまいか。本當に人間の生地のまゝの、素直な自由な自己は、そこに姿を現はしてゐないのではないか。

「本當の自己でも虚僞の自己でも、そんなことは、どつちだつていゝ、この不平、この不滿を、默つてゐることが、どうして出來ようか」といふかも知れぬ。斯る人に向つて禪家ではいふ、『何が不平か、食へないのが不平か、住めないのが不平か、試みに思へ、不平なのは食へないといふことそのことではあるま

等はそれを妬んだり怒つたりしないと同じ樣に、人の贅を盡した生活を見ても、心が動かず、人の赤貧洗ふが如き生活を見ても、何ともないといふ樣であつたならば、人の生活の仕方が如何に樣々であつた所で、問題は無いのである。が、人間といふものは、鳥獸の生活を見てはさして心を動じないが、人の生活を見ると心を動ずる、贅澤を見ては羨み、貧乏を見ては厭ふ、この羨む心、厭ふ心が、だん／＼培はれて行つて、不平不滿となり、階級鬪爭となり、これに社會意識といふものが加つて、此の頃特にやかましい社會問題となつて現はれる樣にもなるのである。それを救ふ道は政治上にも經濟上にも色々あらう。我等はたゞ我等の立場から、此の際、我等の信ずる生活が營まれるやうに、誠意を以てお勸めしたいと思ふ。世の爲に、人の爲に。

我等の生活はいふまでもなく、宗教の生活である。大乘菩薩道の生活である、精神主義の生活である。精神の力によつて一切を淨め、一切を攝り入れ、世の惱みあるもの〻惱みを去り、苦しみあるもの〻苦しみを去つて、我も他も共に安らかに樂しい生涯に入らう、又、入らねば措かぬといふ奮鬪的生活である。

さういへば、『また宗教か、また精神力か、聞きたくもない』といふ人があるかも知れぬが、宗教を疎んじ精神力を無視すれば、人間は破滅である。人間の榮光といふものは全然消え失せてしまふのである。パスカルであつたかと思ふが、『人は弱い、一莖の蘆の葉よりも猶かよわい。が然し強い、何よりも強い、それは物事を考へる所の精神といふものを有するが故に』といふ意味のことを述べてゐる。全く人間は弱い

清淨不可壞の信を建得し、常に佛を供養して心に厭倦なく、正心清淨衆生を發起して一切智を求むるが故に』とあるのが眞の吉祥である。高祖大師は佛種子を植ゑ佛功德を莊嚴せんが爲めに大道場を建立せられた。されば大師は『國家に眞實の佛法弘通すれば諸佛諸天ひまなく衛護するが故に王化太平なり、王化太平なれば佛法共の力を得るものなり』と仰せられた。

要するに大師は、最吉祥の佛を請じて吉祥道場を開き、此の法道を弘通して、國家及人類全體の吉祥莊嚴を成就せん、その御思召であらうと思ふ。此の吉祥の二大文字は、實に尊嚴にして且つ雄大なる大師の御本領を拜することが出來ます。」

歡喜妙樂

人の生活は様々である。ジメ〳〵した裏長屋の生活もあり、金殿玉樓の輝かしい生活もある。上を見ても限りがなく、下を見ても限りがない。併しそれが、銘々すき好んで思ひ〳〵に勝手な生活をしてゐるのであるならば、別に問題は無い。例へば、かの、鳥が空を飛び、魚が水に泳ぎ、獅子が牡丹に眠り、虎が竹に凭り、狐、狼が肉片をあさり、牛、馬が草葉を嚼み、各々その生を樂しんでゐるのを見たとき、我

なるもので、大智禪師の所謂新年頭上の祖師禪であらうが、禪は決して理論でも無く空想でもない。高祖大師や太祖大師の禪風も、皆な佛法の現實化を唱道せられて居る。故に海上風靜の御勅題の如く、心地上にも波風なく、家庭も和合し、社會國家も益々平和に歸し、世界萬國もまた平和の實を擧ぐることが、我が天皇陛下の御聖慮にして、吾々國民の齊く希望する理想であらねばならぬ。而して、それがやがて祖師禪の光明片々であります。

高祖吉祥の偈

高祖承陽大師永平寺を開創したまひ、山號を吉祥山と命名せられし時『諸佛如來大功德　諸吉祥中最無上、諸佛俱來入此處　是故此處最吉祥』の偈を御唱へになつた。

此の偈文は華嚴經第十三に據りたまひしものと思ふ。同經、如來昇兜率天宮一切寶殿品第十九に、兜率天王が佛の神力を承けて頌せられし吉祥の偈文が、七言四句十偈になつて居る。其の一は『無礙如來猶㆓滿月㆒、諸吉祥中最第一、來入㆓衆寶莊嚴殿㆒、是故此處最吉祥』とあり、他の九偈も同工異曲である。吉祥とは覺道莊嚴の謂である。華嚴に『普く衆生をして佛境界を修せしめ、佛善根を植ゑ功德盡くること無く、

悲是れなり、世に慈愛の眞情ほど貴きはあらじ、慈愛は道徳上唯一無二の原料である。同情心深く慈愛の念篤ければ、人の爲め世の爲めに力を致さずには居られぬものである。忠孝の道、慈濟の業の如きも、義務であるから爲さねばならぬといふ觀念で行ふのは、未だ慈悲心の活動とはいはれない。慈悲心の活動は、爲さねばならぬといふのでなく、爲さずには居られぬといふ狀態である。それゆゑ、報酬の有りや無しや、待遇の如何等は問題にはしない。どうしても、父母に孝養を盡さずには居られぬ、社會の公益に努めずには居られぬといふのであるから、その道徳的活動そのものが非常な樂しみであつて、滿足も亦た是より得らるゝのである。

次には信仰です。人の心は迷ひ易く動き易い。また思ひ懸けなき災厄に出逢うたり不幸に際會したり、身を斬られる樣な壓迫を感ずる樣なことがあると、心の土臺がグラつきたがるものである。然るに若し、金剛の如き堅固なる信仰があれば、非常なる場合に處しても、何等惑ふ所は無いものである。而して平時に在りては、心の内に莊嚴無比なる佛の世界を開き、智慧と慈悲と圓滿無礙なる御佛に抱かれて、行住坐臥相離れぬ、その喜びは言葉にも盡されぬ。その嬉しさは何に喩へんやうも無いものです。要するに、信仰は人生々活の最も善美なる根本力である。此等の事も今は委しく說明することは出來ぬが、此の五本柱は極樂建設の必須材料なることを知るべきである。

各々の心地を調へて佛心に投合し、眞如の妙理に融合し、即心是佛の境地に達したのが和徳の最上乘

の人々が相集まりて居りながら、思ふまゝにといふは、無理な希望である。『氣に入らぬ風もあらうに柳かな』それを堪忍して益々愛敬の德を養ひなば、思ふまゝにならざるが却て身の修養ともなり文化發展の基ともなるのである。近頃は人智が發達した爲め、神經が過敏になつて、とかく昂奮し易い樣である。殺傷事件の多いのも、一面には疳癪の募つた證據である。甚しく腹を立つと、理非の見界もなく狂態を演ずるのが人間の弱點である。後に至りて後悔しても間に合はぬ。議場の醜態も、工場等の紛擾も、双互の交涉に依て完全に解決せらるべき可能性のある事件まで、極度の紛亂を來すが如きは、多くの場合、怨恨憎嫉の感情が加はるからである。德川家康は『堪忍は無事長久の基』というた。實に守るべきは堪忍の德である。◆

次には正直、是亦た道德上最第一の至寶である。萬兩の財貨を積むと雖も贋金では半文の價値が無い。人間も、如何に學秀で才優れ、位高く富豐なるも、正直の德を有せざれば人としての價値は認められぬ。誠は天の道なり、正直の頭に神宿る、正直は道德の土臺である。況て、親子夫婦の間に於て虛言が行はれる樣では、圓滿なる家庭の出來やうはずが無い。次には勉强、勉强は人間の動力です。勉强する者は必ず成功し、懶惰の者は失敗を招く『夜もなほ業をつとめよ世の中は寢てまたぬこそ果報ありけれ』此の事は事新らしくいふまでも無い。

次には親切、卽ち同情あり慈愛ありて、眞情を以て積極的に人の爲めに盡すことである。佛心とは大慈

も迷惑を掛け社會にも害毒を流す様になる。故に吾々は、常に聖賢の敎を學び、自己の本分を自覺して、淨き正しき麗はしき心が、始終、活動の中心とならねばならぬ。さすれば本心の德が現はれて、自から氣も和らぎ情も調ひ、道に順ひ法に諧ひ、我見の鋒も折れ瞋恚の焔も消え、胸次浩然春の如くになる。是れが和德の基調である。

此の和德が外に發揚すると、家庭の和合となり、社會の和協となり、國家國民の統一となり、更に進んでは世界の平和ともなるのである。家庭は此の世の樂園でなくてはならぬ。親子・兄弟・夫婦が一處に住して居るのであるから、外に出てこそ、其の業に依りて働く場所も異なれど、家庭に歸れば一蓮托生だ。だから家庭を以て此の世の極樂とし、また極樂となるやうに家内中が心を合せて和合を謀らねばならぬ。よしや、貧乏生活であらうとも、不仕合であらうとも、家内中が心を一にして、扶け合ひ、慰め合ひ、互に親切を盡し合ふことが出來たならば、そこに言ふべからざる樂しみを感ずるものです。家庭の極樂を建設するには、五本の柱が必要である。五本の柱といふは、堪忍と正直と勉強と親切と信仰とである。此の五本柱は極めて簡單な且つ平凡な敎へであるが、此の精神を擴大すれば、社會の上にも、國家の上にも、國際關係の上にも應用すべき重大なる條件である。

「思ふこと思ふがまゝにならざるがかへりて人の爲めにこそあれ」といふ明治天皇の御製を有り難く拜したが、どんな人でも、思ふまゝに此の世を送るといふことは出來ぬ。無常變化の世にありて、十人十色

とが最も痛切に感ぜられる。是れには個性の自覺に起因するものもあらう、國民生活の問題より發生するものもあらう、外來思想の影響に依るものもあらう。併し、何れにしても、和德尊重の觀念と和德の訓練との閑却せられて居ることが、大なる原因をなして居るかと思はれる。そこで予は、新年頭上の第一聲として和德を高唱し、相共に徹底せる和德を實現して、眞に海上風靜の新天地を打開したいと希望する次第である。

一體、和といふ字はやはらぐ（柔）、とゝのふ（調）、したがふ（順）、かなふ（諧）、などの訓があつて、其の心を調へ、無理な欲望や頑固な我見を存せず、堪忍強く度量寛く、何事にも親切にして機嫌好く人にも接し、何時でも愉快なる氣分を有して居るのが和德の基である。故に此の德を修めんには、先づ以て自分の心に、しつかりと和德を植ゑ付けねばならぬ。

心は本より一つであるが、其の作用からいへば、一心萬念で色々の念慮がある。それを大別すれば二つとなる。即ち正しき心と我が儘なる心とである。是を佛敎では菩提心と煩惱心と稱し、儒敎では道心・人心と名けて居る。如何なる人でも、心の中には、必ず神佛に耻ぢざる樣な綺麗な念慮がありますが、之と同時に、淺ましい、耻かしい、不純な妄想もあるのです、人の心といふものは、何時も此の善い心と我が儘な量見とが鬪つて居ります。その結果、善い心が我が儘量見を征伏すれば、道德的に人格が向上するが不幸にして、我が儘量見が良心に打勝つならば、益々墮落して、終には其の身を誤まるのみならず、人に

澤を加へ、國民もまた和敬輯睦して、平和の仕事もまた普く山川草木にまでも洽るは、風靜かに波平らかに、水天相接して瑞靄たゞ霞に鎖されし景徴にも比すべきである。海上風靜の御題は、君民一德の佳瑞を示したまふと同時に、將來に期すべき國家及び國民の理想をも御教へたまはれしかとも謹察して、殊に畏く感ずるのである。要するに、吾々の理想としては平和を以て第一とせねばならぬ。

聖德太子は十七憲法を制せられ、其の第一條に於て「和を以て貴しと爲す忤ふこと無きを宗と爲す、人皆な黨あり亦達する者少なし、是を以て或は君父に順がはず乍ち隣里に違ふ。然も上和ぎ下睦みて事に論ずるに諧へば則ち事理自ら通じ何事か成らざらん」とありて、憲法の劈頭に和合の德を尊重せよと仰せられた、心和する時は面に愉色あり、家族相和すれば其の家榮へ、民衆相和すれば其の社會に幸福多く、國民相和すれば國運興隆し、萬國相和すれば世界昇平に歸す。和合の德平和の功は、實に修身齊家治國安民の要道である。釋尊も常に和德を慫慂したまひ、優婆塞戒經に於ては「衆人の乖離するを見たらば能く和合せしめよ、人の善き事は之を揚げ他人の過咎は之を救護せよ、人を辱かしむるな、人の秘密を許くな、少しの恩惠を受けても倍增して報いんと思ひ、怨みある者には善心を以て遇せよ、己れを罵る者ありなば之を怒らずして却て憐れむべし、己れを打つ者ありとも不瞋を加へよ、一切衆生を視ること猶ほ父母の如くせよ」とまで御諭しになつて居る。

然るに、現代の社會相を觀るに、種々樣々の缺陷を見出すのであるが、第一には、和德の缺乏といふこ

の命ずる所に從ひ佛の御指圖に委せ奉り。其の間に無限の自受用法樂を獲得することが出來る。是を無形の活伽藍といふのである。

今や吾々は太祖六百年の大遠忌に値遇し奉れり。闔國の緇素、擧つて報恩謝德の赤誠を傾けて太祖常在の法身を供養し奉らんとす。此の機會に於て、進一歩して各自に信念を培養し祖風を習得して、平常心是道の妙致に體達せば、必ずや太祖大寂定中に破顏したまふことあるべし。冀くは、我が宗の寺院諸師、各自に報恩記念の大法會を嚴修するのみならず、何れも適當の方法に於て、太祖の眞風を宣揚し、檀信各位をして齊しく平常心是道の祖道を信受奉行せしめられんことを。是れ實に國家に奉じ社會に貢獻する所以の道である。

新年頭に祖師禪あり

大智禪師元旦の偈に『新年頭有祖師禪、興國正當辛巳年、四海浪平龍眠穩、九州不見起狼烟』といふがある。祖師禪の新年は、四海昇平萬里快樂を以て貴とする。新年御歌會の御勅題も『海上風靜』といふので如何にも、景運の伸暢せる皇國は、太平洋の悠遠にも比すべく、國際關係も親

即ち此の肉身に於て宇宙の眞際を盡すの意である。宇宙の眞際を盡すのが、やがて眞實の自己を覺了することである。換言すれば此の肉身に於て佛の御覺りを體驗することである。故に太祖は其の體驗に就て猛烈なる修行を積むこと六年、二十七歳の十月二十日、徹通禪師の御示し下された「平常心是道」の言下に於て豁然大悟、胸中一點の疑團も無く、快然として佛心に相應せられた。太祖の高德も事業も、接衆も度生も盡く此の平常心是道より出現し來つたのである。

平常心是道なりというても、吾々の妄想煩惱を以て是れ道なりと思うてはならぬ。貪名愛利の思想を以て佛道なりと早計してはならぬ。先づ第一に、道を信じ道を尊敬し、道に服從し道を練習せんと期すべきである。此の志が即ち信仰であり修行であり、また自己の向上である。此の大信心の發起する時は、成佛を未來に期するにも及ばぬ。淨土を遠方に求むるにも及ばぬ。佛の大智慧光明は常に吾々の心中に輝き佛の大慈悲神通は常に吾々の全身を攝取して漏したまふことは無い。是を感應道交といふのである。

感應道交の正當時には、自力だの他力だのといふ分界は付けられぬ。氷の解けて水に歸するが如く、吾吾の身も心もそつくり佛性海中に歸入して、朝夕佛の光明裡に行住坐臥することが出來る。斯くある時は大道の靈機が吾人の身口意の上に發轉し、佛の功德が吾人の進退周旋の上に實現するが故に、君國に對しては忠義となり、父母に對しては孝順となり、社會に對しては信義となり、他の生命に對しては不殺生となり、他の財物に對しては不偷盜となり、男女の身分に對しては不邪婬となり、千態萬狀、皆な能く大道

請ふ太祖の無縫塔を作れ

太祖大師の御洪恩は、高祖大師の御恩德と與に廣大無邊である。吾々は明年(大正十三年)を以て、太祖大師御滅後六百年の大遠忌を迎へ奉るに當り、至誠を傾けて報恩謝德の實を擧げねばならぬ。三七日に渉る報恩供養の佛事、殿堂の莊嚴、道俗の群參、皆な是れ報恩の行持であるが、更に進んで、太祖の爲めに箇の無縫塔を作りたきものである。

昔、南陽慧忠國師が終焉に臨み、唐の肅宗帝が其の病床を訪うて、求むる所を問はれし時、國師は無縫塔を造らんことを請はれた。無縫塔とは、言ひ換れば無形の伽藍といふことである。有形の伽藍は鶴見の山頂に建設せられ、七堂の莊嚴、輪奐の美を呈して居るが、此の伽藍の大成のみを以て太祖の御滿足を得ることは出來ぬ。無形の伽藍とは、太祖の法孫及び檀信徒の心の底に太祖の御精神を宿すことである。太祖の御精神は、一言にしていへば平常心是道である。太祖の御家風は實踐躬行主義であらせられた。

太祖は御年二十二歳の時、法華經を看讀し法師功德品の中『父母所生眼悉見三千界』の處に至り大に省悟したまうた。父母所生眼は此の肉體に存する眼である。悉見三千界とは三千世界を見拔くことである。

て、太子の御精神は遥かに凡情を超え、些かの塵埃をも留めたまはぬ。高祖承陽大師の所謂『一塵を動かさず、一相をやぶらず、廣大の佛事、甚深微妙の佛化をなす』ものである。故に其の化道の及ぶ所は盡天盡地であつて、國家は爲めに文化の域に進み、國民は爲めに康寧の慶を讃むる。此等を以て俗諦門の施設と見てはならぬ。直に是れ佛向上の佛事である。彼の維摩經に

白衣たりと雖も沙門清淨の律行を奉持す、居家に處すと雖も三界に著せず、妻子あることを示せども常に梵行を修し、眷屬あることを現ずれども常に遠離を樂ふ。寶飾を服すと雖も相好を以て身を嚴る、復た飮食すと雖も禪悅を以て味と爲す云々

とあるは、太子に對する讃辭とも見るべきである。

古今禪者の中には、動もすれば解脫の深坑に陷りて濟世の神用を缺き、向上の知見に偏して向下の靈機を失却する者あるが如し、故に吾人は宜く太子の禪生涯に倣ひ奉るべきである。若し佳麗なることを得んと欲せば參暇の祕を攫りて、太子の紅法身に相見し奉らんことを要す。

夢の世とおもふもゆめとさとりなばさめんとねがふこゝろだになし

來り不見の相にして見る』というた。菩薩之に酬ひて『是の如し、居士若し來り已れば更に來らず、若し去り已れば更に去らず、所以者何、來る者は從來する所なく去る者は所至なし、見るべき所の者は更に見るべからず』といはれた。病氣見舞の問答としては隨分珍らしいものである。乃至、菩薩は室の空虛なるを見て『居士、此室何を以てか空にして侍者なきや』居士曰く『諸佛の國土も亦復皆な空なり』幽鳥語喃々、雲を辭して亂峰に入るの觀がある。菩薩また問ふ『何を以てか空とする』居士曰く『空を以て空なり』實に是れ夢殿の解釋と見るべきである。

圜悟禪師は『摩竭に室を掩ひ毘耶に詞を杜つ、人皆な以て極致と爲す、殊に未だ夢にだも渠が脚指頭を見ざること在り、大人の大見大智大用豈に格量に拘はらんや、直に是れ痛的的地なり、恨らくは兩手に分付せざることを』と謂はれた。禪的生活の妙趣は、夢中の夢を觀て身外の身を弄し、通身の手眼を拈來拈去して、大慈悲の妙用を發揮するに在るのである。太子の維摩經を觀たまふや『本を論ずれは既に眞如と冥一なり、迹を談ずれば卽ち萬品を示して同量なり、德は罪惡の表に冠し、道は有心の境を絕し、事は無爲を以て事と爲し、相は無相を以て相と爲す云々』と仰せられた。太子の境界も亦た無爲にして能く萬般の施設に當り、無相にして能く無方の妙用を現はす。而して其の根蔕は、悉く夢殿より出生し來るものにして、所謂無住の本より一切の法を立するものと謂ふべきである。

太子御一代の大業は、麤に入り細に入りて罄さゞるは無し、是れ皆な普門大悲の神通に外ならぬ。而し

岡山に於て、維摩大師が飢人と化して、太子に見えられたといふ名高い物語りもある。されども、此等は固より想像より出でたる說に相違ない。

予は彼の夢殿の事蹟に於て、其深なる興味を感じて居るものである。夢殿といふは即ち上宮王院のことで、法隆寺の東院である。今も現に八角形の堂が建つて居て、如意輪觀音が御本尊になつて居る。太子は常に此の夢殿に入りて三昧に住せられた。其の時、金人が夢中に現はれて經卷難解の義理を示されたといふので夢殿と名けられたとある。思ふに、是れは太子の定力の感得する所であらう。金人とは佛のことで、太子は禪三昧に入りて、佛心を感得し佛意に證契せられたものとも見ることが出來る。太子は法華經・維摩經・勝鬘經を以て御信仰の正依とせられたもので、親しく註疏まで御製作あらせられた。而して此の三經は、何れも禪味が多量に含まれて居ることは言ふまでも無い。

法華經は際佛知見を目的として說かせられたる、深入禪定見十方佛の轉法輪である。維摩經と勝鬘經とは、何れも頓敎にして一超直入如來地の垂訓である。而して太子は、此の三經の極則秘訣は、之を夢殿より感得したまうて居られる。即ち深入禪定見佛觀法である。

般若臺におさめをきてし法華經も夢殿よりぞうつゝにはこし

と慈鎭和尙は詠ぜられた。般若臺は慧思禪師の居られし南嶽である。

維摩經に於ける、文殊菩薩問疾の際、維摩居士は文殊の來訪を喜びて「善來、文殊師利不來の相にして

聖徳太子の禪

日本文化の創建者で、日本佛教の開祖と稱へ奉るべき聖徳太子は、實に古今に卓絶したる大聖にてあらせられた。太子御在世四十九年の御生涯は、内治外交、所有方面に於て、國體の精華を發揮し國民精神の特質を啓發し、以て國家永遠に大計を樹立し國運の大發展に努められた。支那・朝鮮の文明は殆んど遺憾なきまでに採收し、而して、其の長を取り短を捨て、是非を選擇し直曲を淘汰し、寸毫も迷信の跡なく心醉の兆なく、其の知見の公平正大にして其の才能の圓轉無礙なることは、千載の下、人をして驚歎措く能はざらしむ。實に神の御業と申し奉るより外は無い樣に思はれる。

禪より觀たる太子は如何といふに、太子は最も禪に深緣あらせたまふのみならず、其の御一代に於ける神の御業は、要するに禪の上の御活動であるとも拜せられる。果して然らば、太子は實に禪界の聖者にあらせられます。

太子は、達磨大師に參ぜられしとも稱せられて居る、天台智者大師の師匠なる、南嶽慧思禪師の再來だといふ說もある。併し、此れらは年代等の上から考證して見ても全く牽强附會の說と思はれる。又、片

要するに、看話禪も、默照禪も、歸着する處は思慮を絶し工夫を假らざる圓融無礙の妙境にあるので、看話禪は公案を機關として迂路に之に到達し、默照禪は只管打坐によりて驀直に之を捕へるのである。看話禪は多數の公案から歸納的に向上の一路に進み、默照禪は驀直に涅槃の妙境に到つて更に演繹的に古則公案を味ふ。茲に於いて、看話と默照とは正反對の立場にあるが如くにして、而かも兩々相俟つて互に其の缺けたるを補ふことが出來る。

看話禪は初心のものを導くに宜しく、默照禪は久參の衲僧が禪の堂奥に進むに適して居る。素よりこれは固定した事ではない。現今、在俗のもの〻禪に入らんとするもの〻多くが臨濟の門を叩くのは、看話禪の入り易くして興味多く思はる〻が爲ではあるまいかと思ふ。從つて又野狐禪を驅出するのも此の門に多い樣に思はれるから、看話的なる現今の臨濟僧も、默照的なる現代の曹洞門下も、各其の缺點に注意する所がなくてはならぬ。

防ぐといふ數箇條の點に於いて重要なる任務をなすものである。

初發心の者は、禪を聞いても餘りに漠然として居るが爲に、殆ど模索に苦しむものであるが、公案の工夫によつて大凡參禪の要路を窺ふ事が出來る。これ公案の必要なる所以の第一である。

次で古聖先德が本分底を了得した形式を學んで、之によつて自己の知見を研くといふこと、これ第二の利益である。而して、機縁熟すれば此の公案工夫によつて忽然として心眼の開發することもあり得る。

次に坐禪をするにも、初心のものは妄念が續出して心を一所に制する事が出來ぬ。かゝる際には公案を以つて精神集中の目標たらしめる。これ公案の必要なる所以の第三である。

次に只默々として坐つて居るばかりでは、初心のものは懈怠の心を生じ易い。かゝる際には公案を工夫する事によつて打坐に興味を覺え、自然に精進する樣になる。これ公案禪の利益の第四である。此の外、公案の工夫によつて參禪の士の得る利益は無數にある。

上來述べた處によると、公案の工夫は一の手段であつて、殆ど重要視すべきものではない樣であるけれども、之によつて眞箇に徹證した例は枚擧に遑なき程であるから、公案の透過は參禪の上に於て重要な事である。只公案の工夫を以つて禪其の物なりとし、これ以外に禪はないといふ樣に考へるのは、確かに一の禪弊であるから、此の點は大に注意しなければならぬ。

が出來るのである。
公案の工夫は、先にも述べた通り、型の研究である。型は何處までも型で、生命それ自らではない。一つの公案によつて古人の得道の形式を覗ふことは出來るが限なき大道の妙趣を悉く味ひつくすといふことが出來ぬ。大道は無限である。それ故に、公案も亦無限であらねばならぬ。古來、祖錄に載する所の話頭のみが公案ではない。山川草木、雨竹風松、悉くこれ公案である。公案透過を以つて悟の階級とすれば其の階級は實に繁多錯雜にして到底枚擧の煩に堪へぬであらう。

默照の禪弊

前來、看話禪の弊を擧げ來つたが、默照禪も之に偏すれば弊害を生ずる事又同樣である。迷悟に關せず作佛を圖らず、只管に打坐するといふ事は、道業共の功を積んだ禪僧が機根甚だ勝れたるものならば出來るけれども、初心のもの信力堅固ならざるものには望むべからざる難業である。依るべき公案もなく導くべき師家もなくして只默坐のみをなすものは、往々邪路に入つて、其の邪路なるを知らずして高貢自ら慢ずるに到る。又、先にも述べた如く、依るべき標準がない爲に、只茫然と默坐して時間を空費し身心を勞するのみにして何の得る處もないものもある。茲に於いて公案の工夫といふ事は、初發心の者に對して參禪の要路を示し、證道の形式を知らしめ、打坐の際に精神集中の目標たらしめ、且つ懈怠の心の生ずるを

て居るものは、公案透過が參禪者最後の目的である如くに誤解して、動もすれば、少し多くの公案を透過すれば直ぐに會に誇り、悟に豐かなるを據んで打坐を忽諸にする傾がある。これ迷へるの甚しいものである。

今一つ看話禪を誤解して居るものの陷り易い弊は、悟に階級があるといふ思想である。これ等の輩は公案の透過を悟の階級の如くに考へて、一則を透過すれば悟道に於て一階級を登るものとなし、公案透過の數の多少によつて悟の高下を定める。これ看話禪が古來梯子悟と貶せらるゝ所以で、禪を以つて一種の技術の如き誤解を生ぜしめる原因は玆にあるのである。元來、佛性海に深淺の差別なく大悟の境に高下の階級がある譯はない。其の深淺あり高下のあるのは學人の信念と知見とに依るのである。信念は人々によつて其の強弱に程度があつて、信力堅固なるものは修行辨道にも熱心であるから、たとひ智力勝れざるも遂に悟道の妙境界に達する事が出來る。悟に階級を立てるものは信と悟とを全く混同して居る。悟は境界であつて信は其の境界に達する力である。悟を目とすれば信は足である。

一則の公案を確實に透過すれば即處に佛境界に到達するのであつて、所謂一所通れば千處萬處である。多數の公案を工夫するのは縱に悟の階級を登らんが爲ではなくて、横に各種の得道の手段を究める爲である。富士山に登るには、どの道か一つを取つて進めば、必ず頂に到達する事が出來るけれども、御殿場口からも登り、大宮口からも登り、あらゆる方面から登ることによつて、一層深く登山の妙趣を味はふ事

一切の公案を透過して居る。本分底に徹到すれば、凡ての公案は工夫せずして自然に氷解せられるのである。坐禪儀に「事に觸れずして知り緣に對せずして照す」とある通り、默照禪は無作の作、無爲の爲で、作佛をも圖らず迷悟に關せざる境界である。

百弊並び起る

看話禪でも、默照禪でも、共に參學の要路であるけれども、其のいづれにでも偏すれば百弊並び起るのである。

看話禪では公案と坐禪とを混同する傾向がある。これ弊害の一である。公案の拈弄は必要であるけれども坐禪をするには是非共公案の工夫がなくてはならぬ、公案の工夫が即坐禪であるといふ樣に思ふのは誤である。公案拈弄は師家の方から見れば學人提撕の機關であり、學人の方から見れば辨道の標準である。公案透過は參禪者最後の目的ではなくて、妄念を拂ひ知見を開き打坐を專一ならしめる手段である。

次に公案の工夫は透過を目的とする所謂待悟の禪であるから、公案を悉く透過すれば、最早、坐禪は無用のものと考へるものがある。これ又、看話禪の重なる弊害の一である。待悟の禪は吾が道元禪師の最も力を入れて誡められた處で、坐禪は初發心時より一生涯不斷に修すべき佛威儀であつて、悟を開く爲めの閑家具ではない。參學のものは須らく一生不離叢林の覺悟を以てせねばならぬが、看話禪を生嚙りにし

公案は古聖先賢が學人に對して大法を示し、或は佛法を了得するに到つた型である。坐禪をするのに、只漫然と坐つたのみでは、特に上々の機ならばともかく、一般の根機のものでは佛知見を開く事が出來ぬから、樣に依つて胡蘆を畫くといふやうに、公案を工夫して古人が悟入した境界を會得するのである。已に一種の型であるから一つ一つ形式が異つて居る。其の異つた型を幾つも幾つも透過する事に依つて、漸次に境界が向上して、遂には型を離れて眞實法を自己のものとする事が出來るのである。

斯樣に看話禪では公案を工夫して古人の悟入した境界を探るのであるから、默照禪が只坐禪をして定を練るに對して、看話禪は主として慧の力によるものといふことが出來る。智慧の門から進んでも、眞に其の堂奥に達すれば智慧を絶し、又、型によつて工夫しても、結局は型を透脱して自由無碍の境界に達しなければならぬ。尤も、型というても敎相判釋の樣なものでは無い。佛向上の宗意に對して横拈倒用せられたる向上の巴鼻である。

看話禪の慧を主とするに反して、默照禪は定を主とする、大慧禪師が洞山下の禪風を默照禪と貶したのは默坐無爲に固着して潑溂たる禪機なく、又、初心の學人は茫然として坐るのみで殆ど歸着點を知らぬからである。けれども、此の弊害のあるのは未だ眞實透脱の境界に達せぬからである。宏智禪師が、大慧禪師の默照禪を貶した其の語を直ちに取つて作つたといふ默照銘にも『默は唯至言、照は唯普應、應ずれども功に墮せず、言なれども聽に涉らず』とある通り、默照禪も其の堂奥に達すれば、默坐の當處に於いて

に趣する商量の如き公案に就いて、仔細に其の的意を工夫せしむるのである。一の公案の真意を会得すれば更に他の公案を工夫し、かくて漸々多くの公案を透過して遂には大悟の境界に透達する事を目的とするものである。

默照禪といふのは、臨濟下の大慧宗杲禪師が天童宏智の禪風に對して其の形式を貶した語である。臨濟下の人々が多く公案に就いて工夫するに反して、洞山下の人々は專ら打坐するのみで、公案を工夫せず作佛をも圖らずして、只默々として照すといふ意味から默照禪と呼んだのである。後世、看話禪・默照禪の語が互に他の缺點を表はす語として用ひられる様になつて、今日尚爭論が絶えぬけれども、それはいづれも他の短所のみを捉へて論ずるからであつて、其の的意を會得すればいづれも皆な悟入の正道である。

慧の禪と定の禪

看話禪は公案に就いて工夫する。即ち公案を機關として古聖先賢が悟入せられた跡を辿るのであるから、古來、機關禪とも稱せられる。坐禪をするには公案は必要なもので、殊に初心のものが公案なしに坐禪をすると、只漫然と坐るのみで、殆んど勞して功のない場合が多いから、是非とも公案に據つて、一氣に工夫を凝すやうに努めなければならぬ。併し、公案の工夫が禪の全體の樣に考へるのは偏見である。公案の工夫は悟道の手段ではあるが、それが唯一の目的ではない。悟入の機關であつて坐禪其の物ではない。

看話禪と默照禪

悟入の正道

看話禪・默照禪の是非は、古來、禪家に於て屢々爭論を惹起した問題であるが、其のいづれにも長短得失があつて、一概に之を論斷することは出來ぬ。この事ばかりでなく、元來、議論といふものは雙方に相當の理由があるから起るので、各々其の主張する處を以つて確實な眞理と信ずるから、互に固く執つて讓らぬのである。禪家の立場から見れば、一切法悉く眞如の顯現であるから、凡ての說は各々一分の眞理で其の究極に達すれば平等一如の大眞理である。之を疑ひ之を否定するのは徹底するまで了解せぬからである。

看話禪といふのは、宋時代に、洞山和尚の系統たる天童宏智禪師の門流が、當時盛に行はれた臨濟系の禪風を評した語である。看は看省の義で、話は話柄である。それ故に看話とは即ち公案を看省工夫するの意である。趙州と僧との狗子佛性の有無に關する問答や、達磨と梁の武帝との間に行はれた聖諦第一義

の義なり」と示されてあるが是も亦一種の說にして、其の意義は殊に甚深なるを覺ゆ。釋尊一代の敎化、その法門萬差なりと雖も、歸する所は不平を平ぐるの外は無い。衆生迷倒して無我の我を執し、無相の相に着し、三毒爲めに起り、五欲爲めに窮り無し。故に之を示すに諸法皆空の妙理を以てす。然るに、小根小機の者は空理に偏して空卽是色なることを忘る。是を以て諭すに中道の妙諦を以てす。是の如くにして遂に八萬四千の法門があるに至つた。要するに、皆な盡く不平を斷ずるに非ざるは無い。而して、不平を平ぐるの結果は分を守るに在り、分を守るとは法々位に住するの謂である。一切諸法は法爾として分を守つて居る。山の突兀たる海の渺茫たる、花の紅なる柳の綠なる、盡くその分を守らずといふこと無し、吾人の修養も亦是の如く、修養の極點は唯だ人をして自己を開發し、其の本分に安住せしむるの外はない。しかれば天地の光景も吾人の身心も自然に其の分を守りて失ふこと無し。是れ豈に偉大なる公案に非ずや。

故に須らく知るべし、公案は佛祖の公案に限るに非ずして、天地法界は渾然たる公案を呈露して居る。豈に唯だ佛祖の機緣をのみ公案といふものたらんや。

情同時成道」ともいふのである。

然るに、近代に至りて佛家爲人の手段を輕々に看取し、唯だ徒らに古人の葛藤幾百箇を記持し、恰も俳優の假鬘を冠り衣服を變へて種々の扮裝を試みるが如きの觀を做し、時に臨み機に應じて巧みに棒喝を振ひ問答を馳せ、以て禪關の幾重を透破して、宗乘に於て大自在を得たるものと誤認して居る者がある。此等の輩は唯だ些子の威氣を存するの外何等の得處も無い。唯だ空見識を振廻し、惡口罵詈を以て得意とする樣な傾向がある。故に多くは高貢我慢に陷りて眞淳なる信念を有して居らぬ樣である。

中には師家たる人にすら、却て此等の似而非禪機を激發せしむるを以て誇りとして居る者も絶無とは斷ぜられぬ。臨濟門下ばかりでなく、曹洞門下に於ても、古來より棒喝の令を行し公案を與へて其の機を驗する宗匠も澤山あるが、眞の宗匠は一棒一喝の手段も皆な法の爲めには身命を惜まざる底の確信より發するものである。其の間には自づから慈悲の涙が湛へて居ることを忘れてはならぬ。天童如淨禪師は常に諸法の知識を罵倒して居られたが、時に或は潸然として涙を流し『我れ恁麼に口業の罪を犯す所以のものは、唯だ他の妄解邪見を覺醒して正法をして失墜せしめざらしめんが爲め、事止むことを得ず抂げて自ら殃を招くものなり』と、仰せられたとある。吾人は此等の慈訓を聞く毎に慚汗の背に滴るを覺ゆるのである。

正法眼藏現成公案の卷の御抄には『公は平等の義なり、不平を平ぐるを名て公と曰ふ、案は分を守る

して何が爲めぞ、是れ臨濟の我見妄情を摔殺して、彼をして大死地に陷いらしめたのである。臨濟は驚き恐れ、直ちに大愚の處に趨りて、吾れに何の過ありやを問ひし時、大愚は臨濟を叱り付けて『黄檗は斯くまで汝が爲めに老婆親切を施されたか』といはれた時、忽然として大悟したとある。卽ち大死一番し去るの瞬間に於て、自己の靈光に觸れ佛法の骨髓を直覺せられたのである。

自己の智慧を以て能照の資料となし、佛祖の公案を以て所照の對法と爲す時は、縱ひ如何程力を研究に費すとも、恰も望遠鏡を以て天文を測るが如く、自己と公案との間には、常に天地の懸隔を爲して居る。故に、自己の身心を脫落し、公案の海中に投じ去るに非ざれば、公案の眞髓を勘破することは出來ぬ。承陽大師は現成公案の卷に於て左の如く示されてある。

佛道を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝといふは、萬法に證せらるゝなり、萬法に證せらるゝといふは、自己の身心及び佗己の身心をして脫落せしむるなり。

工夫猛烈にして、一點の疑情なく纖塵の妄想なき時、佛祖の公案忽然として自己の公案となり、自己の公案は佛祖の眼睛鼻孔となり、一擧手一投足も盡く皆な佛祖の活動となり公案の妙用となりて、自づから天地の大公案に證契卽通するものである。此の時こそ、日月星辰も亦公案、山川草木も亦公案にして、公案ならざる時も無く、公案ならざる處も無いことゝなる。是を『佛事門中一法を捨てず』とも『有情非

先づ以て一切の分別慮知を掃蕩して行かねばならぬから、稱して『言外の言、機外の機』といふのである。

昔、梁の武帝、達磨大師に聖諦第一義を問ふ。大師答へて曰く『廓然無聖』、帝曰く『朕に對する者は誰ぞ』、大師曰く『不識』、唯だ此の不識の二字、佛法の骨髓を説破して餘蘊あること無きを以て、千古の大公案は自づから此の二字に落在して居るのである。併し、如何に不識の二字を解釋して縱横自在なるも、決して公案を究明したる者とは稱せられぬ。參禪者それ自身が徹底不識の境界と爲るに非ざれば、達磨の玄旨を了することは出來ぬ。不識の境界とは絕學無爲をいふのである。さすれば、若し不識の公案に參徹せんと要せば、一切の我見情識を截斷し、一心枯木の如くにし去りて、始めて以て絕學無爲の域に達すべきものである。達磨大師が『外、諸緣を息め、內、心喘ぐこと無く、心牆壁の如くにして、始て道に入るべし』と仰せられたのは則ち是れである。さればとて、枯木死灰の二乘禪と同一視してはならぬ。

我見情識を截斷し盡す時、任運にして本具の智光顯現することを得ん。是を大死一番、大活現成といふのである。然るに、唯だ漫りに胡喝亂棒の伎倆をのみ貴びて、風顚漢の振舞の如きを以て見性悟道の機用なりとせば、世に禪ほど險呑なものは無いことになる。併し、我見妄情を截斷するは難中の至難なるを以て、常に勇猛の氣を鍊り、精進の力を鼓し、恰も水火を履み劒戟を攀づる程の覺悟なかるべからず。禪門に惡辣の機鋒あるは之れが爲めである。

臨濟は佛法的々の大意を黃檗に進向せし時、黃檗の爲めに三十棒を喫せしめられた。黃檗の三十棒は果

て、古徳の公案中最も工夫に切實なる言句を揀びて之を授け、以て參究の標的を示し、その公案を背辨すれば、更に第二の公案を授け、愈通玄の上に假りに重々の關鎖を設け、參禪者の知見をして、麁より細に入り、淺より深に進ましむることを致す。是れ亦爲人慈悲の垂手である。然れども、之を以て一種の格則の如くに思ひ、株を守つて兎を待つが如きことあらば恐くは先賢古徳を辜負し去ることあらん。

天目中峯和尚、曾て公案の意義を示して曰く

公案は乃ち公府の案牘に喩ふ、法の所在にして王道の治亂實に焉に係れり。公とは乃ち聖賢其の轍を一にして天下共の途を同うするの至理なり、案とは乃ち聖賢理の爲めにするの正文を記するなり、凡そ天下あれば未だ曾て公府なくんばあらず、公府あれば未だ曾て案牘なくんばあらず、蓋し、取て以て法と爲し、而して天下の不正を斷ぜんと欲するなり、公案行はるれば理法用ひらる、理法用ひらるれば天下正し、天下正しければ王道治まる、夫れ佛祖の機緣、之を目けて公案と曰ふも亦た爾り、蓋し、一人の臆見に非ず、乃ち靈源に會し妙旨に契ひ、生死を破り情量を超え、三世十方、百千の開士と同じく稟くるの至理なり云々。

然れば萬代不易の妙理、天下萬生の大道、之を公案と云ふのである。理の妙なるもの道の大なるものに至つては、言を以て傳ふべからず、文を以て詮すべからず、是を以て佛祖は言外の言を示し機先の機を轉ず。趙州の柏樹子、洞山の麻三斤の如きは、決して義解識情の及ぶ所にあらず、是を研究せんと欲せば、

して嗜好する所なし、以て勢位を忘れ聲色を去るに至る、勉めずして能するに似たり、今の學者は伎倆を做し盡して終に奈何ともせず、其の故何ぞや、志堅からず事一ならざるのみ』と云うてある。雪堂の家風夫れ是の如くにして、而して能く怒罵を好むこと死心の衣鉢を傳へて針芥相投ずるに似たり。吾人にして深く此の兩老漢の事蹟に鑑みたならば、古高僧の拂を拈じ拳を竪て、棒を行じ喝を下し、又は天下の衲僧を罵倒し四來の龍象を嚴呵する上に、小兒も猶ほ能く之に懐き虎狼も猶ほ能く之に服する底の大力量あることを知るべきである。

冀くは世の禪客なる者切に意を此の事に注ぎ、以て着實なる禪風を發揮し眞摯なる行持を行取せられんことを。

禪家の公案

禪門に於ては佛祖の機緣を稱して公案といふ。碧巖錄・從容錄・無門關等は何れも佛祖の垂語、又は機緣を拔萃して、之を頌說し拈評せしものなれば、盡く是れ祖門の大公案である。故に此の公案に向つて實參實究するは參禪見性の要術である。是を以て、禪門の宗師家中には、初心の者を誘引するの方法とし

抑も禪には軌轍なく定則なし。或時は怎麼、或時は不怎麼、或時は奔逸絶塵、或時は門庭の施設、機に應じて迸發すること明鏡の物を照すが如く、時に隨つて舉唱すること天月の水に印するに似たり。故に、若し是れ其の人ならば痛棒熱喝も亦た上乘の醍醐味、惡罵嘲笑も亦た甚深の轉法輪である。又、若し其の人に非ざれば縱說横說も是れ泥裏の土塊、懸言妙語も是れ謗法の罪愆である。古人が「正人邪を說かば邪も亦た正、邪人正を說かば正も亦た邪なり」と云ひしは實に千古の格言と謂ふべし。

されど、吾人は敢て拂拳棒喝の靈機を不是なりとは言はず、唯だ禪客の禪理を究め禪機を發揮するに於て、最も眞面目にして且つ最も熱心ならんことを切望するものである。殊に洞山大師の所謂「潛行密用愚の如く魯の如し、但だ能く相續するを主中の主と名く」とは、禪門行持の根柢である。彼の臨濟禪師の如き、德山大師の如きは、棒喝禪を行ずること他に超えたりと雖も、熟々其の行持を觀察するに、決して潛行密用の宗師たることを失うては居られぬと思ふ。行履着實、信念強健、其の德行は實に一代の師表と稱すべきである。而して、機に臨んで棒喝を行ずることは電火の相撃つが如し。所謂此の人にして始めて此の機ありと稱すべきである。後世の似而非なる亂棒亂喝に擬すべきに非ず。

雪堂行和尚は前に錄したる死心禪師の敎を受けたる宗匠にして、能く死心の骨髓を傳へられた。然るに禪林寶訓には雪堂の行狀を記して「仁慈忠恕、賢を尊び能を敬まひ、戯笑俚言罕に口より出づ、嶮阻なく、暴怒せず、去就の際に至るまで極めて介潔たり、嘗て曰く古人の道を學ぶ外物に於て淡然と

ならんや」時に禪師は拄杖を拽て方侍者を趁ひ捲りて「爾が見解此の如くならば、他日、必ず勢位に諂らひ權豪に媚び、佛法の賤賣をして世俗を欺瞞する事ならん、我れ之を恐るゝが故に勵聲を發して之を激勵し、學人をして耻を知り過を改めしめんと欲するなり、學人若し吾が語を記憶して忘れずんば、異日、必ず好人物と做ることあらん」と言はれたとある。吾人は此の語を見て、深く古人が提撕に親切なることを感歎して止む能はず、豈に唯だ詬罵のみならんや、拂拳棒喝の機用も亦た皆な學人の志氣を策振し、其の皮袋裏に蓄藏する一切の閑妄想を打破し、以て驀直に大道の眞源に徹底せしめんが爲めである。

然るに、近時、胡喝亂棒を弄し麁言惡罵を事とする者は、多くは樣に依て胡蘆を描き、株を守て兎を待つと一般、更に新條の機輪あることを見ず、而して、其の問答商量する所を見るに、眞に能く縱橫の禪機を弄するの士果して幾許かある。多くは若干の古言古句を記取し、其の場合を見て調子好く之を唇端に漏すといふの風である。卽ち『如何なるか是佛法』と問へば或は『綠水靑山』と答へ、或は『眼横鼻直』などと答ふ。更に進んで『作麼生か道へ向上の事』と問へば、或は『鐵鎚春風に舞ふ』と答へ、或は『面前底藏すに處なし』等と答ふ。殆んど萬篇一律である。雪竇頌古の提唱でも致す積りにて說明し來らば、此等も亦た立派な問答となつて居るかも知れぬが、併し乍ら、是れ所謂魚目を以て珠に代へ燕石を翫んで玉に擬せんとするものにして、句裡に活機なく言中に靈響なし。言はゞ無責任、沒意義の商量である。

又、丹霞子淳禪師の如き、因に宏智禪師參ずる次で、乃ち問ふ「如何なるか是れ空劫已前の自己」智曰く「井底の蝦蟇月を呑却す、三更夜明簾を借らず」、師曰く「未在更に道へ」智、擬議す、師打つこと一拂子して、「又借らずと道うや」と曰はれし時、宏智、言下に大悟せられたとある。我國に於ても、通幻禪師を始めとして惡辣の手段を取られたる宗匠少なからず、而して、此等の大善知識の棒を行じ喝を下すや、殆んど全身の修行力を籠め滿腔の大慈悲心を傾けられてある。故に其の棒喝は盡く向上の轉法輪にして、其の惡罵は總に格下の愛語である。

然るに支那に在りては、晩宋以來、胡喝亂棒の風漸く行なはれ、我が國に在りては、足利の中世以來、盲棒狂喝の弊漸く隆んになりし樣に思はる。今日に至りては、滔々たる天下多くは是れ顚狂の狀態にあらざれば兒戲の舞踏たるを免れず。加之、世に所謂專門の師家と稱ふべき人々にして、口汚なく他を罵倒して揚々たるあり、而して、其の罵倒する者と罵倒せらるゝ者とを比較するに、往々五十歩にして百歩を笑ふが如き觀あるに至りては、禪門の爲めに甚だ慨歎に堪へぬことである。

昔は黃龍の死心禪師雲巖に住せし時、室中常に怒罵を好み、其の勢、當り難く、天下の衲子も皆な風を望んで退いたとある。方侍者なる者ありて苦々しく思ひ、一日、禪師に對して曰く、「夫れ善知識たる者は佛祖の道を行なうて人天に號令す、當に學者を視ること赤子の如くなるべし、今、慘憺の愛を施し、撫循の恩を垂れ中和の教を用ゆること能はず、奈何ぞ仇讎の如くにして見れば卽ち詬罵す、豈に善知識の用心

して分別思量の理路を截斷せしめて居る。

又、趙州禪師、曾て一菴主の處に到りて問ふ『有麼々々』、菴主拳頭を竪起す、師曰く『水淺くして是れ船を泊する處にあらず』とて便ち行く。又、一菴主の處に到りて問ふ『有麼々々』、菴主亦た拳頭を竪起す、師曰く『能縱能奪能殺能活』と、便ち禮を作す。趙州は菴主の拳頭を假りて殺活自在の靈機を弄せられたのである。

又、臨濟、曾て佛法的々の大意をば黃檗に問ふ。黃檗一語を發せず、劈面に三十棒を與ふ。臨濟、其の意を會せず、之を大愚に問ひたるに、大愚は、『黃檗與麼に老婆心切、汝が爲に徹困なるを得たり』と言はれた。實に黃檗の棒頭には大慈大悲の淚が湛へられて居るのである。

曹洞宗は棒喝の機を貴ばずして、專ら綿密の行持を以て家訓としてゐる。然も時に嶮峻の機鋒なきにあらず、洞山の嗣、道幽禪師の如き、一日、上堂し、大衆纔に集る。師乃ち問ふ『甚麼人か鐘を打す』、僧曰く『維那』師曰く『近前來』、師遂に打つこと一掌し却て方丈に歸る。又、同じく洞山の嗣たる天童啓禪師の如き、簡大德來り問うて曰く『學人卓々として上り來る、請ふ師的々』師曰く『我が這裡一屙して便ち了す、甚麼の卓々的々かあらん』、簡曰く『和尚恁麼の答話更に草鞋を買うて行脚せば好し』、師曰く『近前來』簡近前す、師曰く『祇老僧恁麼に答ふるが如き過甚麼の處にか在る』、簡答ふる無し、師便ち打つとある。

餘りあることが解るであらう。世に此れ以上のいゝことがあらうか。

拂拳棒喝の轉機

拂を拈じ、拳を竪て、棒を行じ、喝を下す、是れ禪門に於ける大機大用である。以て言外の宗趣を開示し妄想の窩窟を打破し、學者をして直下に禪關を透得し靈機を撥轉せしむ。故に承陽大師は『拂拳棒喝を事するの證契も未だ是れ思量分別の能く解する所にあらず、豈に神通修證の能く知る所とせんや』と仰せられた。

看よ、百丈大智禪師曾て馬祖大師に參ず、師は直ちに繩床角の拂子を目視して問うて曰く『此れ用に卽するか、此れ用を離るゝか』、祖曰く『汝、向後、兩片皮を開て何を將てか人の爲めにせん』、師拂子を取て竪起す。祖曰く、『此れ用に卽するか、此れ用を離るゝか』師拂子を舊處に掛く。祖、威を震つて一喝す。師便ち禮拜す。師後に衆に語て曰く、『佛法は是れ小事にあらず、老僧、昔、馬大師に一喝せられて直に三日耳聾なることを得たり』と。知るべし、拂子は直に是れ祖門の公案にして衲僧の眼睛たり。馬祖の一喝は能く百丈をして三日耳聾せしむ。唯だ百丈をして耳聾せしむるのみならず、天下人の耳朶を聾却

することを得るであらう。

似而非禪者には往々に空見識を振り廻して、自己の操行を輕視し利他の行願を蔑如して揚々たる者を見ることである。吾れこそは大事を了却せりとて、自身は僧堂に背却して單寮に廻坐し、唯だ學人を接得して棒を行じ喝を打し、口を開けば天下の道俗を罵倒し、自分一人のみ唯我獨尊のやうに思うて居る者もある。どうしても常識ある者の振舞とは思はれぬ。此等の禪僧に相見する者も、あの和尚は甚だ禪機があるというて喜んで居る。古人臨機の活作略を摸倣して尋常の行持を閑却せんとするは、武裝して平和の宴に臨むよりも淺ましい。禪は決して其んなものではない。

圓覺經には作・止・任・滅の四病を說てある。作病とは分別妄想を擔ぎ廻る者ぢや。止病とは枯木禪を死守するのである。任病とは世緣に隨つて逍遙自得する積りで、それも好しこれも好し、寢るも起るも、食ふも飲むのも、皆な佛法であるなどと太平樂をキメ込で居る連中である。滅病は超世間の生涯に住するをいふのである。何れも半途に在りて腰を据るから病を發するのである。此等の病を一掃して、更に進一歩し來れ、必ずや趙州と相見し去ることを得やう。

佛陀の三德四智は、皆な無の公案より出生して來る。菩薩の六度萬行も亦た皆な無の源泉より涌出して來る。是れ人爲ではなく、說明ではなく、理論でもない。此の理を信ずることが出來ずば、端坐一回して見よ、狗子年頭の佳瑞は自を利し他を利し、日を利し月を利し、盡十方界を利し盡未來際を利して、猶ほ

を聞き「既に是れ無佛ならば何の論か之れあらん、當に有佛論を著はして始めて得べし」と告げた。公は何となく其の語の奥床しき意味あるに感じて無佛論の製作を思ひ止まつた。

後日、又た一梵刹を訪ひ、佛前の經を見て其の維摩經なるを聞き卷を開て讀過し、「此の病は地大に非ず亦た地大を離れず」に至りて感歎措くこと無く、「佛教の深遠なる夫れ是の如きか」といひ、經を借り來りて熟讀し、夜の已に闌なるを忘る。間氏之を見て問ふ、「公何の書をか看るや」、公曰く「維摩經」間氏曰く、「此の經を讀破して其の玄旨に通じられなば、始て無佛論を著はしたまふことを得べし」と、公覺えず憮然、是れより心を佛乘に留められたとある。

凡そ、事相に執着するも、理論に拘泥するも、多くは有無の兩頭を以て病根とす。此の有無より「非有非無論」を出し「亦有亦無論」を生じ、眞空と說き實在と說き、絕對と稱し相對と稱し、無限と呼び有限と呼び、無心を論じ有心を論じ、縱ひ說き得て巧妙を極め精緻を盡すも、畢竟じて他の珍寶を算する樣なものである。故に我門にては默坐一番、此等の閑妄想を放下して纎塵も分別することを許さぬ。此の時始て「無」字の大公案に撞着すべきである。此の「無」字を提げて、此の「無」は有無の無ではない、滅無の無ではない、卽ち絕對の無であるなど﹅講釋をしたからとて、唯だ脣吻を動かすのみにして何の役にも立たぬ。故に「無」字を會せんと要せば、會せんと欲する心意をも忘却して見よ。忘却せんとも思ふことを休めよ。祗管に念息を調へて正身端坐して見よ、直下に無字を覺了し、無字を呑却し、無字を左轉右轉

の十八問答である。（編者曰く、この稿には脱漏あるものの如し）

趙州の無字

犬も歩けば棒に當る。年の首めに、趙州狗子の公案を拈提するも妙であらう。禪門の話頭は、學問上の軌轍を以て論評することは出來ぬ。又普通の人情を以て測度することも出來ぬ。趙州が、狗子にかへつて佛性ありやの問題に答ふるに『無』の一字を以て斷ぜられしが如き、是を禪門千古の大公案と爲し、天下無數の龍象をして頭腦を裂破せしめて居る。併し之を哲學上の問題でもあるかの如くに思うて、徒らに工夫を費やし、肚裡の智能を絞り出して様々なる評論を試みて居る間は、決して趙州の本面目に相見するは不可能である。承陽大師は曾て此の公案を擧し了つて後に『有と道ひ無と道ふ二倶に是謗なり』と仰せられてある。有無の兩頭に迷うて居る中は迚も公案現成の分は無い。

唐の無盡居士張商英は頗る儒學に精通せり、一日、僧寺に入りて、一切藏經の齊整するを見て怫然色を作し、『我が聖孔の書豈に胡人の敎に如かざるべけんや』とて家に還りて後、無佛論を著はして佛敎を粉碎せんと、筆を吮て伸吟し深更に至るも休せず。其の妻問氏夙に指を佛敎に染めたることあり、公の志

業をしきりにして佛道にいたらんとするは、なほこれながえをきたにして越にむかはんとおもはんがごとし。又圓孔に方木をいれんとせんとおなじ。之を見ながら修する道にくらき、それ醫方をみる人の合藥をわすれてなんの益かあらん。

醫師が患者の脈を見ても、藥を與へる事を忘れては、何の益にも立たん話である。

口數をひまなくせる、春の田のかへるの晝夜になくがごとし。

たゞ無闇に經許り出して居るのは、春の田圃の蛙がぎや〳〵喧しく鳴くのと選ぶ所がない。

つひに又益なし。いはんやふかく名利にまどはさるゝやから、これらのことをすてがたし。それ利貪のこゝろはなはだふかきゆゑに、むかしすでにありき、いまのよになからんや。もつともあはれむべし。たゞまさにしるべし、七佛の妙法は、得道明心の宗匠に、現心證會の學人あひしたがふて正傳すれば、的旨あらはれて稟持せらるゝなり。文字習學の法師のしりおよぶべきにあらず。しかあれば、すなはち此疑迷をやめて正師のおしへにより、坐禪辨道して諸佛の自受用三昧を證得すべし。

佛の大精神は言ふ迄もなく、正法眼藏涅槃妙心である。之れを禪と云ふも妨げない。されば禪は佛法の全體であり、坐禪は佛法の正門である。此の禪、即ち佛の大精神を體得するには、是非、坐禪辨道に精進努力せねばならぬ。到底、文字教相の末端に拘泥するものは、佛法の全體を知る事が出來ぬ。畢竟、佛法の正門としては坐禪三昧の外、一門もないのである。此の坐禪の妙味の存する事をお示しになつたのが此

或る婆さんが、念佛を三十遍唱へては木の葉を一枚宛ためておいた所、婆さんの死んだ時、三俵も溜つでをつたので、之れだけ溜つて居れば大丈夫極樂に行けるものと思つて居た。處が、案に相違して地獄に行つてしまつた。『こりや途が違つて居りはせぬか、私は極樂へ行ける資格のあるものである、是れだけ念佛を唱へました』と木の葉の俵を出して見せた處、赤鬼・青鬼がやつて來て、其の俵の木の葉を、殘らず箕に移して二三遍あほると、皆な迹形もなく散て了つて、たゞ、殘つたのは僅か二三枚に過ぎなかつた。『是れ見よ、お前の念佛は皆な空念佛で、吹けば飛ぶやうな念佛である。殘りの二三枚は、孫の死んだ時と地震の時に唱へたのがそれである。其の時許りは眞實に心から唱へた念佛である。外のものは何んにもならぬ』と云つたと云ふ話があるが、世間にはこんなのが多い。たゞ聲を出して唱へ、口を動かして念佛さへすればいゝと云ふのではない。

佛法に擬するにうたゝとほくいよいよはるかなり。又、經書を開くことは、ほとけ頓漸修行の儀則ををしへおけるをあきらめるなり。敎の如く修行すれば、かならず證をとらしめんとなり。

修行さへすれば、必ず證を得る事が出來ると御證明下されてあるが、其の修行が中々困難の事である。是れは或る大學生の歌つて居るのを聞いたのであるが、歌は至つて野卑な『妾宅通ひにポケット論語自動車飛ばして慈善會』と云ふのであつたが、こんな譯で、實行と云ふ事は容易にし難いのである。

いたづらに思慮念度をつひやして、菩提をうる功德に擬せんとにはあらぬなり。おろかに千萬誦の口

まなこいまだひらけず、こゝろなほまよひにあることを。おほよそ諸佛の境界は不可思議なり、心識のおよぶべきにあらず。いはんや不信劣智のしることをえんや。たゞ正信の大機のみよくいることをうるなり。

力ある人でなければ佛法の事はわからない、無風流の者はこれを見ても何の感じもない。松原に來ても、松原が見えるだけで、松の故實やら松風の音色などは少しも感じない。昔、良寛和尚の所に盗人が這入つて品物を取つて出て行つた。その後で、丁度、窓から月がさしこんだので、良寛和尚思はず「盗人に取り殘されし窓の月」と詠んだ。誠に風流な話であつて、無風流な盗人には月の寶まで取つて行く事が出來なかつた。佛法の中にゐてさつぱり解らないのと同じである。

不信の人は、たとひをしうともうくべきことかたし。靈山になほ退亦佳矣なりのたぐひあり。おほよそ、心に正信おこらば修行し参學すべし。しかあらずば、しばらくやむべし。むかしより法のうるほひなきことをうらみよ。又、讀經念佛等のつとめにうるところの功德を、なんぢしるやいなや。ただしたをうごかし聲をあぐるを佛事功德とおもへる、いとはかなし。

曹洞宗の百萬遍、之れも立派な信仰があつて唱へれば功德がある。念佛に入浴念佛と云ふのがあるが、之れは湯に這入つて良い氣持になると念佛を唱へるのである。之れちや何んにもならぬ。又、木葉念佛と云ふのがある。」

佛が衆生濟度の活動のお姿である。達磨大師、三世の諸佛・諸祖、皆な坐禪をせられ、坐禪から得道明心せられたのである。故に、坐禪こそ佛法の正門であると云うて坐禪の正門たる理由をお示しになられた。けれども、我見・妄執の强い凡夫の儚さには、これほど御親切にお示し下されても、まだ坐禪の眞精神を合點せぬ者が多い。そこで、御開山の御慈誡は、彌々細に入り、密にわたつて御親切にお示し下さる。

問、あるひは如來の妙術を正傳し、または祖師のあとをたづぬるによらん。まことに凡慮のおよぶにあらず、しかはあれども、讀經念佛はおのづからさとりの因緣となりぬべし。たゞむなしく坐して、なすところなからん。なにによりてか、さとりをうるたよりとならん。

答、なんぢ、今、諸佛の三昧、無上の大法を、むなしく坐してなすところなしとおもはん。これを大乘を謗する人とす。

空しく坐つて居る、それが馬鹿々々しいと云ふやうな誹謗は、大乘を謗する人である。まどひのいと深き、大海のなかにゐながら水なしといはんが如し。

禪と云ふものは、迷の深い人には大海にゐて水なしと云ふやうなもので、分からないものである。佛法の眞ッ只中に坐つてゐながら、何の利益もないと云ふのは、丁度、大海の中にあつて水なしと云つて居るやうなものである。

かたじけなくも、諸佛、自受用三昧に安坐せり。これ廣大の功德をなすにあらずや。あはれむべし、

問、いな、この坐禪の功徳高大なることをきゝおはりぬ。おろかならん人、うたがうていはん、佛法におほくの門あり、なにをもてか、ひとへに坐禪をすゝむるや。

答、これ佛法の正門なるをもつてなり。

と、總べて佛法は、前述の如く禪が根據となつてゐる。弘法大師は、達磨の道は說かなかつたけれども禪は修せられた人である。大師が四十三の時、高野山に入り、禪を修めなければ本當の安心は出來ない事を覺り、寺を建てると云ふ名目で、無代價拂下げを願はれて、それをお弟子に授けられたのが高野山の道場である。その道場で、お弟子達を集めて坐禪せられた。女人は入れなかつた。しかし、斷然、佛敎から女人を隔離せられたのではなく、たゞ男女の風儀の爲めに女人を入れなかつたのである。要するに、佛法の正門は禪であるから、極力、禪を主張するのである。更に進んで、

問、なんぞひとり正門とする。

答、大師釋尊まさしく、得道の妙術を正傳し、また三世の如來ともに坐禪より得道せり。このゆゑに、正門なることをあひつたへたるなり。しかのみにあらず、西天東地の諸祖みな坐禪より得道せるなり。ゆゑにいま正門を人天にしめす。

と、かく坐禪を以て正門となす理由を明に示された。

何宗でおまつりしてゐる佛を拜しても、佛は大抵は坐禪をしてゐらつしやる。立つてゐらつしやるのは、

は、皆なそれ〲異つてゐた。足を擦つた者は『象は樽の如し』、腹を撫でた者は『象は太鼓の如し』、鼻を探つた者は『象は太い麻縄の如し』、牙に當つた者は『象は劒の如し』、耳を擦つた者は『箕の如し』、背を撫でた者は『土手の如し』と答へた。王は、之れを聞いて大いに悲しまれ、いづれも象の一部分を捕へてはゐるが、其の全體を見る事が出來ない。といはれたと云ふ話がある。此れと同じやうに、佛法を學ぶものも、その全部を見る事が出來なければ、此の盲人と何の選ぶ所はないのである。

眞言であれ、天台であれ、淨土であれ、禪宗であれ、各宗・各派・皆な異つて居るやうであるが、元々、同一釋尊の御手元から出たもので、根幹は同一である。その根幹とは即ち禪である。されば、各宗皆な禪が備つて居るのである。乃至、坐禪は實に天地萬物の根本、活動の基礎力である。

汽車の活動して已まないのは何の力であるかと云ふに、動かないものがあるからである。即ち、線路と云ふ動かない、しつかりした物があるから、汽車は活動する事が出來る。吾々も、朝から晩まで働く、その働きを充分ならしめる爲めには、動かない或る大きなものを持つてゐなければならぬ。その動かないものを作るのが坐禪である。

此の坐禪の事に就て、高祖大師が親切丁寧にお示しになられたのが『正法眼藏辨道話』である。此の辨道話中の十八問答を拜覽する時は、明に坐禪は佛法の正門である事が合點せられるのである。

今第一問から順次に拜覽すると、

界一大眞理である。明峯禪師は實に此の消息を通ぜられた。恰も『黒漆の崑崙夜裡に奔る』といふに同じ。
そこで太祖は證明して『脱落々々』と仰せられた。

此の自己能く萬徳を莊嚴して受用不盡である、此の自己能く大智慧光明を放ち大慈悲の妙用を現はして縱横無礙である。是れ卽ち人々本具の閑田地である。吾々もまた能く此の閑田地を開拓し培養して自覺々他の功德を發揚せねばならぬ。是れぞ眞實報恩の行持といふべきである。

辨道話の十八問答

我が高祖承陽大師が、支那から日本に御歸朝遊ばされた當時は、『坐禪は佛法である』、『イヤ佛法でない』、『坐禪は國民の信仰を紊亂させる』と云ふ樣に、各宗から色々な攻擊非難を受けてゐた。然かし、大師は、そんな凡言俗說にはビクともせられず、飽く迄も『坐禪は佛法の眞髓である。總府である、各宗各派は皆な禪の中に網羅せられるのである』と謂はれて居る。

能く引例に出される話であるが、鏡面國の國王は、餘程物好きの王だつたと見え、或時、大勢の盲人に象を撫でさせて、『象と云ふものはどんな形のものであるか』とお尋ねになつた。すると、盲人達の返答

自尊であるが、迷想の爲めに掩はれて居るに依て、恰も河中に在て渇を叫ぶが如く、大道の中に在て大道に飢え、佛性を有しながら佛性を知らずに居るのである。佛祖は之を憐みて無量の法門を開示したまふ。其の慈敎を信受し奉行することに依て、自己の寶藏を打開し本有の靈光を發揮して佛祖の證明を得るを、大悟とも面授ともいふのである。

太祖大師の法嗣にて、本山二世禪師と法の兄弟なる明峰素哲禪師は、初め天台敎觀の學を修め、後に太祖に參じて侍者の役に當られた。太祖は室中常に哲侍者と呼ばれ、師が『はい』というて、應諾すると、『是れ什麼ぞ』と一拶せられた。其の接得は極めて單純である。呼べば應ずる底の者は是れ何物ぞ、要するに吾れは是れ何者ぞと參究せよ、吾は凡夫なりと斷ずる勿れ、吾は罪惡の衆生なりと思ふ勿れ、吾を以て善と爲すべからず惡と爲すべからず、生死ありと爲すべからず增減ありと爲すべからず、一切の妄想分別を遮斷して自己是れ何物ぞと參究せよ。是れ卽ち閑田地の工夫である。明峰禪師、一旦豁然として契悟せられ、乃ち『某甲會せり』と道はれた。太祖は直ちに『儞作麼生か會す』と反問せられた。時に師は『皮膚脫落し盡して唯だ一眞實のみあり』と答へられた。皮も肉も落ち盡して眞實の骨髓のみになり切つた。卽ち赤裸の境界である。善惡といふも邪正といふも、煩惱菩提といふも生死涅槃といふも、皆な相待的判斷である。眞理の根元は絕對である。一實である。眞實の自己を究盡すれば絕對一實の眞理である。此の自己に承當する時は我と佛と一體、師と資と一如である。豈に唯だ吾と佛とのみならんや、盡十方世

心を究め盡せば、宇宙の大眞理、天地の大道と融合一致して居るに依て、其の體は極めて眞、其の相は極めて美、其の用は極めて善なるもので、是れを超越的眞善美ともいふのである。故に此の一心には、自づから智慧の光りが備つて居る、勇猛の力も存して居る、慈悲の泉も湛へて居る。凡夫は修養を怠るが故に常に荒蕪地として居るが、聖賢は修證に努むるが故に、長へに勝福田として自利々他の功德を顯はして居るのである。

太祖大師御年二十二歳の時、法華經を看讀せられ、法師功德品の中に、「父母所生眼悉見三千界」とある處に於て省悟せられた。即ち此の肉眼を以て三千世界を見ることが出來る。此の幻身に於て宇宙の大眞理を證得し、此の身の上に眞理の光明を放ち得るのである。太祖大師の宗乘は、決して、佛法を遠方に求めたり、成佛を未來に期したりする迂遠の法ではない。此の身に於て佛の知見を開き、佛の功德を現はし、佛の慈悲を應用するの法門である。元來、佛教では過去を說き未來を說くけれども、決して妄りに過去のみを憧憬し、又、妄りに未來のみを期するのではない。要するに佛教は、過去を顧りみ未來を慮かり、而して能く現在を愼しむものである。太祖大師は更に實地の正修行に精進せらること六年、御年二十七歳の時、「平常心是道」の公案下に豁然大悟あそばされた。是れ即ち閑田地を耕して靈苗を種付られたのである。それより御本師徹通禪師の佛法を相續し、その佛法を法子法孫に傳へ、又、檀徒信徒に弘通せられた。賣買すというても、畢竟、人々本具の閑田地なれば、物質の如く授受すべきものではない。箇々獨立

べし。斯くする時は自づから、布施・持戒・忍辱・精進・其の他所有善行淨業を發起し、世間をも利益し出世間をも潤澤し、通身盡く光明聚と爲りて、不自在三昧の妙樂を廣宣流布し去ることあらん。

閑田地を耕破せよ

御開山常濟大師の御遺偈の前句に『自ら耕し自ら作る閑田地、幾度か賣り來り買ひ去て新たなり』といふがある。閑田地とは稻田とも麥畑とも定まらぬ田地である。是は吾々の本心を指したものである。心は猶ほ大地の如し、大地は能く萬物を生じて能く之を育てる。吾々の一心もまた能く一切の諸法を造り出して無盡藏である。故に華嚴經には『心は工なる畫師の如く能く諸々の世間を畫く、五蘊悉く從つて生じ法として造らずといふこと無し』とありて、心を畫工に喩へられた。畫工が能く鬼を描き佛を描き、美を描き醜を描くが如く、吾々の一心は能く佛界を造り魔界を造り、苦樂昇沈、樣々なる世界を造り出すものである。同じ此の世に在りながら、或者は幸福を感じ、或者は不幸を招き、或者は喜び、或者は悲しむ、而して其の源は皆な一心の變化である。『極樂も地獄も己が身に在りて心こそなれ鬼や佛に』である。故に心の本體は善とも惡とも名けられぬ。卽ち、稻田とも麥田とも名のつかぬ閑田地である。されど此の本

とあるが、是れ亦た信念所發の曲調である。太田錦城も亦た左の如く其の信念を表白して居る。

放逆姦縱の心には神もやどりたまはず、權謀を恣にして詐力を奮つて、功利にのみ外馳する心にも神はやどりたまはず、唯菜根を咬みて寒苦を忍び、本心に復して君父の恩を思ひ、天地鬼神の冥鑒に背かざる事を思ふ心には神とゞまりたまふべし、此に止りて萬事處置せば、事々皆其の至當を得べし、左傳にも心不レ爽昏ニ亂百度一と云へるは尤の事なり、今の人精神昏亂にして書を讀み道を講じ、又は政事に處置す、百事の紛亂する事尤のことなりと知るべし。

さすれば、吾人にして實に能く修養の功を奏せんと思はゞ、胸中に一點不昧の信念を發得し、誠意正心を以て萬事萬行の源泉と爲し、而して物に接し事に當りては、妄情を制し私慾を防ぎ、驕奢を遠ざけ淫蕩を斥け、唯だ一心に不自在を忍び不自在を習はんことを心懸け、日に修し月に養ひ、終には不自在の不自在なることを忘れ、不自在中に在りて自在滿足を樂しみ得るといふ境界まで、修行の歩武を進めねばならぬ。

予も常に不自在を習ふと雖ども、動もすれば不自在を嫌厭するの情を起し、之を忍ぶこと能はずして、知らず〳〵不自在に辜負し去らんとし、容易に不自在界の主人公たる能はざるは、甚だ慚愧の至りであるが、猶は勉めて不自在裡に優游自適せんことを祈つて居る。冀くは同感の諸兄弟、決して不自在を惡む勿れ、不自在を厭ふ勿れ、不自在を觀ること我子の如くなるべし、不自在を護ること我が眼睛の如くなる

を積んだ例證である。

聖賢の至道を以て私己の欲望を制するに非ずんば、爭でか眞實の人たることを得んや、欲望の手前から見れば甚しき不自在なるも、道といふ方面より見れば此の不自在こそ大なる滿足である。大なる自由である。孟子が

魚我所レ欲也、熊掌亦我所レ欲也、二者不レ可レ得レ兼、舍レ魚取二熊掌一也、生亦我所レ欲也、義亦我所レ欲也、二者不レ可レ得レ兼、舍レ生而取レ義也、生亦我所レ欲、所レ欲有下甚二於生一者上、故不レ爲二苟得一也、死亦我所レ惡、所レ惡有下甚二於死一者上、故患有レ所レ不レ辟也、

といひし如く、生を舍つるは不自在の極點なるも、義を取ることを得たるは最大の滿足と言はねばならぬ。君子と小人との分界、佛陀と凡夫との岐路は、全く此の間に存するのである。

併しながら、不自在を樂しむといふことは、我慢の力では出來ぬ。唯だ信念を有するのみありて之を能くするのである。信念あるの人は自づから、神聖の大道を尊び天地の正氣を養ふことを得べければなり。然らされば徒らに法を外界にのみ取らんと欲し、道を心外にのみ尋ねんと欲するに依りて、畢竟じて誠意正心の人たることは出來得ない。邵康節の詩にも、

天聽寂無レ音、蒼蒼何所レ尋、非レ高亦非レ遠、都只在二人心一、人生心二一念一、天地悉皆知、善惡若無レ報、乾坤必有レ私、

て觸るゝこと無し。乃ち女に謂て曰く、『吾が心死灰の如し革嚢を以て試むるとも何んか有らん』と、時に彼の女は忽ち雲を凌いで逝きつゝ顧みて嗟歎して『海水は竭くべくとも、彼の上人は志を秉ること貞堅にして』と申したとある。向上より觀來らば、慧鬼は僅かに唯一隻眼を具するのみにして、未だ燒菴婆子の瞞盱を免かれざるやも知らざれど、吾人は先づ是の如き貞堅の志氣を操持したきものである。且つ此の因緣も單に昔し話とのみ思ふべからず、今の世にも頭腦の無い無感覺・無常識の鬼は澤山ある。手足だけは利口らしく働けども、表面のみを粧ろうて腹の無い連中も決して少なく無い。吾人はウッカリすると此等の類に誘惑せられて、遂には良心までも失却するに至る。まして天女の歌言に欺かれて一生を過まる者亦た甚だ多きにあらずや。故に慧鬼の如きは修養の成功者中に列すべき人であらうと思ふのである。

豐後杵築の藩士にして有名なりし綾部弘道は、身持極めて節儉にして華飾を好まざりき。ある人が其の子に美服を贈りしことありしも、遂に着用することを許さずして、『先君(父を指す)貧素にして身まかり給へり、吾も辛勤多年漸ひに俸貲を享けて兒女を暖飽せしむ、是れ君の惠なり、夫れ人情は儉に難くして奢に流れ易し、予、兒を愛せざるに非ず、奢りに慣はしめざるのみ』というて戒しめたとある。

又、碩儒太宰春臺は吹笛を能せり。日光門主甚だ音律を好みたまひ、春臺の技を聞て懇ろに召されけるが、春臺は固く辭して『臣は道を講ずるの儒者なり、薄技を奏し宴樂に供することは能せず、若し強ひて召さば吾れ我が術を破らんのみ』と答へ、是より終身また笛を吹かれなんだと。是れ皆な不自在の稽古

十人十色の特長ありて、各々其の禀性の能力を發揮すべきは勿論なるが、何れにしても健全なる體力に待たざるべからざるは一なり。藤田東湖先生は曾て左の一語を以て弘道館學則の骨子とせられた。

徵レ古稽レ今　發二明神聖之大道一　右レ文尙レ武　鼓二舞天地之正氣一

此の一語は以て修養の標準とも爲すべし。天地の正氣を鼓舞すればこそ眞の英雄豪傑とも爲りぬべし、神聖の大道を發明すればこそ眞の志士仁人とも爲りぬべし。若し然らずんば、英雄は是れ姦賊、志士は便ち狂士たらん。而して正氣を養ひ大道に向ふには、先づ以て不自在を忍び且つ樂しむの人たらざるべからず。不自在を不自在として、努めて之を忍ぶは修養の初步なり、不自在の不自在なることを忘れ、安んじて之を樂しむは修養の優なるものである。

高僧傳を按ずるに、釋の慧鬼法師は、晋の隆安年中に彼の有名なる法顯と與に入竺した人である。戒行衆に超えて澄潔、多くは山谷に處して禪を修しき。或時、一の無頭鬼ありて面前に現はる、鬼、神色自若徐ろに鬼に謂つて曰く『汝既に頭なし便ち頭痛の患なからん一に何ぞ快なるや』と、鬼忽ち形を隱す、又一鬼あり腹なくして但だ手足あるのみなり、鬼また曰く、『汝既に腹なし便ち五臟の患なからん一に何ぞ樂しきや』と、其の鬼も亦た忽ちにして形を隱せりとある。或日、天甚だ寒く雪さへ降りしきりける時、一女子の形貌端正、姿媚柔雅なるが來りて寄宿を求め『妾は天女なり、上人の德を慕ひ、天主の命を承け、來りて上人を慰さむ』といひて、艶言以て鬼の意を動かさんとした。鬼志を執ること貞確、一心牢とし

を守るに在る。
徳川家康公は流石に修養的人傑である。左の文は誰れしも知つての通り、公の遺訓として世に傳はる所のものである。

人の一生は、重き荷を負て遠き道を行くが如し、いそぐべからず、不自由を常と思へば不足なし、心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思へ、勝つことばかり知つてまくることを知らざれば、害其の身にいたる、己れを責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるよりまされり。

右は如何にも消極的訓諭なれども決して然らず、修養の趣味は寧ろ此處に存するのである。或人は、「宗教家などが頻りに修養を說くは甚だ宜くない、人間には皆な夫々の特所長所がある、その特長の發達したのが、英雄豪傑、志士仁人等である。然るに矢鱈に杓子定規の修養論を主張して、萬人を一律の下に曳き附けんとするは、偶ま以て其の性情を傷害し其の特長を抑壓し、遂に有爲の人材を養成すること無きに至らん」というて心配して居る樣である。一應尤も千萬なる說の如くなるも、吾人の所謂修養なるものは、決して人間の特性を傷けて其の才能の發達を沮害するが如き窮屈なるものに非ず、修養は夫れ猶ほ體育の如し、身體の健全は一切活動の基礎なり、文人たると武人たるとを問はず、男子と女人とを擇ばず、等しく體育を奬勵せねばならぬ。

で輕し、身心德は本にして重し。此の本を養ひ重きを先にするの道が即ち修養の根本儀である。左に掲ぐる所は阿含經中の佛說です。

生聞梵志、佛に問うて言く、在家と出家は何を以て苦と爲す。佛の言く、在家は不自在を以て苦と爲す、謂ゆる錢寶穀畜奴婢增長せざれば此に因て憂愁す、不自在の故に苦なり。出家は自在を以ての故に苦なり、謂ゆる貪欲・瞋恚・愚痴に隨順して禁戒を守らず、此に因て愁感す、故に自在の故に苦なり。又問ふ、二人何を以て樂と爲す、佛の言く、在家は自在を以て樂と爲す、謂ゆる錢寶穀畜奴婢增長す、此に因て歡喜す、自在の故に樂なり。出家は不自在を以て樂と爲す、謂ゆる道を學んで貪欲・瞋恚の行に隨はず、佛の所制に隨つて、鬪諍・怨憎・憂苦なし、義利あるが故に不自在を以て樂と爲す。

出家は道を行ふを以て分とす、在家は守る所を知らず、故に出家在家を對比して仰せられたり。今日では本より出家・在家を擇ばず、等く德に志し道を行はんことを希はざるべからざるを以て、此の文に出家とあるは、總じて修養に志す者に對しての聖訓なりと心得べし。苟も修養に志さゝん者は、必ず不自在を以て樂しみと爲すの覺悟なかるべからず。不自在とは自己の欲望を制して、進止動靜常に一定の軌道を踐み、確然として守る所あるを曰ふなり。禮儀・謙讓・勉强・儉約等は人間として必要缺くべからざるの德である。然れども之を實行する時は、自づから不自在を感ずることを免れぬ。寢たい時も寢られず、行きたい處へも行かれず、使ひたい金も使はぬやう辛抱せねばならぬ。故に不自在の稽古の第一は堪忍

不自在を習ふべし

吾人修養の第一は不自在を習ふに在り。人間の欲望といふものはとかくに偏僻に陷いり易いものである。故に、徒らに其の食を玉にせんことを望み、其の衣を錦にせんことを望み、其の室を華にせんことを望み、其の名を望み、其の利を望み、其の安逸を望み、其の獨樂を望み、一生區々として欲望の奴隷と爲り去らんとす。此の欲望を裁制して中正に歸せしむるが、修養の基礎である。裁制するの道は不自在の稽古をするに在り。說郛中に田子の佳言を載せて人欲を誡めてある。其の文は左の如し。

田子、見二玉食一、蹙然曰、禦レ饑斯可矣、見二錦衣一、蹙然曰、禦レ寒斯可矣、見二華屋一、愀然曰、禦レ露斯可矣、毋レ玉二爾食一而玉二爾儀一、毋レ錦二爾衣一而錦二爾心一、毋レ華二爾屋一而華二爾德一、惟儀之玉以振二天下一、惟心之錦以文二天下一、惟德之華以覆二天下一、故君子去レ彼取レ此。

爾の身儀を玉にせば天下の模範とも爲りぬべし。爾の精神を錦にせば天下の莊嚴とも爲りぬべし。爾の道徳を華にせば天下の光彩とも爲りぬべし。衣食住は處世上必須の物たりと雖も、徒らに外觀の美を好て脚跟下に大事あることを忘却せば、本末輕重を誤るの甚しきものと謂ふべきである。衣食住は末にし

講經は出來ぬ。虛空には古今なく方處なし。故に、無限の時間を通じて一時も講經せざるなく、無限の空間を盡して一法も說法せざるなし。さあ此の虛空の說法が聞こえたかな。是が聞えぬ樣なものは俱に佛法を語るに足らぬぞとの親訓である。實に千古の大公案と謂つべし。

然るに、座主の眼孔豆よりも小なり。虛空講經の語を以て己れを嘲弄するものとし、奮然、袖を拂て退く、時に馬祖は背後より高聲に『座主々々』と呼ばれた。座主覺えず首を回らす。馬祖曰く『生より死に至るまで唯だ是れ這箇』と。座主と呼び、ハイと首を回らす、是れ天眞の靈機である。此の靈機は那裡よりか得來るや、此の靈機の轉處には、凡情も無く聖解も無く、迷想も無く悟道も無い。山の自から高く水の自ら流るゝが如く、全く無爲の感應である。宇宙間の所有光景を見よ、天に在ては日月星辰、地に在ては森羅萬象、火は熱し、水は濕ひ、眼は色、耳は聲、是れ皆な無爲の感應ならずや。是の如く感應する底の這箇是れ何物ぞと參究すべし。一心生ぜざれば萬法に咎なし。此の感應の靈機を徹證し得ば、我に我なく人に人なく、苦に苦性なく樂に樂性なく、法界洞然として萬象皆な虛空なることを信得及すべきである。此の信發する時、日々夜々に虛空の說法を聞取することあらん。

座主是に於て省悟し、遂に西山に隱棲して、獨り安心三昧に住したとある。今日の吾人は能く此の虛空の說法を徹證し去りて、跡を座主に倣はず、社會の正面に立て、虛空說法の音聲を滿天下の人に聞取せしむるが至要事である。

べきは無い。若し實體ありとせば、四大分散の時、何れの處にか在る。畢竟するに因緣業力の所變たるに過ぎぬ。業力に依て、有に非ずして有に似たる心王なるものは、恰も工なる伎兒の如く緣に觸れて躍り出す。されども獨狂言は出來ぬ。我見の張本者たる意識が和伎者と爲つて、拍子を取り合槌を打つ。心王の傍に侍する大臣にも似たり。故に、大臣が惡いと心王まで惡ものになる眼・耳・鼻・舌・身・意の六識は其の伴侶であるから、心意二識の手足も同然なり。故に心意が亂るれば六識も亦た自から亂れる。要するに、心意識の三者は倶に是れ精神上の作用、自心現の影像にして、本より實體あるに非ず、正眼に見來れば妄想の窠窟である。故に此の妄想の窠窟を以て本覺の佛性なりと執せば、そは所謂奴を認めて郎と爲し、穢身を以て國王と誤るが如し。斯る妄想を以て心經を講ぜんとせば、文字上の心經は、或は講じ得べしとするも、蕩虛空遍法界の大經卷を轉ずることは絕對的不可能である。今日の吾人、終宵禪を修し、終日經を誦するも、尙ほ且つ桶底を脫すること能はざる所以のものは、心意識に運轉せられて、眞箇の活經卷を講じ得ぬからである。

馬祖の垂示是の如く其れ切なり。惜しい哉、亮座主未だ其の親切を感受するの分なし。乃ち曰く「心旣に講不得ならば是れ虛空講得すること莫しや」心が講ぜぬなら何物が能く講ずるや、虛空でも講ずるのであるかと喰て懸つた。座主は何處までも妄想心を珍重視して居る。馬祖大師、擒縱自在、鐵の如き座主の話頭を活捉して、化して黃金と爲して曰く「却て是れ虛空講得す」さうちや、その虛空で無ければ眞の

若し心を明らめ經を明らめずんば、縱ひ富樓那の辯を弄するも、徒らに他の寶を算へて自ら半錢の分なじ。銀行の雇人と一般である。日々夜々に何萬何千の金錢を計算し得て、寸毫不整理のこと無しとするも、是れ自己の珍寶に非ず、自身は依然として家賃も拂ひかね、時々、差配人の御目玉頂戴である。今日の學者・禪者にして此の雇人の御仲間に入らざる者果して幾許かある。妄りに棒喝を振廻し、妄りに虛見識を擔き行き、我は隻手の聲を聞けり、我は闇夜の鴉を見破せりなどと言ふも、多くは脚跟下未穩在にして、自己心上の疎惡なる妄想をすら調伏することが出來ぬではないか。不動の三昧に住すといふ者が、一小事をも忍ぶこと能はずして、見苦しき瞋恚の焰を燃すあり、見性悟道し了れりといふ者が、一微物をも解脫すること能はずして、陋劣なる貪愛の水に溺るゝあり。恰も念佛の行者が親子の爭を演じたり、法華信徒が夫婦の和合をだも守らざると一般で、畢竟するに耳口四寸の禪である。神を見んと欲せば先づ自己を究盡せよ、佛を見んと要せば先づ妄念を截斷せよ、是れ參禪路上の第一關である。

其の時、馬祖は慈愍の眦を垂れ、乃ち座主に示して曰く『心は工なる伎兒の如く意は和伎者の如し、六識は伴侶たり、爭でか經を講得することを解せんや』と言はれた。實に是れ徹悃の婆心より出たる血の淚である。心とは所謂心王で、普通世人が精神の本體とも計するものである。意とは我ありと執する識で、是が妄想の根底となるものである。六識とは眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の識で、色・聲・香・味・觸・法の六境に對して起る分別の意識である。併し心の本體と稱する者も、其の實體を究むるに、自性の認む

跨り、空腹高心、佛を呵し祖を罵る者の如きは、寧ろ一種の禪病である。今や、天下到る處禪風の盛んなるを見るは、吾人の默然措く能はざる所なるも、是れと同時に禪病に罹る者も亦た頗る多きことを憂ふ。苟くも眞參實悟底の人たらんと欲せば、先づ須らく一切の閑妄想を坐斷して、虛空の說法を聽取すべし。未審、虛空とは何ぞや、說法とは何ぞや。

往昔支那洪州西山に亮座主といへる學匠ありき。一切の經論研鑽せずといふこと無く、常に講師を以て自ら任じて居た。或時、馬祖大師に參謁した。馬祖は六祖の法孫に當り、江西に在りて達磨の禪風を擧揚し、門下に一百三十九人の善知識を出したほどの老師家である。馬祖は座主を一見して『什麼の經をか講ずるや』と問はれて、豫て汝の講演に巧なるを聞たり。卽今、汝の講ずる底、是何者ぞや。座主曰く『只今心經を講じて居ります』、馬祖は更に一歩を進めて『何を以て講ずるや』と一拶せられた。此の一拶こそ實に千鈞の重錘である。佛祖の眞敎は決して文字の解釋や高遠なる空論の上にはない。釋尊一代の說法は畢竟門を叩くの瓦子たり。歷祖幾千の公案も總に是れ月を指すの指に過ぎぬ。指を離れて眞月を見、瓦子を擲て門内に入るに非れば、一大藏經の經論も無用の長物たるを免れぬ。座主答へて曰く『心を將て講ず』と。見よ、此の座主は心を將て經を講ずるを知ると雖も、身を將て經を演ずることを知らず、身心を將て經を講ずることを知ると雖も、身心を脫落して法を說くことを知らず。心とは何ぞや、經とは何ぞや。

ひ止惡作善といふも皆な幸福の要道である。

參禪の高流も常に脚跟下を照顧して、心の塵垢を洗ひ、身の過失を離れ、一擧一動をも等閑にせざれば、大道は卑近の中に圓通し、公案は行住坐臥の間にも現成するであらう。禪の生活は平常の行處に間隙なく、不斷の言處に大道を擧揚し、執捉にも運奔にも佛法と離背せざるところにある。『平常心是れ道』といひ、『茶裏飯裏別處に向はず』といふ的意知るべきである。

虛空說法

古人も『參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし』と敎誡せられてある。苟くも參禪に志しあらん者は、誓て實參實悟の人たらんことを期せざるべからず。

世人動もすれば、風流洒脫を以て禪と思ひ、頓智を弄するを以て禪機と思ひ、言語行動、唯だ人の意表に出づるを以て禪的作用なりと思ふ。是の如きは所謂奴を認めて郞と爲し、妄想を認めて本性と誤まり、終に鬼窟裏の活計に墮在して、本分の禪に蹉過せざる者殆んど稀である。僅かに一則の公案を識得し、又は一棒一喝の機鋒を模倣して、自ら謂へらく、我れ既に禪を會せりと。而して大言壯語、揚々として人に

第八問に曰く「何物か火も燒かず、風も亦た碎く能はず、水の能く爛らす所に非ず、能く世間を扶持す、誰か能く王賊と、勇猛にして相抗敵し、人非人の爲めに來りて侵奪する所とならざる」答て曰く

「福は火の燒く所に非ず、風も亦た碎く能はず、福は水の爛らす所に非ず、能く世間を扶持す、福は能く王賊と、勇猛にして相抗敵し、人非人の爲めに侵奪する所とならず」

此の福とは善根功德の積聚より生じたる福分である。是の如き福分は天災地變をも免れ、他の侵略攻奪をも防ぎ得るものである。

第九問に曰く「我れ今猶ほ疑あり、佛に請うて除斷せんとす、今世往後世、誰か極めて自ら欺誑す」、是れ過去・現在・未來を通じて、自ら己れを欺き己れを昧ます所の大敵を請問したのである、答へて曰く

「若し多くの珍財ありて、而も福を作する能はざるは、今世往後世、彼は極めて自ら欺誑するもの」

是れ世福に耽溺して、人道を修めず善根を好まず、徒らに目前の快樂と一身の榮華とを圖る者は、自ら其の本心佛性を昧却し、良心を喪失するものなることを示したまうたのである。

以上、天請問經の佛偈は、問者の機根に應じて敎訓せられたものではあるが、其の大部分は慳貪と瞋恚と愚癡とを誡めて、健全なる德義に酬ひられたる精神的幸福を奬勵したまへるものと見ることが出來る。法華經に現世安穩後生善處といふも、皆な幸福をいふのである。更に一歩を進むれば、轉迷開悟とい

「福は善眷屬たり、罪は惡心の怨たり、地獄は極重の苦、無生は第一の樂」

道德的に造り擧げたる福分こそ忠實なる眷屬である。不道德より招ぎたる罪過は最も恐るべき怨敵である。極重の苦は地獄なるも、此の地獄は衆生惡業の招く所とす。一たび生死の繫縛を脫すれば始て永久の安樂を得るであらう。

第六問に曰く「何者か愛して宜きに非ざる、何者か宜うして愛に非ざる、何者か極熱の病、誰か是れ大良醫」答て曰く

『諸欲は愛して宜きに非ず、解脫は宜して愛に非ず、貪は極熱の病たり、佛は是れ大良醫』

一切の欲は愛より生ず。而して道に背くを以て宜きに非ず。解脫の法は道に順ふを以て宜し。然れども是れ愛には非ず。最も人をして熱狂せしむる者は貪欲である。故に法華經にも『諸苦所因貪欲爲本』とある。此の大熱を救ふべき大良醫は實に佛である。

第七問に曰く「誰か能く世間を覆ふ、世間誰にか魅せらる、誰か親友を捨てしむ、誰か復た生天を障ふ」答て曰く

『無智世間を覆ふ、世間は癡に魅せらる、慳貪は親友を捨つ、染着は生天を障ゆ』

世間を暗黑ならしむるものは無智である。世間の所有事物は愚癡の爲めに魅らかさる。利己慳貪は必ず親友を捨つ。迷執染着は天界に生ずるの勝報を障害すべし。生天とは未來の幸福を增進することである。

如く、一切の疑惑を裁斷することを得べきなり。

第三問に曰く「云何が盜賊と爲す、云何が智者の財、誰か天と世間とに於て、説て能く劫盜すと名くるや」釋尊答て曰く

「邪思を盜賊と爲す、尸羅は智者の財、諸天世間に於て、戒を犯せば能く劫盜す」

邪まなる見こそ恐ろしき泥棒なれ。尸羅は戒と譯す、佛の制したまへる宗教上及道徳上の規律である。此の規律こそ最上の財寶である。天上・人間に於て戒律を犯すものこそ、一切の功徳を奪取する盜賊である。

第四問に曰く「誰か最も安樂と爲す、誰か大富貴と爲す、誰か恒に端嚴なりとす、誰か常に醜陋なりとす」答へて曰く

「少欲最も安樂、知足は大富貴、戒を持すれば恒に端嚴、戒を破れば常に醜陋」

欲望を制限して正道を修むる者は安樂なり。分を守り足ることを知る者は、不足を感ぜず不自由に苦まず、故に富貴なり。戒を持して其の行を正うする者は端嚴美麗なり。戒を破りて其の道を謬る者は醜陋不淨である。

第五問に曰く「誰をか善伴屬と爲す、誰をか惡心の怨と爲す、云何が極重の苦、云何が第一の樂」答へて曰く

天請問經は玄奘の譯に成る簡單な經文である。釋尊が祇園精舍に在せし時、一天人が來詣して、伽陀を以て慈教を請はれしに、釋尊もまた伽陀を以てお答へになつた。それが九問九答あるが、釋尊の御慈悲深き、極めて淺薄と感ぜられる請問に對しても、斯くまで親切に御教示を賜はりしかと思へば、痛切に其のありがたさが感ぜられる。

第一問は『云何が利刀劍なる、云何が穇毒藥なる、云何が熾盛火なる、云何が極重暗なる』、是れは無論、精神的に人を傷くるもの、世を害するもの、功德を燒失するもの、光明を失ふものを問うたのである。釋尊は之に答へて曰く

『麁言は利刀劍、貪欲は穇毒藥、瞋恚は熾盛の火、無明は極重の暗』

惡言・中傷・兩舌等は人を傷つくること最も甚し、不正不義の欲望は世を害すること烈し、瞋恚は諸の善根を燒き、無明、卽ち愚癡は世をして暗黑ならしむ。

第二問は『何人か利を得ると名け、何人か利を失ふと名く、何者か堅き鉀冑、何者か利き刀仗』と、釋尊は之に答へて曰く

『施す者は利を得ると名く、受る者は利を失ふと名く、忍は堅き鉀冑たり、慧は利き刀仗たり』

慈愛を傾けて布施を行ふは大なる利益である。徒らに他の施與を受くるは寧ろ損失なりと知りて、之に酬ゆる所が無ければならぬ。忍耐は堅固なる甲冑の如く、能く煩惱の賊を防ぐに堪へたり。智慧は利刀の

ら其の頭を撫でて、あゝ我こそは厭世の恩愛を離れて聖衆の列に入りたる者なり、何の暇ありてか我見我慢の幢を起すべけんやと想思せよ。又、自ら其の袈裟を顧みて、あゝ我こそは解脫の服を披し福田の衣を纏ふ。若し妄念を盡すこと能はず、利生を事とする無かりせば、何の面目ありて佛祖に見ゆべけんやと觀察せよ。此の思惟觀察をして、相續不斷ならしめば、佛法自から通身に備はり、菩提自から脚下に通ずべし」と示されました。

至道は高尚幽遠なりと雖ども、之を實踐することは吾人の第一歩に在り。其の第一歩に點着することを退歩の工夫と謂ふのである。尤も七尺單前王三昧に安住する端的は、別に一段の眞訣ありと雖ども、平生心是道に參來參去せんと要せば、先づ以て此の退歩の工夫を磨勵して、自己を以て自己を警誡し、開導し、策勵し、活轉せねばならぬ。然らざれば大道の我に於ける、相去ること十萬八千ならん。

道は卑近の中に在り

平常心是れ道とは祖門下の活公案である。茶裏飯裏別處に向はず、日常生活其の儘が自覺々他の覺行とならねばならぬ。釋尊も隨機說法の方便門を通ぜられ、極めて卑近な平凡な教へをも與へられてあるが、その卑近の中に向上の進路がある、平凡の中に大解脫の心境を見出さねばならぬ。

が如し、將た何を以てか貪慾を絶ち妄想を治めんや』と。

學者は道に精しく、智者は理に達す。而して、往々、道に背き理に悖るの言行を敢てする者あり。是れ智以て情を調ふること能はず、情以て意を制すること能はざるが爲めである。口に法華を誦ずるも心に法華を念ずることを忘れ、心に法華を念ずるも、身に法華を轉ずることを忘るゝが如きは、共に法華を知る者と謂ふべからず。是を以て我が高祖は『身心學道』と說き、日蓮上人は『身讀』といふことを示されてある。身心を擧げて道を學び身を以て經を讀むの人たらざれば、眞の佛弟子とは言はれぬ。眞の佛敎信者とも稱せられぬ。今の世に眞の佛弟子、眞の佛敎信者たる者果して幾人かある、曉天の星よりも猶ほ稀れなるべし。是れ皆な退步の工夫を等閑にするが爲めであらうと思ふ。

釋尊入涅槃の時、諸々の弟子を誡めて、汝等は何故に剃髮染衣して佛門に投ぜしかといふことを忘れされとて、左の如く仰せられた。

汝等比丘、當さに自ら頭を摩づべし、以て飾好を棄て壞色の衣を著し、應器を執持して乞を以て自活す、自ら見るに是の如し、若し憍慢を增長するは、尙ほ世俗白衣の宜しき所に非ず、何かに況んや出家入道の人、解脫の爲めの故に、自ら其身を降して而かも乞を行ずるをや。

寂室堅孝禪師も亦た其の弟子に向つて、『我に緊要の一訣あり、此一訣こそ行佛道の基礎とも謂ふべし。然れども、稽古慕道の士に非ざれば、容易に之を示さず。其の一訣とは何ぞや、汝等、每朝、洗面の後、自

以て自己を轉ずることである。所謂、丙丁童子來求火なり、照顧脚跟下なり。此の工夫なかりせば、進歩も眞の進歩たる能はず、向上も眞の向上たる能はず、退歩は實に是れ進歩の好伴侶、向上の關捩子なりと參究せざるべからず。

吾人は何が爲めに學業を修むるや、吾人は何の目的を以て佛弟子と爲りしや、日々の行持は如何にせば自己の天職を完うすることを得べきや、平素の言行は如何にせば佛祖の恩德に酬い奉ることを得べきや、斯く造次顛沛の間にも、暫時の油斷なく回光返照し去る時は、一點英靈の氣、忽然として通身に充ち滿ちて、行住坐臥、自から其の道を履み其の德を明らかにするものであります。

いか程立派な學者になりしとて、「學者の本分は如何」と返照して、常に其の立脚地に安住するに非ざれば、眞の學者とは稱し難し。如何なる大宗教であればとて、「宗教家の天職は如何」と省察して、常に其の立脚地に安住するに非ざれば、眞の宗教家とは申されぬ。氣を逐ひ香を尋ね、外に向つて妄りに貪ぼり求めんとす、是れ人心の常なり。此の人心こそ動もすれば五根を率て邪惡の門に入らしめ、國家を毒して垢濁の坑に陷いらしめ、終には無量劫來死生の根本と爲る、古人は之を「心猿飛び移る五慾の枝、意馬馳走す六塵の境」というて歎かれてある。佛智裕和尚の語に曰く『駿馬の奔逸なる、而も敢て足を肆まゝにせざるは、銜轡の御なり、小人の強横なる、敢て情を縱まゝにせざるは、刑法の制なり、意識の流浪する、敢て緣を攀ぢざるは、覺照の力なり、嗚呼、學者にして覺照なきは、猶ほ駿馬の銜轡なく小人の刑法なき

又、拔隊和尚は毎に嘆じて『生死事大拯ふべからず』といひ、功を用ゆること益々切に、或は遊行して足を移すを忘れ、或は露坐して驟雨の身を濕ほすをも忘るゝ程であつたとある。是の如くなるが故に、念々に定慧の力を莊嚴することをも得られたのである。

尤も、相當の職責を有する者は伊菴・拔隊の轍を踐むことは到底不可能の事なるも、眞實求道の志あるに於ては當面の職務を完全に盡しながら、自然に工夫力を發揮することが出來るはずのものである。

吉田松陰先生は、獄中に在りながら門人の爲めに孟子を講じて居られた。門人之を休めんことを乞ふと、先生曰く『生死自づから命あり、何ぞ必ずしも獄中に在ると否とを論ずべけん、而して人の此世に在る、一日一時も道なかるべからず、故に我れは我が道を習ふのみ、敢て文字を弄するに非ず』と、此の志氣ありてこそ始て是を求道と言ふべきである。

若し然らずんば、徒らに貪名愛利の飯袋子たらんのみ。何の用をか爲すに堪えん。暫時不在如同死人の一語、深く之を味うて長く斯道の警策となすべきではあるまいか。

退歩の工夫

退歩の工夫とは、自己を以て自己を警しめ、自己を以て自己を導き、自己を以て自己を勵まし、自己を

是の如く純一に工夫し去る時は、生死の牢関も自づから透破せられ、悪業の葛藤も自づから截断せられ、豁然として天地の大道に逢着し、宇宙の大精神に契当する者である。身の出家たると在家たるとを論ぜず、職の繁劇閑散を問ふを要せず、唯だ志の有無に依て決せらるゝのである。

古人の長処は己れの為めに道を求むるに在り、今人の短処は他に待つ所あるが為めに道を学するに在り、己れの為めにする時は、其の修行は甚だ実頭なるべきも、自調解脱に住着するの恐れがある。他に待つ所ある時は道を以て名利の具と為すの恐れがある。両頭ともに不是なるも求道の資格よりすれば他に待つある者は殆ど其の価値を認むること能はざるものと謂はねばならぬ。

苟も仏道に趣向して自己を究尽せんと欲する者は、先づ之を己れの為めにせざるべからず。即ち自己の為めに自己を究尽するのである。此の大道心の上には寸毫も他に待つ所あらじ、即ち名も無く利も無く奇特も無く法執も無い。

小河立所は不俗なるも猶ほ「己れに反求して人を責むること勿れ、忠以て己れを尽し恕以て人を待つ、人の解ゆるに逆はず己が信ならざるを思へ」の三條を以て学をなすの指針とせるに非ずや。

伊庵の權禪師の如きは、工夫を用ゆること甚だしく、晩に至れば必ず涙を垂れて「今日又只什麼に過ぐ未だ知らず来日の工夫如何ん」と、衆に在りても人と興に一語を交へず、食時に鉢を展ることを忘るゝこともありきとぞ。

是れを云つたのである。

次には、須らく自己を究盡すべし。自己とは何ぞや、卽ち本來の面目なり。父母未生以前の皮肉骨髓なり。故に太祖大師は『參禪は須らく胸中を打開して淨潔ならしめ、情識の中重き所を去却して單々に只自己を持て參取すべし』と仰せられてある。身心和合して吾れあり、身は是れ地水火風の四大に依て生ずる所、心は是れ受想行識の四蘊に依て存する所、四大分離すれば此の身なく四蘊消散すれば此の心なし。されば、四大を執して自己といふべからず、四蘊を認めて自己といふべからず。然らば、自己とは畢竟是れ何物ぞ、是れ實に千古の大公案にして、千佛萬祖も亦唯だ此の事の爲めに難行苦行し、積功累德せられたのである。

太梅法常禪師は馬祖に參問するに『佛』を以てせしに、祖は『卽心卽佛』を以て答へられたり。卽心とは自己の事である。南嶽禪師、初て六祖に參ぜし時、祖問ふ『何れの處より來る』師曰く『嵩山の安國師の處より來る』祖問ふ『是れ何物か恁麼にし來る』師措くこと罔し、工夫八年の後漸く大悟せられたといふ。是れ皆な自己の問題である。

吾人も亦た日用光中、何物か去來し、何物か語話し、何物か喫茶喫飯し、何物か回頭轉腦するやと、一々照顧し點檢して見よ。唯だ漫りに心理學的研究を此間に弄してはならぬ。敢て必ずしも學究的態度を否認するには非ず、學究的態度以上の工夫を下し、驀直に自己の皮肉骨髓を把捉し去らんことを要するのである。

宋の歐陽修曾て嵩山に遊び山寺に入る。一老僧ありて法華經を誦す、其の風彩脱俗、態度沈重なりしかば、修は其の傍らに至りて問うて曰く「古高僧生死の際に臨み皆な談笑して脱し去る、何の道か之を善くす」老僧答へて曰く「定慧の力あるのみ」、修又問うて曰く「今は乃ち寂寥たるは何ぞや」老僧笑つて曰く「古の人念々定慧に在り臨終安んぞ亂るゝこと有らんや、今の人念々散亂に在り臨終安んぞ定まることを得んや」、修、聞て膝の屈するを覺えなんだとある。定慧の力とは即ち道力なり、道力堅固ならば四魔も之を妨ぐるに由なし、心思散亂すれば五佛も之を救ふに由なきものである。

然らば、如何にせば平常心をして大道と符合せしむべきやといふに、石頭大師が「但だ凡情を盡せば別に聖解なし」といはれし如く、先づ以て凡情を盡すことに努むべきである。凡情多種なりと雖も貪瞋痴の三毒を以て本と爲す。乃ち邪貪と妄瞋と痴迷とである。故に、吾人は十二時中、少欲主義を執りて聊かも邪貪に走るべからず。少欲主義といふは道義を以て欲念を制裁するの謂である、道義的精神に生きることである。又、吾人は順逆の一境に對して常に妄瞋を誡め、苟にも憎嫉忿怒の念を生ずべからず。又、吾人は常に正道理を守り、正智識を啓き、如何なる場合に臨んでも愚痴暗鈍の弊に陥在すること無からんを要す。この克己法を以て單に消極的修養とのみ斷じてはならぬ。苟くも自己の光靈を發揮せんと欲せば必ず先づ妄想の窩窟に向つて根本的截斷を試みざるべからず。妄想一たび破るれば本具の大道は自づから七通八達なることを得ん。三祖大師が「但だ憎愛なければ洞然として明白なり」と仰せられたのも即ち

ある。心此に在らざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らず。此とは何ぞや、卽ち道なり。道とは何ぞや、卽ち自己なり。自己とは何ぞや、卽ち佛法なり。故に吾人は此の語を服膺して、四六時中、自己を閑却せず、自己の佛法を失墜せざらんことを要するのである。禪門の工夫は全くここに在りて存す。

佛法は元來自己なるが故に、吾人方寸の中に備はりて存せざるの時なく、現はれざる處なし。自己元來佛法なるが故に、宇宙萬象の上に遍滿して輝かざる時なく、照さゞる處なし。されば靈雲は桃花の開けるを見て大悟し、香嚴は擊竹の響きを聞て大證す。故に承陽大師は『佛家には敎の殊劣を對論することなく、法の深淺をえらばず、たゞし修行の眞僞をしるべし、艸華山水にひかれて佛道に流入することありき、土石沙礫をにぎりて佛印を稟持することあり』と仰せられてある。

故に、吾人は其の求道的工夫を做すに於ては、毫も時處諸緣を擇ぶべきに非ず、工夫の純一を缺くの恐れある場合は、或は時を選び、處を選ぶの必要も無きに非ずと雖も、工夫若し純一ならば、適せざる時も無く可ならざる處も無いはずのものである。唯だ道を求むるの志氣堅剛にして精進勇猛なるに非されば佛道を自得すること難し、之を鐵漢の志氣といふのである。故に卍山禪師は『參學の高士專ら鐵漢の志氣を具するを要す、既に此の志氣を具すれば名利之を撓むとも撓まず愛欲之を柔らぐとも柔らがず、剛然、樸然として破綻の處なし、行や鐵一團、坐や鐵一團（乃至）盡十方打成鐵一團』と示されてある。

とある。此の僧は全く口先の禪機なるを以て、其の言ふ所果然として禪機の奴隷となつて居るから、雪峰の一棒を免れぬ。禪道佛法の主人公たる人にして始めて使得十二時の域に達するのである。

暫時も在らざれば死人に如同す

昔、澧州龍潭の龍泰寺來和和尚は機鋒嶮峻にして、名一世に震ふ。天下の龍象爭うて風に趨る。故奕堂禪師及び如禪和尚等皆な其の輪下より出づ。而して其の行持の嚴厲なる、殆ど衆をして脇席に着くるに遑あらざらしむ。是を以て晝夜坐の如き、一衆皆な道業に疲れて、時としては身體綿の如くなることがあつた。然るに、和尚は止靜鈴の鳴り罷むを待ちて、徐ろに禪椅を降り手に警策を執り衆僧の前に卓立し、勵聲に「暫時も在らざれば死人に如同す」といふ。其の聲凛然として堂の内外に徹す。大衆一たび此の語を聞くや、惰者は自づから氣を勵まし、睡者は自づから眠りを醒し、道念なき者は道念を起し、信心薄き者は信心を進むるに至りきとぞ。

如禪老漢常に衆に告げて曰く、「來和尚は通身禪氣に滿たされたるを以て、感化力の偉大なること殆ど想像の外に在り、然れども暫時不在如同死人の一語亦甚だ剴切なるを覺ゆ」と。實に老漢の言ふ所の如くで

で『順逆無二門、大道徹㆓心源㆒、五十五年夢、覺來歸㆓一元㆒』との辭世を遺した。恰も生死岸頭に立て大自在を得て居る樣に思はるゝが、彼が生涯を通じての行持は何んなであつたらう。彼は非凡の豪傑、拔群の材器であつたに相違ないが、佛法眼より見たならば、舊に依て一介の凡夫である。禪鏡に照して見たならば、彼が一生は未だ妄想窟裏を脱しては居らぬ。彼は夢中更に夢を貪ぼりて、遂に覺者の邊際にも達しては居らぬ。如何となれば、彼は使得十二時の味を解せず、其の主に使はるゝことを知りて、其の主を使ふの見地が無い。境遇や時運に役せられて、之を役するの力量を缺いて居る。

昔、雪峰禪師一僧の來るを見、乃ち問て曰く『甚麼の處より來る』煩惱中より出で來りしか、菩提中より出で來りしか、苦中よりか樂中よりか、よく〳〵自己を反省して、自らの來處を辨ぜねばならぬ。僧曰く『浙中より來る』此の僧頗る正直ものである。師曰く『船來か陸來か』是亦た事を借りて更に行履の點檢である。平生の脚下果して如何、向上門に入り去や、向下門を出で來るや。自力を以て佛法を參得せるや。他力に賴て安心を獲得せるや。僧曰く『二途倶に渉らず』、自力に非ず他力に非ず、超然として向上向下の外に自在である。此の僧なか〳〵見識を振り廻すことが巧である。師曰く『爭てか這裡に到ることを得ん』重々の點檢である。船にも乘らず陸をも歩まざれば何うして此に來りしぞ。自力にも他力にも依らずとせば、汝の信念は那邊に在る。僧曰く『什麼の隔礙かあらん』法界圓融、順逆不二、四方八面に障礙なし。信念も何も用不着でござる。惜哉、此の僧は明智光秀のお仲間である。師打て此の僧を追出れた

は、浄土荘厳の功徳聚となつたのである。物を使ひ時を使ふ時は真法智な楽土と為り、物に使はれ時に使はるゝ時は天地悉く苦界と為る。

甲州恵林寺の快川禅師は、織田信長の為に火を以て攻られ、数十員の大衆を率へて山門に上つたが、その時、火勢焔々として階上に燃あがり、将に衣袖に及ばんとした。禅師は高声に告げて曰く、『諸人者、大火焔裏に向つて如何が法輪を転ぜん』、大衆交々一転語を下す、最後に、禅師再び高声に示して曰く、『安禅何ぞ必ずしも山水を須ひんや、心頭を滅却すれば火も亦涼し』、此の時に於る快川の胸臆裏には、怨恨も無く、信長も無く、快川も無い。唯一仏法のみ一法輪のみであつたのである。是れ即ち火中に在りて能く火焔三昧を使ひ得たる底の風流である。

山居せる禅僧の処に一箇の雲衲が訪らひける時、饗応すべき物がない、禅僧示すに歌を以てした。曰く「何をがな参らせばやと思へども達磨宗には一物もなし」、彼の雲衲は欣然として「一物も無きをたまはるむこそ本来空の妙味なりけり」と返歌した。是れ即ち虚空を使ひ得たのである。此の境界に到り得る時は語默動静、自から規に合ひ矩に契ひ、平生の行持のそのまゝが、仏の光明を放ち仏の神通を現じ、任運にして自覚々他の功徳を成就するものである。

此の功徳は、智慧や分別の力では到底不可能である。如何ほど舌頭上に禅機を弄することが出来やうとも徹底、十二時を使ひ得る底の漢でなければ、夢にだも此の功徳を得ることはならぬ。明智光秀は死に臨ん

坐臥を活用する底の手脚が無ければ、眞に能く佛法を信受し悟得せし者とは印證することが出來ぬ。

物に使はれ時に使はれ、役々勞々として一生を不平不滿の間に送過するは、普通凡夫の狀態である。金錢の爲に自主的精神を失ふ者は、金錢に使はれたので、美色の爲に自己の本務を忘却するは、美色に使はれたのである。或は飮食物の爲に使はれて其の身を損じ、或は遊藝舞樂の爲に使はれて其の志を敗る者などは世上に澤山見る所である。それが爲に進んでは自己の智德を啓發すること能はず、退いては累を一門親族または社會にまでも及ぼすことがある。恐るべき悲しむべき事なるかな。

能く出る話であるが、或處に一老婆ありて、二人の子を有つてゐた。其の子の長ずるに及び、一人に傘屋を、一人に草履店を開業させた。處が、天氣が好いと傘屋のことを思うて『近頃の樣に雨が降らんではさぞ傘屋が困るであらう』とて心を痛め、雨降の天氣には草履店の方を思うて『かう降り續いては爭で草履の賣れべきや、あゝ無情なる雨なる哉』とて愚痴をこぼし、年が年中、不平ばかりいうてをつた。是は天氣に使はれたので、此の老婆の爲には、晴天も雨天も、兩つながら牛頭馬頭の鬼と爲つたのである。其の後、或る善知識の敎訓に從ひ、今までの反對に觀念することゝなつた。卽ち雨降には傘屋を思ひ出し、『あゝ此の雨天では傘屋も定めて不時の商賣があるであらう、實に情ある雨なるかな』というて喜び、晴天には草履店を思ひ出し『あゝ此の鹽梅では草履も意外に賣れるであらう實に有り難き太陽の惠みかな』というて樂しんださうである。是は天氣を使うたので、此の時は晴天も雨天も、兩つながら老婆の爲めに

いひ凡夫といひ唯一念の轉處に由て分る。天堂といひ地獄といふ本是れ一歩の差異に過ぎぬ。況や本具の佛性、本來の面目、豈に淨穢佛魔の別あらんや。至道は近きに在り佛法は脚下を離れぬ。山の突兀たる水の滿瀁たる、花の爛熳たる鳥の睍睆たる、盡く是れ微妙の法門、實相の般若である。悲しい哉、吾人は此の法門を打開することを知らず、妄りに自ら般若の光明を昧まし、名利に繋がれ罪福に縛せられ、盡日役々として三界の間に迷ひ、終宵勞々として六道の巷に苦しむ、實に淺ましき極みではないか、是れ皆な用心を錯まるより生ずる自己の過失である、無繩自縛である。故に、吾人も亦宜しく「十二時中如何が用心せん」と參問し去ねばならぬ。

趙州禪師は之に答へて「汝は十二時に使はる、老僧は十二時を使得す」と言はれた。即ち汝は十二時の時間に使はるゝに依て、漫りに用心の方法を尋ね廻はるが、老僧は十二時の時間を自由に使ひ得るに依て、故らに用心を要するに及ばぬ。此の「使得十二時」の一篇は實に千古の公案である。

「朝々日は東より出で夜々月は西に沈む」是十二時の光景にあらずや、「飢え來れば飯を喫し困じ來れば眠りに就く」是れ十二時の消息にあらずや、吾人は生より死に至るまで、曾て十二時を離るゝことなし。未審、吾人は能く十二時の主人公と爲り、能く十二時を使ひ得るや否や、使ひ得るといふは、能く是を利用し善用し活用するを謂ふのである。十二時を利用して大功德藏と爲し、善用して大智慧海と爲し、活用して大正法輪と爲すを使ひ得ると謂ふのである。朝に太陽を利用し、夕に明月を善用し、喫茶喫飯、行住

が邪說であると騷ぎたつて困つた。そこで舍利弗といふ大弟子が『涅槃は身心都滅にあらず空無の境にあらず』といふ旨を談じて事をしづめた。また釋尊は『人死して再生すといふも當らず、再生せずといふも當らず、再生するもあり再生せざるもありといふも當らず、再生するにあらず再生せざるにあらずといふも當らず』と仰せられたことがある。若し涅槃が空無の境であるならば、こゝにあげた言句を如何に取扱ふことが出來るか。

要するに釋尊は、涅槃を表象の形に於ては示されなかつた。また、釋尊の威神力を以てしても示すことが出來なかつたのである。が、德行を修する人、道行を修する人は、渾身心に涅槃の境地を親しく味得し體得し行くのである。この味得體驗は後世の大乘佛敎徒によつて、或は哲學的に、或は宗敎的に取扱はれてゐる。その說述をなすことは大に意義あることであるが、しばらく他の機會を俟つことにしたい。

予は十二時を使得す

趙州從諗禪師は禪門の大偉人である。嘗て一僧あり、問て曰く『十二時中如何が用心せん』と、是れ甚だ緊要なる一問である。昔の話とのみ思うてはならぬ。人の此の世に生ずる其の性自から相近し。聖賢と

行持である。

「現法に於て自ら證知し自ら實現して遊履せん」各人が在る所の境地に徹底し、そこに證知する所の道行を修すべきことを教諭し給ふ釋尊は、その道行によりて開かる〻所の境地についても、自證し味得すべきことを示して、その境地そのものを積極的に說示せられるといふことはなかつた。

道行によりて開かれる境地、これを釋尊は涅槃と稱せられ、その涅槃に有餘涅槃と無餘涅槃との二通りがあることは示されたけれども、その積極的の表示はいたされなかつた。何はさて置き、その涅槃といふ文字が既に消極的の字で「消える」或は「ふきけす」といふ字である。釋尊は人生を達觀して、この苦惱に滿ちた老病死の苦しみにつきまつはつてゐる身心は、迷妄の業因の果體である。貪・瞋・痴の三毒を恣にした報いであるのだから、この身心を脫却しなければ安樂は得られない、それには先づ、迷妄の業因、貪瞋痴の三毒を滅さねばならぬ。迷妄三毒を滅したのが有餘涅槃である。迷妄三毒の業報であるところの身心までを滅しつくしたのが無餘涅槃であると示された。

で、この有餘涅槃・無餘涅槃を表面から見ればどうしても、それは空無のことであると見るより仕方がない。こ〻を以て西洋の佛敎學者は、釋尊の理想境は空無に歸することにあつたのであるといつてゐるやうである。が、果して釋尊の理想境卽ち涅槃が空無の境地であらうか。

釋尊の御在世中に御弟子の一人が「涅槃は身心都滅である」といつたことがある。すると、他の弟子達

あるが、佛教徒の五戒は、佛教徒の道義的精神の發露が五戒の戒相となつたのである。釋尊の御言葉に『現法に於て自ら證知し自ら實現して遊履せん』とあるが、これがその間の消息を示してゐるものである。

香嚴智閑禪師は唐朝に出られた高僧で、聰明博識の聞えある方であつたが、『現法に於て自ら證知し自ら實現する』といふ點に於て缺くるところがあつた。それを師の潙山禪師が遺憾とせられ大に警策された。智閑禪師大に感ずる所あつて、所持する一切の經卷祖錄を燒きつくして、潙山に、『智閑昏昧にして道を得ず、冀くは師我がために說示し給へ』と申された。すると潙山答へて『我れ汝のためにいはんことを辭せず、恐らくは汝後に我れを恨まん』說くことを惜むのではないが、說きしめしたのでは尊公のものとならぬ、却つて尊公が道を得るの障礙となりて、後ち〳〵には衲を恨むであらう、あのときに餘計な說示を聞かなかつたならば、證知する日が早かつたらうにといふ日があらう、佛法は自證であるぞと示された。果して智閑禪師は當武山に入つて自證に力め、一日、礫が竹にあたつた音を機緣に、道を證知體得し、遙に潙山禪師を拜して『我が師、我がために說き給ふことあらば、いかでか今日この事あらん』、いま道を自證したのは、我が師潙山禪師が說示し給はざりし恩德のいたす所である、と感謝せられたと傳へられてある。眞の道行、眞の德行、世の一切に汚されない純淨無垢の大行といふものは、他より强ひられて致される譯のものでない。只だ人自ら肯うて乃ち方に親し。自ら證知し自ら實現するこれが、佛教徒の

に於ては當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし、闇に明に遇ひ貧人の寶を得るが如し、當に知るべし、此れは即ちこれ汝等が大師なり、若し我れ世に住するともこれに異ること無けん」とある。この波羅提木叉とは即ち道のことである。この道こそは、暗を照す燈火、窮乏を扶くるの寶である。

波羅提木叉は梵語で、譯すれば淨戒または別解脱となる。純一無雑の佛道を行く人の持つべき戒法であるから淨戒といひ、これを持てば、持つた分だけづゝ迷妄の雲が消えてゆくから別解脱といふのである。釋尊が示し給うた所の波羅提木叉を師とする、言ひ換へれば釋尊が示し給うた戒法を嚴守し、その道を履み行ふ、これが佛教徒の本務であり、喜びである。

この本務を遂行し、この本務の遂行を喜びとしてゆく、そこには問題はない。が、然し凡夫のあさましさは、この本務の遂行を喜びとはしないで、いや〳〵ながら仕方なしに行るといふことになり易い。世の法律や道徳を守る人が、體刑や罰金を恐れて仕方なしに愼んで行くと同じやうになり易い。これは釋尊の最も悲しみ給ふところで、釋尊が當時の婆羅門教に滿足し給はなかつた理由の一に數ふべきことである。釋尊が示し給ふところの五戒といふ掟のことでも、釋尊の創制ではなく、當時の外道の中には、それを持つてゐたものもあつたのであるが、それを持つ持ちぶりが見だらしいものであつたのを、釋尊は遺憾に思召し、自己内心の要求としての五戒の嚴守を慫慂し給うたのである。で、外道も佛教徒も同じ五戒を持つてゐるといつても、その持ちぶりが全然異つてゐる。いつて見れば、外道の五戒は五戒に縛られるので

んで坐るがいゝ。足を組めない時は手を組む、手の組めない時は氣息を調へるといつた風に、正式の坐り方に出來得るだけ接近した身構へをすることに心掛けるがいゝ。さすれば自ら事上の磨錬も十分に出來る様になり、錬膽術の臭味を離れて錬膽術と親しくなつてゆくことが出來るのである。

眞の道行と眞の德行

我が大恩教主本師釋迦牟尼世尊が御入滅あらせられたのは、二千五百年も前のことである。この長い年月の間には、世態人情の推移と共に、釋尊教團の歷程も萬里一條鐵であつたとはいはれない。が、如何に世が推移しても教團が變遷しても、永劫に變らぬものは、釋尊の示し置かれた道とその道を信奉する教徒の淨心とである。

ヘルマンといふ人が、ソクラテスとクリストと釋尊とを比較して、クリストは神の子としての自己を指示することの外には神聖な務が何一つないと思つてゐた。が、釋尊やソクラテスは、聖者としての自分を示す代りに、萬人の憑るべき道を指示した『釋尊はその死に際しても、道を忘れてはならぬと深く誡められた』といつてゐるが、洵に當を得た見方である。釋尊がその弟子達に殘された遺誡の語に『我が滅後

ッと見てゐるといふ様な、そんな形式に落ちてしまつた坐禅のことを云ふのでない。

然しながら、行住坐臥を悉く錬膽の工夫とならしめることが難しい。公私の事務に追ひまくられてゐて、静寂の心持を確保してゐるといふことは容易なことでない。事上の錬膽は言ふに易くして行ふに難い。そこで禅家に於ては、事上の錬膽を徹底するがための妙術が別にある。この妙術こそは、承陽大師の普勧坐禅儀、常済大師の坐禅用心記に示さるゝ所の坐禅である。

即ち佛の制し給ふ所の戒律を持ち、飲食物を過不足なく取り、極めて静かな場所に至り、世間との関係を断ち、適當な正師について、その教のまゝに、右の足を以て左の腿の上に安じ、左の足を右の腿の上に安じ、寛く衣を以て斂ひ、右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、両の大拇指面ひて相拄ふ様にして、正身端坐し、舌は上の腭にかけ、口はつむり、眼は半眼に開き、下腹部に軽く力を入れて、そこに心を安じ、自然に任せて氣息を調へる。而して心に何を思ふのでもなく、何を思はぬのでもない。體の自然なるが如く、心をも自然にして、一切の執着を離れてゐる境地を持續するのである。これが所謂承陽大師や常済大師の示さるゝ錬膽の妙術である。必ずしもこれは錬膽の妙術とのみいふべきものでなく、佛家の妙術といふが本當であるけれども、今は錬膽のことに限つてこれをいふのである。

この妙術が親しく手に入つて来ると、寝ても起きても、妙術の徳果が身心から離れなくなる。かくして錬膽は本當に徹底して来る。で、我等が錬膽の方法として、機會のある度毎に、五分でも十分でも足を組

しく、坐禪などしてゐる暇がありません。禪師曰く『行住坐臥、一切の事務、是れ最良の修禪道場なり、これ只管打坐の道場なり』起居振舞、一切何をしてゐてもそれが直に坐禪を修行する道場である。坐禪をする最善最良の場所であるのだと。

この問答は時宗が大の怯懦であつたことを明かに物語つてゐる。而して、その大の怯懦が大膽不敵日本第一の大男となつた徑路をも物語つてゐる。

時宗が怯懦の穴を閉ぢて大の豪傑となつたのは坐禪の力によつてゞある。時宗は年が年中、禪に親しんでゐた男で、當時の禪僧蘭溪道隆や大休正念等にも參じてゐる。祖元禪師が時宗の死を悼む語に『時宗は十種の妙德を有つてゐた、母に事へて孝、君に事へて忠、民に事へて惠、二十年來、參禪を專らにして世欲に親しまず』といふ意味が述べてある。時宗が大膽な傑物となつたのは、全く坐禪の力によるものであるが、およそ世に、これに勝る錬膽の方法があるであらうか。予をしていはしむるならば、坐禪の外に錬膽の妙術は無いのである。

但し、予のいふ所の坐禪は、祖元禪師が時宗に向つていつてゐると同じ意味の坐禪である。『行住坐臥、一切の事務これ最良の修禪道場なり、これ只管打坐の道場なり』といふ坐禪である。六祖大鑑慧能禪師の所謂『外、萬境に對して心を動せず、內、自性を見て動せざる』底の坐禪である。王陽明の所謂『事上の磨錬』である。親が死んだといふのに坐り込んで動かぬ、子供が井戸に落ちるといふのに、坐禪してジ

その弱虫が如何して「相模太郎膽甕の如し」といはれるほどの大膽ものになつたかといふに、それを示す古文書がある。時宗が支那僧の祖元といふ禪師に教を請うた時の問答がそれである。

祖元禪師は支那にゐる時、忽必烈の軍兵に襲はれ、將に首を斬り落されようといふその際に、「珍重大元三尺の劍、電光影裏春風を斬る」と喝破して、軍兵の度膽を抜いた豪の者である。この豪僧に時宗は教を請うて、「余の憂苦する所は怯懦を以て最となす、如何にしてか之を脱することを得ん」といつた。祖元禪師答へて「當に怯懦の來處を閉づべし」、怯懦だといふが、その怯懦の這ひ出して來る穴を閉鎖してしまふがいゝといつた。時宗、怯懦は何れの處よりか來る」怯懦の這ひ出す穴は何處でせうかと問うた。禪師曰く『正に時宗より來る』、時宗曰く『我れ怯懦を忌むこと甚し、爲ぞ時宗より來ると云ふや』私は怯懦が大嫌ひである、大嫌の私が怯懦の產み出し親であるとは肯けないといつたのだ。すると禪師は『試みに明日より時宗を棄却し來れ、膽の大なること坤の如くならん』まあいゝから、明日は時宗といふ怯懦の親分を棄てゝ來い、すれば怯懦なんといふ奴の面は見たくも出て來なくなる。怯懦が顏出しせぬから、膽ッ玉が大きく擴つて大地ほどにもなるぞといはれた。時宗「如何にしてか時宗を棄却せん」時宗といふ私を如何して棄てゝ來られませう。禪師曰く『一切の念所を斷て』樣々な思知念覺をするな何も考へるな。時宗曰く『その方法如何』禪師曰く『只管打坐して身心の靜寂を期せ』靜かに坐りこんで身心を安靜にするのだ。時宗曰く『俗家事務を免れず、時日乏しきを如何せん』私は在俗のもの公私の要務に忙

も畏いことではあるが、國威が如何なりゆくものか逆睹しがたい狀勢にあつた。國を擧げての大騷ぎ、月卿雲客は色を失つて、俄か發心の神詣で佛信心の外には詮術も無い樣に見えた。

然るに北條時宗ばかりは、あわてふためかず、翌くる建治元年の如き、忽必烈の使、杜世忠等が鎌倉に來ると、いきなり引つ捕へて、これを龍の口で斬つてしまつた。そんな樣なことが數回繰り返へされて、弘安四年の來寇となつたのであるが、神風の冥助もあつて、國威は赫々として四海に輝きわたつた。十四ケ年に亘るこの大事件が、時宗の膽玉一つで解決したといつては、溢美であるかも知れぬが、然し、膽玉一つの與つた力は實に偉大なるものがあつたといはなければならぬ。

人には生れながらにして、賢あり不肖あり、大膽なるものあり、怯懦なるものあり、必ずしも一樣ではない。時宗の如きは、定めし生れながらの大膽者であつたに相違ないと、人は思ふであらう。二十代や三十代であの膽ツ玉だもの、それが天禀でなくて何であらうと誰しも思ふであらう。が、奚んぞ知らん、時宗は初め大の怯懦であつた。

その著『途の草々』に『齡漸く長ずるに從ひ、心益々精、才愈々巧、然れども意氣は柔弱にして恰も處女の如し』とある。自分でいふのだから謙遜なのだらう、自分の愼しみとする語に過ぎぬのだらうといふ人もある樣だが『心は益々精に、才は愈々巧に』といふ句より見て、謙遜の言葉とも自警の言葉とも思はれぬ。やはり初め、時宗は弱虫であつたのだと思はれる。

開祖大師とも其の御態度には、時代の推移に依り多少の相違はあるもの丶、其の宗乘と家風とは、全く銀盌に雪を盛り明月に鷺を藏すが如くである。是を開祖一味の行持といふのであります。

事上の錬膽

膽ッ玉が太い、度胸がいゝといへば、話を聞いただけでも、雄々しくて氣色がいゝ、天地が顚倒する樣な大事件が勃發しても、ビクともしない度胸があつたら、どんなだらうか。予が信念よりすれば、度胸が無かつたら、何一つ仕出かせるものでないと思ふ。

日本人で度胸のいゝ代表者は北條時宗であらう。時宗の膽は大甕の樣だつたといはれてゐる。空前の大國難を一身に引き受け、よくそれを切り開いたやり振りは、小膽者の爲し得る所でない。元の忽必烈が攻め寄せて來たのは、弘安四年の夏ばかりでなく、文永五年以來のことで、その間實に十四年の久しきに亘つてゐる。十四年のその間には幾度となく、忽必烈は樣々のことを仕かけて來た。文永十一年の如きは軍艦九百艘に數萬の兵を乘せて壹岐・對馬を侵し、疾風迅雷の勢で九州に攻め上つてゐる。その[illegible]忍は言辭に盡くされぬ。京・鎌倉は何時何時、ふみにぢられまいものでもなかつた。申す

法嗣總持寺二世峨山禪師も、孝心深くおほせしことは孤雲禪師の如く、その御遺囑も亦た同様であつたので、是れ亦た別に佛事を修せず、常濟大師御忌中の一日を以て御供養申上ることゝなつて居る。以上七點の外にも、兩祖大師の類似點は澤山ありますが、今は之を略して置く。

猶ほ茲に申し置きたいことは兩祖の御著述の事である。承陽大師は二十八歳の時、支那より御歸朝あそばされ、建仁寺に寓せらるゝこと約三年、後、深草に閑居し、三十四歳にして興聖寺御建立、四十四歳にして越前に錫を移され、五十四歳の御涅槃である。此の間、前後二十七年、常恒不斷に龍象を接得して、正傳の佛法を御擧揚あそばされる餘暇を以て、親く御筆を執て宗門の眞訣を後世に遺したまひしもの、正法眼藏九十五卷、永平廣錄十卷、大清規二卷、其の他數多の御著述があらせられる。

然るに常濟大師は傳光錄、信心銘拈提、坐禪用心記等、僅々七八卷に過ぎぬ。而も其の御作は、主に御歳三十代の時の御筆である。如何にも、吾々兒孫としては物足らぬ心地せらるゝが、思ふに大師は淨住・永光・光孝等の名刹を開き、最後に總持寺を開創せられ、常に接衆と行化に御忙はしく、全く御執筆の餘地があらせたまはなんだのであらう。月坡禪師製作の御傳には『師性素より行脚を樂しみ遂に解職し（總持を峨山禪師に、永光を明峰禪師に讓らるゝこと）畢て遊方し、破笠瘦藤、到る處衆を接し歸する者市の如く』とある、是に由て之を觀れば、常濟大師は專ら巡錫化導に御努めあそばされ、全く席溫まるゝに暇なき御有樣であらせられ、其の御巡錫の區域も、或は非常に廣くあらせられたかとも思はれます。

第五には、兩祖共に觀音大士を崇信せられ、深き佛因緣あらせたまうた。永陽大師は正法眼藏の中に特に觀音と題する一卷の親訓あり、支那より御歸朝の航海中、風波の厄に遇はれける折、一心に觀音大士を念じたまひしに、一葉の蓮華に乘りたまひし大士の御姿が海面に現はれると同時に、忽ちにして風收まり波も穩かになりて、恙なく肥後の川尻に御着船あそばされたので、自ら其の尊像を御畫きあそばされた。常濟大師は、其の御母が觀音大士に心願を籠めて、大師を胎内に宿したまひ、大師生後六歲の時、觀音大士に詣でゝ發心せられ、後に觀音大士の靈告に依りて、今の總持寺を定賢律師より御受納になり、本と諸嶽寺と稱せしを諸嶽山總持寺と御改稱なされたのである。

第六には、兩祖御示寂の御樣子が全く一律である。永陽大師は、豫め釋尊御涅槃の時の御遺教たる八大人覺の御示しありて、太陽曆の九月廿九日夜半に遺偈を書して御入寂、常濟大師も亦た豫め八大人覺の御示しありて、同月同日同時刻に遺偈を書して御圓寂あそばされたのである。

第七には、兩祖とも二代の法嗣が世に超えて至孝であられた。永平二世孤雲禪師は、永陽大師御入寂後永平の法席を董すこと十五年、その間、方丈の傍に先師の尊影を安じて、夜間に珍重し曉天に和南し、恰も生に事ふるが如くであつた。猶ほ法子に遺囑して滅後と雖も別に塔を建てず、先師の塔の侍者の位に埋ましめ、且つ、我が爲めに別に佛事を修せず、先師御忌中の一日の回向に與からんことを命ぜられた。永平寺にては、今猶ほ永陽大師御忌の中に、孤雲禪師の御供養を營まれることゝなつて居る。常濟大師の

見三千界」といふに至つて大いに省發せられた。卽ち此の肉眼を以て三千界を見るといふのであつた。後に平常心是道の公案に參じて、遂に徹底せられたのである。是の如く兩祖ともに實際生活の上に禪道を發揮せられました。

第三には、兩祖とも名利を厭ひ權勢に遠かるの態度を取られた。是れは當時佛教界の墮落に憤慨せられ努めて時弊に反對せられたことが認められる。承陽大師は王城の地を棄てゝ遠く越前の山中に逃れ、猿鶴を友として古風を保任せられた。常濟大師も加州より能州に入り、益々能州の奥へ〳〵と進ませられたのである。されども、桃李言はずして下自から蹊を成すが如く、後嵯峨天皇は三度勅使を越前に差して承陽大師に紫衣を賜はり、後醍醐天皇は遙々勅使を下して常濟大師に十種の勅問を垂れたまひ、その奏對、叡慮に愜ひ、勅して紫衣を賜はり、且つ出世道場の綸旨を下したまうたのである。

第四には、兩祖とも護國主義であらせられた。承陽大師は『國家に眞實の佛法弘通すれば諸佛諸天ひまなく衞護するが故に王化太平なり、聖化太平なれば佛法その力を得るものなり』と仰せられ、佛教を以て國家敎化の基本として、敎化力を以て國家の發展を圖りたまうた。常濟大師は『汝諸人悉く皆な國土にはらまる、一天下國土上悉く是れ國王の水土に非ずといふことなし。然るに家にあれば親に仕へ國に侍べれば君に仕ふまつる、如是なる時天地加護ありて自ら陰陽の惠みをうく』と仰せられ、佛法と王法と一般、人道と天道と一如なることを說き、以て鎭護國家を標榜して佛法の弘通に努められた。

に弘通發展の門を開きたまうたのである。承陽大師は保守的に宗乘の根源を涵養せられ、常濟大師は進取的に宗風の開展に從事せられた樣に思はれる。されど、其の御心操と御行狀とは全く符節を合せたらんが如くで、實に先聖後聖その揆一なりと申し上ぐべきである。

今暫く、兩祖の契同點を七點ほど擧げて見やうと思ふ。第一には、兩祖の宗旨の渾一なることは言ふまでも無い。承陽大師の正法眼藏や普勸坐禪儀等を拜讀して、更に常濟大師の傳光錄や坐禪用心記等を拜覽して之を比較し奉るに、その宗乘の御提唱は、火と火とを合し水と水とを和したるが如く、全く同工同曲である。

第二には、兩祖とも知見よりも、實行を重んぜられた。即ち理論よりも實際に力を致された。尤も、其の知見の堂々たる、其の理論の明々たる、實に深遠高尙、古今に卓越して居らるゝが、是を單なる理論とせず、直ちに日常生活の上に實現せられたのである。所謂佛陀の大精神を實際化せられたのである。承陽大師は初め叡山に登りて止觀の法門を修められたが『本來本法性、天然自性身』といふに至りて大疑團を起された。本來本法性で、人々皆な佛なりとせば、三世の諸佛は何故に發心修行せられて、而して後に始めて成道せられたのであらうか。大師が此の大疑團を起されたのが十五歲位の時であつた。叡山に於て多くの學匠に就て此の疑問を提起せられたが、遂に滿足なる解決を得るに至らなんだ。是れが衣を更めて臨濟禪に投ぜらるゝ動機となつたのである。常濟大師は二十三歲の時、法華經を讀誦して「父母所生眼、悉

兩祖一味の行持

九月二十九日は、我が曹洞高祖承陽大師及び太祖常濟大師御涅槃の御命日である。承陽大師は永平寺の御開山で、建長五年八月二十八日の御入滅、常濟大師は總持寺の御開山で、正中二年八月十五日の御圓寂であるが、之を太陽曆に推歩すると、不思議にも御二方とも九月二十九日で、卽ち同月同日同時刻の御涅槃である。我が宗は永平・總持の兩大本山ありと雖も、兩本山一體で、一宗一派の宗門である。而して、兩大本山の御開山も亦た其の宗乘遺訓も相同じきのみならず、御一代の化儀と行持とが殆ど一味であらせらるゝことを、有り難く感ずるのである。

尤も承陽大師は、當時に於ける佛教界の弊風を慨歎せられ、時流に超然として越前の深山に根本道場を開き、專ら眞純綿密なる宗風を保任して、佛祖の兒孫たる模範を後世に示したまひ、後嵯峨上皇より恩賜の紫衣をさへ二回までも御辭退あそばされ、苟も名利に類する事は絕對に峻拒せられました。太祖大師は承陽大師の皮肉骨髓を得たまひしが、承陽大師滅後十六年の御誕生で、化を北陸の野に弘めたまひし時は承陽大師より約五十年の星霜を經て居りますから、時代の變遷に鑑みられ專ら宗門萬世の基礎を定め、大

開かれたと云ふことである。彼もなく此もなく佛もなく凡夫もない本来平等の大海に、自から慈悲心の波濤が躍るといふ境地に至らねば、佛法の御利益は顯はれませぬ。

又、後龜山天皇の皇子師の宮様が出家なされて、有名な眞阿上人といふ御方になられた。で、京都の誓願寺に居られた頃、足利義教公が「口に唱へ卒塔婆に書きし彌陀は見ゆ書かず唱へぬ彌陀を教へよ」といふ歌を贈られた。筆にも書けず口にも唱へられぬ佛様とは、慈悲心のことである。時に上人は『なにと吹く風とは更に知らねどもあはれもよふす秋の暮かな』と返歌せられました。天眞にして妙なる宇宙の大意志はかくの如くである。上人が或る時、義教公の館に赴かれ、憐れむべき囚人を御覧なされ、之を赦免せられたしと請はれたが、義教公は御聴入がなかつた。その時上人は『慈悲の眼に憎しと思ふ者ぞなき咎ある身こそなほあはれなれ』と云ふ歌を詠ぜられたれば、義教公は大に感激せられて、遂にその囚人を赦されたと云ふことです。

尤も、斯く申せばとて、佛の慈悲は決して良民も罪人もゴツチヤにするのではありませぬ。平等の中に差別ありて、秩序が毫も亂れませぬが、その平等も差別も、菩提心の上から自然に現はるゝ妙用であつて心の欲する所に從つて矩を踰えぬと云ふのが菩提心の妙功德であります。

馬もその臆病に呆れたと見え、すぐさま元の陣中へと引返して來た。信玄は、それでも別段に叱りもせず今度は家中の隱目附を命じ、『若し內證事を知りつゝ申上げざれば、嚴しい科に處すべし』と申渡された。大藏は大に恐れて、馬鹿正直に、何もかも上申したので、大層役に立つたといふお話がある。

此等は名君が人を棄てずに利用した話でありますが、吾等の菩提心とて亦た斯くの如くで、如何なる境遇に處しても、如何なる惡人に出遇うても、決してこれを恨まず、これを憎まず、益々これを憐み、これを愛すれば、惡人も善人に化し穢土も淨土と變じ、苦痛困難も安寧幸福となるものです。承陽大師が『この發心よりのち大地を擧すればみな黃金となり大海をかけばたちまちに甘露となる』と仰せられ、太祖國師が『六道の輪轉自ら大乘の輻軸なり、四生の受業まさに是れ自己の活計』と仰せられたのは、まさしくこの消息を示されたものです。凡そ吾等の心でも、天地でも萬物でも、その人の觀念と境界とに依つて苦ともなり樂ともなり、惡業の因緣ともなり菩提の行願ともなるのです。

昔、了菴門下の麒麟兒と稱せられし大綱明宗禪師は、初め淨土門の人であつた。相州酒句に於て盛に說法して居られた時、有名なる慧春比丘尼が座にあつて說法の後に相見して、『貴僧は聰明な御方ぢやが、惜しい哉自己の安心が出來て居らぬ、願はくば最乘寺の了菴禪師に參ぜられよ』と勸告された。そこで明宗禪師は、早速、了菴禪師の處に至つて曹洞の宗旨を聞かれたが、さつぱり解らぬ。或日、海濱を通行の折大勢の小供が『向ふも見えねば此方も見えぬ聞くは磯打つ波ばかり』と謠ふのを聞いて、忽然として悟を

と仰せられてあります。六趣と云ふのは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道、四生といふのは生物の生れ方に胎生と卵生と濕生と化生との四通りがあるので、これを四生と云ふのです。併し、これは未來の事とばかりと思つてはなりませぬ。この世の中でも、火の車に乘つて居る者もあれば、劍の山を踏んで居る者もある。飢渴に苦しむ餓鬼道、獸道を踏んだり弱肉强食の醜狀を呈する畜生道、我慢競爭の修羅道、仁義忠孝の人間界、十善安樂の天上界、社會の狀態は此世からなる六道の巷である。この六道の巷を經廻つて居る吾等の身の上が、若し菩提心が堅固なれば、盡く菩提の行願を成就すべき好因緣となります。

大閤秀吉の寵臣たりし湖秀游は如何なる人をも棄てずに盡く採用して、その能を見て善く使はれた人である。臣下の中に泣面の男が一人あつた。始終、涙を流し眉を皺めて一見ゾッとするやうな陰氣な顔つきでありました。「何んぼ何んでも餘り緣起の惡い顔つきだから、之を放たれよ」と諫むる人もあつたが、秀游は笑ひながら「決して無用と思はるゝな、葬式や法事の使などには無類の重寶者よ」と云つて、生涯扶持を與へられたと云ふことである。

武田信玄の家來で大藏左衛門と云ふは大の臆病者で仕方がなかつたが、信玄は使ひ途ありとてこれを扶持せられ、信州戸石の合戰の時、彼の臆病者を勝れたる逸物の馬の鞍にくゝりつけ、大勢で馬の尻を敲いて敵の陣中に追ひこんだ。大藏は喫驚仰天ブル／＼震へあがつて、夢中になつて念佛ばかり唱へて居た。

と申すのであります。

さあ一度この菩提心が現はれますれば、何處に行つて何事を致しても、順境に居やうと逆境にあらうと少しもこの心の作用を妨ぐる物はない。惡人に向つた時は益々惡を止め、且つ惡人を導かんとの念を起し、善人に向つた時は益々善を行ひ道を修するの志を長じ、苦を受けた時は忍辱精進の行を勵み、樂みに遇うた時は禪定智慧の功を磨き、國に向つては國を愛し人に向つては人を愛し、鳥獸に向つては鳥獸を憐れみ草木に向つては草木を憐れむといふやうに、萬事萬物に對して、任運自然に孝順心慈悲心を現はす時は萬法皆な菩提心を增上すべき因緣となる。氣に入らぬ事があればこそ、其の御陰で堪忍と云ふ美しき德を養ふことも出來、無常の世の中であればこそ、苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟を開き業障を消滅して佛樣の御仲間入も出來るのである。是を承陽大師は、發菩提心の卷に『もし一刹那この菩提心を起すより萬法みな增上緣となる、おほよそ發心得道みな刹那生滅するによるものなり、もし刹那滅せずば前刹那の惡さるべからず、前刹那の惡いまださらざれば後刹那の善いまだ生ずべからず、この刹那の量は唯如來ひとりあきらかに知らせたまふ』と御示しあそばされてある。斯樣に菩提心を應用して參りさへすれば苦も樂も、善も惡も、盡く道に進み德を明らかにして、三聚淨戒、十重禁戒の御戒法の御光りを現はす所の因緣となります。

されば又『若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も其の輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり』

木一本、水一滴、塵一介でも、孝順心慈悲心の姿ならざるは無い。一個人の道德も社會國家の道德も同一の原理で、一人の善行も萬人の善行も圓融して相離れぬ。自分の利益と他人の利益とは、元來、同じ孝順心慈悲心の眼であつて、自分と他人との間に劃然たる境をつけることは出來ぬ。ちようど日月の萬物を照すが如く、他を照すと同時に自身をも照して居る。任運に起つて來る孝順心慈悲心の作用は、求めずして自から他を利益し、願はずして自から自身をも利益するのである。

然るに凡夫の悲しさには、動もすれば反對に他人に迷惑を掛けたり、自身に損害を招いたりするのは何故であるかと云ふに、それは本來平等の中に於て、故らに自分と他人との隔てをつけて、我、卽ち「オレガ」と云ふ塊物を拵へ、それに執着するからである。貪慾・瞋恚・愚痴、其の他所有煩惱惡業は唯この「オレガ」と云ふ惡戯者の仕業ならぬは無い。釋尊は「一切衆生は皆な如來の智慧德相を具す、唯だ妄想執着に依つて而も證得せず」と御誡め下されてあるが、妄想執着と云ふのは卽ち我のことです。この我を離れ妄想執着を脫しさへすれば、自から宇宙の意志に冥合して、眞正の菩提心、卽ち佛心を發します。これを己れを忘れよ、己れを捨よと云ふのであります。承陽大師が『佛道をならふと云ふは自己をならふなり、自己をならふと云ふは自己を忘るゝなり』と御示し下されたのも、卽ちこの事であります。三世の諸佛、十方の菩薩が、己れを捨てゝ衆生濟度の願を御發しあそばされたのも、決してわざ／＼拵へた御誓願と云ふのではない。つまり、宇宙の意志に冥合して佛性常住の孝順心慈悲心が現はれた姿で、これを菩提心

菩提心には老若男女などの區別は入らぬ。誰でも大慈大悲の誓願の起つたものが、即ち大菩薩心である。されば、如何程陋しい者であらうと、愚か者であらうと、誓願の心に變りはない。生々世々を盡して一切衆生を救はんと志せば、國家も世界も盡く我が誓願の領分內である。釋尊の『今この三界は皆な是れ吾が有なり、その中の衆生は悉く是れ吾が子なり』と仰せられたのはこゝです。この大誓願は、決して教育や遺傳の力で造つたものではない。佛性常住の妙德と申して、吾等の本來具へて居る心の作用である。言ひ換へれば、即ち宇宙の大意志である。この世界の成り立たぬ前、此の身の生れぬ前から、ちやんと具有して居るのです。教育の力や遺傳の力は、その大意志の發現する手續の一部に過ぎませぬ。

世間の倫理學上では、善惡の標準を定むるに就て種々なる學説があつて、或は人間行爲の原因たる動機を本として論ずるもあり、或は人間の行爲が社會公衆に對して利益があるか無いか、又は個人に對して利益があるか無いかを立脚點とする結果論者もあり、又、進んでは、人間の目的以上に宇宙の目的なるものがある、吾等はこの宇宙の目的に服從せねばならぬと主張する宇宙主義もあり、又は自律的國家主義他律的國家主義もあり、實に千態萬狀でありますが、何れも一長一短、其の根本原理が確實でないやうに思はれる。

ところが吾が佛の御教では、宇宙萬象は本來、一體平等にして、宇宙萬象のそのまゝが佛性常住の孝順心慈悲心の塊り物である。社會も國家も、一家族も、一個人も盡く平等にして差別はない。草一本

鍛へ智識を磨き精神を錬りて、遂に佛とも神ともなるのです。『無明實性即佛性、幻化空身即法身』泥中の蓮華の一節は、人生の價値、修養の覺悟、宇宙の實相を言ひ顯はしたものであつて、前節の聲色解脱の心境である。島津公は是より一層御歸依が深くなつたといふことである。

以上の例に見ても、此の無常觀は決して消極的觀法では無く、寧ろ吾人をして向上の英氣を策振せしむべき力ある觀念である。

尤も、無常といふは萬象變化のことであるから、換言すれば、宇宙の活動に名けたものである。宇宙の本性は古今不變であるが、其の作用は轉變して停まらぬ。その變化の上に苦樂昇沈の差異あることは、皆な道業の如何に依るのであるから、佛教に於ては、無常を觀ずると同時に常住の妙理を明らめ、且つ因果の理法を信じて、日々の作業を愼しむべきは勿論である。

佛　心

佛の心とは大慈大悲の心である、母親が自身の艱難を厭はずに我が子を愛育するやうに、自分と云ふものを先にせず、常に人のため世の中のためにと思うて、慈悲心を運んで行くのが眞の菩提心である。この

村の農家に生れたが、後、士籍に入つて藩士として登庸せられた。仔細あつて、五十三歳にもなつてから出家したが、若い時より佛教を研究し、殊に禪道に參じて居りしかば、間も無く出世して、遂に君公の菩提所に住職するに至つた。和尚の出家も參禪も、やはり無常觀より入つたのである。禪門の例規として、住職の時、晉山開堂といふ大禮が行はれる。その式を晉山といひ、そのとき須彌壇に上りて佛祖に代つて法を演ずるを開堂といふ。此の時に大問答が有る。然るに、和尚が農民の出であるといふので、僧侶の中でも和尚の出世を喜ばぬ者があつて、和尚に恥を與へたいといふやうな嫉妬根性を起した結果、藩公を說いて、藩公の手で彼を辱しめ樣としたのである。

彌々晉山の當日になると、島津公は公式を以て御乘込なされた。さて和尚が須彌に上りて、香を拈じて後、問答といふ段になると、藩公は座より起つて法堂の中央に進まれ、須彌に向て、大音聲に『如何なるか是れ久志良の土百姓』といふ奇問を發せられた。是れは『汝が本來の面目如何』といふ意味にもなるが、とにかく一種の侮辱味を含んだ進問であつた。滿場の人々は皆な大に驚いたが、君主の事なれば手の着けやうが無い。處が、平氣なのは和尚である。無常觀法に徹底して見れば、名利にも吾我にも執着は無い。八風吹けども動ぜぬ。却て君公の奇問を面白く感じ、ニツコリと笑を含み、聲も穩かに『泥中の蓮華』と答へた。土百姓で、泥の中からであればこそ蓮華も開きます。

此の人生は無常にして、苦惱も多く罪惡の穢れに滿ちて居るが、その無常、苦惱、罪障が却つて人格を

若し無常觀の力に依り、聲にも迷はされず、色にも役せられず、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が、色・聲・香・味・觸・法の六境に對して、常に泥中の蓮花の如くならば、始て內省的自省心が高まり、理智的求道心が向上するに依つて、最も健全なる菩提心、即ち宗教的信念が發起せらるゝものである。

是れが永平大師の無常觀である。此の教訓に隨へば、無常觀の結果は、淺薄卑劣なる妄情邪欲を制し、剛健なる精進力を倍增し、進んで大解脫の境地に證入することが得られるのである。

禪門近代の高僧卍山和尚は、青年の時、其の師より前に出でたる小晦庵の「少年易老」の詩を敎へられ、深く之に感じて此の詩を坐右の銘として、八十歲の入寂まで間斷なく精進せられた。

王陽明は一代の儒宗であるが、彼は青年の時代に、常に九相の圖を懷ろにして情欲を制して學業を勵んだとある。九相の圖とは、美人が病に侵されて、床上に苦悶し、死し了るや肉體腐爛し、遂に白骨となるまでの經路を、九通に分けて畫きしものである。是れも「花の色はうつりにけりな徒らに我が身世にふるながめせしまに」の歌の如き一種の無常觀相である。

支那の伊菴の權禪師は、非常に修行に骨を折た人で、毎日晩方になると、必ず涕を流して「今日又只恁麼に空しく過ぐ、未だ知らず來日の工夫如何ん」というて精進せられた。

明治維新前に薩摩の島津公の歸依を得て、其の菩提所福昌寺に住した無三和尚は、頗る棒鉢辛辣なる禪風で、西鄕南洲翁も青年の頃、八年間も和尚の提撕を受けたといふことである。和尚は鹿兒島在、久志良

と恰も頭に火のついたのを救ふが如くあらねばならぬ。あの人が怠けて居るから己も働くことを止めるなどといふ者は、自分の頭に火のついた場合に、あの人が火を消さぬから己も消さぬといふにも似て、如何にも愚かな事である。身命の牢からずして、何時、病氣するやら死ぬるやらと思ひなば、その道に勉勵し其の職務に精進することも亦た一生懸命であらねばならぬ。釋尊が過去に於て菩薩行を修せられた時、偶ま弗沙佛といふ佛を拜されたが、餘りの有り難さ嬉しさに、七晝夜の間、足を翹つたなりで、夢中になつて佛德を讃美せられたといふ因縁があります。吾々も、求道の念が猛烈で無常觀が深刻であつたならば、此の菩薩の如き熱心も生ずるものである。

次に無常を觀ずる事が深ければ、縱ひ天上界の樂師たる緊那羅王の音樂や、世界第一の妙音聲と稱せらるゝ迦陵頻伽鳥の聲を聞くとても、夕べに松吹く風の琴を調ぶる如き妙なる音を耳にする樣なもので、あゝ好き聲とは感ずるけれども、決して其の聲には迷はされぬ。また、古の美人と稱する毛嬙・西施の如き麗しき容顏を見たからとて、朝の露が草の葉末に玉を聯ねたらんやうに結ばれて居るのを見るが如きもので、あゝ綺麗だとは感じても、毫も其の姿に愛着の念は起らぬ。松風の聲は遂に跡を留めず、朝露の姿は忽ちにして消ゆ、之を知るが故に愛執は起らぬ。耳を喜ばしむる美音も、眼を娛ましむる艶容も、觀じ來れば暫時の幻影に過ぎぬ。然るに、凡夫は此の幻影に迷うて、心を惱まし身を苦しめ、惑を生じ罪を造る。思へば淺ましきことならずや。

三節）已に容色の纏縛を離るれば自ら道心の理致に合はんか、

無常観は決して頑なる悲観ではない。深く無常を観じ来らば、お互の肉体も時々刻々に變化して、決して固定した者は無い。古歌に『世の中に我が物とては無かりけり身をさへ土にかへすべければ』とある通り、緣に從つて此の世に生れて來たもの丶、人生僅か五十年、一秒時の間にも變化すること水の流れて停まらざるが如くで、ドヽのつまりは『焼けば灰、埋めば土』となるのである。お互の精神としても、念々無常にして、決して定まれる心相は無い。斯く観じ来らば、己れが我れがというて我見の角を振り立てたり、此の己れが我れがに愛着して、虚名を貪つたり、浮雲の如き利祿に迷うたりして居る凡夫の有様は、恰も猿が水中の月影を見て之を手に捉らんとて騒ぎ廻る様なものです。理想の無い欲望は砂の上に樓閣を築くが如く、信念の無い盲動は水の上に畫を描くに似て最とはかない〳〵かなし。無常観は自から、是の如き妄想より出でたる吾我の情、利己心より發したる名利の欲を遠離するものである。

次に無常を観ずる時は、月日の移り易く時光の太だ速かなるには驚かされます。『少年易老學難成、一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲』とは朱晦庵の所感である、『盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歳月不待人』とは陶淵明の警告に非ずや。『あすありと思ふ心にだまされて今日も空しく過しつるかな』、受け難き人間の身を受けながら、うか〳〵と夢の如く一生を送り去らば、人間としての價値果して何くにか在る。故に、時光の太だ速かなるを恐れなば、此の道を修行するこ

間』、釋尊の言はく『子、未だ道を知らず』、次の弟子は答へて曰く『飲食の間』、釋尊曰く『子も、亦た未だ道を知らず』、次の弟子答へて曰く『呼吸の間』、釋尊は始て『善い哉、子は道を知れり』と仰せられた。

さて、吾々が深く此の無常觀に入りなば、先づ第一には死後の問題が思ひ浮ぶであらう。此の思惟からして永遠の生命を發見することが出來るのである。第二には利己的欲望や不合理の所作などは何等の價値なきことに氣がつくであらう。第三には、此の身は縱ひ死するとも永久に死せざる功德を積み置かんとの志望を發することであらう。されば眞實に、德を養ふ心も道を求むる觀念も、此の無常觀よりして、熱心にもなり眞劍味をも帶びて來るのであるから、無常觀は實に正信開發の動機となるものであります。

我が高祖承陽大師は、八歳の時、悲母の逝去に遇ひ、香烟の消え失せるを見て深くも無常を觀じ、遂に出家求道の志を發せられた。後に學道用心集を著はして、參學の心得を示され、最初に發菩提心を說くに當り、專ら無常觀を勸導せられた。その中、左に擧ぐる一段の文章の如きは、簡潔に無常觀の功德を說きたる教訓としては、比類稀れなる御慈訓である。

誠に夫れ無常を觀ずる時、吾我の心生せず名利の念起らず（第一節）時光の太だ速かなることを恐怖す。所以に行道は頭燃を救ふ、身命の牢からざることを顧眄す、所以に精進は翹足に慣ふ（第二節）、縱ひ緊那迦陵讃歎の音聲を聞くも夕の風耳を拂ふ、縱ひ毛嬙西施微妙の容顏を見るも朝の露眼を遮る（第

無い。辛うじて財を得て喜び、漸くにして富を得て樂むも、一朝死といふ暗が目前に現はれる時は、最愛の妻子も身に随ふことを得ず、汗を流して求め得たる財寶田宅も持することと能はず、水火の苦しみを經て獲得したる榮職も悉く拋たねばならぬ。而して、其の死といふ暗は何時來襲するやら知れぬ。時と處とを選ばず、老と少とに拘はらぬ。

既に本年（大正十五年）一月に入りてからも、人皆た新年を迎へて互に祝し合うて居る間に、彼の總理大臣加藤伯が御逝去なされしが如き、思ひ寄らざる國家の大不幸事で、哀悼の情に堪へざることである。同日に三浦將軍の御逝去あり、又、總持寺の信徒總代として、常に外護の任に當られたる村井吉兵衛翁の如き、一月二日の朝、元氣好く龍子夫人と御話しをして居りながら、忽然として心臟痲痺を發して、一瞬間に逝去せられた。又、予と師弟の緣ある醫學博士久我六郎君の夫人澄子は、客年十二月二十四日の朝、佛前の勤行を終り、入浴して髪を梳り、衣服を更ためて坐すると何時に腦溢血に罹り、一語をも發せず其のまゝ故人となられた。是の如き哀話は到る處に、限りも無く實現せられて居るであらう。實に金剛經に『一切有爲の法は、夢幻泡影の如し、露の如く亦電の如し、應に是の如きの觀を作すべし』との御示しのある通りです。

吾々お互も亦た、何時、哀話中の人となるやら知れぬ。明日かも知れぬ、今夜かも知れぬ、今が今かも知れぬ。釋尊は曾て御弟子に問ひて、人の命は幾許の間に在りやと御尋ねなされた。對へて曰く「數日の

釋尊を始めとして、古今の大宗教家又は大信仰家には、多く無常觀が正信開發の動機となり、來道心發現の土臺となつて居る。今日と雖も、最も眞劍味のある熱烈なる宗教的信念は、概ね無常觀が其の出發點となつて居る樣に思はれる。

凡そ天地間に於ける萬有諸法は、一事一物として常住不變なるものは無い。皆な悉く時々に變遷し刻々に流轉して、暫時も停止しては居らぬ。此の世界すらも轉變して成・住・壞・空の四劫を現出して居る。世界生成の時代が成劫、存在の時代が住劫、破壞の時代が壞劫、空滅の時代が空劫である。空劫よりして時節到來すれば、復た成劫となり住劫となり、輪環して息まぬ。

世界の上に羅列する一切の事物も亦、生・住・異・滅の四相を現出して、暫時も停止することは無い。即ち、發生し、存在し、變異し、滅却し、而して滅し已つて更に生じ、四相流轉して窮まり無し。

人間や動物に至りては、生・老・病・死の四相を現出して常に變遷する。獨り肉體の變遷常なきのみならず、精神の如きも念々無常にして、決して常住なものでは無い。殊に死といふことが最も變化の大なるもので、觀じ來れば人生悲哀の極みである。

生死事大無常迅速とは禪門の警語であるが、さればというて、無常なる語は必ずしも悲觀より發したものでは無い。無常は變化の迅速なることを言ひ表はしたものである。併し、人間は常に活きんが爲めに活動して居る。衣食を漁り住處を求め、財寶を貪り安逸を望む。多くは活きんが爲めの欲念より發せざるは

此の趙州の公案は禪門向上の大事であるが、此れは信仰上の教訓としても實に貴とい意味が備つて居る。自力だの他力だのといふは門外の批判に過ぎぬ。それらをも放下して信心の堂奥に入りなば、自力・他力などいふ閑名目は附せられぬ。即ち、信ずる人の心の誠と、信ぜられる佛陀大慈悲の誠とが融合する處に、不可思議の意味が現はれる。是を感應道交といふのである。

感應道交とは信ずる人の感ずる心と、信ぜらる佛の之に應ずる御慈悲とが道交融合することであるから、此の場合、吾々の全身心が佛の慈悲の心に銷け込むと同時に、佛の大慈悲光明が吾々の全身心の上に輝きを放つことで、信仰の極致は是非斯くあるべきものである。是を「入我々入」とも「諸佛の法身我が性に入り、我が性却て如來と合す」とも申すのであります。

前に述べたる四種の信仰狀態を標準として、信仰に入る人々は、よく〱能信の動機を自ら顧みて、不純の嫌ひなからしむると同時に、所信の御本尊に就ても眞面目に考慮して、迷信や狂信に陷らぬ樣注意せられたいものである。

處である。

凡夫にはとかく執着の念がある。心を一法に專注するは必ずしも惡いことでは無いが、執着といふと、そこに不純な妄想がくッついて居る。佛が大菩提を樂みたまふが如きは、所謂自受用法樂で、決して執着ではない。縱ひ善法にても、執着が加はれば必ず微細なる我執妄想が伴ふこととなる。故に金剛經には『法すら尚ほ捨つべし、如何に況や非法をや』との御誡めもある。佛法にせよ、信仰にせよ、僅かに執着心が存すれば、やはり一種の我見に墮在する。宗派根性に囚はれたり自讃毀佗に流れたりして、宗教家などにも、却て俗人よりも甚だしき法執我執に囚はるゝ者が多い。空觀に住すれば空見に陷り、無相を了ずれば無相に偏す、故に、麁より細に入りて、此の執着を離れ偏執を脱して、中道一實の法門に證入せねばならぬ。

趙州は『放下着』の三字を以て一大鞭撻を加へられた。釋尊一代の聖教も、一言にしていへば放下着の法門とも稱せられる。其の時、嚴陽尊者は『一物不將來箇の甚麼をか放下せん』徹底無一物であるから放下すべき何物もござらぬというた、獅子翻擲の勢ありと謂ふべし。すると趙州は簡單に『擔取去』擔取し去れ、擔いでおいで。眞に大無我の境地に安住することが出來たならば、その境地こそ佛の大光明である、佛の淸淨土である。その無我的大信心を以て進みなば、行住坐臥も皆な信仰裏の活動であり、治生産業も亦た佛の光明片々であるぞとの提撕である。

悲を敬禮し、其の御救ひに信頼すること恰も幼兒が慈母の懐に抱かれたらんが如く、心中一點の疑惑もなく、不安もなく、欲念もなく、實に何とも形容の出來ぬほど安心なる境致に在る時、何處に自力だの自我だのといふ樣なものが認められませう。又、此の心境には理窟も議論も近づくことを許されぬ。全く大無我三昧である。

彼の一遍上人の詠ぜしと傳へられて居る「唱ふれば我れも佛も無かりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして」といふ歌の如くである。由良の法燈國師は此の歌を聞て、「聲ばかりして」といへる、そこに聲なるものを認めて能所が立つから眞の大無我といはれぬ。「唱ふれば我れも佛もなかりけり南無阿彌陀佛〳〵」とせよといはれしとやら。毘婆娑論やらに、「眞實、菩提心の發得したる證左は、佛の御姿を拜し若くは佛の御教を聽聞せし時、心のドン底から有り難く感じて、覺えず涙を流すとか、又は兩腋より汗を流すとかする、是れは感激の熱情の絶頂に達したので、是れぞ發菩提心の驗證なり」と説てある。

昔、支那禪門の巨匠、趙州從諗禪師の處に嚴陽尊者なる禪者ありて「一物不將來の時如何」と問うた。即ち、私は何一つ將て居らぬ、全く無我無心である。本當の赤裸裸です、所謂我れも佛も無かりけりである。是の如き者に對して、禪師は如何なる法門を以て御指導せらるゝやとの問である。時に趙州は「放下着」と答へた。放下着とは捨てゝ了へ、そんな物を持て居ては邪魔になるから、本當の空手になれとの説得です。——私は何にも持ちません、——うむそれを捨て了へ、——此處が玩味すべく參究すべき

理想を實現するには、一身の安定も生活の向上も、圖らねばならぬ。法華經には『現世安穩、後生善處』というてある。現世安穩といふは此の世の幸福、後生善處は未來の幸福である。幸福というても利己的欲望の滿足ではない。佛教の因果觀よりすれば、世人が幸福と稱するものゝ多くは苦惱の種である。眞の幸福は、人としての德を修め、人としての道を行ひ、人としての眞價を發揮することである。故に如何なる場合にも、報恩行と慈悲行とを離るゝことは出來ぬ。此の意味において、吾々は常に幸福を希望せねばならぬ。

健康を增進するのも、知能を啓發するのも、家庭を齊ふるのも、社會の發展を圖るのも、政治も敎育も產業も勞働も、盡く是を自覺々他に回向する時は、一として菩提の行願ならざるは無い。眞諦も俗諦も、有漏道も無漏道も、皆な〳〵其の人の運心如何に存するのである。故に承陽大師は『況や世務は佛法を障ゆと思へる者は、たゞ世中に佛法なしとのみ知りて佛中に世法なきことを未だ知らざるなり』と仰せられた。

淨土門にては自力他力の二門を說き、聖道門の信仰は自力であると判じて居るが、我が宗から見れば、信仰門には絕對の自力などいふものゝあるべきはずも無く、又、絕對の他力といふものもあらうと思はれぬ。佛道を欣求し佛心に歸仰する菩提心が開發せられた時は、自づと身・口・意の三業も淨められ、從前の煩惱惡業も悔悟せられ、そこに自己の佛性が一點の光輝を放つのである。更に進んで佛の大智大德大慈

我が宗にては釋迦牟尼佛を御本尊として居るが、三世十方に無量の諸佛ある中から釋尊を選び取て御本尊とするといふ樣な、取捨の見より出でたのでない。釋迦牟尼佛は法界の本主なりと拜するのであるから、一釋迦牟尼佛は、取りも直さず、十方諸佛の大智大德大慈悲を綜合する大功德體であらせられる。されば高祖大師は「謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり、過去現在未來の諸佛倶に佛となる時は必ず釋迦牟尼佛となるなり」と御示し下された。故に、我が宗の寺院にして、其の寺の歷史的事情よりして、藥師如來・觀音大士・地藏菩薩等を御本尊として居る向もあるが、悉く釋迦牟尼佛に對する觀念を以て信心歸仰すべきである。

佛の應化分身作用は所謂千百億であるから、或は降魔の形を現じ、或は施福の相を示し、或は寂靜、或は活潑、千態萬狀であるが、皆な佛心の一分光である。故に、吒枳尼天にせよ、道了薩埵にせよ、秋葉三尺坊にせよ、悉く佛の濟度攝受の一分證として信仰すべきである。故に、吒枳尼天の本地は盧舍那佛なりと稱し、道了薩埵の本地は十一面觀世音なりと稱するのも、以上の意味を考ふれば、何等疑ふ所は無いのである。

さて能信の動機も純淨で所信の御本尊も完全圓滿とすれば、其の御本尊に歸仰して何事を願求すべきかといふに、一言にしていへば、自覺々他覺行圓滿を欣求するのである。即ち、無始已來の迷執煩惱を解脫して大安心を獲得し、永遠の大生命を得て無窮に自利々他の妙用を現はすことを期するのである。此の

亡者で、即ち倫理に反したる者となる。是の如き者は決して眞の信仰の發るものではない。

尤も『何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ』といへる歌の如く、佛に對して信念開發する時は、己れをも忘れ身をも忘れて、只々有り難くかたじけ無く歸依し奉るのであるから、其の場合、倫理とか因果とかを考慮してから信心を起すといふ樣な餘地は無い、と言ふ人もあるであらう。それはそれに相違ないが、眞に己れを忘れ身を忘れ、歡喜踊躍して、恰も幼兒が慈母の懷に飛びこむが如く、自己の全分を佛の大慈悲海に投ずる時は、決して非倫理的な穢れた心や、因果を撥無するやうな邪曲の見解は無いものである。故に華嚴經には『信は道の元功德の母たり、一切諸の善法を長養す』とも『信は垢濁なく心清淨なり、憍慢を滅除して恭敬の本たり』とも說てあります。

能信の動機が純眞であつて、信仰の對象たる本尊樣が不合理ではならぬ。凡そ今生より未來に亘りて、眞正の解脫を得て萬德圓滿の果報を得んと欲せば、其の歸依する所の御本尊は、第一に宇宙の眞理、天地の大道の表現體でなければならぬ。同時に人道最高の規範と仰ぐべき人格的功德體で無ければならぬ。猶ほ世界人類は言ふに及ばず、一切の衆生を濟度すべき慈悲體で無ければならぬ。此の三條件が圓滿に具備せられたのが、吾人の全身心を投じて歸依し奉るべき理想的御本尊である。是の如き御本尊は、古今東西を通じて、我が佛樣の外にはあるまいと思ふ。故に佛敎に於ける御本尊は皆な眞理の表現體、最高の道德體、無限の慈悲體である。

き類がそれである。

又、能信の動機も利己的で非人道的であつて、其の御本尊も何等宗教的権威なきもの、例せば、一攫千金の利を射んとして盗賊たりし鼠小僧の墓に祈願を捧ぐるの類で、獨り感應の威力を存せざるのみならず、却て己れを滅し人を損するの結果を招くべきである。以上は何れも迷信と名くべきものであるが、中に就ても、第二と第三の如きは狂信・邪信とも稱すべく、獨り感應の功徳なきのみならず、拭ふべからざる禍を醸生するに至るべし。

然らば、純真なる能信の動機とは如何なるものであるかといふに、第一に倫理的でなければならぬ。次には三世因果の法則を昧ましてはならぬ。次には至誠眞實を以て歸命し奉るでなければならぬ。細かに穿鑿したならば、此の外にも必須の條件が多々あるであらうが、先づ以て前の三條項が主要なるものである。

三處不轉法輪というて、佛の説法度生の手の及ばぬ處が三箇處ある。一は我慢の高山、是れは至誠歸依の念が無く、只だ自分の我を最高最上のものとして、少しも他の教へに耳を假さぬ者。二は邪見の稠林、是れは神も無い佛も無い、未來も無いといふ、つまり因果を撥無する者。三は五欲の淤泥、是れは非理非分の欲望より出でたる、財欲・色欲・食欲・名譽・睡眠欲で、恰も泥池に足を踏みこんだやうに、段々と深みに沈むものである。此の貪欲に囚はれると、終には義理も人情も打忘れ、慈悲も情けも無き我利々々

ことは、輕々に斷定することは出來ぬが、此の兩者の相違點を說明するには、先づ以て信仰狀態に四種あることを知らねばならぬ。

その四種とは、信ずる人の動機の純不純と、信ぜらるゝ對象、即ち本尊さまの正邪との關係に依て、四に分れるのである。即ち

一、能信の動機は純眞なるも所信の對象が不合理なるもの
二、所信の對象は完全なるも能信の動機の不純なるもの
三、能信の動機も所信の對象も共に不純なるもの
四、能信の動機も所信の對象も共に純眞なるもの

右の內、前三種は迷信にして、後の一種を稱して正信と名くべきものである。

如何に信仰の動機が、至誠眞實にして邪曲なしとするも、其の所信の本尊が何等の權威も無いものであつては、榮光ある感應のあらうはずが無い。世に、狐狸や大蛇や、奇巖や朽木や、若くは、譯も解らぬ山神鬼神等に祈願を籠めるの類はそれである。

又、御本尊は如何に理想的であつても、能信の動機が不純では、是れ亦た何等感應を被むるはずが無い。世に、利己的欲望を充さんが爲めに神佛に祈請を凝らすとか、又は病人が醫療や養生を放任して徒らに藥師樣や不動樣を拜むとか、甚しきは、惡事をしながら其の罪の發覺せざらんことを神佛に祈るが如

を嗣き上下相信じて乖戾あること勿れ、是れ老衲が末後の赤心なり」と示された。

吾々は道を求むること熱心にして道を守ること親切ならば、人事上の所有事業も、盡く菩提道の莊嚴となるであらう。此の心をもつて業に從ひ職を盡しなば、益々剛健の力も現はれ、且つ人道の目的をも達し、自づと幸福の門も開け安樂の道も通ずること疑あるべからず。斯くする時は、現在の此世が直きに佛の國土となり、現在の此身が直きに佛の法身の光輝を放つことゝなるであらう。併し、此の道を體得せんには金剛堅固の信仰と、公平無私の行業とが土臺とならねばならぬ。

吾々は此の多望なる新年を迎ふるに當り、新年劈頭上に於て是の如き目的を立てゝ、益々現代の弊習を一洗し、理想的文化の實現を期し、相共に向上の一路を打開したきものである。

正信

正信と迷信との區別を的確に言ひ現はすことは困難である。世には正信に似たる迷信もあり、迷信に似たる正信もあり、甲の宗教に於て正信とする所も、乙の宗派にては迷信と斷ずるあり、宗教家に於て普通正信と稱するものも、學者側にては迷信として排斥するあり、故に、何れが正信なるや迷信なるやといふ

戰陣に在るが如くである。大勇氣を發し大忍力を養ひ、艱難に屈せず苦痛をも耐へ、斃れて猶止まざるの覺悟を以て進まされば、理想を實現して安心を獲得することは出來ぬ。

人生の目的は食色や名利ではない。食ふことも生殖も、名譽も利益も、自然の要求ではあるが、猶ほ其の上に人としての使命が無ければならぬ。眞の使命は人たるの道に盡すに在る。人の道に於ける猶ほ魚の水に於けるが如し。魚、水を離るれば死す、人にして人たるの道を失へば、功名富貴も何等の價値が無いことゝなる。釋尊の發心出家も唯道の爲めのみ。達磨大師の西來も亦た唯道の爲めのみ、道の存する所に眞の幸福が存するのである。

吉田松陰は刑に處せらるゝまで書物を手から離さなんだ。彼は其の門人に對して『死生命あり、富貴天に在り、牢獄の中に在らずとも命數盡きなば死すべし、死ぬ迄は生きて居る、一日此の世に在らば一日此の道を修むべし』と示した。死に臨みても『よしや身は武藏の野邊に朽つるとも留め置かまし大和魂』と詠じた。

天桂禪師は道を守りて動かず、人を接すること親切にして且つ適切であつた。蜂須賀侯の老職稻田氏が教を乞ひし時、佛の字を書し『佛とは誰が結びけん白糸の賤のおだまき繰りかへし見よ』といへる歌を添へて示された。人の彼此と誹謗するに答て『まゝよやれすめばこそあれ難波江に。よしといふともあしといふとも』と詠じて笑ひけるとぞ。最後に蜂須賀侯に對しては『齊家治國も亦た菩薩の行道なり、篤く仁政

は、米國の排日態度は益々深刻となり、其の他の外交狀態も未だ親善の實を收めては居らぬ。今後の形勢如何に依つては、どういふ事態を生ずるやも知れぬ。何れにせよ、解決の根本は我が國力の發展より外は無い。然れば吾々八千萬の國民は、協同一致して國家の內容を充實すべく努めねばならぬ。而して、國家の內容を充實するには國民の體力を增進し、勤儉力行以て富力の發達を圖り、知識道德兩ながら圓滿なるを要するが、何れにしても國民精神の剛健が根本基礎である。

現代人は概して文弱に流れて、シツカリした大丈夫な精神が乏しいかと思はれる。皮相なる文明は、動もすれば輕薄に流れ易い。利己主義の者は欲望の奴隷となるから、勇氣があつても、勇氣が却つて其の身を害するに至る。戀愛に溺れる者は情欲に飜弄されるから、如何に熱烈であつても、熱心が却て罪を招くに至る。人生は實に行路難で、內には私慾私情の制し易からざるあり、外には環境の爲めに壓せられ脅かされ束縛されるあり、此間に立つて能く其の道を守りて其の天分の使命を果さんには、八風吹けども動ぜざる金剛心が無ければならぬ。

釋尊は四十二章經に於て『夫れ道の爲めに修養せん者は、譬へば一人が萬人と戰ふに、鎧を掛け門を出づるに、或は意志の怯弱なる者あり、或は半路にして退却する者あり、或は格鬪して死する者あり、或は勝を得て還る者あり、學道も亦た戰に臨むが如くなるを以て、其の心を堅固に持ち、精進勇鋭、前境を懼れず衆魔を破滅して、始て道果を得べきぞ』と仰せられた。吾々の生涯は、或る意味に於て、恰も

超越的大智慧といふは、自己心性の本體を究め、生死の本源を明らめ、過去・現在・未來の三世に亘りて原因結果の理を覺ることである。佛教にては十二因緣を觀じて此の智慧を開發せしめて居る。是に依て眞正の自覺を得、未來永遠の大理想をも確立し、人生に於ける順逆苦樂の因緣を解決し、以て轉迷開悟の功を收むることが出來る。併し、聲聞緣覺の智慧は佛智慧に比すれば頗る低級であるから、更に一段の修養を要するが、之と同時に、一切衆生を利益して其の苦惱を濟ひ、永久の幸福と安樂とを與へんとの大誓願を發し、未來際を盡して無限に濟度の手を垂るゝのが平等的大慈悲で、是を行ずる人を菩薩と稱するのである。

解脫と智慧とは自覺の本にして、慈悲は覺他の行である。此の自覺と他覺とを圓成して、最高最勝の聖位に昇られたのが佛である。故に佛は功德の結晶體であると同時に、吾々を救濟したまふ慈父である。吾々は深く之を信じ之に歸して、常に佛の御德を此の身の上に莊嚴せんことを志し、新年の第一日から此の事を堅く心に誓ひ、日々夜々に之れが體驗に努めたいものである。斯くありてこそ、始て活機輪を轉ずることが出來やうと思ふ。

今や我が國は、內憂外患交々臻るとも謂つべき國家重大の時期に遭遇して居る。之を內にしては、綱紀の肅正が叫ばれ、行政・財政の整理が政府施政の要件になつて居る。此のことは國民の間にも同樣で、社會の綱紀が弛み、一般の風紀が紊れ、國民の經濟關係が頗る憂慮すべき状態になつて居る。之を外にして

へて「御門人の中の申棖などは頗る剛勇の士ではありませんか」といふと、孔子は『棖は慾あり焉んぞ剛を得ん』彼には欲念があるから眞の剛者とはなれぬと申された。誠に意味深い敎訓である。

私情や私慾があつては、事物の判斷も公平を缺き易い。從つて俯仰天地に恥ぢざる行動に出づることが出來ぬから、何事も龍頭蛇尾に畢るものである。私情私慾を離れて道に順ひ善に進む人は、其の心が佛の心にも神の心にも合ふが故に、恐るゝ所も無く恥づる所も無いから、其の言ふ所は天の聲に齊しく其の行ふ事は佛の業に契ふに依つて、一擧一動も百世の師ともなり天下の則ともなる。是れ則ち鐵牛の機である是を活機輪を轉ずるともいふのである。

此の靈機を得んと要せば、先づ以て解脫的大意志力を涵養せねばならぬ。解脫とは所有束縛より脫出し精神的に自由を得ることである。人多くは自己の妄想や慾念の爲めに束縛せられる。貪慾に耽りて道德に反したり、忿怒の情に驅られて慈悲の德を失うたり、愚癡に蔽れて煩悶に陷つたりする。又、外界の境遇や物質の爲めに縛られて種々の苦痛や憂愁に囚はれたりして、益々精神の苦悶を重ぬるに至る。其の結果は知らず〳〵此の身心を迷執の暗路に投じたり、罪惡の渦中に墮落さすに至る。故に、吾々は道德的大意志力を鍛錬して、妄想や邪慾を斷ち截つて、大無我の境に進むべきである。此の境致に至らんには、堅固なる信念と不動心を鍛出すべき禪定とに依るのが最善の妙術である。されど、單に心を治めるといふのみではならぬ。更に進んで超越的大智慧を開發することが大切である。

果を明らむ。菩薩乘の人は大慈悲心に住して無限に敎化救濟の行を營む。此の三乘は佛德の中の一分である。聲聞は解脫的大意志力、緣覺は超越的大智慧、菩薩は平等的大慈悲で、語を換へれば大勇・大智・大仁の三德である。此の三德を圓融したる佛德を大白牛車に譬へられて居る。吾々は此の大白牛車の主人公となりて、眞に能く佛德を實現することに努めたいと思ふ。牛の如く柔順にして優美なる信念と、牛の如くどつしりと落着のある度量と、牛の如く剛强なる氣力とを以て、此の身に於て幾分なりとも佛の御德を實現し、佛陀の大精神に基ける大勇大智大慈悲の生活に入らねばならぬ。

昔しは風穴禪師、郢州の衙內に於て上堂せられ『祖師の心印形鐵牛の機に似たり』と示された。達磨の精神は鐵で作りし牛の機用の如くである。鐵の牛であるから欲念も妄想も無い。さうして靈妙なる心機を具へて居る。

欲念や妄想があつては、我れと我が身を冒瀆することゝなる。學問ありとも欲念の爲めには却て學問を以て造罪の具とする、德行を修めても妄想の爲めには却て德行をして虛僞の生活たらしむ。所有罪惡は皆な欲念より發し、所有煩悶は悉く妄想より生ず。故に吾々は、常に自省して自己の欲念を制し妄想を脫すべきである。さればとて、單なる無欲の人たれといふのではない。不合理の欲、正義人道に反する邪欲を誡むるのである。禪道の上からいへば、一切の分別や執着を截斷らねば本心の光りは輝かぬ。

孔子が曾て『吾れ未だ剛者を見ず』眞に剛健なる人を見ることが出來ぬと言はれた。すると、或人が對

は、上下倶に萬般に亘りて、革正、整理、改善を要すべき重大なる使命を負うて居るから、今までよりも百倍千倍の大努力を致すべき意氣を以て、勇猛精進せねばならぬ。

此のめでたき新年を迎ふると共に、眞に能くめでたき一年たらしむべき覺悟が大切である。東洋の文化を代表して、歐米列國と握手を交換すべき位地に在る吾々國民は、新年の第一日より大々的覺悟を以て、理想的生活の實現に力を致すべきである。昨年十一月十日には、御大詔御渙發の記念日たる同日より一週間、勤儉週間と稱して、各府縣一齊に勤儉の奬勵と實行に努め、相當の成績を收めた樣であるが、此の勤儉の奬勵は國力を充實する第一の要素であるから、全國民が不斷に之れが實行に當らねばならぬ。

凡そ人間の生活には物質的と精神的との二方面がある。勤儉力行も此の二方面に向つて進まねばならぬ。勤勉して業務に當り、儉約して冗費を省き、以て能力の増進と業務の伸展とを圖り、生活の餘裕と內容の充實とを期し、更に進んでは、勇猛精進して道を修め德を養ひ、智を磨き技を練り、恭儉己れを持して情欲を節し放縱を避け。私欲を制し、妄想を戒め、以て精神生活をして豐富ならしむべきである。殊に本年は丑年であつて、丑は牛に通ずる。牛といふ動物は其の性質柔和にして物に騷かず、力強くして能く重きを荷ふ。

釋迦は法華經譬喩品に於て、羊車・鹿車・牛車の三車を以て聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘の三乘に喩へられた。聲聞乘の人は能く煩惱を制伏して俗界を解脱す。緣覺乘の人は能く眞理を覺り諸法緣起の原因結

大白牛車の主人公

鳳暦端を改めて、茲に大正十四年の新日月を迎へたるはめでたいことである。殊に天皇陛下には玉體御健勝に向はせたまひ、皇后陛下、皇太子殿下、同妃殿下を始め奉り、皇族各殿下にも、御機嫌麗しく龜鶴の寶壽を添へさせたまひしことは、同胞國民と與に慶賀に堪へざる所である。顧みるに昨年は、內治外交兩つながら多事多端な年であつた。わけて大震火災の大打擊を受けたる東京・橫濱及び關東一帶の罹災地の如きは、復興事業の爲めに、官民齊く幾多の辛苦を嘗め、其の餘波は全國に亘りて、最も苦き經驗を味うたことである。我が本山の如きも、震災の難に罹り殿堂全體に損傷を來し、爲めに太祖大師の大遠忌すらも一箇年延期することゝなり、殆ど手の着け樣も無き有樣であつたが、闔宗の寺院・檀越、其他特志の援助に依り、漸々に復舊の事業を進め、來る四月一日より、三週間を期して大遠忌を奉修し得るに至りたるは、感謝に堪へざることである。

昨年の我が國は、外、米國の排日法實施に逢ひ、未曾有の恥辱を受けたるのみならず、內、國民生活の上にも種々の問題が續出して、未だ解決を見るに至らざるものが甚だ多いのである。とにかく大正十四年

れてある。されば日々の行持が佛作佛行の因であると心得て、一寸でも精神の緊張を缺いてはならぬ。此の不斷の努力こそ禪の活三昧を得把するに至るのである。

驀然の淨識を掃倒して禪機を煥發し、香嚴の擊竹、靈雲の桃花、慧能の精米、皆な是れ平常底に於て、如何々々と工夫せし爲めに、終に三昧王三昧に住するに至れり。故に日常底また禪の面目の露現である。故に道元禪師の坐禪儀にも、正禪は打坐三昧なることを解いて、坐禪の方法に就いて詳はしく述べた上、最後に『豈に坐臥に關はらんや』と結んである。是れ打坐三昧以外に、吾人の日常の左之右之、運水搬柴、其の卽處々々それになりきりて行けば、其處に禪の面目も露現し佛道も活現するのである。

吾人脚跟下、夫れ黃金の地である。佛法は吾人の兩袂の邊に明歷々たり。されば、日用の行履が卽ち佛法であるとしたならば、家庭は是れ卽ち禪の道場、社會國家は是れ卽ち佛法活潑々地すべきの道場たるべきである。斯くあるべきが禪の本來の面目である。身心一枚行解相應せば、吾人の日用光中の運作轉動は、畢竟するに正命の全提、法の說話現成である。其の存意を學せんと欲せば不惜身命に研鑽せよ。大死一番は必ず大活現成して、得人無上道卽成就佛身たらむ。眞箇の禪は修にあり、修證不二一如なること深く究參すべきである。

所と殆ど相違なきも、這箇は是れ理論究明である。那箇は是れ實踐體得である。禪の超倫理的、超哲學的と云ふも實に玆に基因する所以のものである。若し禪にして修證を缺かむか、そは世間の諸科學、又は近時流行する靜坐法等に異ならず。斯くの如きは禪とは云はれず、禪の生命は實に修證に存するのである。

しかも古聖先德は、十二時中、造次顚沛に於ても、暫くも蒲團上を去らず、兀々と打成三昧に住し、不惜身命に工夫辨道せられた。其の勝躅は以て吾人の範とすべきである。白隱禪師が、

　昔に聞えし臂切二祖は、雪に立つとや三尺餘寸、聞いて見なんせ身毛の戰慄。

と謡はれし、二祖慧可禪師は、竹の節も破裂すると云ふ酷寒の初九夜に、腰を沒する雪中に竪立不動して、終に利刀を以て左臂を切斷し、面壁三昧の達磨大師の邊に投じて、遂に大法を相續せられた。又、雪峯は『三到投子、九至洞山』の辛苦を經て、遂に家珍を打開せられた。其の他の先覺皆な喪身失命を厭はず、辨道に勇猛精進して超關脱落せられた。

然しながら世に擔板漢あり、斯く云はゞ『禪門の修養は坐禪中のみにして、平常底は如何にするも可なり』と考へるものなきにしもあらず、是は實に誤れるも甚しきものにして、禪門の修養は坐禪と平常とを分別するにあらず、平常底是れ禪と合沓して須臾も離るべからざるものである。「觸目道を得せずんば、足を運ぶも焉ぞ道を知らん」で、行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然、吾人日常の一擧手一投足に、禪三昧を活現するやう注意周到せねばならぬ。故に高祖大師も『日々の行持是れ諸佛の種子なり』と仰せら

其の微妙の處は、到底、凡情の思量分別を以て窺窬し得べきところのものではない。斯の如き言詮不及、意路不到の端的に對して、禪と云ふ名目を附するだに、已に其の本旨を誤つて居るのであるが、之れを禪と云ふは假名借辭して云うたのである。されば九峰和尚は禪を呼んで『一心の異名なり』と云はれて居る。一心とは『本來本法性、天然自性身』のことで、卽ち、人法倶に久遠劫來天然法爾として具する玲瓏玉の如き眞如である。故に、一心の顯現した處は畢竟すれば禪である、眞如である。白雪を頂く山峰も、石を嚙む溪水も、霞に笑ふ梅花も、霜を凌ぐ青松も、不垂一言、自らなる禪の脫體現成である。春は百花爛漫として、秋は千山紅葉するも、不示一字、元より眞如の露現そのまゝである。

空間的にも、時間的にも、古今東西を問はず、一切時、一切處に、自由にして徧滿、無碍にして顯現、不增減である。所謂無欠無餘、細入無間、大絕方處底にして、蓋天蓋地、一團の禪の妙相である。蘇東坡曰く『溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈に淸淨身にあらざらんや』と、山川草木、雨竹風松、悉く佛の妙音を傳へ禪の面目現前である。

しかも禪は上述の如く、人々分上裕かに具はれりと雖も、修せざるには現はれず證せざるには得ることなし、實參實究を經ずんば眞箇に禪を會得體現することが出來ぬ。

されば修證は是れ禪の生命である。修證を俟たざる禪ありとせば、そは野狐禪である、狸禪である。萬物の上に一貫せる大精神が宿つて居るくらゐのことは、萬有神教や汎神教、又は唯心論の立場からも說く

修證は一如なり

雪裡の梅花漸く蕾を破り、谿谷の鶯兒初めて法華經を囀り、將に春色沙界に徧からんとする如月。憶ひ起す三千年の昔、恆河の畔、沙羅雙樹の間に於て、横說竪說、四十九年の活說法に有緣の衆生の度すべきものは已に度し終つて、未だ度せざるものにはまた皆な度すべき因緣を示し、更らに『自今已後我が諸の弟子展轉して之れを行せば、卽ち是れ如來の法常に在まして而かも滅せざるなり』と大教訓を垂れ給ひ『常に當に一心に勤めて出道を求むべし』と最後の御教誨を殘されて、諸弟子の悲泣嗚咽の間に涅槃の雲に隱れさせ給へり。時恰も二月十五日、萬籟寂として聲なき中夜なりき。

是れより幾度か花咲き、花散りて今日に至る。星辰は推移するとも、而かも佛陀の慈訓は遠く萬代に傳はりて、不易なること恆河の水の滔々として止まざるが如く、流れて今日に至る。我等法乳の兒孫茲に其の聖日に遭ふ、更に報恩の一着を打せんと欲するのである。

禪は三學、六度、四威儀の中にある定、禪、坐の如き部分的のものに非ずして、其の包括的のものである。この包括的の禪とは、吾人各自が本來具有して居る佛性、卽ち如來最上乘の禪を指すのであるが、

楠公の如き偉人でも、嘗つて南都に赴く途次、片岡と云ふ處にて一禪者に逢ひ、疑ふ所を質し更に進前して問うて云く「猶ほ密旨ありやなきや麼」と、僧曰く「公の名は如何」答へて云く「楠多門兵衛正成」と、僧「正成」と呼ぶ、某甲應諾す、僧曰く「這裏是れ什麼の所在ぞ」某甲、是に於て心中豁然として省悟す。其の後、常に此の僧に請ひ數々鉗鎚を蒙る。或時、某甲問うて云く「道を以て軍に勝つ如何」と、僧曰く「至善を兵となす」と、某甲服膺して怠れず、此の僧故里に歸り、幾ならずして入寂す。某甲道を聞ふ僅かに八ケ月餘、只勝緣淺かりしを恨む。然りと雖も、斯道を會得して以來「兵を用ふる自在、機に對して無礙なり」と、之れ楠公が親しく禪師に語る處である。師曰く「善哉、多年作家の爐鞴に入らずんば焉ぞ今日の事あらん」と。然り、永年の定力凝つて徹底の大悟が得られたのである。何ぞ口頭禪を以て此の境界を得ることが出來やう。必らずや、千軍萬馬の裡に於ても、君を思ひ國を顧みながらも、其の乾坤一擲の大業を成就する原動力を養ふ爲めに、面壁打坐の修行をせられたことであらう。

要するに禪は論ずべきものにあらずして參ずべきである。一歩進めて云へば、參ずるよりも坐すべきである。看よ、人生の大海原は朝に清波の靜かなるかと思へば夕に怒濤の躍るあり、昨日は順風帆檣に滿つると思へば今日は逆風舷頭を撲む、我れを苦しむる者あれば我れを樂むる者あり、賞する者あり、罵る者あり、千變萬化の浮世中に、八風吹けども動ぜず如須彌山と坐り込む。修養は、日一日と浮薄に赴むく現代に於て、最も緊要缺くべからざることである。

と聊か奇矯に失すると雖も、初心は此の覺悟の面壁でなければならぬ。斯の如き只管打坐でなければ、默照だ鍋蓋だと惡評されても致し方なき次第である。

此の面壁打坐の境界は、移して以て日用光中の運作轉倒の上にあらしめば、歩々如々不動の地を離れざることが出來る。眼は色の爲めに轉ぜられず、耳は聲の爲めに役せられず、鼻は香の爲めに瞞ぜられず、舌は味いの爲めに惑されず、身は觸の爲めに縛せられず、意は法の爲めに亂されず、盡日說いて口に咎なく、千里を行きて足に過ちなく、色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ、味を嘗め、身に觸れ、意に緣ずるの處、無罣礙不染汚にして、月の空に遊ぶが如く玉の盤に走るにも似たり。是れ只管打坐の妙用である。起つて活動をなすは坐つて休養せし結果である。百萬の軍勢が山野に激戰をなすも、謀は帷幄に廻らさるゝなり『靜なること林の如く疾きこと風の如し』とは楠多門兵衞正成の旗印にあらずや。

建武丙子の三年五月十二日、帝城を發せし楠正成公、湊川に着して軍旅を醫王山の麓に屯す。一日、明極楚俊禪師に參見して、問うて云く『生死交謝の時如何』、師曰く『兩頭倶に截斷して一劍天に倚つて寒し』、正成云く『落處作麼生』、師震威して一喝す、正成起立三拜し通身汗流る。一劍天に倚つて寒き處は面壁打坐の本體である。大喝一聲は只管打坐の活躍である。蓋世の英雄、忠臣の儀表たる公の安心は之れに依つて得られたのである。這裏、生を求めず何ぞ死を恐れん。打成一片の境界である。此の境界は一朝一夕で得らるべきでない。

水の不羈を慕うて、禪とは斯くの如く一風變つたものと速了して、似て非なる狂態を演ずるを得意とする者もあるやうだが、未だ眞個に只管打坐の妙味を解せぬ鵜の眞似をなす烏だ。

魯祖山の寶雲禪師は馬祖大師の法嗣である。凡そ僧の來るを見れば便ち面壁す。面壁打坐、實に懇篤なる接得であるが、多くの無眼子輩には要領を得ぬ。南泉山の普願禪師是れを聞いて云く『我れ尋常他に向つて、空劫以前に承當せよ、佛未だ出世せざる時に會取せよと、道ふすら尚ほ一箇半箇を得ず、他恁麼ならば驢年に去らん』と、大に貶斥せられたやうだが、元是れ同穴の野狐、句抑下の意卓上である。空劫以前は陰陽未分、一機未發の處、佛未だ世に出ざる時、卽ち迷悟凡聖の音沙汰はない。閻浮八萬四千歲、干戈を動ぜず泰平を致しつゝ本來の面目に承當せよ。會取せよと云ふも半箇一箇を得ず、然るに、佛向上非佛の端的を呈露して面壁打坐して居ては、十二支中になき驢の年が來ても學人を接得することが出來まいと、例の毒舌を弄して居らるゝが、之れ南泉が諸人の爲めに一線路を通ずるの手段に外ならぬ。

　闇の夜に鳴かぬ烏の聲きけば生れぬ先の父ぞ戀しき

戀しき父に相見し得るのは只此の面壁打坐にある。此の打坐もボンヤリ坐つて居ればよいのではない。鈴木正三老人が云へる如く、

洒落佛法、ぬけがら坐禪は何の用にもなるまじきぞ、眼をすへ齒をかみしめ血眼になりて、むらがる敵の中に跳り込み、敵の鋒先に突立る覺悟を以て修行せよ

吾參玄の士が須臾も離るべきものでない。然り離るべきは道に非らず。

趙州老漢の平常心是れ道と示せる其の道の全體が只管打坐である。一寸坐れば一寸の佛である。五分でも十分でも、半時間でも一時間でも、電車の中でも汽車の裡でも、机の前でも窓の下でも、氣を丹田に回らし目を半眼に開き、脊梁骨を竪立し兩唇皮を閉却し、足を組み手を組み、呼吸を調へてドッシリと坐り込むがよい。煩悶起らば起れ、睡眠來らば來れ、昏沈も、散亂も、少しも恐れずに驀然として金剛不動の地に坐り込むこと日を重ね月を重ねる中には、知識も、道德も、決斷も、覺悟も、忍耐も、慈悲も、皆是の靜坐の源泉より流れ出で、忽然として桶底を脫するの機が來るのである。

承陽大師は正法眼藏三昧王三昧の卷に

驀然として盡界を超越して佛祖の屋裏に大尊貴生なるは結跏趺坐なり、外道魔黨の頂𩕳を踏翻し、佛祖の堂奧に箇中人なることは結跏趺坐なり、佛祖の極之極を超越するはたゞこの一法なり

と示されてある。結跏趺坐は右の足を以て左の腿の上に安じ、左の足を以て右の腿の上に安ずるのであるが、或は左の足を以て右の腿を壓すのみの半跏趺坐でも、婦人方は日本式の平坐でもよい。身を調へ、息を調へ、心を調へて、僅かに每朝衆人より一時間早く起きて坐つても、每夜衆人より一時間遲く寢て坐つても、必らずや、無所得の所得があることは受合である。

禪と云へば、或は大聲に喝散し、或は棒頭を振廻し、丹霞の燒佛、南泉の斬猫、一休の洒落を學び、桃

禪は、其の字義から云へば、梵語の禪那を略せしものにて漢譯して靜慮と謂ふ。惜しい慾しい憎い愛いの妄想より是非善惡の觀念など色々の慮を靜むるのであるが、單に靜慮の意味ならば、神道では靜心と云へると同じ、孔子は大學の中に『大學の道は明德を明かにするにあり民を新にするにあり至善に止まるにあり、止るを知つて定まり、定つて後に慮る』と說き、宋儒は盛んに靜坐を行つて居る。西洋諸國にも亦た類似した方法があるやうである。印度の波羅門は釋尊出世以前より習禪をやつて居た。故に外道禪・凡夫禪・小乘禪・大乘禪などの名目もあるが、今云ふ禪は斯樣な修し習うたり、悟を待つ樣なものではない。萬法歸一の巢窟も、本來無物の蹤跡をも坐斷したる、三昧王三昧の端的を我がものにしたる當體を云ふのである、と文句を併べればむつかしくなるが、要するに有の儘の一念に住するので、唯是れ安樂の法門なりである。

されば四角張つた理窟は用不着なりだ。我が宗の靜慮は只管打坐にあるのである。試みに人とは何ぞやと問へば、色心の二法、即ち身體と精神の二つより成り立ち居ることは明かである。此の二つは二にして一なれば相離るべき者でない。故に、身を安んぜんと欲せば心を安んぜねばならぬと同く、心を安んずるには身を安んぜねばならぬ。打坐は即ち靜慮の當體を身に現したので、心意識の運轉を停め念想觀の測量を止めて、兀々として坐定せば作佛を圖らずと雖も自から佛である。故に、覺王世尊の如き聖人も端坐六年の蹤跡あり、達磨大師の如き偉人でも面壁九歲の傳說がある。實に打坐は佛々祖々平常の行持にして吾

月の二十四日に入滅したまへたり。實に其の孝順心の深重なることは千古に卓絶すと謂ふべし。故に、常濟大師は師の大徳を稱揚して、『夫れ法を重んずること師の操行の如く、徳を弘むること師の眞風の如くならば、扶桑國中に眞風到らざる所なく、天下偏く永平の宗風に靡かん』云々と御示し下されてある。

又、常濟大師も、五十八年の御行持は偉大なる傳道史である。傳光錄の開示は三十三歲の時である。後に化を北陸に移されたるも、桃李言はずして下自ら蹊を成し、到る處に道俗を化導せられ、能州の山中に在りながら、皇上の勅問に答へ法を九重の雲上に敷きたまひ、御入滅の時の如きは、夜半に鐘を鳴らして大衆を方丈に集め、衣を整へ座に登り『念起是れ病、續がざる是れ藥、一切の善惡都て思量すること莫れ、纔に思量に渉らば白雲萬里』といふ垂誡を下されて、溘然坐化せられました。

元來、佛祖行持の目的は、衆生濟度の外には無いのである。而して、古の佛祖は平常心是れ道であられるに依て、其の一代の行狀は全然說法であるから、其の遺德餘馨は普く十方に輝き、遠く千載を覆うて居るのである。

只管打坐

承陽大師の如きは「一愚なる我れは佛にならずとも衆生を度す僧の身たらん」、『草の庵にねてもさめても願ふことと我れよりさきに人を度さん」と詠ぜられ、京都西洞院なる俗弟子覺念の家に於て寂を示さるゝまで、一時一刻も度生の佛事を休せられなんだのである。

永平二祖孤雲禪師の如きは、其の一代の行業が全く其の儘の活轉法輪であつた。承陽大師に參隨すること二十年、其の間、影の形に從ふが如く暫くも相離れず、唯だ療病の爲め師顏に向はざりしこと僅かに十日のみなりしといふ。曾て深草に修行の時「一月開度、一出三日」の制が定められてあつた。師の母最後の病中に見舞に往かれたるも、やはり法を守りて三日目に歸山せられた。母彌々臨終の時、縱ひ制に背くとも往きたまふべしとの衆議なりしが、師涙を流して衆に告げて曰く、「佛祖の軌範、衆儀よりも重し、正しく是れ古佛の禮法なり、悲母の人情に隨ひ古佛の垂範に背かん、頗る不孝の過何ぞ免かれんや、故如何となれば、今方に佛の制法を破らん是れ母最後の大罪なるべし、夫れ出家人としては親をして道に入らしむべきに、今一旦人情に隨ひ永劫沈淪を受けしめんや」とて、遂に制を破られなんだ。永平の法席を續がれてより十五年の間、方丈の傍に先師の影を安じ、夜間に珍重し曉天に和南して一日も怠らず、生々奉侍せんことを期し、永平を退隱の後、十五年間、祖廟の傍に在りて奉侍すること御在世と異ならず、自身の遺骨も、先師の塔の侍者の位に埋めしめて、別に塔を立てず、同寺に於て我が爲めに別に佛事を修せんことを恐れ、先師忌の佛事中の一日、回向に預らば願ひたると申されしが、本願の如く、先師と同じ

震旦の二祖慧可大師は傳法の後、敎化に努めらるゝこと三十年、或は酒肆に入り、或は屠門に過り、或は十字街頭に立ち、或は花街柳巷に赴き、隨時隨處に法を說き化を敷きたまへり、或人が、『師は道人なるに何故に斯くは輕々しく身を處せらるゝや』と問ひしに、大師は『是れ我が自ら心を調ふるのみ』と仰せられた。遂には邪師等が嫉視して害を加ふるに遇ふまで、獻身的に御敎化あそばされたのである。

四祖大醫禪師は脇席に着けざること六十年、隋の大業十三年、徒衆を率ゐて吉州に抵りたまふ。群盜蜂起して吉州城を圍むこと五旬、萬衆惶怖す。師之を愍み、城兵及び城民を敎導して摩訶般若を念ぜしめられた。時に賊衆城壁を望むに、神兵あるが如くにして犯すべからず、不思議の感を爲して『城內必ず神人あらん』とて、遂に退却したとある。七十二歲にして入滅せらるゝまで一時も敎化を休したまはず、末後に臨みても猶ほ門人に垂誡して『一切諸法悉皆解脫す、汝等各自から護念して未來を流化せよ』と宣ひ訖て坐脫せられたとある。

六祖大師は、到る處に於て縱橫無盡に禪道を鼓吹し、其の說く所、佛敎を實際的方面より開示し、最後に鄕閭に歸りて法を說き、七十六歲の御入滅まで全く敎化三昧に打せられたのである。

洞山大師は、一生綿密の宗風を擧揚して曹洞の美風を遺し、最後に於て、門人の哀泣止まざるが爲め、一旦寂を示して後、更に蘇生して愚痴齋を設け、晝夜、生死の問題、安心の基本を垂示せられしが如きは、到底凡情を以て測るべからざる慈悲神通である。

併し、古聖先徳は此の節儉の中に於て、絶大の興味を有せられた。承陽大師上堂に曰く『(前略)箇箇絶境好辨道所在也、但恨主人元少ニ相待一、雖ニ然如一レ是、溪乃朝聲夜聲分落ニ便宜于遠水一、山又春色秋色分得ニ便宜于嶽半一、且希安水以レ道爲レ念』と、芙蓉楷祖の祇園正儀に曰く『(前略)況活計具足風景不レ疎、華解レ笑鳥解レ啼、木馬長鳴石牛善走、天外之青山寡レ色耳邊之鳴泉无レ聲』云々と、此等は七珍萬寶を以ても買ひ難き無限の快樂である。吾人は生々世々を期して是の如きの美蹟を模倣したきものである。

利生の願行

釋尊は御在世八十年、未だ一日も大道を弘通するの行持を廢したまはず、入涅槃の時に臨みても、娑羅双樹の下に於て大涅槃經を說きたまひ、愈々御臨終の刹那には遺教經を說き給へり。その御勇氣は實に法孫の忘るべからざる鑑である。

達磨大師は、百有餘歳の老軀を提げて遠く震旦に來り「吾本來ニ此土一、傳レ法救ニ迷情一、一華開ニ五葉一、結果自然成」の偈を以て其の本懐を述べ、「直指人心、見性成佛」を以て其の宗風を御示し下された。洵に佛道の大聖として景仰し奉るべきものである。

開き粟を種え、水を引き蔬に灌ぎ、夜間は香燈を供へ、掃地に努められたとある。

芙蓉楷祖は、大衆と議定して更に山を下らず、齋に赴がず化主を發せず、年貢米を三百六十分に分ち、日に一分を取て之を用ゆ。故に一日の食は僅かに粥一盂なり、粥と作して足らざる時は、只だ米湯のみを用ゐられたとある。楊岐禪師は始め住山の時、老屋敗椽、風雨に侵され雪霰牀に滿つ、衆之を苦み修造せんことを請ひしに、師は衆を誡めて曰く『往古の聖賢多くは樹下露地に經行す、汝等做手倘ほ未だ穩かならず、何の暇あつてか豐屋を事とせん』とて、『楊岐乍住屋壁疎、滿牀盡撒雪珍珠、縮二却項頸一暗嗟噓、翻憶古人樹下居』といへる偈を示されたとある。

天童如淨禪師は、君主の賜ひし紫衣師號を表辭するのみならず、一生まだらなる袈裟を搭けず、上堂入室、皆な黑き袈裟と直綴を用ゐられたり。承陽大師も淨祖の古風を慕ひたまひ、黑衣操行の沙門として生涯を盡されたり。玄明首座が北條時賴公より寺領を受けたる時、大師は直ちに山門を放逐し、名利の魔障に道場を穢されたりとて、彼の住せし床下三尺の土を取て捨てたまはれた。淨因の道臻禪師は戸を出でざること三十年、一布裙二十年の間易へられなんだ。

悟由禪師は二十三歳の時より節食を誓ひ、行鉢には再審せず、普通は飯二椀を超えず、一片の紙と雖も必ず自ら之を重んじ、椀鉢淨巾は必ず自ら之を洗淨せられ、食膳に對しては未だ一語の是非をも口にしたまはざりき。如禪和尚は、道中自製の甞め味噌を携へて、是を唯一の菜蔬とせられました。

せられたきものである。

質素の家風

質素は美德なり、質素なるものは欲を寡くし侈りに遠ざかり、謙讓自ら愼しみ能く堅忍の德を成すものである。

釋尊は專ら山林に行持し、王宮に還らず、國利を領せず、三衣一鉢に安んじ、淨衣乞食を佛儀としたまへり。迦葉尊者は、日中に一食し、樹下に一宿し、常に十二頭陀を行じたまへり。趙州禪師は四十年の間世財を貯へず、常住に米穀なく、或は栗子・椎子を拾うて食物に充られた。

藥山禪師は常に大布を以て衣と爲し、自ら其の鞋を織り自ら其の食を具ふ。門人數百、童侍甚だ多しと雖も、未だ嘗て其の力を用ひず、珍羞百品、鮮菓駢羅すと雖も、未だ嘗て其の食を易へられなんだ。大潙禪師は潙山に住するに當り、堂宇なく常住なく、鳥獸伍を爲し橡栗を食に充てられき。

雪峰禪師は行脚の時、一把の杓頭を買ひ一條の手巾を縮ね、到る處行乞して堂頭の飯を喫せず、後日自ら『一千五百の布衲子は老僧の杓頭より酌み來る』と仰せられにき。其の嗣の玄沙禪師は、日中は田を

まへり、澆季の山僧其の德乏しきを以て、大枚二步の淨財を投ず、若し此の財を輕視するが如き思想ならば、もはや造立に及ばず」と、衆、此の語を聞て大に感奮し、遂に四方に募緣して一宇を建立せり。今の迦葉院は卽ち是れである。同院に傳ふる開山傳承物の中に一足の足袋がある。卽ち、和尙は生涯此の一足にて間に合せたりといふ。洵に稀有の行持と謂ふべきである。

奕堂禪師や楳仙禪師は、大本山貫首の御身を以て、戒會御親化の際には戒弟の飯臺にも出て、飯臺の行香までもせられた。悟由禪師の如きは、八十二歲の御遷化まで、三時の勤行と晝夜の打坐と讀書とは一日も御休みはなされなんだ。總持寺貫首素童禪師も、戒會御親化の際は戒弟飯臺にまで臨ませられた。星見天海老師は、祖山へ上山の際は、必ず黑衣を被し草鞋を穿ち、常に徒步にて上山せられ、未だ曾て人力などには乘られなんだ。是等は實に活きたる敎訓である。福山默童老師は、每朝、極寒の時と雖も水浴を缺きたまはず、日置默仙禪師などは老齡を以てして、尙ほ東敎西化席暖かなるに暇あらず、戶澤春堂老師は間あれば自ら庭內の草を取り箒を使はれた。

其の他、押野太壽老師や長谷川天顯老師等は、老體の身を以て日夜雲水と伍せられ、永平寺の淸担覺和尙は一生を期して祖廟に侍せんと誓ひ、栗谷維那は死しても猶ほ祖山に在ることを期された、是の如き有り難き道人もまた少なしとせず。

吾人は全く是れ佛祖の暖皮肉なりと觀じ、崇敬措く能はず、願くば世出世ともに此の不退の行持を操守

寶供養の粥飯を調ふべき典座の大任を命ぜらる。實に是れ無上の幸福なり。唯恐くは、忠實に其の職を全うすること能はざるを。依て任命の其の日より、庫院の流し下に願袋を張りて、流れ落る一切の物を袋に受け、毎夜、大衆就寢の後、袋を開いて塵砂瓦屑等を除き、菜片米粒等は、總て纏めて此の鍋中に容れ、多少の殘飯を添へ、加ふるに生鹽を以てし、毎朝之を煮て喫すること一日一回のみ。最初は甚だ喫し難かりしも、佛天の冥加に依りて、今は其の美味なること天食の如し。而して、之を喫し始めてより身力健固にして病魔に侵さるること無し、是れ亦た師恩の致す所、感謝言ふ所を知らず」といひまして、サメ〴〵と泣れました。禪師も亦た感歎の餘り落涙せられ、それより眞直に僧堂に臨み、此の因縁を一大公案として大衆を說得せられました。

　其の後、和尚は隨徒を率て行化し、今の御藥院の地に來りし時、日暮たるも大勢を引率せしことゆゑ、松林の間に野宿せられた。曉天、林中に於て坐禪して居るうち天明に至れるに、淡烟林を籠め旭影松に映する光景、得も言はれぬ麗しさに、覺えず「此の地宜く梵刹を建つべし」といはれた。衆皆な之を賛せしかば、和尚大に喜び、「我れ爲めに造寺の資を出さん」とて、袈裟文庫中より金二步を出して衆の前に置かれた。衆相顧みて「一寺を造立するに僅かに二步の基本、有れども無きが如し」と、和尚叱して曰く、「昔しは釋尊衆と行く次で、地を指さして曰く「此の處宜しく梵刹を建つべし」、帝釋、一莖草を地上に挿て曰く「梵刹を建つること既に了れり」世尊は微笑せられたり、釋尊の偉德は能く寸草を以て梵刹を建立した

は實に修養に志す者の良警策である。承陽大師は五十四年綿密の行持を無間斷に打せられて、第一天を照したまひ、天童安居の時の如きは晝夜睡らずして坐禪せられしこと、天童淨祖之を絶賞したまへり、常濟大師も亦た徹通禪師に參侍の折、前後六年脇席に着けずして勤修したまへり。

武州（北葛飾郡櫻井村に在り麻蒔舌溪老師住山地たりし）迦葉院開山默山元轟和尚は奥州の人なり。初め江戸駒込の學寮に入りしが、道友の勸めに依りて、錫を下總國山王村東昌寺、隱之禪師（卍山禪師の嗣）の會下に掛け、辨道六年、遂に大事を了畢し禪師に嗣法せり。一旦行脚の後、歸單せしに、禪師は其の道心の純一なるを見て、典座の職を命ぜられた。半歳餘を經て、誰れ言ふとなく、『默山典座は別菜を作りて、私に食して居る怪しからぬことなり』との評判が立つた。禪師は聞て太だ之を怪み、其の實際を點檢せんが爲め、或朝、不快なりとて坐堂を閑却せられ、潛かに警策を袖にして典座寮に行かれた。寮内の爐には焚落しを入れ、上に土鍋が懸けてあり、和尚は其の傍らに端坐して居る。禪師は突然戸を開けて、和尚の面前に立たれた。和尚は更に驚く色なく、師の御氣分を問はれると、禪師は『風邪の氣味にて寒氣を催し殆ど堪え難く覺ゆ、鍋中の物頗る暖かく思はる、試みに之を喫せんか』と言はれると、和尚は『是れは自分の食料なり、恐くは師之を喫したまふこと能はじ』禪師色を作して強て之を求め、僅かに口中に入るれば、其の味たる、澁きが如く、苦きが如く、汚臭鼻を撲ちて呑吐不下なりき。禪師曰く『不味甚し、是れ將た何の物料ぞや』、和尚、時に双眼に涙を浮べ、やゝ良久して曰く、『某甲、修行生疎にして三

師より『勸レ君莫レ歸レ郷、歸レ郷道不レ行、並舍老婆子、說二汝舊時名一』の一偈を受けられ、之を守りて一生郷里の土を踏まれなんだ。是れ不退の一志堅固なるに依るなり。

雲巖禪師は脇席に着けざること四十年、洞山大師は「我れ打成一片ならんと欲して坐禪辨道已に二十年」と仰せられた。

百丈大智禪師は、百丈山に住して數百人の隨徒を有し、年既に八十を超ゆるも、普請作務の時には、壯齡の者と共に之を勸む。侍者は餘りに御痛しく感じ、一日、作務の道具をかくして師に與へざりし、師は其の日一日食を廢されて「一日不作一日不レ食」一日でも作すべき事を爲さゞれば、勿體なうて、御飯が喉に通らぬぞとの意味であります。

趙州禪師は六十一歲にして行脚の途に上り、八十餘にして趙州城の觀音院に住し、坐禪接衆四十年、「一生不レ離二叢林一」の誓ひありき。南嶽の懷讓禪師は曹谿に執侍せらるゝこと十五年、雪峯禪師は三たび投子に到り九たび洞山に上り、漆桶を坐破すること十八枚とある。

承陽大師、天童山に安居して、一日、極暑の時、佛殿の前を過ぎ、本府用典座といふ一老僧の、片笠を被らず竹杖を携へ、弓の如き背骨の身を以て、唯獨り頻りに作務するのを見て、「師は是れ一山の重役たり、何故に部下の少壯者に命ぜざる」といはれしに、彼は『他不二是吾一』と答へぬ。大師は更に「今は餘りに酷暑なり、他に於て作されては」といはれしに、彼は『更待二何時一』と答へられしといふ。此の二言

の一族なり、須らく仔細に心地を明辨して低細に用心し、一毫髪の名利の思なく一微塵の憍慢の心なくして、親く心術を定め細やかに身儀を調へて、到るべきに到り究むべきを究めて、一生參學の事を辨じ曩祖囑累の事を忘るゝことなくして、歩を先聖に繼ぎ眸を古佛に交へて、設ひ末世澆運なりと雖も市中に虎を見る分あるべし」と御示し下されてある。

近世にても、奕堂禪師が大本山總持寺の獨住一世に任ぜられし時、非常に御機嫌惡く、容易に御請にならざりしといふ。又、悟由禪師が大本山永平寺の後董に御當選の時も、固く辭退せられ、福山默童老師等が泣て懇請せられたので、餘儀なく御請なされしことは皆人の知る所である。

不退の行持

達磨大師は其の師般若多羅尊者に侍して、參學すること四十年、後、天竺に在りて傳道に從事すること六十餘歳の後、遙に支那に來りて面壁九年の行持を行取せられ、入滅に至るまで、一日も休息したまふことは無かつたのである。

江西の馬祖大師は修行二十年、老に至りても、普請作務の處には自ら先きに赴かれたり。其の師南嶽禪

ぜられ、第四回目の勅使を差遣せられし時、『若し果して應ぜずんば首を取り來れ』と仰せられた。勅使、山に入りて旨を諭されしに、師は頸を伸べて『さあ御斬りなされ』というて神色儼然たり。帝、益々感歎して、爲めに珍衛を賜うて其の志を遂げしめられました。

大梅山の法常禪師は、馬祖大師より卽心卽佛の一語を承けて大安心を得、艸菴を大梅山中に結び、端坐すること三十餘年、馬祖の召喚に遇ひて『摧殘枯木倚二寒林一、幾度逢レ春不レ變レ心、樵客遇レ之猶不レ顧、郢人那得二苦追尋一』の一偈を呈して之を辭し、更に深山に居を移して『一池荷葉衣無レ盡、數樹松華食有レ餘、剛被二世人知二住處一、更移二茅舍一入二深居一』の一偈を打せられた。

芙蓉道楷禪師は、國主より禪師號並に紫衣を賜ふに、受けたまはず、國主の咎めありしかども、遂に固辭せられて、盛んに祇園の正儀を擧揚せられました。

永陽大師は四十歳の時、京洛の塵を避けて蹤を越前の深山に晦まし、後嵯峨上皇より、特に勅使を遣はして紫衣を賜はりしも、固く辭して受けたまはず、勅使三度に及び、天恩の渥きに感じ、『永平雖二谷淺一、勅命重重重、却被二猿鶴笑一、紫衣一老翁』の一偈を呈して御受けにはなりしが、之を高閣に藏めて一生着せず、依然、黑衣を以て生涯を了せられた。

常濟大師も亦た晩年に至るほど北陬の地に錫を移され、後醍醐天皇の御歸依最と深かりしも、遂に京洛の地を踏ませられなんだ。故に佛光錄に於て『諸余學人、忝なく芙蓉楷禪師の遠孫として既に永平門下

永平二祖懷弉禪師は十八歳にして出家し、廣く性相及び天台の止觀を研究せられしが、後に、或時、母の處に歸省せしに、母は禪師を諭して『我れ汝を出家せしめたるは、上綱の位に補して榮譽を得せしめんが爲めではない、何時までも黑衣の非人として、背後に笠を掛け、往來唯かちより行けと思ふのみぞ』といはれしを聞き、斷然、念を名利に絕ちて、專ら大法を求められました。

出塵の志操

大道を欣求し德行を勤修する時は、自然に名聲をも得、福樂をも得らるゝものである。神聖なる名譽と至善なる福利とは修道の所產である。然るに、凡情に縛繫せらるゝ者は、至誠を以て道を行ふことを知らず、唯だ名利をのみ惟れ求めんとす。是れ猶は眼を掩うて物を見んとするに似たり。故に高祖大師は『名利は一頭の大賊なり』と御誡め下されてある。名利の外に超然として唯だ道惟れ樂む、是を出塵の志操といふ。

震旦の四祖大醫禪師、貞觀癸卯の歳、唐の太宗皇帝その德風を景慕して、詔して御召しになりしが、師は上表して辭退せられた。前後三回の勅命ありしも亦た皆な辭退せられた。帝は少しく御機嫌を損

「汝、終夜雪中に立つ、そも何を求むるや」、師曰く「唯だ願くは、和尚慈悲、甘露門を開て廣く群品を度したまへ」、大師曰く「諸佛無上の妙道は曠劫精勤して、行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍ぶ、豈に小徳小智輕心慢心を以て眞乘を冀はんや」師、是に於て益々求道の念止み難く、遂に左の肘を斷ちて大師の面前に呈出した。大師之を見て始て入室を許されたとある。

四祖大醫禪師は、十四歳の時三祖の門下に投じて、勤勞九載なり。傳法の後に至るも脇席に至らざること六十年とある。

六祖大師は新州の樵夫にてありしが、十字街頭に端なく金剛經を誦するを聞き「應無所住而生其心」の一句を聞取するに及んで、豁然として心開け、後、黄梅山に上り、大滿禪師の會下に於て米を碓房に舂くこと八箇月、此の間暫時も工夫を怠ること無く、遂に五祖の衣鉢を稟傳したまうた。承陽大師は六祖の行持を示して「黄梅の會に投じて八箇月、ねぶらずやすまず晝夜に米をつく、夜半に衣鉢を正傳す、得法以後なほ石臼をおひありきて米をつくこと八年なり、出世度人說法するにもこの石臼をさしおかず希世の行持なり」と仰せられてある。

承陽大師は藤胄の家に生れたまひしも、八歳の時悲母に別れ、香の烟を見て無常の理を觀じ、十三歳の春、潜に家を遁れて比叡の山麓に走り、竟に出家を遂げ、修行十年猶ほ未だ安んぜず、二十四歳の時、遠く大法を震旦に求められた。

り』、神通といふも、光明といふも、決して心を離れて外には無い。但だ其の訓練にして宜しきを得ざる時は、一心の妙徳を發揚することが出來ぬ。若し心の動機にして正當なる規道に依らざる時は、煩惱を生じ邪見を增長し罪惡をも造り出すに至る。明治天皇の御製に『ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ敎へがたきは人の道なり』と御諭しのあるのは此の意である。發心正しからざれば萬行虚しく施す。此の發心の正しきを得るのが精神修養の根本基礎である。

古徳の發心求法

西天第十祖婆栗濕縛尊者は年八十にして出家せられた。人其の老耄爲す無きを嘲りしが、尊者は毫も意に介せず、自ら『我れ若し三藏を學通し三明を得ることなくんば、誓て脇を席に着けじ』と誓ひ、晝は參學誦經し、夜は安禪思惟して、かつて横臥せらるゝこと無く、三年にして遂に一大事を開悟せられました。

震旦の二祖大師は、達磨大師の禪室を嵩山の少林寺に扣かれし時、大師は入室を許したまはぬ。時に大通二年の十二月九日の夜、寒風肌を裂き降雪膝を沒する庭前に立て居られた。大師は天明に至りて漸く

發心正しからざれば萬行虚しく施す

此の世の中は、貴賤・貧富・苦樂・種々樣々で無限に複雜性を以て居る。此の間に處する吾々は一身に無數の資格を有て居る。中には、私は無資格でありますといふ人があるが、法規や約束に依て認めらる資格が無いにしても、一般的に有して居る資格は實に極り無いものである。

親に對しては子といふ資格がある。子に對しては親といふ資格がある。大君に對しては臣民、妻に對しては夫、兄に對しては弟、妹に對しては姉、朋友として、同郷者として、町村民として、郡縣民として、國民として、社會の一員として、世界人類の一數として、皆なそれぞれの資格がある。是の如く數へ來りなば、此の一身上に有する資格は幾百千萬なるやを知らぬ。而して、一々の資格には必ず皆なそれぞれの義務が附隨して居る。是の如く多くの資格を有し多くの義務を負うて居つて、複雜窮り無き此の世に在りて圓滿なる生涯を送るといふことは、決して容易なことでない。

併し、吾々には一種不可思議なる大機大用を有する心がある。此の心を充分に開發し訓練する時は、能く萬變に處し萬境に當りて應用無礙なるものである。「心にも及ばぬものは何かあると心に問へば心なりけ

禪榻茶話篇

男女相依て人類の世界を創造す其の間毫も尊卑の論あるべからず、されど男女各其の特能あり之を啓發して相和し相扶け以て人生を莊嚴せざるべからず、殊に家政を整理し子弟を養育するは勿論、凡そ人生の和樂は婦德に待つもの最も大なり、故に婦人は常に溫和の德を修め優美の情を養ひ、愛の權化として起居に平和の天地を發展し且つ諸德の中心として和合恭敬慈愛忍耐信念の五德を涵養するこそ大切なれ、宜しく氣質を和らげ言葉を愼しみ邪推と愚痴と嫉妬とを制し、謙遜を守りて下々に對するにも傲慢の振舞なく、萬事に親切にして人に接するに眞情を以てし、雅量を存して忿怒を戒しめ意志を剛健にして勤勉を樂しみ面に喜色を帶び言葉に愛情を含み、神明を敬まひ佛陀を奉じ忠孝を重んじ祖先を崇め、心靈の實在と因果の原則とを確信し、佛陀の大誓願と大慈悲とに感激して報恩の誠を竭さんことを期すべし、殊更日進月歩の世に處しては文化の進運に鑑みて智識技能の向上に努め、長上に敬順し子女を敎養し、一切の功德を回らして君國の鴻恩に報謝し奉らんと願ふべし、是れ實に安穩快樂の源泉にして、また正に自覺々他の大行にこそありけれ。」

ひ、實能く僞に勝つ時は、樂み窮まり無し、唯此の三勝を以て智仁勇の三德を圓成すべく眞善美の三諦を莊嚴すべし。

佛教擁護の仁者

羽前羽後地方は、人氣も朴直にして佛教の信仰も比較的深きことなるが、居士・大姉が地方僧衆と伍して、率先、佛教主義を鼓吹して國民道德の向上に精進せらるゝは、如何にも欣喜に堪へざる所である、就中、山形縣飽海郡酒田町には、藤塚熊太郎氏・佐藤清治氏の如き、飽海佛教會の中堅になつて間斷なく教化宣傳に努められ、同郡松嶺町報恩婦人會の如きも、筒井蘭芳女史常に第一線に立て各處に於て講演して居らるゝが、藤塚・佐藤兩君の囑に依り書したる修養訓二則あり。

修養訓

誠實なれ勤勉なれ快活なれ親切なれ、而して常に品性を高うし秩序を守り責任を重んじ勤勞を樂み、能く忍び能く愼しみ堅く忠孝の道を勵み能く敬し能く信じて篤く神佛の教へを奉じ、時代の趨勢に順應して智德の向上に努め、溫和の中に剛健の志氣を養ひ謙讓の間に獨立の精神を練り、質素にして其の分を盡し恭儉にして其の業にいそしむべし、成功の寶は必ず勤儉の山に產し幸福の花は自づから和敬の園に開く。

日本國民は飽までも其の獨自の美點と長處とを失墜せずして、歐米の長處を採用し、以て完全なる新日本の建設に努力せられんことを切望して止まず。といふ意味の熱心なる講演であつた。

氏は明治二年、帝大の前身たる南校の教授として來り、科學の教育に力を致すこと五年、又、越前松平春嶽公の招聘に應じ藩校に教授たりしこともありて、其の功績少なからず、依て今回は勳三等に叙せられた。米人中最も優れたる親日論者で、日本紹介者として殊功ある人格者である。

報恩行

東京神田東龍閑町、三勝堂商野樹吉氏は、二十二年前、單身郷里越後北蒲原を出でゝ上京し、霜辛螢苦奮勵努力し、神田にインキ材料商を營みてより昨年（大正十五年）九月一日が創立二十週年に當るを以て、該記念として六曲金屏風を製し、恩人たる横濱市インキ製造業諸星千代吉氏、外二氏に各一雙づゝを贈呈して報恩の忱を表せられた。諸星氏は此の奇特なる行爲に感じ、將來を祝福する爲め家道訓を賦りたしとて、予に之を囑せらる。依て左の諷語を叙して需めに應じぬ。

家道の隆興は忠孝を本と爲す、永遠の安樂は信念惟れ基、恩を知り德に報ゆれば萬善自ら備はり、身を修め節を守れば萬福必ず臻る、勤能く怠に勝つ時は事遂に成り、義能く欲に勝つ時は行ない道に合

ウイリアム、エリオツト、グリフイス氏が、昭和二年六月十一日に歸米するといふので、八日の夕、東京中央放送局より『なつかしき日本を去るに臨んで』といふ題にてラヂオ講演をせられた。其の講演の要旨は、我が北米合衆國の使節ペルリが來朝してより僅に半世紀なるに、封建の制も流血の慘を見ること無くして文明的施設を成就し、今や世界の最强國として威を中外に振ふに至れり。是れ偏へに英邁なる明治大帝の御威德と、賢臣及國民の愛國の至誠とに依るものたるや論なし。而して、是の如きは日本國家の中心に拔くべからざる一大信念と精神文明の偉大なる實力ありしに依るものたるや明々白々なり。

米國民は、世界の平和と人類の幸福とを希望して止まざるものであるが、政治的には、時に國民の意志に副はざるものあるを見る。近くは日本國民の意向に反し、ペルリ來朝當時の意志にも反する排日的法律案の通過を見たるが如きは遺憾の極みである。

我が親愛なる日本國民諸君は、益々日本獨特の文化と國民性とを發揮して、穩健なる模範的發展を遂られたし。歐米諸國の文化と雖も、決して完全とのみいふべからず。故に、歐米の文化を採用せらるゝにも、十分選擇を誤まらず、日本固有の美風良俗を損傷せざらんことを望む。

近頃、日本婦人にして世界に誇るべき綠の黑髮を斬り、得々として銀座街頭を徜徉せらるゝを見て、余は甚しき失望を感じたりき。玉石倶に模倣し美醜倶に模擬するが如きは、決して賢明の措置といふべからず。

自覚より出たる節倹は麗はし

高知縣香美郡佐古村の處女會は、約六十名より成立て居るが、昨春、修養會の席上にて二三の會員より自發的に『向後、此の會員が結婚する時は、一生に一度より手を通すことの無い絹布の紋服を製するは、甚だ不經濟であるから、之を廢して一切を綿服とし、兩親等の負擔を輕くしよう』といふ提議ありしに、一同之に賛成し、父兄等も承認し、村長や小學校長等は大に之を賞賛し、結婚する處女には金十圓を贈ることゝした。綿服は全部で十五圓を要するに依り、結婚當日の服裝として父兄の負擔は僅かに五圓となり、昨年中に八名の結婚者が之を實行し、本年(昭和二年)三月からは、他村へ嫁ぐ女子も此の服を用ゐ、他村より嫁入する場合も綿服結婚に依り、若し之に違犯する者あれば、除名處分を行ふことになりしとぞ。自覺より出でたる節約は麗はしきものである。

一般の女子、必ずしも美服を好むには非ざれど、社會の耳目が彼をして美服を要求せしむるに至つたのであらうと思ふ。故に社會的自覺に依り無益の冗費を省く樣にせねばならぬ。

外人の同情深き忠告

明治の初年來朝して我が國の文化を輔け、一旦歸國して五十七年振りで再び來朝せし、八十四歳の米人

併し中華の名は、元來、我が日本の稱號であつて、山鹿素行は中朝事實を著はし、その自序に於て『恒に蒼海の無窮を觀る者は其の大を知らず、常に原野の無畦に居する者は其の廣を識らず、是れ久しうして狃るゝなり。豈に唯だ海野のみならんや。偶ま中華文明の土に生れて其の美を知らず、專ら外朝の經典を嗜み嘐々として其の人物を慕ふ、何ぞ其れ放心なるや』云々と記してある。

本文に至りて『皇祖高皇産靈神遂に皇孫天津彦火瓊々杵尊を立てゝ以て葦原中國の王と爲さんと欲し』と錄し、『是れ本朝を以て中國と爲すの謂なり』云々と註して置かれた。今や東西の文化は擧て我が國に鍾まり、我が國は世界の文明を綜合融會して、一大更新の旗幟を飜すべき使命を帶びて居るものと思はれる。聖上の御勅語にも『今や世局は正に會通の運に際し人文は恰も更張の期に膺る』と仰せられた。世界の文化も亦た、我が國が會通更張の任に當るべきものと思ふ。然れば我が國は、山鹿素行氏の所謂中華文明の土たるの實を擧げたきものである。

宗教に於て殊に然りと思ふ。故大隈侯は最後に東西文明の調和なる一書を公にして世に遺されたが、東洋の文化として佛教を紹介することの無かりしは、甚だ遺憾に感じたことである。

此の際、我が國の佛教家は、學者・識者の應援の下に、宗教的中華文明の國土を建設せられんことを切望する次第である。

観音大士の三十三體といへば、多く西國三十三處の靈場に安置する尊像に擬するのであるが、師は普門品に據る三十三應化身の石像を建造すべく立願せり。即ち佛身・辟支佛身・聲聞身を始め、天龍八部より執金剛神に致る三十三體なり。中には長者・居士・宰官・婆羅門もあり、童男童女もあり、夜叉、阿修羅等もある。此の像に圓通大悲の恩德を表示することは頗る困難なる事である。尊像圖様は、尾竹越堂畫伯が綿密なる研究と非常なる苦心の下に描寫中とのこと、像の上には釋清潭師の製作せられた偈文を題賛とし、書は各宗大本山法主貫首の執筆に成る。今其の中の一部を擧ぐれば、佛身の偈は「三十三慈應、初門現大雄、大雄無作力、諸界及無窮」、長者身偈は「長者推尊者、藏中積衆珍、要求財寶去、當念大悲身」、執金剛身偈は「勇猛執金剛、眼中無敵陣、大悲無畏人、現來獨奮迅」である。

東京麻布佐養世界社々主、菅原洞禪師は大に此の擧を隨喜し、藤田師の依囑を承け、東京に在りて專ら事務の衝に當れり。遠からず落成を見ることとならんが、成功の上は世に珍らしき靈場として、永く東北の一大勝境となるであらう。(昭和二年)

中華文明の士

支那は革命後中華民國と稱して居る。尤も、支那漢代より自ら中國と稱し、外邊を東夷西戎南蠻北狄というて輕視したものである。

たるのみか、その下段に單獨にて光明塔を建設した。

堂は莊嚴なる六角形の佛堂にして、堂の中央に塔龕を安置し、龕上には觀音大士の尊像を奉安し龕内には御名號及び書寫の經卷を收む。大正十二年に一旦造立したが、大震災の爲めに潰倒せしかば、同十五年の秋までに復興再建したのである。法尼自身にも御名號一萬枚を謹寫するの誓願を發し、既に殆ど全部を書し了り、更に世を終るまで追寫し奉る志念であらうと思ふ。其の他、十方の僧衆、及び紳士淑女其の他有緣の方々に囑し、觀音御名號の淨書を請ひ、悉く是を龕中に收め、以て永遠不朽の紀念に備へんとす。而して其の塔は、光明と稱する如く常恒に無盡燈を供養せんとす。

右は强羅の發展、大雄山別院の隆昌と與に、法燈煌燿として函嶺の内外を普照すべし。法尼の深信特行は隨喜の極みである。

普門品による三十三身の尊像

宮城縣石卷町梅溪寺は、大本山總持寺の直末にして東北有名の古刹なり。現住藤田賢龍師は、多年、寶門の爲めに盡力せし人なるが、その道場が觀音大士の靈地にして、而も山上に在り、境致幽邃物外の仙境たり。是に於てか、住山以來、專ら堂宇を修造して莊嚴を一新し、道路を擴張して詣衆の便に供し、更に大士の尊像三十三體を境内に奉安することゝとなし、目下熱心に其の事業を進めて居る。

の天地と與に極り罔きを感じ奉るのである。

皇太后陛下大奥の御魂祭り

報知新聞の傳ふる所に依れば、去る八月十日は大陰暦の七月十三日にて盂蘭盆に當るので、その夕べ、皇太后宮には大奥におかせられ、心からなる御魂迎へをあそばされた。女官が焚く御迎へ火の後で、桐の間なる権殿の御靈前には、先帝が御在世中に好ませられた果物の數々を獻ぜられ、菊燈に火を點じて、深新たなる御拜があつた。御崩御以來の八ケ月、朝夕の御拜を缺かせられたことは無いが、御魂の歸らせられるといふ初の盂蘭盆を迎へさせられては、また御懷かしの涙のわかせられて、燈籠の火影に夜をこめて、ありし日の御事ども、女官を相手に語り明かさせられたと拜聞す、と謹記してあつた。予は此の尊とき、皇太后宮の御心情に無限の感激を禁じ得ないのである。（昭和二年）

片桐慈光法尼の閫行

片桐女史は箱根強羅一郭の主人であるが、夙に佛教に歸して專ら觀音大士を信仰し、自ら發心して僧籍に投じ、有髮の法尼として、從晨至夜、法悅三昧に住して居る。強羅の最高地點、即ち早雲山麓に道了薩埵を來安して、大雄山最乘寺別院を開創するや、率先その事業を賛助し、同別院造立に多大の翼賛を致し

美の國と汝があくがれしその國へ我も行かなむ汝が跡追ひて
我ながら愚痴とは知れど却々に止めあへぬは涙なりけり
親のなさけかくありけむとなき子等を思ひ出でつゝ我は泣きけり
今さらにかゝる歎きのありと知らば妻をも子をもたざらましを
老いぬれば朝はまだきにめさむれど起きかひなしと妻はいひけり

罔極の御仁德

聖上陛下には、昭和二年八月四日、五日の兩日、豐後水道に於て擧行される聯合艦隊の戰時訓練を御親閱あらせたまふを機會に、遠く炎暑燒くが如き南洋の熱天地小笠原島に行幸あらせたまひ、又、奄美大島にも御艦を寄せさせられたまうた。

小笠原父島母島及奄美島民の、未曾有なる此の光榮に感激して至誠の限りを盡したる御奉迎を受させられ、親しく御上陸あらせたまひ、島狀を御視察あそばされ、御懇ろに島民を慰撫したまひ、不便の地なればとて、島民の健康をも御心に懸けさせられ、特に侍醫を差遣して、病者に對して御施療の恩德を敷かせられた。兩島民に取りては、有史以來、始て鳳駕を迎へ奉りしこととて、其の感激と歡喜踊躍とは如何許でありしならん。獨り兩島の臣民のみならず、全國內の赤子は此の廣大なる御仁德を拜し、實に御聖恩

子爵の高風と氏の光徳と相對して、無限の教訓あるを覺ゆ。且つ、氏は宗教的信仰に富み、母堂も令室も亦た優れたる篤信家である。母堂は信仰安心の爲めに能く因緣を了じ、氏の沒後一週間ばかりは憂愁に沈まれしが、その後は、念佛三昧に菩提を弔ひて、微塵も愚痴らしいことが無いとのこと、耳のみは頗る遠けれど身體健康で、過日も綾衣子さんと與に予を訪れられ、予の病弱を慰められた程である。

親心卽子心

東京市外堀ノ内、無相庵主戸塚傳七郎氏は、大正十一年二月令息文學士太郎君（二十九歳）を失ひ、翌年二月、令嬢美智子（二十一歳）に逝かれ、堪へ難き愛別離苦に値ひたまへり。氏は死別の悲しみ忘れ難く、時に隨ひ物に觸れて憂愁の涙に咽び、迸つて國風となりしもの﹅内より、百首許りを選び、愚痴百首と題して印刷に付し、有緣の知人に與へられたり。

予も亦その寄贈を被りて之を一讀せしに、其の緒言に於て「私は子等を悲しむと同時に、又、亡き父母を悲しむ。子等に先だ﹅れて始て今更のやうに父母が戀しくなつた。(乃至) 私は親として泣くと同時に、又、子として泣かさるを得ない。親心卽子心、子心卽親心である」云云と叙せられたが、是れが眞諦とも實諦とも申すべけれ。世の親を有する人、子を有する人は、此等の情愛を思惟して孝養をも盡し、健康をも保たれたい。今氏の詠ぜし國風の一部を舉ぐれば

四に金錢慾に薄きこと

五に事業慾に勇猛なること

であつた。此等は實業家の理想條件であるが、氏は殆んど完全に之を具備せられたるもの丶如し。殊に予の最も喜ぶ所は氏の篤孝である。

十九歳にして父を失なひ、二十歳にして祖母藤子に別れたるが、母堂は幸子と稱し、本年九十一歳今猶ほ健在なり。室織衣刀自は聰明な賢夫人にて、老母に孝事し遺兒を教養して、殊勝にも永く夫君の志を繼がんとして居られる。氏の至孝なる、此の老母を後にして逝きたまふ、其の心中如何ばかりにありしならん。殊に大震災復興の偉業を經始しつ丶、事未だ成らざるに白玉樓中の人となる。予が大正十三年問病中の作に『復興誰克贊二皇謨一　劫後憐君擁二藥爐一　新語二經綸一年亦改、欲レ宣二微力一奈二迂愚一』と云ふがある。

玆に最も尊き逸話は、氏の母堂が八十八壽を祝するに當り、澁澤子爵は氏の篤孝に感じ、特に親ら孝經一卷、十八章一千九百四十三字を書寫して贈られしことである。同子爵の追懷談にも、『更に同君に敬服するは、修身齊家、父母に孝養を盡すと云ふことなり。恰も心學道話を讀むが如く、二十四孝其の儘にして、其の家庭の修まり方は實に欣羨に堪へず。斯くして始めて君の人格益々高きを來したるものと謂ふべく、予が母堂八十八歳の壽を祝するが爲めに孝經を筆寫して送りたるは、單に拙筆を揮ひて一幅の書を贈る位の程度にては相濟まぬと思ひたればなり』云云とある。

みほとけに手向けんものは朝夕に我が身を悔ゆるまことのみなる
國のため家のためにも盡さなん我がおや思ふそのなさけもて
いさともに心みがきてあらはさん此の世ながらの法のみくにを

和田豊治氏の篤孝

澁澤榮一翁の後繼者を以て目されし、實業界の巨傑たる氏は、不幸にして天壽に乏しく、大正十三年三月、六十四歳を以て逝去せられた。

氏は大分縣中津町の人にして福澤諭吉先生と同郷なりき。食祿に豊かならざる氏は、郷里に在りて辛うじて中學校を卒業し、早くも父葉六氏の死に遇ひ、甚だ不運なりしが、明治十二年に東京に出で、慶應義塾に學び、卒業の後、米國に渡りて博く智能を砕勵し、歸朝の後大に其の材幹を發揮し、實業界一方の重鎭となられたのであるが、予の氏を欽愛する所以は、氏の崇高なる人格に在り。

或人は氏の五特質を擧げて列擧せられた。

一に友情に厚きこと

二に恩義の觀念に強きこと

三に事業に熱心なること

機にして、君と己が交際は實に年久しきを經れども、互に佛教を信仰することを知らずして過ぎしは、寧ろ不思議とやいはん、今さらの如く思はれければ

　年月を君とながくも交はれど知らずも同じ道をたどりつ

此の頃、大覺寺門跡龍池上人より消息あり曰く、吾れ嚢に十年を期して心經一萬六千卷を寫し以て御代安泰を祈りける。今更に十年を期してまた一萬六千卷を寫さんとの誓を佛前に立てたりと、上人は現に八十有二歳にして此の誓を立てられけるは、人をして自ら一大勇猛の心を起さしむるあるを喜ぶの餘りに

　わがいのちあらん限りはつくさんと己が爲めにも人のためにも

『觀音とは何か』を印刷して法施しける折、觀音信仰の本旨は慈悲を躬行するに在り、先づ我が本分の務めを盡さざるべからずとの意を述べて

　めぐまれつめぐみつわたる渡し船おのが務めをふなしろとして

福澤桃介君が『觀音とは何か』の印刷に贊助せられけるを謝して

　なか〳〵に君のなさけぞ身にしみぬ世のため盡す眞心みえて

佛教といふ題にて詠める

　身を修めこゝろたゞすぞみ佛を賴まん道の初めなりける

今回その陶印四百六十六顆を上梓して十冊と爲し、題して陶印觀音經と號し、今回其の一部を迂衲に寄贈せられた。之を拜觀するに裝幀高雅にして一印を一葉とし、書風・刀法兩つながら巧妙にして、その信念の純眞なること、一刀一字の中に躍動して居るの感がある。（昭和二年）

井上角五郎翁の篤信

我が友なる翁は、學者にして實業家、且つ政治家であるが、常に好んで佛典を讀み、深く法喜禪悦に安心を獲て居られる。其の研究も頗る玄に徹し、專ら觀音の大慈悲に歸命し、信仰を以て活動の源泉とし、曾て『觀音とは何ぞ』といへる一書を著はし、更に「南無觀音」と題する著作もあり、專ら菩薩行に精進したまへり。

先般・翁は其の詠歌を印刷し、題して『詠草第五』と稱するものを贈りたまひたれば、その中、信仰に關する部分若干を左に鈔出することゝなしぬ。

田中新七君を總持寺に葬送しける折、君が建立せし鐘樓の音に耳を澄して

君がよにたてしいさをしつぎ〳〵に數へても聞く鐘の聲かな

福澤桃介君、此のごろ米國より歸られしも、緩々面晤する暇を得ざりければ、其の岐阜縣三留野に滯在せられけるを聞き尋ね行きて、談話は終に宗教の事に及びける。是れなん己が觀音の記述あるに至れる動

加藤良知君の信行

同君は千葉縣出身にして、九歳の頃母を失ひ、青年時代には一方ならぬ苦辛を嘗め、其の後、志を立て、朝鮮に渡り、暫く澁澤農場に執務し、明治四十一年、單身、平安南道平原郡石巖里に入りて農業を經營し、刻苦勵精、遂に畑地百町餘、小作七十五戶を有するに至り、常に鮮人農民と事を同うし、謙讓慈愛、鮮人の齊しく敬愛する所となる。

大正十三年、その令室が難病に罹り、有らん限りの力を盡して醫療と看護とに努めたるも、病勢愈々募り、醫術の施すべき無きまでに至つた。君は平素觀音大士を信ずること深かりしかば、『妻女の運命最早旦夕に逼れり、人事は既に盡し畢りぬれば、此の上、大悲の願力にお縋りするの一途あるのみ』と、それより沐浴齋戒して觀音大士に祈願し、且つ普門品の陶印を刻せんとの大願を發し、大正十四年の二月始て刀を執りしが、その頃より妻女の病勢頓に衰へ、五月二十八日に陶刻の全部を了せし時、さしもの病氣全く快復を告げたれば、見聞の者その感應の不思議を稱せざるは無い。

君の歡喜喩うるに物なく、益々大士慈愍の偉德を感じ、その陶印全部を擧げて京城曹洞宗別院に獻納せられたので、豫て觀音大士に篤信なる院主たる朝鮮曹洞宗布教監督五十嵐絕聖師は、大に其の志を喜び、之を寶庫に收めて永く珍什と爲した。

明治天皇御在世の時、其の聖徳を萬世に記念せんとて、「昭明節」制定の請願を貴衆兩院に提出したるは明治四十五年一月であつた。更に明治記念國立公園として、富士山大公園設定の請願をも提出せられた。明治天皇御崩御の後は、昭明節を明治節と改めて再び請願せられたが、其の趣意が貫徹して明治節御創定となつた。

翁は獨立互尊主義を以て終始し、自ら互尊獨士、又は互尊童子と稱して居る。翁に本領として三貫四成あり、其の三貫とは「仁深故不レ貫、以二互尊一爲レ貫、勇強故不レ貫以二共成一爲レ貫、智廣故不レ貫、以二獨尊一爲レ貫」、其の四成とは「互尊成二獨尊一、獨尊成二互尊一、獨尊成二獨尊一互尊成二互尊一」といふのである。

翁は曾て其の財嚢を傾けて、雄大なる圖書館を長岡市の中央に建設し、是を互尊文庫と稱して、そつくり市に寄附せられた。又、翁は君民一體主義を提唱して、「君は日の如く民は其の光の如し、故に皇日と仰ぎ光民と稱す」というて、自ら常に光民と稱して居る。翁は神明を奉じ佛教を信じ、最も禪道に歸依せらる。

予が曾て翁の住居を訪ひし時、翁の令嬢が、先帝御即位の時、半紙に圓相を描き、其の圓相中に歳の字を書すること一萬字なるを示された。即ち萬歳の祝意を表したものである。予は之を見て「流石に翁の令嬢哉」と感じたりき。

も、『村の爲めとならば、自分一己の習癖に囚はれては濟まぬ』というて、斷然禁酒したので、村民一同禁酒の約を守るの念一層强固となり、遂に立派な禁酒村を建設した。尚ほ森山村長は村民と謀り、二丈一尺の峨山禪師誕生記念碑を建立し、附近の田畑山林を買收して峨山園といへる小公園を作りて、遺蹟を保存する計畫なりとぞ。誠に貴き美談ならずや。

又、過日の新聞に群馬縣甘樂郡の某村が飲酒の風が盛んに行はれ、村民の生活も窮乏に傾き風紀も紊れ易かりしかば、同村の處女會員が禁酒運動をなし、且つ、向後、飲酒する青年には嫁すまじといふ不婚同盟をなすに至つた。村民も又之に勵まされて遂に一村擧て禁酒を斷行するに至りしとぞ。是等をこそ眞の自覺といふべけれ。

又、埼玉縣大里郡長井村の青年團は禁烟を申合せ、其の代り禁烟貯金を勵行する事とし、團員を敷島・朝日・バットの三階級に分ち、各組員それだけの價格を毎日貯金することゝして居りしが、其の金額も稍や積りしかば、旱害用井戸を堀り村に寄附せしといふ。(昭和二年)

野本互尊翁

翁は恭八郎と稱し、北越長岡市の人にて、忠誠無比、亦た以て肉身の菩薩と稱すべし。翁は公共心厚く志氣豪邁、最も任俠に富めり。而も常に大處高處に着眼して、些々たる末節に拘々焉たらず。

禁酒と禁煙

酒類は身體に害あるのみに非ず、其の精神を狂亂に導き、經濟上、法律上、道德上に大害を釀成すること少なからず、煙草も亦た多少の利ありとするも、其の害の大なるに比すれば、固より比較にはならぬ。されど、一たび飲酒喫煙の習慣を作れば、其の害毒の猛烈なるを感ずるも、容易に之を禁ずること甚だ難し、殊に村落などに於て、飲酒の盛んなる處にては、經濟上の損失も莫大にして、保健、風紀の上にも著しき惡結果を示して居る。我が國民は各々自發的に之を節制し、又は禁斷すべきである。是れ實に自家衛生上肝要なるのみならず、やがて國家の爲め子孫の爲である。

近頃の美談を擧ぐれば、石川縣羽咋郡阿合谷村は我が總持寺第二世峨山禪師御誕生の靈地であるが、疫病やら不作やらにて村內疲弊を極めたるため、四萬五千圓を要する學校改築の事業は目前に迫るも到底寄附に應ずることも出來ぬ始末であつた。村長森山忠省氏は深く之を憂ひて、村の弊習を檢するに、飲酒が第一で、一ヶ年約八十石を飲む、此の代九千圓となる。村民が五ヶ年禁酒すれば、優に學校改築費を産み出すことが出來る。そこで森山村長は、村民の愛鄉心に訴へて慫慂に力めたるに、村民も其の熱心に化せられて、遂に之に贊成することゝなつた。

平兵衛と稱する人、一日に一升五合を飲むといふ酒豪であつたから、衆皆な彼に注目した。平兵衛氏

舞しには猛獸の樣な殘忍性がある、猿と猿舞しとを比較して見ると、どちらに靈長の價値があるか、疑問である』と語り合ひしとかや。猿が果して自ら縊死せしとすれば、動物心理の研究上好材料であらう。

禪の法供養

長岡市覺張半四郎氏は同地禪學會員にて、其の人格智能共に市民に信望せられたりしが、不幸、昭和二年一月四日に逝去せられた。

五月三日午後六時より、早大校友會・禪學會・研究會・同好會聯合の追悼會を昌福寺に開催した。行法は禪學會之を主管し、遺族親戚十名、一般會員五十七名にて、開設せる坐禪道場に入りて、一同にて正身端坐一時間、中央に聖瑞賢英居士の靈位を設け、同音に坐禪儀を緩誦したる後、住職赤柴哲禪氏導師にて法要を行うた。

會員は市内一流の紳士なりしも、一切坐蒲團を用ゐず、階級的席位を定めず、一汁一菜の淡泊なる齋食、一同合掌、般若心經を讀誦して後之を喫し、了て追悼講演會を開きたりと聞き、予も其の眞摯なる禪的法供養なることを知り隨喜に堪へず、居士の爲めに左の如き追悼の偈を贈れり。

聖道參來絕二業纏一、瑞門超脫死生緣、賢明已徹心經髓、英士高標直指禪。

の猿が流星の如くに室内に飛込み來り、狂氣の如くになつてアチコチと探し廻る。「あゝ是れは夕べの猿に相違ない、産みし兒が案じられるので追て來たものと見える」とて、家内中が目を醒まして猿に同情した。處が、其の子は最早死骸となつて、土間の隅にころがつて居るのである。猿は冷き死骸を撫で廻しては泣て居たが、とても蘇生の見込なしと思ひ諦めてか、その邊にあつた繩を摑んで表の方へ飛び出した。どこへ行つたか知らんと思うて、暫くは樣子を見て居たが、一向戻つて來ない爲め、一同は寢て了うた。

翌日起きると、家内も客も猿の話で持ち切て居たが、暫くすると彼の猿舞しが雪を踏で來り「昨日は猿の畜生奴が一向に藝をしない、打ても敲いても唯だ泣顏ばかりして居くさつた、おまけに夕べは繩を喰切て逃げ出したが、此處へは來なんだか」といふので、亭主は夜半猿の來りし話をすると、猿舞しは一向可愛さうとも思はず、腹を立てながら椽の下だの物置などを探したが更に見當らぬ。段々探して居ると、數間離れた立木の下で、茶屋から持ち出した繩で、首を縊つて死んで居つた。

一同は非常に同情して、皆な口々に可愛さうだ〳〵といふに、獨り猿舞しは、ブツ〳〵小言をならべ、「畜生奴ろく〳〵働きもせずに死んで了ひやがる、いまいましい奴だから、今日は猿汁を煮て食べやう」と言ひ出した。亭主を始め一人もそれを食べる者は無かつたが、猿舞しは一人で猿の肉を悉く食べて了うた。

そこで一同は呆れかへり、「これで見ると、猿には却て人間の如き母性愛の麗はしきものがあるのに、猿

新八氏は益々信心を凝らされし爲め、實氏は其の感化を受けて、幼少の時より觀音大士を信仰し、その信力に依て精神的に無上の安心と幸福とを惠まれしとて、常恒法悦に充ちて居られた。

猿の縊死

大分縣玖珠郡森町は、肥後の國境に接せる盆地の小都會で、元久留島藩の城下、兒童敎育の大家久留島武彥先生の鄕里である。予、昨夏（昭和二年）、同町の安樂寺に應請せし時、珍らしき話を聞けり。同町の西方に可なり高き山あり、其の山の頂は板を立て連ねしが如き大岩が扇子の骨か櫛の齒の如くに並び、それより半里餘の間隔を置て稍や低き同型の山がある。是を巖扇山・小巖扇と稱し、又は雄櫛・雌櫛と呼べり。其の中間の凹地は通路にして『八町越』と稱し、其の上に『水場』と名くる處に休憩處にして旅店を兼たる茶屋がある。

數年前、冬の半ば寒さ强き頃、一疋の猿を負うて藝を賣る、俗に猿舞しと稱する者が水場の茶屋に泊りしに、其の夜、猿が子を產んだのである。翌朝、產まれし兒をば打捨て、猿を負うて出掛しに、猿は其の子に別るゝを悲しみ、脊の上にて泣き叫んださうだが、一向無關心にて森町の方へ下つた。

其の夜は寒さ烈しく、夕刻より雪降り出したれば、茶屋では早く灯を消して寢に就きしが、夜半に至り外から戶を扣て泣き叫ぶのが、どうも猿の聲らしい。餘りに騷々しい爲め、雨戶を少しく開けると、一疋

米田實氏の信仰

前代議士米田實氏は觀音大士の篤信家にして、大雄山最乘寺道了薩埵に歸依し、東京に於ける信徒總代の一人として常に外護せられた。不幸にして昨年(大正十五年)逝去せられしが、氏は發信の因緣につき最も興味ある來歷を筆錄せられた。

氏は奈良市の人で、其の父は米田新八といへり。新八氏三十歲の時、黑內障を煩ひ、名醫の診療を受けたるも更に功果なく、遂に失明の身となつた。氏は深く悲しみ、此の上は信仰の門に入り、幸に福祿未だ盡きざりせば、佛の慈光に照されて、多少なりとも明るい世界を得んものをと願ひ、山城柳谷觀音に祈誓をかけ、信心惻隱、三年三ヶ月を經たるも更に效驗なし。

一日、尊像の御前にて十句觀音經を讀誦すること數十週數百遍に至りしが、ムラ〳〵と妄想を起し、「斯程までに熱心に信仰を凝らすも何等の感應も無しとすれば、佛の神通力といひ、菩薩の慈悲力といふも、凡愚を欺く妄語なるべし、嗚呼、三年三月の間無益に心願を凝らせしこそ口惜しけれ」と思ひ、手にありし拍子木を尊像に投付けたが、その時、忽然として壇上の燈明を見ることが出來た。「こは不思議なり、忝けなし」と歡喜踊躍感謝の淚に咽びしが、是れより一眼だけ明らかになることを得た。恰も西國の壺坂寺の盲人澤市の因緣に酷似して居る。

大正十四年九月十七日、予は親しく同町仙林寺に於て、該尊像の點眼供養を行なひしが、其の時の法語は左の如し。

信刀誠斧技如神、刻出端嚴微妙身、誰識覺園花一朶、挽回八道鷄林春、 咦、
分明點出頂門眼、五智雙圓照鑑新。

不自由の感謝

去る三月二十九日より、三州西加茂郡保見村永澤寺に於て授戒會を啓建した。住職岡崎奇山師は、殿堂を造營し、莊嚴を一新し、常に教化道に精進せり。該授戒會中、同寺は人家を離るゝこと四町といふ山中なれば、戒弟は皆な本堂や庫院に宿泊せり。

大勢のことなれば、臥具なども十分に齊ふ由もなく、數百人の戒弟は皆な疊の上に横臥し、枕は共同木枕で、横臥せし上から蒲團を掛く、二人若くは三人に一枚、隨分不自由不足であるに相違ない。中流以上の生活をして居る人も少くない。然るに、一同は之を喜び、臥しながらも合掌隨喜して法悅にひたれりとぞ。

予は此の事を見聞して不自由に對する感謝といふことの如何にも貴とく麗はしきことを深く感じたことであつた。(昭和二年)

小學校長藤田誠蔵氏は、模範的校長にして、多年教育に從事し遂に叙位の恩典あり、先般は更に奏任官待遇の特典に浴せらる。梁川興風會なるものあり、宍戸嘉平氏、會長として民風作興に盡瘁し、會の事業として少年少女會あり、引地忠蔵氏會長として、毎年夏期には林間學校を開設して、年々著るしく進歩の成績を擧げて居る。

又、納税組合ありて納税義務の遂行を奬勵する爲め、過般は納税成績優等の點に於て、特に縣知事より表彰せられたり。同町民にも個人としては政黨關係もあらんが、町民としては無偏無黨、擧町一心となつて居るため、町會の場合も、一問題に就て二日以上に亘りしことは無しと聞く。

同町を中心として其の周圍の五ケ村も、恰も一町内の如く、常に協和の實を擧げつゝあるは、誠に模範的名譽と謂ふべきである。（昭和二年）

佐藤東石居士の篤志

居士は通稱庄次郎、前記梁川の隣町保原町の人である。曾て日置默仙禪師や横尾賢宗師に參ぜし因縁もありて、極めて堅實なる篤信者である。且つ餘技として彫刻を善くし、其の精巧木職に譲らず、先年、朝鮮忠淸南道の天安なる大典寺の本尊にとて、白檀一木、高さ一丈三尺の釋尊の尊像を、非常なる努力を以て彫刻し、大正十五年十月、めでたく奉安式を擧げた。

（二）重きを運び地を鋤きて、骨身惜まず犧牲と、なれる彼等の行爲は、我等の爲に苦を救ふ。（三）佛菩薩の願行と、同一心の作用よ、學び習へよ彼等の犧牲、仰ぎ信ぜよ釋迦の慈悲。

予が豐橋龍拈寺滯錫の折、仁保師の來訪を得、その熱心なる活動の狀況を聞き、隨喜の念禁ずる能はさるものありき。

戰死者の木像

靜岡縣寶臺寺には、日清戰役に從軍して忠死したる、靜岡全縣下の軍人百餘名を木像に刻してあると聞きしが、同縣志太郡岡部町永昌院には、日露の役に於ける郡内戰死者約二百五十名全部を木像に刻して之を安じ、稱して英靈殿といふ。立像にして身長約一尺二寸、臺座を併せて一尺五寸許り、毎年追弔會を行ふ。依て其の地方の人には、寺號よりも英靈殿の名が通り宜しといふ。

模範的名譽

福島縣梁川町は千二百戸程を有し、古來、蠶種製造業にて譽れ高く、蠶都などゝ稱せられて居るが、全町民が常に和合輯睦して平和の範を示して居る。町制施行以來、町長は僅かに二代に過ぎぬ。現町長富田三津藏氏は二代目の町長にして、今猶ほ繼勤して町治に努めて居られる。

愛心を喚起せんとす。

兩三年前（大正十四・五年頃）、山口に開催されたる中國六縣聯合畜産共進會に於ても大にこの宣傳に力め、同縣下各屠場を歴問して、屠殺祭文や屠場安置の掛佛式大メタル等を寄附し、又、馬車交通の要路に給水井を開鑿して人畜給水の便に供し、且つ牛馬用の水盥を置て慈愛水槽と名け、先づ郡內より實施して、漸次に各地に擴張せんと努力して居られる。實に麗はしく尊とき行持である。其の事業の如きは之を詳說することを省くが、祭文と唱歌だけを掲ぐることゝする。

屠畜祭文ー　惟るに、汝等其の生前や、常に地を耕し重きを運びて困苦を厭嫌せず、其の死後や、又、身を殺り肉を割きて人命を保養す。況や國家有事の秋に當つては克く士卒と共に死生の巷に出入す、其の勞多く其の功大なりと謂ふべし。然も、汝等生前死後に於て其の捧へる多大の勞苦に對して、何等の報酬を要求せざる犧牲の的意は、佛陀の說示したまふ菩薩所修の願行、無爲無作の功德にして、亦た卽ち汝等の業障消滅、轉生解脫の妙理なることを信解すべし。蓋し汝等、宿業の感する所、生を畜類界に享け、永く父母師長三寶の名字を聞く能はす、冥より冥に入り苦趣に沈淪す、憐むべく哀むべし、祇今、大衆檀越の敎法に基き、生者安全死後得脫の法門を開けり。正に是れ汝等發菩提心の最勝因緣なり。仰ぎみて佛法僧の三寶を敬信し、伏して三歸の妙戒を奉持せよ。

宗旨ー（一）普く天下の士女に告ぐ、動物虐待國民の通弊、畜類慈愛本會宗旨、暑さ寒さの厭ひなく。

出來たといふのは居士の誠意も感ぜられるが、久我師の熱心と努力と不退轉の願力とに依るものと思はれて、感激措く能はざるを覺ゆ。（昭和二年）

畜類慈愛會

畜類の中にても牛馬の如きは、人間生活の爲めに多大の勞苦を提供して居るのみならず、己れの血肉を犠牲として居る豚・羊等を始め、多くの魚鳥も皆なさうであるが、中について牛馬などは一層不憫に感ずる。

全國五百有餘の屠場に於て撲殺せらるゝ牛馬の頭數は、毎年三十萬頭餘に上ると聞く、此等の畜類に對して慈愛の念も無く、彼等の死後に其の靈を救濟する考へも無く、平氣で驅役と殺戮とを敢てするが如きは、決して人類の至情とは謂はれぬ。殊に佛教では衆生恩を說いて、此等人間生活を資くる動物は恩分ある者として、慈愛を注ぐべきことを示されてある。

是に於てか、山口縣佐波郡右田村天德寺、永井大曉師及び其の徒弟にして常に社會事業に精進せらるゝ仁保活曉師が、佛教の精進に基く動物愛護の徹底と普及とを圖らん爲め、先年、畜類慈濟會を創立し、仁保師專ら其の衝に當り、先づ以て、同郡の首府たる防府町に慈濟塔を建立して、全國の屠殺業者等より牛馬の骨片を納めしめて其の靈を祭り、且つ種々の方法に依りて慈濟愛護の精神を宣傳し、平等無我の大慈

よ」といへば「さうかそれは御馳走、今讀みかけた御經を讀むと直ぐ參るぞ」といふので、小僧は戻りしが、いつまで待つても一向見えぬので、再び呼びに行きしに、端坐のまゝ頭を低れて居つた。言葉をかけても返事が無いので、傍に倚て見ると、もう息を引取て遷化して居つた。

和尚の法孫なる千葉良賢和尚は、觀音寺住職中、和尚の愛用品なる如意と水晶の念珠とを予に寄贈せられたので、今猶ほ大切に保存して居るが、奕堂禪師は非常に和尚の志操願力を稱揚して、筏舟古佛というて居られた。

龍拈寺方丈と青巒居士

久我師は豐橋市の名藍龍拈寺に住職してより、歳月を閲みすること四十年、其の間、間斷なく布教傳道に精進し、授戒會の如きも既に六回に及びしといふ。大正五年の春の戒會には、入戒者二千六百餘人もありて大混雜を致せし爲め、戒弟を制限して、去る三月廿二日より授會戒を啓建したが、入戒者一千二百名、隨喜寺院雲衲等にて約一百五十人といふ盛會であつた。

其の際、聞て感心せしは、大内青巒居士が每年春秋彼岸會には、必ず同寺に來りて、一回四日間の講演を行はれた。それが一年も一回も欠缺なく、二十三年間に亙りて、發病まで繼續せられた。彼の多忙なる居士にして、而も全國的に間斷なく講演行脚をして居る身を以て、二十三年間も定例的に繼續することが

たから、評議の上和尚の要求に應ずることゝなり、數十名の遊女を一つ處に集めた。和尚は袈裟を披着し、經典を讀誦して後、遊女に向ひ、『汝等は今此方に買はれたのであるから此方の自由になれよ、先づ掌を合せよ、御拜をせよ』と命じ、それより諄々として人の履むべき道と佛に歸すべき信を敎へ、懺悔の行を修めしめ、歸依三寶の文を授けた。翌朝は一文錢も無き赤裸々の雲水僧となつて、奥州の伊達方面へ托鉢しながら行かれた。

先づ飯坂町常泉寺に鞋を脱し、寺側に無覓庵と稱する一茅舍を設けて住し、乞食を以て自活し、任運騰々隨處に法を說き敎を敷かれたが、人稱して『伊達の羅漢』というた。梁川の興國寺に至りし時梵鐘の破損して音響の宜しからざるを歎き、自ら梵鐘鑄造を志し、寺主の許諾を得て、梵鐘建立と書せる箱を頸に懸けて地方を托鉢し、遂に建立したのが、現今の同寺の梵鐘がそれである。

和尚は後に米澤に至り、同地方に有名なる龜岡の文殊の門境に、石の大像の十六羅漢を建立した。更に山形附近に有名なる古道場岩敎寺、即ち通稱山寺の勝概を愛し、寺僧の承認を得て後方の巖窟を住居となし、日々坐禪と讀經とに精進し、飢ゑ來れば、巖壁から滴たり落る水にて小麥粉などを煉りて食し、時としては山村に鉢を托した。

和尚は赤豆飯が好物であつた。慶應三年の一月、本坊で赤飯が出來たからといふので、小僧が巖窟に行きしに、線香を立てゝ讀經して居つた。小僧は『羅漢さま、今朝赤い御飯が出來たから本坊へ來て御食り

白の聲調が稍や拙劣なるに得堪へず、堂に上つて自ら之に當らんと請うた。僧衆は氣狂かとも思うたが、どこか魁偉の處があるのを見て、試みに餘衆の列に加へた。和尚は破褌弊衣のまゝ聲明を擧しけるに妙調の衆に優るゝものあり、衆議遂に明日法會の唱白師を囑す。和尚之を諾して、復もや橋下に戻りて乞丐に伍す。翌日來りて法會に參す。時に乞丐どもは寺內に聚り來り、和尚の堂內に在るを見て大に驚き口々に『あの和尚さんは豪いことをやつて居る』とて騷ぎ立てたといふことである。

又、和尚は還暦を期して、觀音寺に於て自誓を行なひ、尋で盛んなる授戒會を修し、完戒の日、單身孤影、山を下りて奥州に向うた。徒弟や檀徒とは門頭に於て別れを告げた。上堂の示衆は、

『弁也六十年來、喫二飲光頭陀之飯一、食二承陽鉢底之粥一、粥足飯足、接物利生、化縁既畢矣、願八回建二法憧一、三七隨二戒錫一、領二衲子一三百、授戒子五千、世壽同二本卦一、法臘六九年、剃度接二七箇一、傳燈附二四員一、今也坐脫立亡卽非無、網光睞瞬誰知レ有、故打二一踏一欲レ辭レ世、諸人諦聽、竪拂曰、不去不來、渠無二國土一、如去如來、我有二淨土一咄』といふのであつた。

和尚は腰に百兩程の財を附けて居つた。是を見た人々は老僧もやはり御金が入用と見えるかと申し合ふた。處が和尚は、其の夜、津川町に着して信者の家に宿したが、同町には數軒の遊女屋がある。和尚は宿所の主人を介して遊女屋全體の樓主に、今夜、一時の間遊女全部の總揚げを致したい。此に百兩あるから是れにて取計つてくれよと申込んだ。同町民は多く和尚の信者であつた。それに其の頃の百金は大金であつ

と認めありしといふ。同君の地位を以てして、自動車も乘り入ることの出來ぬやうな、狹き芝公園の邸宅に住して居られ、一生を通じて、平民的な貧書生の境涯に甘んじて居られしことは、實に賢君子の人格ありといふべきである。

同君の歿後、其の邸宅に於て野田大塊翁に遭ひし時、翁は『原君は死生命有といへる觀念に住して、旅行中も身邊を警戒する樣なことは無かつた。人々が身邊を案じて彼此申すと、伊藤侯を見よ、軍隊や護衞に圍繞せられながら、遭難を免かるゝことは出來なんだではないか。天命の歸することを悟了せば、何をか畏れ何をか疑はん』というて居られたと申された。

役舟古佛

和尚は越前福井藩士某の子で、八歲の時、鯖江萬慶寺曇英師に就て得度し、撥草瞻風の後、大事を了畢し、後に越後草水觀音寺に住して大に宗風を擧揚せられた。和尚、境涯灑脫、全く俗氣なく、雲水の時、一時、乞丐の群に投じて苦行練修を試みしこともありき。

或時、加州小松町に至りて、乞丐と與に橋下に露宿す。翌日、托鉢して誓願寺の前に至る。同寺にては明日大布薩會を修行するとて、多數の役僧が本堂に於て法要を豫習して居つた。右の法會には唯一の聲明師たる唱白と稱する役が最も大切である。和尚は元來聲明に熟し、且つ頗る美音であつた。唱

外から方策を講した方が便宜だと考へたからのことだつた。

例の革新倶楽部が政友会と合同した時も、犬養氏は野を卑うして齋藤君の同行を勸めた。併し、齋藤君は断じて應じなかつた。残留組となつて益々普通選挙實現に努め、郷里青年の爲めに普選通過後、憲政倶楽部を組織した。玆に齋藤君の志のある所を窺ひ知ることが出來る。

自作農免税問題の如きは、氏が帝國農會の最高幹部としての意見が動機となつて起つたもので、氏の力が非常に與つて大なるものがある。

原平民宰相の心操

此の程、高橋光威君より原敬君の遺言書の事を聞き、其の心操の高潔なることを今更ながら尊とく感ぜられた。

同君は、大正十年十一月四日、東京驛頭に於て不慮の死を遂げられたのであるが、平素覺悟する所ありしものと見え、立派な遺言書があつて、何れも感歎すべきことが澤山遺されてあつたが、其の中の一二を舉ぐれば、

予の死後に於て、若し叙位叙勲を奏請するが如きことあらば、絶對に御辭退すべきこと。

墓碑は單に「原敬墓」とのみ書すべし。而して墓石は兄上の墓石より大ならざるやう致すべし。

獨行影に慚ぢざる人

敵味方から惜しまれて死んだ秋田縣選出の前代議士齋藤宇一郎君を、一言にして謂ふと全く表題の語で盡きてゐるやうである。

風流の解すべきを知らず、只管、國家政局に目を放ち、農村振興、町村自治の改善に始終し、傍ら郷黨の訓育に專心した齋藤君は、啻に秋田縣に止まらず、實に我が日本の寶であつた。

昨秋（大正十四年）病を得て郷里に歸臥し、醫師の勸告に從つて五月初め東京帝大呉内科に入院、癌種の疼痛甚しかつたが、新藥の注射で一時小康を得、令息も看護を離れた程だつたが、其の日、即ち五月十日不歸の客となつた。

明治三十五年初めて衆議院議員に當選、爾後引續き八回當選してゐたが、大正十三年は、專心、地方公共の爲め盡したいからといふので、その候補たることを固く辭してゐた。併し、氏の訓育を受けた青年たちは、氏の固辭に關せず、自辨で運動して、遂に次點者との差確かに百票といふ多い得點をかち得た。以て氏が如何に德望人格の士であつたかが窺ひ知れる。

數年前、氏は他の代議士連と一緒に憲政會を脱して革新俱樂部に這入つた。併し、これは憲政會が嫌になつたからではなく、當時やかましかつた普選問題も、どうやら憲政會で煮えきらぬものだから、寧ろ黨

一少女

校長先生

如何にも忠実にして頼もしき少女の芳心である。富豪の子弟たち全般に斯かる情念あらまほしと思ふ。

讀書趣味の向上

予が先年米國を巡錫せし折、同國に於ける圖書館の盛んなるを見て感心した。人口一萬以上の町には、殆ど例外なく圖書館と公園とがあるさうである。予は歸朝後、各寺院諸師に簡易圖書館開設を勸めて居るが、國民全體に讀書趣味を養ふ必要がある。

文部省社會教育課最近の全國圖書館調査なるものを見るに、全國公私立圖書館四千四百十二館の内、大正十四年度の閲覧人員が二千三百十七萬四千三百六十九人で、前年度よりは二割五分の增加を示して居るが、一館平均して一年の閲覧者が四千六百九十八人、一ケ年の開館三百日と見て一日平均十五人六分となるさうである。如何にも寂寞たる狀態である。東京市立や大阪府立の圖書館は、一日千人以上であるといへば、全國的には一日平均五人内外、甚しきは一日一人といふものもあるであらう。

我が國民の圖書館利用に無關心なる、實に驚の外は無い。宗教家・教育家等は一齊に、國民の讀書熱を旺盛ならしむべく盡力せられたいものである。

勞働者の多數居る處に在る寺院などで、或は慰安會を催すとか、內鮮合同の懇親會を開くとか、御茶一杯煎餅一枚でも眞情を籠めて施し、有益にして興味ある御話しでもして聽聞に入れることが、內鮮融合の上に大なる效果があるのであらう。

會社とか事務所とかに、それ〴〵適當な催ふしのあるべきは勿論だが、全然無關係なる寺院などに於て、奇麗な方法にて優待することは一段と良成績を示すものと思ふ。予は此の點に於て切に佛敎寺院諸師に希望するのである。

感ずべき臺灣の一少女

大正十五年一月廿九日の報知新聞に、臺灣臺中州の埔里尋常高等小學校長、佐藤一治氏より、同校生徒の一少女の特志に係る八圓五十錢の爲替を、東京市社會局長矢吹氏あてに贈て來たことが記載してあつた。其の特志者よりの、左の手紙が添へてありしが、少女の誰なるやは知れぬ。卽ち無名の寄附である。

先生、この間掲示黑板を見ましたら、東京で二百人からの人が食べられないそうですね。私は昨夜活動寫眞に行かうと思つて、三十錢母からもらひましたが『二百人』といふ事に氣がついて止めました。この金は今年御年玉に戴いたのと、修學旅行の小使と合せて八圓五十錢、これを東京へ送つて貧しい人に上げて下さい。

或時、湯島の麟祥院にて、見出の如き演題を掲げて演說した。「老人、氣でも狂つたか」と思つて聽聞せしに、國民統一、民衆和合の必要を、面白く且つ適切に述べたのであつた。卽ち『僧とは、委くは僧伽耶、譯して和合衆といふ。全國民が精神的に和合して、國民の統一せる威力を發揮せされば、國家の威光を顯彰することは出來ぬ」といふ意味であつた。今日も猶ほ此の精神を充實し普及することが緊要事である。

我が國民は常に人種の平等を主張して、米國の排日的法律に對して其の不條理を責めて居るが、國民相互の間には頗る矛盾が多いでは無いか。水平社問題などは其の著しきもので、明治、大正の御代となつても猶ほ差別的態度を取る者のある處より、同社員の激怒する所となつて種々の問題を惹起して居る。同社員の神經過敏なるが爲めか、將た一般民衆の舊習に囚はれて居るが爲か、何れにせよ、同胞の間に於て互に反感を抱くが如きは、遺憾の極みである。

鮮人も近年は續々內地に來るやうになつた。尤も筋肉勞働者が多いのである。此等鮮人に對しては、一層、同情を以て平等に取扱ひ、俗に謂ふ繼子根性の無いやう、どこまでも內鮮融合の實を擧ぐべきは、內地人の大切なる務めである。毫も輕侮に渉る樣な態度や素振りがあつてはならぬ。此等の點に就ては、我が佛敎家が率先して、敎化の方面からも、待遇の方面からも、力を盡して行きたいものである。殊に鄕里を離れて內地に出稼する鮮人などは、種々の點に於て危惧の念もあり、不安の感もあるのであらう。鮮人

る所の淨米は佛前に捧げ、淨財は悉く、敎化、又は慰問救濟事業等に贈與して居る。

同市安善寺、土田放牛師の如きは、一夜も缺かず、帽をも被らず股引も着けず、先頭に立て同行せられたりとて、會員の故老茨木一如居士より報告せられき。

右禪學會は毎月二回、安善寺または昌福寺に會して靜坐を打し、師家の提唱なき時は、會員だけにて、或は各自の研究を吐露し、又は所感を演說し、半宵、禪味を飽喫すること數年一日の如くである。

訪歐飛行の成功

朝日新聞の計畫に係る訪歐飛行は、世界的大事業である。然るに、安邊・河內・篠原・片桐の四勇士は、愛國的義氣と世界的壯志とを以て遂に之を完成せられた。是れ實に我國の誇りたるのみならず、全世界の航空界に貢獻する所多大なるものであらう。予は近來の一大快事として我國文化の爲めに祝し、且つ四勇士に對しては熱誠を捧げて感謝するものである。

全國民を僧侶とせよ

明治十二年頃、本鄕に敎觀義塾を開きたる塾長神原精二翁は、學識辯才に長じ、當時佛敎演說に於ける權威者であつた。

志摩國が本住地である爲め、大廟に對しては衆に勝れて盡され、敬神崇佛を以て念とせられ、大正十三年には自ら主催者となりて、同縣下に於ける御贈位の光榮に浴したる先賢の爲めに追福の大法要を修し、十四年十二月七日には津市四天王寺を會場として、兩院議員及縣會議員の先亡に對する追悼大法會を營まれた。翁の眼中には黨派もなく親疎も無い。既に古人となられし三名の貴族院議員、二十名の衆議院議員二百九名の縣會議員は皆な國政縣治に盡されたる恩人であるとて、恰も自家の祖考に對するが如き觀念を以て、法供養を營まれた。

予は縁ありて該法要に臨み、左の法語を唱へて拈香せり。

灑盡熱血丹誠衷、議政壇頭克奉公、護國神靈曾不滅、七生應致獻芹忠、咦、
蹴翻圏外君看取、大活全存大死中。

居士林の寒托鉢

長岡市の禪學會員二十餘名の居士たちは、毎年寒托鉢を實行して居るが、本年（大正十五年）も一月十二日より五晩、市内に托鉢行道を致された。是は嚴寒修練のため發起せられたのであるが、今では報恩謝德の信仰三昧となりて、雪夜に鉢を托し經を誦して市内を巡行するや、見る者皆な合掌して隨喜せざるは無い。會員は何れも紳士であるから、受く

尙ほ同會附屬少年少女會にては、昨年、會員中より孝女渡邊まん（十四歲）、菅野まつ（十二歲）、秋葉くら（十五歲）の三名を表彰せしが、右三名の如きは、史上有名なる孝子にも劣らざる至孝篤志の少女なり。

心經杖

豐橋市小島久一氏は竹堂と號して篤信の士である。常に若般心經を讀誦して佛行を修習して居るが、曾て自ら心經を竹杖に刻して心經杖と稱し、一千本を製して同信の道俗に施與せんとの願を發し、既に今日まで五百本ほどを刻して布施せられた。同市に於て吳服商を營みつゝも、猶ほ一ケ年に百本以上を刻出するといふ。

昨年（大正十四年）十二月下旬、予が市外小坂井村東漸寺授戒會に臨みし折、特に來りて得度を受けられたので、予は照空齋竹鳳節心上座の法號を授與し、且つ左の偈を贈りたりき。

虛心高節士、竹杖刻經來、五蘊皆空去、獨遊般若臺。

御木本翁の信行

眞珠王と稱する御木本孝吉翁は、禪者の如き快活の人であるが、その信仰心が如何にも尊とく感ぜられる。

路掃除を順次に行ひ、女子部は同時間より麦茶を用意し、之を日盛りの一二時間、通行の激しい二三ヶ處へ出張して、往來の人々に接待の勞を盡し、以て各自の身心鍛錬、且は家庭手傳習慣養成の爲めと、社會奉仕の觀念を涵養する爲めに實行せしめた。

男少年三十名、女少年二十名は、非常なる熱心と歡喜とを以て之に當り、豫期の通り圓成し、色々の意味に於て、社會に對し少なからぬ感動を與へたるのみならず、中には涙を流して喜ぶ兩親もありしと聞く。此等をこそ眞に報恩の行持とこそ謂ふべけれ。(大正十三年)

林間學校

夏期に於ける林間學校が、年々世間一般に盛んに行なはるゝは誠に喜ぶべき事なるが、予の直接關係せる中にて、最も盛大なるは神戸市歡喜寺の夏期學校で、本年(大正十三年)は八月一日より二十日まで、二百餘名の少年を收容して之を行ひ、其の成績殊に良好なり。

又、予の鄉里なる福島縣梁川町にては、予の經營たる梁川興風會の事業として、會長引地忠藏、幹事挽地直吉、顧問熊倉仙太郎の諸氏は、町長高田三津義氏外町民諸氏の特別なる應援の下に、先年より八月一日を期し、四週間、鎮守天神社境内に於て林間學校を開催し、出席者三百名に近く、好成績を擧げ居れり。今年もまた盛大に擧行せられたるは予の滿足し且つ感謝する所なり。

頗る多く、既に百五十餘名に達し、續々増加するの傾向あり。

予は同地巡錫中たま／＼授業開始の日に遇ひ、親く登塾して、生徒一同に左の一文を示し以て講話をなせり。

優美なれ快活なれ柔和なれ親切なれ、正直を守りて神を敬ひ信心を捧げて佛に奉ぜよ、學問は身の寶、忠孝は徳の本、品行は人の花、忍耐は最上の力、能く教へに從ふ者は必ず幸を得、能く身に行ふ者は長く樂みを招く。

女史は貧困の中に人となり、兩親に孝養を盡すの外、令弟恭太郎君を教育せんが爲めに、獨身にて自給自足し其の身を節し來りしが、今や令弟は立派な醫師となり、現に鶴岡の醫士會長たり。女史は深く三寶に歸命し、謙遜の徳に富み慈善の志篤く、常に法悦に充ち、只々生徒の教養を以て無上の樂しみとせり。從つて婦人會員一同も極めて堅實に發展し、皆な其の志を同うし、和合の徳、恭儉の質、見るからに限りなき愉快を感ず。

少年會奉仕團の活動

名古屋市聚福院内、帝國工場布教團附屬聚福少年會にては、創立一週年の紀念行事として、夏期休業を利用して奉仕團を組織し、七月廿一日より二週間、男子部は毎朝五時半より一時間、學校聯區内各町の道

く「滿堂浴客盡長生、柏石老來斑彩情、甲子新年開吉例、獻來眉壽祝前程」。予亦一絶を賦して呈す
「慶雲閣繞小仙寰、五十二星開笑顔、破壁可以介眉壽、更期鶴算等南山」

佛教婦人の龜鑑

羽前鶴岡の伊藤鶴代女史は、其の淑德、信念、佛教婦人界の儀表と稱すべき賢女なり。其の曾祖父たる伊藤鳳山先生は、渡邊崋山の親友にて勤王家を以て鳴る。其の子雄之助は砲術を以て鶴岡藩主酒井侯に仕へ、其の嗣子雄次郎は即ち女史の父にて、女史は明治元年を以て生る。

幼きより學を好み最も裁縫に長じ、二十一歳より人を教ふる身となりぬ。明治三十年、鶴岡高等女學校に奉職せしが、父の病を奉養する爲め職を辭して專ら看護に從事せり。父は明治十八年に眼病に罹り遂に失明す。次で母もまた病歿す。女史の奉養世に比ひなく、明治二十六年、時の縣知事より賞表せらる。兩親の歿後、再び公職に就きしが、明治四十三年、退職して獨力で裁縫研究所を起し、高等女學校と連絡を取りて卒業生の爲めに裁縫を教授し、其の出身者を以て如蘭會を創立し、廣く裁縫の業を教養す。

大正八年、莊内佛教婦人會の開創せらるるや、女史は推されて會長となり、會員諸氏の希望に依りて、大正十三年に至り、鶴岡若葉町に校舍を新築し、鶴岡裁縫塾と稱し、普通科、研究科の二部に分ち、一般女子に必要なる學科をも授くることとなれり。去る六月一日を以て授業を開始したるに、入學志願者

鶴見の孝女

當本山の所在地鶴見町大字生麥、貝行商石井德太郎氏（四十五歲）の妻は、十有餘年前、當時三歲の長女いね子（今年十四歲）を置去りにして逃亡した。氏は男の手でいね子を養育し居りしが、一昨年（大正十一年）八月中旬より、胃病に罹りて働くことが出來ぬ樣になつた。

いね子は孝心深く小學校に通學の傍、朝は早く夜は遲くまで、アサリむきをしては稼ぎ、病父を看護し、辛くも生計をして居るので、附近の者は同情して、一升二十錢の剝き賃を特別に三十錢づゝ與へて居る。同人は鶴見小學校六年生で、成績優良の模範生なりといふ。

介眉壽宴

新潟縣刈羽郡北角、丸田尙一郎氏は誠忠篤孝の賢者であるが、大正十三年一月十四日、土地の老人五十餘員を招き介眉壽宴を開き、敬老の誠を盡して老情を慰められた。

令閨の調菜にて饗應し、養母は山田流の琴を彈じ、令息潤二郎氏の意匠にて趣味深き福引を出し、蓄音器等の餘興もあり、氏は眞情の籠りし席上の挨拶をなし、八十歲以上の人には特に壽字盃を呈せられ、一同歡を盡して解散せしとぞ。而して氏は今後、年中行事として永久に此の宴を開かるゝ由、氏に作あり曰

同會は佛教主義の婦人會にて、毎月佛教講話會を開き其の研究と修養とに努め居らるゝが、大震災後數萬事業に盡瘁し、且つ市内有志の寄贈に係る衣服六百枚を、會員二十餘名が油井氏別邸に集りて、之を洗淨し縫直して、是を當本山總持寺に贈りて配給を囑せられた。女子師範や成蹊學校の生徒も熱心に手傳はれたさうである。

本山にては其の奇特なる厚意に感じ、特に謝意書を印刷して衣服に添へ、横濱の社會課と協議の上、最も困窮せる細民の兒童に配給せしに、何れも同會の眞情に感激して、非常に喜び深く感謝の意を表せられた。

布施の植度

予、昨年(大正十二年)十月、名古屋市門前町陽秀院授戒會に在りし時、同市西區八坂町四十番地水野久太郎氏(十二歳)その母なみ子と共に參詣し、當本山震災見舞として百金を寄附せられた。

少年の事なれば親く其の志を尋ねしに、氏は從來其の身を節約して郵便貯金を爲し居りしが、當本山の災害を聞き、自ら進んで其の志を母に告げ、貯金の全部を救護義捐に提供し、其の内百金を亡父の菩提の爲めにとて、本山に納附したるものなりとぞ。少年の身を以て自動的に此の布施を行ふこと、實に萬金にも勝りて貴とく感ぜられたり。

て釋尊成道忌を嚴修し、道俗來集し、舍利禮文を讀みつゝ、遺骨を粉末にし、釋尊の像を造り、戒會の中日を以て開眼安座の式を行ふ。向後は十年毎に造像する計畫なりといふ。其の尊像は端嚴微妙にして一般の信念を增進するに足れり。

又、同寺現住中田直芳師は、授戒會を紀念として、墓地內の無緣の墓石を集め、上に雄大なる無縫塔を建立せられたりき。

千手觀音

本鄕駒込の洗心菴に住する、晩晴居士福島甲子三君は篤信の賢君子である。曾て邸內に觀音堂を建立し、當代の大家高屋肖哲畫伯苦心の傑作たる千手觀世音の靈幅を本尊とす。

大正十二年九月、大震災の後、罹災兒童一千人に衣服を施與せんとし、之を世の仁人に訴へたるに、寄贈を受たる衣服六千領餘に達す。居士夫妻は之を浣洗し、大人の衣服は之を仕立直して、數千の兒童に頒たれたり。尙ほ居士は、寄贈せられたる人々の厚意を記念する爲め、村上專精博士等が觀世音の功德を稱揚したる文章を冊子として、之を贈りて謝意を表せらるゝといふ。

德島市德母會

原敬氏の特志

五月二十四日、盛岡市祇陀寺に於ける大祖大師六遠忌豫修、並に西有禪師十三回忌法會に臨みける折、同市大慈寺たる原敬氏が逸子夫人の墓に詣で、暫時、同寺の庫院に於て茶菓の饗を受けしが、原敬氏の墓標の如き、表面には「原敬墓」の三字を刻せしのみ、其の區域も墓石も極めて簡素なものであつた。

それより大慈寺會長中村治兵衛氏の別邸にて藥石の饗を受け、來賓の諸君より交々同氏の逸話を聞き、同氏の忠孝に篤く信仰に富めるを感じ、且つ同氏の獨力建造に係る大慈寺の本殿・庫院の如き、壯大には非ざるも、其の様式が古風に倣ひ質實を旨とせられたるを見て一層奥床しく感じたりき。（大正十二年）

染黑道場

岩手縣黑澤尻町染黑寺に於て、去る五月二十三日より授戒會を修行せしが、同地方一般の信仰狀態は頗る優勢なるを認む。同寺所屬に修證會あり、修證婦人會あり、南無會あり、三浦町長始め有力なる人々何れも熱心に信念の修養に努めらる。また佛教主義のこども會あり、菅原禪師會長、中田直芳師幹事、宮松子主任の下に、毎日曜開會して兒童を訓育す。會する兒童三百名に達すといふ。

芳野喜八氏は大正五年以後五ケ年に亘り、二百七十五人の遺骨を聚め、大正十一年十一月、自宅に於

貧苦の中に養育しけるが、病弱の身となり遂に失明するに至る。

氏は病母と五姉との生計を一身に引受けて農業に勉勵し、勤儉力行殆と想像の外に在り。明治三十八年には福知山聯隊に入營し、看護卒として四ヶ月の服役を果たし、歸來、一層の努力を以て家計を支へたりしが、退營後一ヶ年を出でざるに、不幸、火災に罹りて家屋全燒せしも、氏は屈せず、益々稼業に勵み、姉妹をして相當なる支度を整へて他に嫁せしめ、己れまた妻わき子を迎へしに、一年に滿たずして死し、後妻りうはまた一子を擧げて逝けり。氏は信念堅固、天を怨みず人を咎めず、よく母を慰め幼兒を鞠育し、更に室いと子を娶りて一男一女を擧げたるも、奮闘の結果、今は一家團欒として羨ましき程に平和なる家庭を作り、失明せる母に事へ其の笑顏を見るを最上の樂しみとなし、寺院に法話ある時は盲母を肩に擔うて參詣し、村内の演劇にまで母を連れ行き、音曲を聞きて娯ましむ。故に、其の母は盲人なれど日々樂しき晩年を送り、姉妹との間の親しみは人の羨む程にて、常に往來して歡談に餘念なし。

尙ほ氏は、個人として孝友に富めるのみならず、公人としても義務を重んじ責任を盡し、常に公事の爲めに誠を致す。曾て簡閲點呼のみぎり聯隊區司令官は在鄕軍人の模範なりと賞揚せらる。本年（大正十二年）三月、郡長大野義衞氏は特に其の善行を表彰せられたり。

予は同村永明寺授戒會に臨みける時、氏を接見して之を賞しけるに、醇厚の風姿毫も誇る色なく、謙讓の態度一層奥床しく感じたりき。

か十二歳の身を以て此の事ある、その篤孝は實に感歎に堪えざることである。（大正十二年）

美はしき恩報の行持

神戸市上橋通四丁目、大橋一惠氏は篤信至孝の人なるが、大正十一年十月、亡父母の追善を營むに當り、郷里兵庫縣河東郡社町公會堂に於て盛大なる佛事供養を修し、且つ三百餘金を投じて、社町・小野町及び大部村外五ヶ村の貧困者九十一名に、一等白米一斗づゝを施されける。社町警察署長警部岩橋政楠氏は、其の行持を德として施米に關する手續を取扱はれたり。予が同郡河合村慶德寺授戒會に臨みし折、來見せられ、大橋氏の追善行爲は當地に於ては未曾有の美擧にして、施米を受けたる者の齊しく感激したるは勿論、その行爲が一般思想界に良好なる影響を與へたりと認むる點少なからざる旨を御話しせられける。予も深く之を隨喜し、同氏の信念と孝道との、大に我が佛教報恩の正道に契當する菩薩の行事なることを知り、一般の人々にも、此の種の淨擧あらんことこそ願はしけれ。

孝道の龜鑑

京都府天田郡下川口村字牧、荒川善吉氏は温厚にして忠孝の觀念深きも、三十八歳に至るまでの經歷は慘の極たるものであつた。氏は荒川伊次郎の長男なるが、七歳の時父を失ひ、母よね子は六子を抱きて

野に生ふ大和撫子』

尙ほ同校内に設立せるきぬがさ會は、昨年より優美なる衣笠會誌を發刊せられ、會員たる生徒たちは、刀自の八十壽を祝せんとせしも、刀自は虛禮がお嫌ひであるからとて、衣笠文庫を設置せしに、刀自は早速、豫て佐々木青牛大人より寄贈されし故副島蒼海先生の遺書等千五百卷と、自身手澤の歌書・佛書・漫筆・寫本の類千百卷の書籍を寄贈せられしとぞ。同校顧問下田歌子先生も『衣笠の山の姫松あま雲に聳ゆるまでもたち榮えなん』といへる詠歌を贈られける。

刀自が八十一の老齢を以て、壯者にも勝れる勇氣を皷して敎育にいそしまるゝ、實に是れ菩薩の大行持とや申すべき。

幼女の篤孝

宮城縣名取郡六强村、針生辰五郎長女靜枝は、十二歳の時、同村小學校の五年生であつたが、乳癌に罹りし母まつの病氣囘復を祈る爲め、仙臺市東九番町向正寺に立籠り、酷寒の夜中に水垢離を取りつゝ、二週間の寒行をなし、尙ほ自宅より一里餘の觀音堂に丑の刻參りをした。

此の事村長の知る所となり、郡長に對して表彰の上申中であり、松竹キネマ會社は之を活動寫眞に撮影して一般に紹介するといふ事が、萬朝報の去る三月十日の記事に「宮城野の孝女」として掲載せられてゐた。僅

に到り、又、毎朝老母の手を執て散歩するなど、その孝行の勤めぶりは土地の人の斉しく感ずる處であつた。隠居の九六菴の如きは、老母が九十六歳の時、特に新築せしものなりとぞ。翁は之を聞て、子爵が政治的技倆よりも一層ありがたく感じたことである。

今の政治家・學者・富豪・其の他一般の人々も、皆な斯くありたいものと思ふ。是の如きは人道の自然であつて、苟も道義心の存する者は必ず斯くせざれば滿足は出來ぬはず、外國人などには其の社會風習の關係から、斯る美徳を知らざる者が多いと聞く、誠に氣の毒なものである。（大正十二年）

きぬがさ會

翁の道友たる、滋賀縣神崎郡五ヶ莊なる塚本源三郎氏の母堂さと子刀自は、本年八十一歳の高齢なるも、曾て亡夫の記念に淡海女子實務學校と稱する女學校を創立し、自ら校長となりて敎育に從事し、今尚ほ御健全にて育英を以て晩年の樂しみとして居られる。

刀自は佛敎の篤信家にて、其の志操行狀の綿密にして高尚なるは實に世の模範と稱すべし。常に和歌のたしなみ深く、昨年（大正十一年）、第一回の卒業生に贈るとて『春風にうちたびきても青柳のみだれぬ絲をむともがな』と詠ぜられ、曾ては自ら伊國飛行機歡迎會の花賣に出でゝは『花めせといふまも人の波たちてをしよせらるゝ今日の賑ひ』、敎育に於ける志を詠じては『老松のよし倒れてもそだてたむひなの

險惡さの濃くなる思想界や生存競爭の激しくなる社會には、此の慈愛と平和を象徴した觀音樣は、生活苦の人々に取て、唯一の母であり友であらうと思はれます。故に、私ば熱心に蒐集して居ればとて、骨董趣味でも好奇心でもない。此の御像が千體に達したならば、私の幸福を願て下さる親しい人々へ、一體宛お頒ちする考ですと申された』と記されたり。

衲は氏の至誠純一にして慈愛深きを知るが故に、一層ありがたく感ぜしまゝ『分身百億、箇々圓通、溪山雖異、雲月惟同』の一轉語を氏に呈似せり。

後藤子の孝行

東京市長後藤子爵の御母堂里惠子刀自は、去る二月二十六日、九十九歲の高齡を以て逝去せられた。刀自は舊水澤藩伊達將監の御典醫長菴坂野元秀氏の女で、當時小姓であつた後藤十右衛門氏に嫁せられた。坂野家は國での藏書家で富裕な家なりしが、之に反して、後藤家は天井も雨戶も無く、明日の食料にも差支へる程に貧困であつた。刀自は忍耐力強く萬事に勉强家であつて、刻苦艱難して夫を扶け子弟を愛育し、七十餘年を一貫して精勤の範を示されたといふことである。

殊に子爵は有名なる篤孝家で、老母の前には恰も幼兒の如き態度であつたさうな。乳母車に老母を載せ、自ら之を推して庭内を廻り、箱根に在りて老母を迎ふる時などは、自ら驛に迎へ老母の手を執りて別莊

なるが、昨年(大正十一年)、同大學に於ける入學式並に學長親任式に、全哲學科代表の資格にて、僧服を着して四大僧正、並に全波蘭國五大學長、及び大統領の握手を賜はり、佛弟子の相形を知らしむることを得しに、同地各新聞は「光榮ある僧服にて」なる標題にて其の狀況を記載しける旨通信ありたり。佛陀の教田を歐洲に開くべき前兆とも思はれ、殊に嬉しく感じたり。

高島平三郎氏の觀音蒐集

心理學の大家として知られ且つ人格高き同氏は、觀世音菩薩の尊像を深山に蒐集し、既に二百六十七體を得られしとぞ。

東京每夕新聞記者が其の發願を尋ねしに、氏は之に答へて「私は深い信仰とか又は佛像の研究といふものとは全く離れて、たゞ幼い時から觀音樣が好きであつたのです。私の幼なき時の心にも深く泌み込んだあの慈愛の溢れた觀音樣のお姿は、いつか私の實生活の上にも、又、職業の教育家としての仕事の上にも、どれ程うるみのある慈悲の力を與へてくれたか知れません。此の端麗な淨化された御像が、女性でも男性でも、そんな論議に拘はらず、此の優しい姿の前に向へば、誰でも一種の畏敬に打たれます。又、所謂觀自在の心では、惡人には惡人に對するやう、善人には善人の心で、子供には子供の心になつて、優しい相手となることは、私など教育家に取て必要であらうと思はれるし、尚ほ大きく申せば、益々

尼僧の教育は刻下の急務なり。尼僧智德の向上は建化門頭の偉力ともなりぬべし。予は切に同林の健全なる發展を望むと共に、宗內尼僧各位の一大奮勵を希望して止まざる次第である。

長岡禪學會の精進

同會茨木一如居士等率先して、數十名の會員參禪辨道に精進し、同市、安善寺・昌福寺の兩寺を禪堂とし、每月三日・十三日・二十三日の夜間を期して、每會少くも十數名は必ず參集して端坐し、十數年來更に怠りなし。昨臘（大正十一年）成道會の際の如き、十二月一日より八日まで、每夜、安善寺に於て攝心を打し、午後六時半より一時間坐禪、次に普勸坐禪儀を讀誦し、了て諸師の禪話あり、詣する者常に三百名を超ゆるの盛況を呈し、且つ每會々員諸氏の信仰談、所感談等ありて、一層光彩を添へる由、禰、遙に之を聞き隨喜に堪へず。

曹谿大師曰く、『誰知火宅內、元是法中王』と、此の修得する三昧力を以て人事に善應せば治生產業もまた禪月の光明藏なるべし。

波蘭大學に於ける僧服の學生

東京淺草出山寺三浪德林師徒弟、梅田良忠師は昨年夏渡歐し、波蘭大學ワルシヤワ哲學科內に勉學中

なるものを設立し、同學林教職員、出身者、在學生、及び本會の目的事業に贊同する者を以て組織し、專ら會員の親睦と尼僧の向上とを圖らんとし、每年五月總會を開き、且つ一週間、宗教的・社會的の講習講演、又は必要と認むる事業を行ひ、尙ほ每年一回會報を發刊することゝし、既に去る七月『城林』と題する內容豐富なる會報を創刊せられた。

予は隨喜の念禁じ難く、且つ、創立當時より今日に至るまで盡力せられし道俗各位の功勞に對し、甚深なる敬意を表する次第である。依て予は、特に尼僧訓を製して同林に寄贈せり。其の文は左の如し。

生れて文化の御代に遇ひ、衣を染めて身を佛門に投ず、何の幸か之に過ぎん。既に佛子たり、何ぞ佛風に習はざる。唯だ應に淨信心を養ひ佛威儀に則とり、永劫の勝緣を喜び菩提の妙行を樂しむべし。柔和忍辱は行持の力にして孝順慈悲は報恩の基ぞかし。佛性海中には男女の隔てなし、故に品性と志氣とは最も高尙なるべし。尸羅法中には和敬の制あり、故に秩序と禮儀とは極めて、嚴正綿密なるべし。其の一動一靜は信仰の儀表となり、其の心操と慈懷とは婦德の模範たらんことを期すべし。水を運び柴を搬ぶ上にも法輪を轉じ、飯を調へ菜を擇ぶ上にも佛心を顯してゆかば、把針下にも公案現成し、掃洒裏にも宗乘自在ならん。分に安んじ道を樂しむは古佛の家風、謙を守り德を養ふは衲祖の心術なり。四弘の願心內に深ければ、六度の淨行外に全かるべし。精進は日用の間に在り、大道は平常を離れず、佛祖の遺訓を奉ずるは四恩の罔極に報ゆる所以なりと知るべし。

子供たちの入學者百五十名餘、毎朝早天に着場し、内外の掃除をするやら、運動をするやら、教授を受くるやら、愉快に眞劍に勉强して、暑さをも知らざるが如しとぞ、洵に嬉しきことにこそ。斯かる催しは建化門頭實に美はしき事といふべし。汐川泰仙師は專ら修養訓に當り、神戸小學校の中村・森本、長狹校の天方・平尾の各先生が教授の任に當り、主伴一致して、快然勉强して居る樣は、感謝に堪へざる次第である。（大正十一年）

曹洞宗關西尼僧學林

同學林は、明治三十六年五月、愛知縣東春日井郡高藏寺村に創設し、其の後、梅本金三郎氏の敷地一千二百坪を寄附せるありて、四十一年に今の名古屋市東區柳原町に移轉し、初め教場及び寄宿舍を建設し、尋で講堂を建造せり。水野常倫・堀密成・山口巨鑑等の各尼は、身命を放捨して斯業に盡力しけるが、同地道俗諸氏も非常なる同情を以て之を翼贊し、殊に前記梅本氏拔群の喜捨ありて、宗門第一の尼衆教育機關を完成するに至れり。本年（大正十一年）は恰も創立二十周年に當るを以て、去る五月八日より十日間、最も盛大なる紀念大法要を修行せられた。

同林の職員は、近藤疎賢師を林長に戴き、有阪泰忍・小松原國乘等の諸師、水野常倫（教頭）・堀密成・山口巨鑑等の諸尼が、同心協力して學業の發展に努めて居らるゝ。尙ほ創立二十年の紀念として城林會

に陥いりし病も、漸々に快方に向ひ、十死に一生を得て、約一ヶ年にして全快せられた。

本年の春漸く大乘寺へ歸山せしが、その後も池田村内の者は、代表者を金澤まで特に遣して、寺内の衆僧や檀信の人々にも、今後の養生等の事を依頼して行きしといふ。大龍師多年の感化にも依るならんが、擧村一致して斯くまで信心を凝らせしとは、近頃珍らしき美談といふべきである。

子供は御國の寶

神戸市荒田町野徹高寺住職、汐川泰仙師は夙に修養會を組織し、年々數回に亘りて講演會を開き、會員も教育家・醫師・實業家等を網羅し、會主共に非常なる熱心を以て、佛祖の遺訓に親しみ居れるが、大正九年更に修養コドモ會を組織し、毎月數回修養會を開き、年に二回の大會を催ふし、愛らしき子供たちが一齊に三歸を唱へ心經を讀誦し、佛陀の恩徳を喜びて修養に勵み居れるが、去る七月二十八日より三日間、修養會夏期大講習會を開き、松浦百英氏と松本文三郎・福來友吉の兩博士を聘し、三十日には、明治天皇御十年祭を武德殿に於て擧行し、併せてコドモ會月次大會を開き、少年音樂隊を組織して其の演奏式を行なひ、且つ八月一日より三十一日まで、徹高寺に於て修養コドモ會夏期學校を開催し、毎日午前八時より十一時まで、修養訓半時間、算術二時間、日本高僧傳半時間、午後一時より四時まで、隨意練習時間とし、其の間に唱歌・默想・經文等の練習を爲さしむ。

て靜坐を打し、尋で朝課中、團員は各々端坐して參列し、了て喫粥、それより僧俗一同して内外を掃除し、午前・午後とも、現住四津谷道雲師の禪學提唱、外來講師の講演等あり、午餐・晩餐とも禪林の規矩に從がひ、夜間も靜坐を行なひ、然る後に打眠す。

團員は誠心誠意行持にいそしみ、四日の日程、猶ほ其の短かきを憾み、解散の時の如きは、寺門を去るに忍びざるほど名殘を惜み、落涙して歸町せしとぞ。今月（七月）も亦た八、九、十の三日間、前同樣の會を開くことを定めたりといふ。（大正十一年）

稀有の美談

金澤市大乘寺先住大龍師は、大正九年の秋、舊住職地たる群馬縣利根郡池田村迦葉山に寄錫の折、大患に罹り、來診の名醫も皆な見放して、既に葬儀の用意まで致した程でありしが、池田村の村民は擧つて病氣平癒の祈願を凝した。

同地の小學校にて、或日、全校の生徒が一人も殘らず、御辨當が赤飯であつたから、教員も不思議に思ひて、其の故を尋ねしに、大龍さんの病氣全快の爲め、稻荷神社に祈願を籠めて、今日が滿願の日であるとの事に、深く其の志を感じて、教員諸氏もまた祈願を捧ぐるに至りしとぞ。殊に青年會の如きは、寒氣の激しき折、水浴して一齊に池田神社に祈禱をしたさうである。その靈驗の致す所なるや、さしも重態

隨感漫録

菩薩の行願

新潟縣南蒲原郡大崎村、永明寺住職、中島青山和尚は稽古の道人である。常に寺門を整理し、地方青年を獎勵して神佛の崇敬、社會の奉仕に盡すやう、自ら率先して其の範を示さんとして居る、去る六月同寺で行はれた授戒會の際の如き、同村青年會員は上下一致して、運水搬柴及び夜警等の任に當り、其の振舞は全く眞情の流露であることが認められた。聞く所に依れば、降雪期などには會員が晨朝に交通の道を開きて、一般の便宜を圖つて居る。何れも菩薩の行願と稱すべきである。(大正十一年)

中堅青年團

高岡市瑞龍寺にては、去る四月中、市内の各町より一名または二名の青年を選拔して中堅青年團を組織し、四日間、同寺に於て修養會を開かれた。團員三十八名、毎朝四時起床、直ちに體操、それより一同に

露ほどもあらはれてゐない。

が、ときに各自の實感と反省とに訴へて見たいことがある。それは次の一事である。他の乘客に足を踏まれ履物までも傷けられたとするに、そのばあひその人が『あゝ飛んだことを致しました、誠にどうも相濟みません』と衷心からあやまれば、自分はどんな氣持ちになるか、そこには如何いふことが現はれるか、阿修羅の怒號、惡魔の焰のかはりに、人情の美はしい花が咲き、和平の無絃琴が限りなく奏でられはせぬであらうか。

予は思ふ、たゞこの心情と心情との攝合、賀狀にものいふ態度、寫眞にものいふ態度こそは、石と石との衝突を生命と生命との抱擁ならしめ、物と物との接觸を心情と心情との攝合ならしむるところの鍵であると。

禪的修養のすゝむに隨つて、この鍵が自由自在に使はれるやうになるといふことを、予はこゝに附記するものであるが、禪家では賀狀に卽して山川千里の人と談り、寫眞に卽して心情を溫むることを『一莖草を拈じて丈六の金身となす』といつてゐる。

賀状にものいふ心情のある人は、そんな取扱ひはなし得ないであるまいか。

いや更に思つて見るがいゝ、愛子をサガレンあたりの守備隊にやつてゐる老親などが、お屠蘇を祝ひながら「婆や、兄公も天子様から餅を頂いたらうか喃、蜜柑や柿はあるか知ら、兄公にも服がよく似つく喃、あゝ笑つてゐるわい、婆や兄公にお屠蘇を献つてやらないか」などと愛子の寫眞を見まもつて、目縁を寄せてゐる老親、その老親に、愛子のその寫眞が影であらうか、紙の切つ端であらうか、老親は親しく愛子と談り愛子と笑つてゐるではないか。温い心情と心情とが觸れ合うてゐる。申すも畏いことではあるが、三大節に小學の兒童が學校で御眞影を拜するそのときも然うであるに違ひない。聖上陛下の大御心と兒童の心ばせとが感應道交してゐるのである。

予は今日の文明を呪ふわけではないが、所謂物質文明の興隆は人をして如實といふことを閑却せしめ、抽象的なことにばかり心を向かはしめることになり、その結果、生命といふものを忘却し、自分の生命に温を與へることもしなければ、他の生命を尊重することもせず、全く生命を殺してしまつてゐる。ために生命と生命との温い親しい抱擁であるべき人と人との交際までが、石と石との打つ突り合ひ、拳と拳との打つたゝき合ひのやうになり、實に荒みきつたものにならんとしてゐる。誠に遺憾な次第である。電車などに乗つても、年の暮や年の始は特に雜沓するが、人と人とが石と石とくらゐにしか思つてゐないのであるから、觸れ合へば立ろに火花が散る。罵詈、怒號、とても世界に卓越する大國民たるの態度などは

年賀狀を受取つた刹那の實感を反省して見て欲しいと云ふのである。反省して若し賀狀にものいふ心情のあることを知り得たならば、その心情を、いつもいつも肌身はなさず持つてゐて下さいといひたいのである。

賀狀にものいふこの心情、これは甚だ些末な事であるやうであるが、實はこの心情によつて人生の禍福は分れるのである。これを持するものは人生に禍殃を見ず、これを持せざるものは人生に福樂あるを知らざるに至るのである。輕忽にならぬはこの心情である。この心情こそは人の生命である。

人間の生命そのものである所の心情を修養することを怠つてゐる人は、他の生命を見ることが出來ないで影ばかりを見てゐる。物の内面を見ることが出來ないで外面ばかりを見てゐる。年賀狀を見ても、葉書であるとか、活字であるとか、外面のことばかりを見て、内面に含まれてゐるものを知らずにゐる。内的生命の躍動に觸れないのである。寫眞を見てもまた然うである。化學作用によつて紙片の上に映されてゐる人影が怎うしたといふのか、その映されてゐる影が何人の影であらうとも、影は畢竟影である。影をまつり、影をかざり、影に喜び、影に泣く、狂態もまた甚しいではないか、といふやうなことをいつてゐる人があるが、實に恐ろしいほどあさましいことであると思ふ。いふまでもなく、人の寫眞は人の影である。厚紙の切れ端に印した二寸か三寸乃至一尺たらずの人影である。これを放り出さうと引き裂かうと、寫眞はふんともいひはせぬが、心ある人の心は、そんな亂暴なことをなすに忍びないではあるまいか。

賀狀に對する心情

年の暮から正月へかけて、郵便局は總動員で目をまはす忙しさであるといふが、これについて「年賀狀などは廢すがいゝ、形式や虚禮は我等の取るところでない」といふやうな議論がある。

成るほど今日賀狀が形式一偏のものとなり、精神が失はれてゐる向きがないではないが、然し、どの年賀狀もどの年賀狀も皆な形式一偏のものであるであらうか、形式でなくて虚禮でない年賀狀がありはすまいか、年賀狀を受取つて、握手して物言ふごとくに感じ、久濶をわび舊情を溫める人がありはすまいか、年賀狀にしたためられてゐる文字は假令簡單であらうとも、賀正の二字だけであらうとも、またそれが印刷文字であらうとも、受取る人の心情いかんによつては、千里を隔つる父母にも見え、親族・知己・朋友あらゆる人とも談りて、新玉の和平の春を祝福することが出來るではあるまいか。思ふに一片の賀狀、これを虚禮となすも形式となすも、將たまた親情あふるゝ叫びとなすも、それは一に受取る人の態度いかんにある。心情いかんにあるのである。

斯くいふといへども、予はこゝに年賀狀の宣傳をしてゐるのではない。予はたゞ年賀狀を受取る人に、

男の子を連れて散歩するを通例として居つた。工場に出て多少の賃銀も得らるゝので、其の子の爲めに二錢なり三錢なり駄菓子を買て與へた。其の保護會の主人はなか〳〵嚴格な人で、子供に間食などを與へないので、無邪氣なる子供は此の出獄者の手から菓子を貰ふのを喜びて『叔父さんは本當に良い叔父さんだ』と繰り返して言うた。すると彼は其の子を確かり抱て『坊ちやん、あなたは私を本當に良い叔父さんだと思ひますか』といふと、『本當に良い叔父さんだよ』と言はれたので、彼はハラ〳〵と涙を流し『私は生れて二十七年にもなるが、良い叔父さんだと言はれたのは始めてです』といふて、非常に感激し、それより悔悟の實績が擧がつたといふことである。是れは無邪氣なる子供の至情に感化されたのである。良い叔父さんだと言はれたのに感激したる彼は、從前、如何に冷酷なる境遇にありしかゞ想ひやらるゝではないか。

故に社會の人々は、犯罪者に對しても、よく彼等の境遇に同情を持ち、温き情を寄せて慈愛の誠に攝取する樣にありたいものである。犯罪者を視ること恰も病人を見るが如くにして、努めて其の病を癒して健康に復さしめんとの慈念がありたいものである。殊に釋放者に對しては、其の家族や親戚及び郷里の人々が、前科者扱ひにせず、一層、彼に親み彼に對する保護の實を擧ぐる樣心懸て貰ひたい。『前心惡を作すは雲の月を蔽ふが如く、後心善を作すは炬の暗を消するに似たり』、布施と愛語と利行と同事とは佛子の常行である。而して、是れがやがて國家に對する重大なる報恩行である。

経に、釋尊は長者の子善生が禪定の事を御尋ねしたるに答へて「禪定とは即ち戒なり、慈悲喜捨、遠く諸結を離れて善法を修習す、是を禪定と名く」と仰せられた。尤も、禪定は三昧行であるから、釋尊は更に「世法に處すと雖も身心動かざること猶ほ須彌の四風の爲めに傾動せられざるが如し」とも示されてあるが、その不動の三昧力に依て自淨其意、慈悲攝取の大行を起すのが禪の生活である。

釋尊はまた發菩提心に二事ありと說かれたり。「一には了々として自ら己身に苦ありと知る、二には衆生の苦を知りて己れ苦を受くるが如く、爲めに彼の苦を斷ずること己れの如く異なること無し」と仰せられた。先づ銘々各自が樣々なる苦惱に惱されつゝあり、且つ罪惡を犯すべき種子あることを知りて、何物よりも自己智戒に注意せねばならぬ。次に他の苦惱や罪惡を見ること恰も自身に之を有するが如く觀じて、之を救ひ之を除くことに努むべきである。

凡そ感化教導の功を收めんには、威嚇や壓制は無功である。また理窟の力も甚だ薄弱である。それには衷心より迸り出づる慈悲の至情を以てせねばならぬ、所謂誠の力でなければならぬ。彼の良心をして光輝を放たしむるもの誠の力に勝るものは無い。誠より發したる溫情には鬼を化して佛となすの大威力がある。

曾て東京深川に免囚保護會を經營せし人が、四五人の出獄者を收容し、日々、某工場に通勤せしめた。工場から早く歸つて來た出獄者の一人は食事までの間、毎日、其の保護會の主人の子で五歳ばかりになる

餘の人間なりとて社會から顧みられなんだ時は、彼等は職業に就くことが出來ず、人間として存在することも出來ぬやうな處から、知らず〲再び煩悩の奴隷となつて、累犯の恥を曝す者が多いといふことである。

四海同胞の見地より觀れば彼等も決して他人ではない。況や佛教より觀れば猶ほ更ら吾々の家庭の者と同じである。殊に共同生存の上から眺むれば社會もまた一の有機體である。一箇の惡人があれば、各自の社會に一種の病を生じた様なものであるから、釋放者保護事業の如きは、各町村の官公吏・名譽職の人々などが率先して之を保護し教化して、彼等をして安んじて正業に就き、愉快に生活し得る様にしてやらねばならぬ。是れは決して彼等の爲めに無駄骨を折るのではなく、一人でも犯罪者を減ずれば、それだけ此の社會が健康體になるので、而も精神上物質上に於ける損失を少なくすることになる。

近年は、青年及び少年にして不良性を帶び、種々なる墮落または犯罪の徑路をたどる者が著しく增加した。是等も其の原因を調べて見れば、多くは家庭の缺陷と社會の誘惑とに由るとのことである。國家の爲め暫時も打捨て置くことの出來ぬ事柄である。裁判所や、警察や、感化院や、慈善家にのみ委せて置くべきことではない、國民全體が各自の責務として、是等不良の青少年の根絶を圖るべく大に注意せねばならぬ。此の如きは佛教に所謂菩薩の行願である。

禪の生活といふは諸惡莫作の生活、衆善奉行の生活、自淨其意の生活、慈悲攝取の生活である。故に戒

一切衆生悉有佛性と說いてある。尤も、人の本性に對する理論としては、佛教の人生觀と支那の孟子等の唱道せし性善說とは、決して同一では無いが、併し、通俗的にいへば、佛性悉有の說は性善說と牴觸しては居らぬ。既に佛性を備へ善性を有するとせば、一旦惡業を造りて犯罪者となりし者でも、導くに善道を以てすれば、改過遷善して其の本心に立歸るべき可能性があるのである。聖德太子は十七憲法の第二條に於て、佛教を以て國民教化の標準と定めたまひ、且つ「人、尤惡なるは鮮し能く教ふれば之に從ふ」と仰せられた。

此の教への道には宗教と教育との二途があるが、何れも皆な善導教育の機關である。犯罪者は前節に述べた通りであるが、犯罪の種子は精神の不良分子、不純性であるに依り、如何なる人にも、淺深厚薄こそあれ、此の種子を有せざる者は無い。佛教では之を煩惱と稱して居る。故に犯罪行爲などをせぬやう、一般人に對して常に精神的教化を施して、犯罪を豫防し犯罪の種子を枯渇せしむることが必要である。是れ宗教家・教育家・爲政家等の大に努むべきことである。

不幸にして犯罪者となりし者は、國法に依り刑務所に收容して改過遷善の實を擧げしめ、既に解放せられたる者には、十分、保護の方法を實行し、彼等をして良民としての活動を資け、再び罪惡の窩中に陷らぬやう保護せねばならぬ。古人も「其の罪を惡んで其の人を惡まず」というて居る。而して其の罪なるものも、彼等の境遇や事情を穿鑿して見たならば、一面には甚だ同情すべき點もあるであらう。然るに、刑

す金額は五千萬圓を下るまいとのことである。其の他犯罪豫防や犯罪後の救濟に費す金額を總計せば、約一億萬圓に上るならん。此の他國家並に自治團體の蒙むる損害、各個人々々が犯罪防禦の爲めに消費する勞力と經費、及び被害者の損害等を數へ來つたならば、一ケ年には二億三億の額にも上るであらうといふことである。

右は物質上の損害であるが、更に精神上の損害もまた非常なものであらう。犯罪者あるが爲めに社會が常に不安と恐怖とに襲はれて居る。殊に被害者の憂愁と苦痛とは如何ばかりであらう。加害者其の者は爲めに名譽を失墜し、自由を失なひ、永く世の爲めに嫌忌せらるゝのみならず、其の家族及び親戚に於ける精神的苦痛は、實に言葉にも述べられぬ程であらうと思ふ。して見れば、社會全體が互に相勵まして、犯罪者を出さぬ樣に豫め防止するの方法に努力せねばならぬ。

又、犯罪者として國法の處罰を受けし者に對しても、彼等が出獄するを待ち十分に之を保護して、再び犯罪の暗路に惑はぬ樣にせねばならぬ。斯くしたとても、犯罪者を絶滅することは不可能ではあらうが之を幾分づゝなりと減少することを得ば、國家及び社會に於ける最大節約となる譯である。

昨年は行政法規も改正せられ、監獄の名稱も刑務所と改まり、典獄が刑務所長となり、監獄醫が保健技師と改稱せらるゝ樣になつた。是れ即ち從前の威嚇主義の應報刑より教育善導に進んだのである。

元來、人類には如何なる者でも良心を具へざるは無い。從て其の性は善なる者である。佛教に於ては

世界大戰の結果として、精神界にも物質界にも著しき變化を來し、社會の事象は益々複雜となり、從て、勞資の衝突やら、貧富の軋轢やら、小作爭議やら、種々雜多の問題を惹起して思想の混亂を招致し、加ふるに、外界の刺戟やら、境遇の壓迫やら、生活の困難やらにて、益々人心を不安に陷らしめ、爲めに社會は日一日と犯罪事項を增加し、財產罪・傷害罪・殺人罪等は日々の新聞紙上に報ぜられ、實に吾人をして戰慄に堪へざらしむるの狀態である。

專門家の示す所に依るに、一ケ年に於ける犯罪件數は五十萬乃至六十萬の多きに達するといふことである。尤も、實刑を科せられて苦役に服して居る者の數は、四萬五千內外であるが、實際に於ける犯罪者は此の數倍に上つて居る。體刑に相當する罪があつても、檢事に於て犯罪の動機其の他の事情を精査した結果、之を不起訴處分と爲す者が頗る多く、裁判所にて犯罪の情狀を酌量して刑の執行を猶豫する者も少なからぬ。故に、實際、體刑を科せられて入獄の身となつて居る者は、全犯罪者の一割位であるさうである。

此等犯罪者の爲めに、直接間接に受くる所の損害は非常なもので、卽ち大正十一年度豫算に於ける、司法省所管の裁判所の經費は千五百二十七萬圓餘（裁判所の經費は民事々件にも要するが大部分は刑事に關する費用に支出せらる）、監獄費は千百五十八萬圓餘、內務省所管の警察費として、犯罪の爲めに要するもの千七百七十餘萬圓、合計四千五百萬圓餘である。又、各府縣が犯罪の搜査及び檢擧等にて、直接に費

禮、又普門品を讀誦すること三十三卷、斯くすること一日も怠らず、且つ一層心を平らかにし身を淸め、邪念を拂ひ邪業を遠ざけ、所謂胎教に專ら心を注がれけるが、遂に十月八日朝日の昇る時、安々と玉の如き男子を分娩したまへり。此の御子こそ後の太祖常濟大師にてあらせたまふ。此の御誕生日を太陽曆に推步すると、一月二十一日となるのである。苟も人の母たる者は太祖大師の御母の如く、胎兒の教育に注意すべきである。

又、姙娠以前にも深く信心を勵み慈念を抱き、嚴肅端莊ならんことを要する。況てや出生以後は、父母たる者は其の身を以て範を示す樣に心懸ねばならぬ。太祖大師の御母は、此の點に於て實に母たる者の良い龜鑑であらせられた。されば大師は性來御孝心深く、獨り御母老後の身を養ひたまふのみならず、導くに佛の道を以てして、信心歡喜の生涯を送らしめられた。

明年（大正十三年）は太祖大師六百年の大遠忌に相當するを以て、太祖の兒孫たる者は、その信者に對しては特に胎教及び兒童教養の道を以てすべし、是れ亦た報恩行持の一分である。

犯罪の防止動員

胎教といふは胎兒の教育である。人の母たる者は、一朝、姙娠したりと知りなば、其の胎兒に對して直ちに教育を施すの心懸が無ければならぬ。父母の精神も體質も、自然に其の子に遺傳するのは當然であるが、殊に姙娠中の母の身心及び行動が直接に感化を與ふることもまた疑ふべからざる事實である。尤も、過去世の業報のあることは勿論なれど、教育感化の力は實に爭はれぬものである。

漢の劉向の烈女傳には『古へは、婦人子を姙んでは、寢るに側たず、坐するに邊らず、立つに蹕ちせず、邪味を食はず、割正しからざれば食はず、席正しからざれば坐せず、目に邪色を視ず、耳に淫聲を聞かず、夜は則ち瞽をして詩を誦し、正事を道はしむ、此の如くんば則ち、生るゝ子、形容端正にして、才人に過ぐ』とある。有名なる周の文王の母の太任は、是の如くにして胎教を爲したとある。是れ等の教へは普通の人には盡く模倣することは能はざることなれど、要するに、心を正しくし行なひを愼み、身體を强壯にして快活なる精神を保ち、且つ加ふるに淨く聖なる信念を抱くことが胎教の要點である。

我が太祖常濟大師は越前國の御生れで、其の母は年三十を超ゆるも子なきを憂ひ、家系の斷絶せんことを恐れ、程近き多禰の觀世音菩薩を信仰して、熱心に一子を得んことを祈り居られしに、文永五年、母夫人三十七歳の正月初旬の曉に、佛前に禮拜し東に向ひ朝暾を拜せんとせし時、忽ち日輪飛び來りて口に入りしゆゑ、思はず之を呑むと見て驚き覺むれば、そは猶ほ深夜の夢にてありしが、此の月より姙娠を覺えられけるとぞ。之に依て益々菩薩を欽信し、更に祈誓を凝して、毎日禮拜を行ずること三百三十三

はし、日分・月分・年分に別ちて、叢林に於ける森嚴なる行持を提示せられてある。重雲堂式の中には『佗人の非に手かくべからず、憎む心にて人の非を看るべからず、佗の非を見ざれば、我れは是れ自然に上敬まひ下恭しゝの昔の語あり、又、人の非をならふべからず我が徳を修すべし、佛も非を制することあれども憎めとには非ず』といふ御示しがある。示庫院文は炊事場の教訓であるが『敬を以て宗と爲す』を原則として、施主に對しても、供養物に對しても『天上人間の中に極重の敬禮を用ひ至極の尊言をして敬まひ奉り、飯饌等の供養のそなへを造作するなり』と仰せられて、言葉使の用語までも示されてある。衆寮箴規には無義の語、無益の語、雜穢の語、無慚愧の語を堅く戒めたまうた。故に吾々は、平生の言葉使にも注意して、成るべく意義のある語、有益なる語、純潔なる語、品格を辱しめざる語に則るべきである。

此等に關する教訓や實例も、今は詳かに之を擧ぐるの暇が無いから、略して置きますが、吾々國民は各階級を通じて、禮儀と愛語とを尊重して、秩序正しく規律備はり、共敬相愛の美德を莊嚴する樣に致したいものである。

たと御挨拶をなさい、さうして、お父さん・お母さんが何とお仰るか覺えて居て、明日學校へ來て報告して下さい」と申渡した。翌日、生徒は皆それ〴〵の報告をしたが、一生徒は「私のお父さんは御挨拶をする資格がありません」といふた。先生驚いて『何故か』と聞くと「昨日家へ歸りしに、お父さんは胡坐をかいて仕事して居た。そこでお辭儀をして『お父さん』といひしに、振向て『なんだ此の野郎』といはれた、『只今歸りました』といひしに、お父さんは『なまいき言くな』と申しましたと報告したといふことである。

威儀即佛法、作法是宗旨とは禪門古聖先德の家訓である。どんな無智な者でも、眞實、長上に對して敬重の禮を存すれば、其の時だけは立派な人格者である。如何なる無能な者でも、眞情を以て親切を盡せば、其の間だけは尊貴なる人物である。一時の慈愛は一時の菩薩、一日の禮譲は一日の君子である。禪宗は形式や末節に拘泥せさる家風あり、且つ禪機の迸しる處、痛棒をも揮ひ熱喝をも飛ばして、頗る惡辣の如くであるが、平生の行持に至つては、嚴粛なる威儀を保ちて作法を尊重し、一擧一動をも等閑にせぬ。故に支那に於ては、百丈禪師夙に叢林の清規を定め、進退起居、肅然として如法の威儀を行なはしめた。唐宋を通じて禪林の規矩は非常に如法であつた。歐陽修やらも、之を見て感歎措く能はず「三代の禮樂は緇衣の中に在り」と稱した程である。殊に我が國に於ける曹洞宗高祖道元禪師は、大清規を始め重雲堂式示庫院文等の鍼訓ありて、叮嚀懇切に威儀即佛法の宗旨を闡演せられ、太祖瑩山禪師は所謂瑩山清規を著

ると思ふ。

元來、怒號や彌次を以て他の言論を妨げ、他の主張を制せんとするが如きは、自ら言論の自由を蹂躪するので、非文明の尤なるものである。主張は宜く主張を以て制すべし、理論は宜く理論を以て伏すべし、言論は宜く言論を以て鬪ふべし。その言論にせよ、餘り露骨に自讃毀他であつたり我田引水であつては、折角の演說も其の權威を失却し去るべし。況や、漫罵暴評、手忙脚亂の結果、修羅場を演出するが如きは憲政を辱汚するの行動に非ずして何ぞや。予は切に、諸賢が脚下を照顧して、禮讓を重んじ共敬相愛以て模範を天下に示されんことを望むのである。一般國民も相互に敬愛の念に住し、擧動言語共に大に戒愼せざるべからず。

曾て越後國水原町小學校に至りし時、校長さんが予に對して『就任以來、生徒の言葉使に注意し、野卑に涉らざる樣警誡せしが、今日では、生徒中、野郞呼ばりをする者は殆ど無い樣である。尋常一二年生の中には、猶ほ校庭遊戲の折、野郞の語を發する者が幾人かあるやうで、十分に注意して居る。又、學校の近くに神社がある、其の前を通過する時は必ず神社に敬禮する樣に訓示して居るが、近頃は幸に一人殘らず敬禮を行ふ樣である』と申されて、予も大に喜んだことがある。家庭に於ても、父兄たる者はやはり言動を愼んで貰ひたい。

或る小學校の先生が、生徒に對して『皆さん家に歸つたなら、お父さん・お母さん等に、只今歸りまし

近いこともありと聞く。辯論の練磨としては、爆彈的漫罵亂評を浴びながら、それに屈せず、當意即妙、其の主張を貫くが如きは好箇の鍛錬ともなるであらうが、併し、動もすれば、徒らに辯士の演說の腰を折り、聽者の心を波立たせることに熱中して、爲めに辯士をして其の要旨を說き得ること能はさらしむるに至りては、悲しむべき弊風と謂はねばならぬ。況や帝國議會の如き、一言一句が國政の休戚に關し國民の利害に繋るに於ては、最も眞面目に熱心に自他の言論を聽取せねばならぬ。

若し黨派根性に囚はれて、自黨の人ならば、其の說の如何に拘はらず拍手して登壇を迎へ、且つ之を聲援し、他派の人ならば、其の主張の是非を問はず、漫罵を浴せかけて其の演說を妨害するに至りては、實に情けなく感ぜられる。又、演說をする人も、徒らに駄辯を弄したり、同じ事を繰り返して貴重なる時間を浪費したり、瀆々しい言辭を使用して風なきに波を起したりするのは、言論を濫用するもので、演壇を冒瀆するの責は免かれまいと思ふ。暴行を以て大勢を動かしたり、彌次を飛ばして他の主張を妨害するが如きは手段の拙劣なるもので、君子の取らざる所である。殊に酒氣を帶びて演壇に登り、游戲的に言論を賣弄することとあらば、是を何と名けて宜いであらう。國家最高の立法府に於て、斯る非禮儀・非愛語が存續すれば、知らず識らず國民全體に恐ろしき暗示を與へ、縣會にも市會にも町 村會にも其の惡風が感染し、國民の議員に對する尊敬の念が薄らぎ、議會そのものまでも輕視するやうになる。此の意味からして、予は議員諸氏の非禮なる態度と非愛なる言論とは、實に全國的に毒瓦斯を放射するやうなものであ

ある、帝都の街頭にすら平氣で路面に唾を吐く國民が居るのを見た』というた。此等も國民の一部に非禮儀な態度があつた爲めに、國家の品位を傷けたものと謂はねばならぬ。

殊に帝國議會議場に於ける、非禮儀非愛語は其の國民一般に影響すること少なからざるを思ひ、最も遺憾に感ぜられる。今次の議會にては貴族院にすら『誰だ馬鹿な事を云ふな』、『早く本論をいへ』、『馬鹿默れ』などゝいふ言葉があつたと新聞に出て居る。徳川議長も憂慮して居られたと聞て居る。衆議院議員の如き、何れも國家の選良で、その人格識見共に衆庶の模範ともなるべき人々である。予の知り得る範圍内でも、議員諸君は皆な尊敬に價する人々である。斯かる人々の中に、何故彼の樣な言動をする方があるのであらう。是れは強ちに、騒ぐ人や怒號する人をのみ責むる譯にはゆかぬ。議場の如き場合は、互に辯論を戰はして大勢を制せんとし、可否を討論して勝敗を決するのであるから、實に眞劍勝負である。從つて神經も鋭敏となりて、昂奮し易く激し易きは免かれ難き議會心理であらう。此の場合、一人二人の簡單なる漫評的着語も、妨害的彌次も、その對手方には、恰も彈丸を投下せられた程に感じて、俄かに湧き立つことゝなる。況や非禮なる態度、非愛なる言語の如きは、議員全體の感情を刺戟して、滿場に狂瀾怒濤を捲き起す樣になる。故に、禮儀なき態度と、敬愛に反する言論とは、恰も毒瓦斯の如きもので、一發猶は議場全體を攪亂するに足る、佛教の上よりいへば實に大なる罪惡である。

近頃は彌次といふことが流行して、彼の青年たちの雄辯會などでは、雄辯會といふよりも寧ろ彌次會に

に依りて、個人としても家庭としても國家としても、自づから品位を高め秩序を正し規律を存し和合を致すものである。

文化の發展に從がつて、從前の秘密も開放せられ、萬里も殆ど咫尺の如くになり、個人の一擧一動までも世の人に知られる。況や高官とか代表者とか稱せらるゝ方々の行動は、一擧手一投足の末に至るまで、全國民に對して何等かの暗示を與ふるものである。子に對する父母、弟妹に對する兄姉、學生に對する教員、勞働者に對する工場主等の態度や言語は、十分に注意を要すべきである。

我が國民の現狀は遺憾ながら、此の禮儀と敬語との訓練が甚しく缺けて居ると思はれる。何の考へも邪氣もなく使ふ言語でも、非常に醜陋を感ずることが少なくない。解職解雇することを「馘首」といひ、「首を斬る」といひ、「首にする」、「首になつた」といふ、何といふ恐ろしい厭らしい惡語であらう。けれども、使ひつけた人は神經が麻痺して居つて、更に惡語とは氣がつかぬ。

名古屋に於て或る人が「自分は汽車に乘る時は、三等か一等ときめて居る、二等車の乘客には傲慢な者が居つて胸が惡いから乘らぬ」というた。是れは頗る極端な觀察だが、二等車の乘客に甚だしき非禮儀なる者あるを見て、先入主となつたものであらう。停車場の混雜や電車乘降の雜沓などにも、非禮儀を感ずることが多い。

佛國の元帥が、世界大戰後、我が國に來り、歸國の後、人に向て「日本はまだ文明國とは稱し難い點が

ず唯低頭して敬意を表す、然るに劇場にて講演の歸途には脫帽も低頭もせぬ人が多い、是れ講演場の如何に依つて聽衆に與ふる印象に等差を生ずるにはあらずや』といはれたことがある。此等も大に味のあることゝ思ふ。

禮儀と愛語とを尊重せよ

政治にせよ、經濟にせよ、事業にせよ、皆な人道の上に成り立つものであるから、何事でも道德を以て基本とせねばならぬ。動機の善惡も、結果の是非も、總て道德を標準として審判すべきものである。道德なるものは、其の內容も複雜であり、表示の狀態も時と處と對機とに依て一樣ならざるべきも、『敬』と『愛』との二大精神を離るゝことは出來ぬ。人類は實に共敬相愛に依て其の德相を莊嚴せらるべきものである。其の敬愛の表現したものが禮儀であり愛語である。

儒教の禮記には『凡そ人の人たる所以は禮儀なり、禮儀の始めは、容體を正うし顏色を齊へ辭令を順ふに在り、容體正しく顏色齊ひ辭令順ひ、而して後、禮儀備はり、以て君臣を正うし父子を親しみ長幼を和らぐ』と說てある。禮儀の本は敬と愛とで、此の敬愛が言語の上に發すれば愛語となる。禮儀と愛語と

類に對する場合も亦同じ。

然れども宗教的信念、即ち菩提心の莊嚴は、個々人々の心田地に向て開拓すべきものなれば、多數の大衆を集めて教義を宣布するが如きは、寧ろ第二義的の布教に屬す。第一義的布教は一人々々が對機である此の意味に於て、布教家たらんものは、何人に對しても、如何なる場合にても、隨時隨處に法を說き敎を敷きて心田開拓を圖るの覺悟が無ければならぬ。

佛教家に於ては、相當の準備の下に莊嚴なる儀式を整へ、高座または演壇に立て大勢を相手に講演するを以て布教と思うて居る向が多いので、布教の機會が甚だ少ないのである。一人一箇を對機とせば、寺參りの者に茶を進めながらも、葬祭の爲めに臨場せし際も、機會を捉ふることは易々たるのみ。立談坐說も亦不是あることなし。但だ此の場合、一言一句も自己の胸裡より流出し來るものでなければならぬ。戲論功をなさず、熱誠なく、信念なく、同情なく、慈悲なかりせば、決して布教の効果を奏することは出來ぬ。

されば、說教にせよ、講演にせよ、出來得る限り莊嚴を保持することに注意するを要す。燭臺の蠟燭が曲つても、香爐の線香が斜めになつて居ても、聽衆の心鏡には微細の陰影を投ずるものである。說教の場合は無論のこと、讃佛にせよ、陀羅尼の讀誦にせよ、鳴鼓鳴鐘にせよ、努めて綿密愼重なるを要す。加藤咄堂居士の講話に、「地方に講演して會場を出で、歸途に就きし時に、聽衆の歸り去るに逢ふが、寺堂講演の歸途には聽衆の顏容は多く脫帽して謝意を表す、學校に於て講演の歸途には多くは脫帽をせ

元來、宗教は民衆の全體に普及徹底せしめて、齊しく安心立命の法益を得しめねばならぬ。各地方に於ける因習的説教法話などには今猶ほ從前のまゝの、因緣話や和讃詠歌等を主として居る向もあるさうな。それでは到底現代人の滿足を得ざるのみか、却つて宗教に對して嫌厭の情を發するものである。人根に利鈍あつて十人十色であるから、布教もまた其の機類に順應せねばならぬ。今、布教の方式を大別すれば、

（一）有識の求道者に對しては、參禪會または講演會に依り、禪道の要義、佛教の妙諦を解説して研究の途路を開くこと。

（二）普通有識者に對しては、成るべく組織的理論的に禪道及佛教の勝義を説示して其の要領を領解せしむること。

（三）青年男子及女子に對しては、一般または各別に教筵を開き、堅實なる信念の開發と德性の涵養とに資すること。

（四）少年及幼年の子女に對しては最も平易に興味ある教義を説明し、德育を助長し宗教的信念を培養せしむべきこと。此際若し少年と幼年とを各別に集合せしむることを得ば、一層適切なるべし。

（五）智識に乏しき老爺老媼には、心意の平恬と處世的安心の方針を授け其の精神生活內容を饒益すること、軍人、官公吏、劇務に從事する人々には、適應の布教を施すべきは勿論とす、盲聾其の他特殊の機

對するが如きものである。宣宗皇帝が馬祖の法孫弘辯に對して「禪師既に祖意を會す、還て佛を禮し經を轉するや」と御問ありし時『沙門釋子佛を禮し經を轉す、蓋し是れ住持の常法なり』と御答した。惟ふに、唐宋時代に於ける禪門の宗匠も、その信仰態度は非常に綿密を極めたものであつたらうと思はれる。即ち佛を瞻仰し法を崇敬するに於て至れり盡せるものと察せられる。

丹霞の木佛を燒き無著が文殊の影現を打着せし話頭などに依りて、三寶敬重の念を失するあらば、寧ろ祖門の罪人である。吾人は飽までも佛法を護持する上に於て、又、自己を愼護するに於て常に宗教的敬重觀念を等閑にしてはならぬ。

布教の對機は個人に在り

或人が寺院に於て講演の際「佛教の講演または說教に老爺老媼が多い、老年などは來聽するに及ばぬ、今後は努めて青年を參聽せしめよ」と警告せられたことがある。此の警告は隨處に能く聞く話であるが、是れも餘りに極端のやうに思はれる。

禪門に於ては、禪定三昧を中心として即心即佛の理想を實現せんと期するのであるから、達磨西來後、唐宋に至る迄の禪風は、祇管打坐して默識神通に精進した。心外に佛を禮し法を求むるは求道の眞乘に非ず、直下に妄想を打破して心地の光明を開發せよと教へた。般若多羅尊者が東印度の國王に對して『貧道、出息衆緣に渉らず入息陰界に居せず、常に是の如きの經を轉ずること百千萬億卷』といはれし如く、全く佛教を體讀することを重んじた。

古來禪門の修證は是心是佛是法を原則とせり。故に、徒らに自己を閑却して佛を外方に望むは、是れ佛の影像を追ふ者にして、眞に佛を信ずる所以でない。佛心佛德を自己心中に影現して入我々入するこそ、眞の信仰なれといふのである。古今の禪匠が佛を呵し祖を罵るの禪機を拈弄せられたのも、皆な此の見地より出でたもので、是を以て最も佛に親近し奉侍し歸命する所以としたのである。古禪僧の如き、多くは皆な熱烈なる信仰を有して居られたことが窺はれる。

黄檗希運禪師、鹽官の會下に在り、一日禮拜す、時に後の宣宗帝逃潜して僧となり、同會に在り、黄檗に問うて曰く『吾れ聞く佛に着て求めず法に着て求めず僧に着て求めずと、和尚箇の何をか禮するや』、檗曰く『佛に着て求めず法に着て求めず僧に着て求めず、唯だ禮すること是の如し』、帝は『然らば禮佛の必要なきに非ずや』と問はれければ、檗は直ちに一掌を與へた。此等の話頭には頗る意味深長なるものがある。黄檗は至心に佛を禮した。されど其の禮佛の意中には何等の要求も希望もない。只だ孝子が慈父母を

に關係なきことでも、僧侶中に不始末の事があらば恰も自己の責任の如くに感じて、相共に惡弊陋習を矯正すべく努めねばならぬ。決して宗門の自派と他派を問ふべきではなく、全佛教を一佛家として相互に警戒し援護したいものと思ふ。

佛教は諸惡莫作衆善奉行の宗教である。轉迷開悟、離苦得樂の法門である。是は佛教僧徒の所有物の如く思うてはならぬ。予は決して僧徒を尊敬して欲しいとは言はぬ。佛教を尊重せられんことを切望する。僧徒を呼ぶに坊主の稱を以てするは甚だ宜しくない。坊主といへる語は決して侮蔑の語ではないが、今は習慣的に忌な感じがする。予は本師からやかましく注意されたことが身に泌みて、未だ曾て坊主といふ語を使うたことがない。然るに、世には僧侶その人が此の稱呼を亂發する。如何に情けないことならずや。世の中の人の口を閉ざすことは到底出來ぬことであるから、ならば坊主といふ語にも自然に尊敬の意味を含有する樣になるまで、宗教の權威を進めて貰ひたい。

全體、日本人は概して粗惡な言葉を使ふ陋習がある。甚しきは、自分の子を呼ぶに、野郎・餓鬼・うぬ・きさま・てめえ及び、こん畜生などある。議政壇上にすら、馬鹿野郎・たわけなどの惡語を聞く。自分の家族を呼ぶに、愚父・荊妻・豚兒なぞといふは謙讓の美德より發したものではあらうが、現代人としては、餘りに陋劣ならざる稱呼を定めて普及を圖りたいものである。少しく御話しが岐路に入つたが、願くは佛教に對する、敬重觀念を普及せしめたきものである。

すべし、違ひ棚に置きては飾り物の扱になりて恐れ多し」といはれたさうであつた。

先生は極めて眞面目な信者で、予に向ても、自分の擔任して居る東京醫專では、明徳會といふを設け、毎月、佛教講話を開催し全生徒に聽講せしむ、『御本尊は教育勅語と佛法僧三寶であるが唯だ教理を聽受せしのみでは徹底せぬ。全部の職員生徒が皆な念珠を持ち法悦の境に入らねばならぬ、そこで、今は職員にも生徒にも皆數珠を持たせることにした』といはれた。先生の門下より出でし東京愛宕下樋口病院々長樋口繁次博士は、毎月二回、佛教講話會を開き、職員・看護婦・産婆等、差支の無い限りは聽講せしめ、前後十分間づゝ靜坐を行なひ、教育勅語を奉讀し、三歸禮文を讀誦することにして居られる。

今後は僧侶の衣鉢風態にも大に愼重なる注意と研究とを要する。だらしの無い風態などでは、到底、教化の効は奏せられぬ。從つて儀式・奏樂・唄讃・誦經等は精々尊嚴を傷つけぬ樣にせねばならぬ。之と同時に、世間一般の人々にも宗教を尊重する觀念を失はれぬやうに致したいと思ふ。故に予は常に敬重は最上の莊嚴なりと信じて居る。

佛教僧侶の中に、宗教家として相應しからぬ態度や、風姿や、儀禮のあることは大に嘆かはしい。又、社會の風教を害する不如法の言動をなす者もあるであらう。多數の僧侶なれば、其の盡くを純化し淨化する事は出來得ないことであるが、斯る僧侶があればとて、佛教そのものゝ罪とも言はれず、宗教そのものゝ責とのみはいはれず、だが、僧を惡んで袈裟に及ぶは人の感情であるから、僧侶としては、縱ひ自身

きいか。

凡そ何事でも、自ら侮つて而して後に他の侮りを招く。我が佛教の如きも、僧侶自身が常に三寶を敬重し法儀を崇信せねばならぬ。是に於てか、殿堂の莊嚴、佛像法器の安排には、十分の注意を拂はねばならぬ。佛殿に詣づる時の如き、若し佛像にして其の形像正しからず、若しくは法器蓮座に損傷あるに於ては、決して敬虔なる信念は生ぜぬものである。佛體を陳列する堂閣でも、單に展覽に供するといふ意味だけでは何等宗教上の感化は受け得られぬ。靈佛靈場の縁起を説明する場合にも、熱も無く信も無く蓄音機的に説明する分にては、せつかく兆し來りし信仰心すらも消散して了ふものである。況や墓地や境内に安置する地藏菩薩の頭が取れて小石を載せて置くとか、錫杖も蓮座も毀はれたまゝに放任して置くが如きは、寧ろ信仰心を減殺するものである。

防州富田町なる前貴族院議員逆渡權治君は篤信の君子である。予が曾て德山町の別莊を拜宿せし時の御話しに、先年、高木敏實先生が寄杖せられし時、何れも篤信家でありし爲め御話しも能く合ひ、先生も大滿悦でありしが、別れに臨んで「此の別莊は如何にも瀟洒にして少しも申分は無いが、たつた一つ君の別莊としては氣に入らぬことがある」といはれた。無遠慮なる先生の言なれど、如何にも意味ありげに聞いたので、扨て何んであらうかと思うて見た結果、觀音大士の銅像を違ひ棚に安置してありしに心附き、「先生是れでは無いか」と申すと、先生は「それ〳〵觀音大士は大悲の菩薩である、宜しく床の間の正面に奉安

成るべく僧侶といふ資格を匿すといふ風があつた。

明治二十二三年の頃、予が今の駒澤大學の前身たる麻布日ケ窪の曹洞宗大學に奉職の頃、暑中休暇の際、留守居役を勤めし折、或日、本郷より、雲水笠を被り麻衣を纏ひ、徒歩銀座を通り、餘りに渇きを感ぜし爲め氷水店に入りて店頭に腰を掛けしが、女中達が不思議さうに眺めて居て、一向に氷を持つて來ない。そこで懷中よりお錢を出して催促せしに、始めて是れは失禮しましたというて一杯を與へくれたことを覺えて居る。

其の頃は、帝國大學などに在學の僧侶たちは、その名字に禪とか佛とか祖とか悟とかいふ字があると、故らに善・物・素・梧などの文字に換へて名刺を製した者すらあつた。排佛棄釋の眞最中でも、雲照律師・奕堂禪師・楳仙禪師・行誡上人といふ樣な碩德は嚴然として古風を守られたが、爲めに一層信者崇敬の標的となつて居つた。時勢の大變動とは申しながら、佛教家自身が己れを輕んじ法の尊嚴を傷つけたのである。

今日でも、各地を巡錫して感ずることであるが、路傍に遊び居る兒童の語を聞いて、粗ぼ其の地の宗教狀態を察することが出來るやうに思はれる。新潟縣・富山縣などでは、僧侶を見て、和尙さま、方丈さま、お寺さまなどと呼ぶ。愛知縣などでは、御坊さま、和尙さんなどと呼ぶ。關東などは多く坊主坊主と呼ぶやうである。此等は些々たる問題なるが如きも、宗教の權威といふ點よりは一考すべきことではある

すら、入口の飾物として佛像を安置して居る者すら見受られる。何たる宗教の冒瀆であらうぞ、米國なぞに於て、基督や聖母や、其の他、靈像聖畫に對し、あんな取扱をしたならば、社會は重大なる問題として、決して之を看過せぬであらう。然るに日本では、佛教家も殆ど傍觀の位地に立ち、政府も何等干渉を試みず、社會も亦た之を放任して居ることは、如何にしても了解し能はぬ』といふのであつた。予も、如何にも尤も千萬なる疑問であると思うた。

又、予の渡米せし當時、桑港本派本願寺開教監督は内田晃融師（今は歸朝して現に本願寺の重役たり）で、予の巡錫に多大の便宜を與へられ、一方ならざる優遇を賜はつた。師が一日、慨然として言はるゝには『日本では、演劇にせよ、活動寫眞にせよ、僧侶の出る場合は御話にならぬ醜状が多い。弘法大師・親鸞上人・日蓮上人の行狀や、苅萱道心などの類は宜しいが、大概は僧侶が出ると、輕卒で、滑稽で、權威などは少しも認められぬ。吾々は平素熱心に布教し、日曜學校や幼稚園に於ても、佛教の神聖を開示して信念の涵養に努めて居るが、一度、内地から來りし演劇や活動寫眞に於て僧侶の出る場面があると、平生の布教傳道も全く其の効果を喪失するの觀がある』と申された。是れは第一我が國に於て概して佛教に對する崇敬の念が甚だ薄弱であるのみならず、寧ろ之を侮蔑するの風が存在して居る所より、佛像を飾物としたり、玩具あつかひにしたりしても自他共に之を怪まぬ様になつたものと思ふ。是の如き原因は、明治維新の廢佛毀釋の運動に根ざし、一時は僧尼を以て不淨の者と同一視したるより、僧侶の中にも

る。然るに、動もすれば、利己的感情に囚はれて、國民道德の大本を忘れたり、奢侈贅澤に流れたり、甚だしきは外來の惡思想に感染して國家を輕視し、國法を無視する樣な恐ろしい考を抱く者すらあるといふは、實に情け無いことである。故に、吾々は非常なる覺悟を以て此の五濁の世を廓淸し、五淨國の建設を以て絕對的天職とせねばならぬ。而して、是れがやがて國民の最大義務にして、佛教本來の大精神である。

宗教に對する敬重觀念

予が曾て米國に巡錫せし時、同地二三の紳士より下の如き質問を受けたことがある。それは、「日本は國民の大部分が佛教信者である、信仰頽廢せしといはれる今日でも、猶ほ佛教には深き因緣關係を有して、自他共に檀家とか檀徒とか稱して居る。故に日本は佛教國といふことに異論は無い。然るに、國民の佛教に對する態度の不遜不謹愼なることは、吾々外國人として甚だ怪訝に堪へぬ。其の事例を擧ぐれば、東京の市街を眺めても、佛教徒の歸崇する佛像菩薩像などが、古道具屋とか夜の露店などに不規律に陳列せられ、甚だしきは、煙草盆や鐵瓶や簞笥や針箱などと一處にしてあるのを見た。堂々たる紳士の邸宅で

氣も、節操も、皆な之より生ず。心迷へば地獄を造り、心悟れば淨土を現す、故に『わが心われと折々かへりみよ知らずくも迷ふことあり』といふ御誡めの御製がある。又の御製に『まなびやに入りにし日よりうなゐ子がものいひさへもかはりけるかな』と詠じたまひしを拜しても、如何に教化修養の大切であるかゞ感ぜられる。

次は身體の淨化である。淨化といふは身體を鍛錬して健康を增進し、四肢五體ともに完全に發達することである。廣い意味からいへば、單に健康無病といふ計りでなく、眼でも耳でも、手でも足でも、人間としての能力を十分に發揮するのが眞の健康である。御製にも『心からそこなふこともなくもがな親のかたみと思ふべき身を』と御諭したまひし如く、身體の健全なるは孝道の初めである。

次に時代の淨化、是れは科學及び宗教等の力に依りて、天變地災を防ぎ、自然界を利用し善用して、人類生活の安定と向上とを圖ることとである。よく『自然を征服する』といふ語があれど、征服といふのは餘り穩かな語ではない。要するに自然を利用し善用して、人間の生活に順應せしめ、人間生活を向上せしめて、文化的理想の實現せる時代を造るのが淨化である。

今や我が帝國は、恰も登り坂の中途に步を進めて居る樣なもので、內治も外交も頗る困難の位地に立つて居る。外國には排日の聲が聞え、內地には階級鬪爭が喧しい。政治・經濟、何れの方面も皆な不安の狀態を呈して居る。是れ實に國民一致して、國家を擁護し、國運の發展に奮勵努力すべき重要なる時機であ

よ、萬事萬端の上に、常に正しき道を辿るのが國家の品位を高むる所以である。

次には思想の淨化、根本的知識の充實が肝要である。輕佻詭激に傾き易き思想界の懦弱は、實に恐るべきことである。御製に『千早振神の御代より一筋の道をふむこそうれしかりけれ』と御詠じあそばされし如く、我國には神代の昔より幾千年を通じて錬り上げたる傳統的大精神がある。此の大精神は決して島國的狹量な精神ではない、入ては忠君愛國の誠となり、出ては慈悲博愛の德となるべき正義人道の總府である。此の總府を開いて大道德の如意寶珠を運出するのが根本智の妙用である。

次には精神の淨化に最善の努力を拂ふべきである。吾々は先天的に欲望性と反抗性と執着性とを有して居る。欲望性を放逸にする時は、財を貪り、色に溺れ、虛名を漁り、酒食に耽り、怠惰惰弱に陷るのであるが、之に施すに訓練を以てすれば、遠大なる志望ともなり、高遠なる理想をも招來して、自づから活動の源泉となる。反抗性を恣にすれば、憤怒の情に驅られ、殘虐の性を馴致し、怨恨憎嫉底止する所なきに至るが、若し施すに修養を以てすれば、抵抗力を强め、剛健の氣を高め、孟子の所謂自ら反みて直くんば、千萬人と雖も敢て恐るゝ所なきに至る。又、執着性を放任し去らば、癡情に陷り、邪執に囚はれて、狂亂狀態となるであらう。彼の色情狂の如き妄想狂の如き、精神錯雜者の如き、多くは愚痴の致す所にして、執着性に起因するのである。若し之を訓錬するに宜しきを得ば、此の執着性が無限大の慈悲ともなり、熱烈なる信念ともなりて、研究心を高め、發明力を進む。諸佛の大願力、菩薩の大慈悲力、聖賢の志

せられたが、此の剛健性を鍛錬するには是非とも體力の發達を圖らねばならぬ。

最後に劫濁とは、劫は劫波と稱し時分と譯す。で、劫濁とは即ち自然界の障礙のことである。昨年の大震災の如きは最も不可抗の地變であるが、之に伴ふ大火災の如きは必ずしも不可抗力とのみは言はれぬ。平素の不用意と其の不注意とが自然界の魔力をして幾百倍ならしめて居るのである。自然力の脅威は多くの場合、人力の得て救ふべからざる者あるも、猶ほ人智の發達に伴なふ施設と用意とに依りて之を輕減することが出來る。更に宗教觀よりすれば、國民の道徳が向上して國家が昇平になれば、天祐神助ありて、自づから災害を免かるべき道理もあるのである。

以上の五濁は、言ひ換れば、社會的、思想的、道徳的、衛生的の缺陷及び國家治安の施設の上の缺陷から煩悶を生じ、罪惡を犯して、眞正なる文化の發展を阻害し、國民生活の上にも不安を感じ苦痛を感ずることをいふのである。

此の五濁世界を改善して五淨の國土を建設するのは、吾々各自の本務であり使命である。佛教の目的も亦た自づから此の中に存するのである。

故に、先づ第一には衆生界を淨化せねばならぬ。即ち社會の風紀を廓正し、國民の行動を改善し、品行の正しい、禮讓の篤い、紀律の整うたる社會を造ることに努力すべきである。明治天皇の御製に「ならび行く人にはよしやおくるとも正しき道を踏みたがへそ」といふ御教訓がある。政治にせよ、實業にせ

惡を惡とするの判斷力があつても、それを實行するの力なき者は眞の知識とは言はれぬ。佐藤一齋翁は、『今の學者は隘に失せずして博に失し、陋に失せずして通に失す』と言うたが、現代の教育も亦た横幅の博い割に奥行が淺い。融通は利くが落着きが無いといふ樣な嫌がある。そこで、比較的に知識のある者が餘計に惡戯をして、從つて不正事件も大きい樣である。是れは根本智の缺陷が主因であらうと思ふ。根本智開發には、修身教育の外に宗教々育も必要であるのは言ふまでも無い。

次に煩惱濁とは精神の墮落である。前の見濁は知識の缺陷であるが煩惱濁は主に情の不健全に屬する。近頃は節操を重んずるとか、恩義に感ずるとかいふ美徳が薄らいで、知らず〳〵放縱に流れ、本能の滿足を以て幸福の享有であるとするに至つた。爲めに或は非理の欲望を起し、或は怨恨憎嫉の情に役せられ、若くは愚痴狂亂の醜態を演ずる者が、日々に社會を騷がして居る。

次に命濁とは體育保健上の缺點である。國民の體力增進は盛んに奬勵せられて居るが、猶ほ良成績を收め得たとは言はれぬ。醫學博士金杉英五郎氏が先年衆議院に於ける演說には、我が國は幼兒及び壯丁の死亡率が甚だしく增加して、世界三十一箇國中、下から四番目に當つて居る、二十年以前までは下から十番目であつたが、今日では一層不成績を呈して居るといつてゐる。我國より下なるは智利と露國と暹羅であるさうな。天然痘の如き傳染病も歐米よりは驅逐せられてゐるが、我國では猶ほ猛威を振うて居ると金杉氏はいつてゐた。昨年(大正十二年)十一月の御詔書には『國家興隆の本は國民精神の剛健に在り』と仰

釋尊は曾て此の世を「五濁惡世」と稱せられたが、是れは此の世の缺點弱點を指摘して吾々に自覺を與へ、一轉して此の濁惡の世を淨化し浄らしめんとの敎訓である。而して釋尊滅後三千年、今猶ほ依然として世は五濁の醜惡を呈して居る。

五濁の濁は醜劣の意で、善美を意味する淨の反對である。文明とか文化とかいふも、畢竟、人の世を開發して、醜陋より優美に、僞巧より眞實に、劣惡より善良に進ましむることとである。政治も、經濟も、宗敎も、敎育も、歸する所は、五濁世界を轉じて五淨國土を建設するに在らねばならぬ。五濁とは衆生濁と見濁と煩惱濁と命濁と劫濁とである。

衆生濁とは人類行爲の上の醜惡である。試に現代の社會相を觀るに、人類諸般の行爲は皆な醜惡である。言論も動作も決して善良とは稱せられぬ。尤も、中には立派な實行も無きには非ざれども、之を道德的又は宗敎的に、嚴格に批判し去つたならば、俯仰天地に愧ぢずといふ樣な行爲なりと許さるゝものが、果してどれだけ有るであらう。群衆の間には色々の爭議が起り、不正事件を生じ、不平不滿の聲は絕間なく響いて居る。個人々々の上では、奢侈の風、虛榮の弊が現はれて、其の品行も大體に於て甚だ亂れ勝である。

次に見濁とは知識上の缺點である。知識には根本的知識と應用的知識とがある。現代は主に應用の知識、卽ち科學的知識が盛んに啓發せられて居るが、修身の敎、治心の道が比較的微力である。善を善とし

の讀經も、幾萬返の念佛も、香華の淨供も、茶湯の盛饌も、一場の戯論と化し去るであらう。況や諸佛菩薩を供養し、死者の冥福を資助するが如きは、實に容易ならざる典儀である。只だ信念と至誠との力のみが幽明交感の道である。佛祖に事へる者はよく〳〵此の點に注意せねばならぬ。

予は布薩や諸講式を行ふ毎に、古人が如何に信仰が熱烈であつて敬虔の情が深かりしかを思惟して、感涙の胸に溢るゝを覺ゆるのである。然るに、此等の行法を輕視し嘲笑する者の如きは、實に情け無いことと感ぜられる。されど、其の行法が實際今人の機根に副はぬ節が多いから、現代的宗教意識を啓發するの效果が薄いのである。さればとて、行法儀禮を廢することは斷じて不可能であるから、古人の信仰と敬虔の至誠とを基調として、其の形式を改良するの必要を感ずるのである。

其の他一切の莊嚴も、宗教の神聖と信仰の充實とを土臺として、適當の改正を施すが宜いと思ふ。一切の莊嚴は信仰の發露であるが、その莊嚴がまた信仰を開發し助長するものである。作法是宗旨、威儀卽佛法である。

五濁惡世といふ言葉

されは、佛教本来の精神から申せば『一樹下石上是れ道場、語默動静總に佛事』である、何ぞ必ずしも殿堂を要せん、また何ぞ必ずしも煩瑣なる作法に拘はるべきであるが、併し是れは、上根上機の人に非されば能はず、一般人を攝取して静かに信念を養ひ、正法を聽受し參學せしめんには、必ずや相當の形式に依らねばならぬことは事實の證明する所である。但だ殿堂にせよ行法にせよ、能く現代人の心理を考察し、時機相應の方法に依らねばならぬことは當然である。此の意味に於て現存の堂塔伽藍の如きも、努めて之を活用し善用して、住持三寶、教化民衆の道場たる眞價を發揮せねばならぬ。將來、新築する場合の如きは、よく〳〵時代思想を考察して、宗教の尊嚴と民衆の便宜とを併せ全うする様に致したく思ふ。

又、法式の如きは最も大切なる儀禮にして、宗教上缺くべからざる行持である。但し其の法式は、徹頭徹尾、宗教的精神の充實したる信仰の表現でなければならぬ。從前は、僧侶が主として之を勤行し、檀徒信徒は之を傍觀するのみで、何の意味やら、何の經典やら、不可解の間に參詣して居るといふ狀態であつた。今後は、出來る限り民衆をも勤行の列に加へて、僧俗一致して、三寶の功德を讃美し各自の信念を表白する様に致したい。從つて其の法式も通常の場合は、成るべく冗長に渉らず煩瑣を避け、簡明適切にして、始めより終に至るまで精神の充實を期すべきである。

此の勤行に列する者は、胸中一切の妄念邪想を淨除して、專心一意、佛陀の聖教を畏こみ、佛陀の慈悲を仰ぎ、其の感應と攝取とを願求し、感謝の報恩の誠を以て勤むべきである。若し然らずんば、幾十回

て、僅かに慣習的信仰を滿足せしむるに過ぎず、其の行法も、讀經も、大部分は徒らに舊慣に從ふのみであるから、國民の中堅たる青壯年者を感化するの效果が現はれぬ。而も是に對して何等の改良をも加へず、又、新らしき方法をも講せず、行法の役者たる僧侶もまた舊慣に甘んじて、敢て燃ゆるが如き熱情にも信念にも乏しいといふ有樣であるから、莊嚴なる殿堂も形骸を擁する樣に感ぜられ、森嚴なる法式も告朔の餼羊の如くに感ずる樣になつたのである。

元來、莊嚴は信仰の發露であると同時に、信仰は莊嚴に依て一層涵養せられ精錬せらるゝものであるから、殿堂といひ、行法といひ、裝飾といひ、何れも斷じて輕視すべきものでもなければ、廢止すべきものでもない。要する所は、内容の充實、信念の流露、宗教的精神の活動を主とせねばならぬ。故に殿堂の樣式も、法式の儀禮、禮佛誦經の作法も、時代の趨勢に鑑み、佛禮の規繩たる眞精神を體し、穩當なる改良を施すが宜いと思ふ。

予は常に『身體の赤裸々となつたのが家庭で、精神の赤裸々となるのが信仰である』と說て居る。家庭内では、老人も子供も、男子も女子も、皆な和合して一體同心となつた處に團欒たる樂しみが味はれる。軍人もサーベルを片付け、學者も理智の衣を脫ぎ去り、商人も損德を忘れ、政客も政策を忘れて素裸になればこそ、七十の老人と三歲の兒童とが抱き合うて樂しまれる。宗教的信仰の門に入りし時に、喜怒哀樂も順逆是非も打忘れ、虛心坦懷、只々法悅三昧となるのは精神の赤裸である。

信は莊嚴より生ず

佛教は古來より儀禮を崇び作法を重んずる所より、殿堂の樣式、行法の綿密、道場の莊飾等、それ〴〵細緻を存して居る、是を莊嚴といふ。然るに時代の推移に從ひ、其の樣式も行法も、一般民衆の宗教感情に適應せざる者が少なからぬ樣になつて來た。そこで近年は著しく殿堂を無用視したり、行法を輕蔑したり、所有裝飾や形式を呪ふ樣になつた。是れも時代的宗教觀として、大に考慮し且つ反省せねばならぬ。

外宗教は暫く措き、我が佛教に於ける莊嚴は、殿堂の樣式も、行法の威儀も、皆な熱烈なる信念の發露ならざるは無い。壯大なる伽藍も、三寶を瞻仰し多數の信者を聚合し、見佛聞法の勝縁を結ぶの必要より構成せられたもので、其の内部の設備や裝飾も、一般民衆の宗教的感情を滿足せしむる爲めに裝置せられ、行法も儀禮も總て信仰の流露である。

然るに、時代の推移に連れて種々の缺點を生じ、廣濶なる殿堂を有するも、之を運用するの力なくして、門前雀羅を張り堂内は蛛網に充たされ、偶々法會を營み教筵を開くも、詣衆の多くは村翁野嫗にし

己れの口腹を飽かしむるが如き欲念はあるまいと思ふ。その代り精進の調理法も十分研究して、成るべく好味に喫し得られる樣にするが宜い。

尚ほ葬祭の折など、時間があらば、佛教の御話しでも、法話說教でも致して、生死の問題、弔靈の觀念等をして一層奧深く涵養せんことを期するもまた望ましきことである。又、その死者に善言嘉行の見るべきもの傳ふべきものあらば、それを語り合ふも宜しからう。近頃は人事多忙の爲めでもあらうが、多少誠意の缺ける樣な事が見受けられる。儀式は其の土地に依りては簡單にするも宜しいが、能所共に誠意の籠もつた態度が望ましいと思ふ。縱ひ見ず知らずの他人でも、途中にて葬列に逢うたり、又は葬列を出す家の前を通行したりする場合は、一寸足をとめて禮を行ふ樣に致したいものである。

梵網經には不修福慧戒の本文中に、『若し疾病國難賊難父母兄弟和尚阿闍梨亡滅の日、及び三七日四五七日乃至七七日にも亦た應に大乘の經律を講說すべし、(乃至)多淫多瞋多愚癡多疾病にも皆な應に此の經律を讀誦し講說すべし』と說いてある。此等の經旨をも翫味して意義ある葬祭を勤修し、葬祭上にも佛教の精神が光輝を放つ樣にありたいものである。

濟を仰ぎて亡靈に回向し、亡靈に代はりて淨供を設け、其の功徳を回らして亡靈に致すのである。その亡靈なる者は、多くは既に他に轉生して居るであらう、されども、此の大信念を以て、至誠、菩提を弔ふ時は、其の功徳は轉生せる靈にまでも通じて、報土を莊嚴するものと信ずるのである。故に葬祭ともに、不滅の靈を對象として法語を唱へ、又は經典を讀誦するのである。從て葬儀讀經の際は、餘念を交へず戲論に流らず、渾身に誠意を充たして勤行せねばならぬ。要するに佛式葬祭は、遺族または子孫として、祖考または先亡に報ゆる倫理的至情と、其の冥福を資助すべき宗教的信念とが一致したる、最も意義深き行事である。施主家たる方々も此の意義を存して、至誠眞實の念を捧ぐべきであるが、取り分け葬儀を勤修する僧侶は、最も敬虔の至情を以てせねばならぬ。聊かでも戲論に落ちたり餘念を交へたりしてはならぬ。不滅の大生命の實在することを信じ、業力の相續を信じ、佛陀救濟の大願力を信じ、心靈感應の妙機あることを信じ、滿腔の熱情を以て精靈に對する、こゝに佛教の妙致が存することゝ思ふ。

就ては、其の儀式を冒瀆する樣なことは斷じて避けねばならぬ。葬祭の折に酒類を用ゐて醉態を現はす事などは甚だ宜しくない。齋供を設くる場合にても、成るべくは精進にされたいと思ふ。魚鳥の肉を喫することは、人間生活として止むを得ざることではあるが、魚鳥の生命を奪ひ其の肉を食して美味なりと稱するが如きは、實に動物愛ある者の所作とは申されぬ。せめて葬祭の折なりとも魚鳥の肉を食まず、博愛の生活を實現したならばと思はれる。會葬者、又は佛事の參列者にしても、なにも葬祭等の席に臨んで

葬祭ともに誠意の溢れた御儀式が行はせられた。從て一般臣民も、葬祭には極めて嚴肅なる儀式を務めたことゝ思ふ。

元來、我國では、古より神靈の實在を信じて居るに依つて、葬祭ともに眞に生者に事ふるが如くに行うたのである。卽ち故人として祭るのではなく、冥界の現人として崇敬したので、敬神齋靈の大禮も此の信念より發したのである。佛教の傳來するに及び、心靈問題や未來觀念が一層明確に信ぜらるゝに至りて、葬祭共に其の觀念が益々深まつて來たことは言ふまでも無い。殊に佛教では不滅の一大生命あることを高唱して居る。淺薄なる心靈觀に言ふが如き、靈魂といへる一種の固形體が存して居るものとは言はぬが、決して物質と共に滅無に歸するものとは許さぬ。未來の果報は、業力の相續に依つて現ると說く、其の果報には善報あり惡報あり、苦樂昇沈、千態萬狀である。是に依て天堂・地獄・淨土・穢土、各々其の果報を同じうせぬ。故に佛教は、生者を救濟すると同時に、死者に對しても其の業繫を解脫して菩提を莊嚴すべく、三寶の威德を迎請し、其の慈光を仰ぎて回向をなすのである。

是の如く、佛教に於て、葬儀の際に經典を讀誦し佛名を唱禮するは、單に告別の意味ではなく、靈位の爲めに正法聞持佛光加被の功德を與ふるのであるから、最も神聖にして且つ尊嚴を極めたる儀式と謂はねばならぬ。死者に對して經を讀むは木石に向つて音樂を聞かしむるも同然なりと思ふが如きは、佛教の信念を無視したる妄見邪見たるに過ぎぬ。忌日命日に當りて經を讀み供を設くるが如きも、一面には佛の慈

を悲しまさらん、誰か別れを惜まさらん、如何に悲しむとも之を如何ともする能はず、所謂「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者」である。如何に惜しむとも逝く者は再び歸らぬ。苟も人情ある者として、其の遺體を葬るに哀戚の誠を致さずには居られぬ譯である。又、死後年月を經過するとも、その命日忌日には追懷の情を捧げて、相當の祭儀を行なはずには居られぬ。是れ人情の自然である。若し其の死をも惜まず、遺體を遇するに敬虔の心を存せず、忌日命日に當りても猶ほ且つ追遠の念をも生ぜずとせば、是れ果して人間としての心操といはれませうか。

葬祭の儀式に就ては、古來より支那が一番嚴密なる儀節を行うて居るかと思ふ。今日はどうか知らぬが、禮記などを見ると、非常に細かな禮法が示されてある。我國でも幾分、支那の禮が採容せられて居るものと思はれる。併し、我國では天照大神の時、既に齋服の御事があつた。大神御親ら神衣を織らせたまうて齋服殿に居たまうた。山鹿素行の中朝事實にも「是れ天神を祭祀するの義なり、祭祀の說なしと雖も、既に神衣と曰ひ、既に齋服殿と云ふ、則ち神自ら之を織り以て神明に供ふるなり」とある。高皇産靈尊も「吾は則ち天津神籬及び天津磐境を起し樹てゝ、當に吾孫の爲めに齋ひ奉らん」云々と勅せられた。神武天皇もまた御親ら靈畤を鳥見の山中に起て、皇祖天神を祭りたまひ「我が皇祖の靈、天より降鑒して朕が躬を光し助く、今諸虜已に平ぎ海内無事なり、以て天神を郊祀りて用て大孝を申ぶべし」と詔らせたまうた。是れ實に報本反始の盛典、祖先崇拜の本元である。歷代の御皇室に於かせられても、

定に安住すべく精進するこそ望ましけれ。

佛式葬祭の意義

古は、葬儀にも弔祭にも、佛者は餘り關係を有せなんだが、近世に至り、葬祭は佛教僧侶の手に依つて、其の式が行はれ、今日に於ては葬祭が寺院の重要なる役目たるの觀がある。故に、寺院僧侶といへば直ぐ葬祭を聯想せられ、甚しきは、僧侶の業務と認められるといふ狀態である。そして其の葬祭の儀が、一部の人よりは賤しめらるゝ樣に感ぜられるは、甚だ遺憾なことゝ思ふ。

葬祭は人事上最も重要なる儀式の一である。僧侶が其の檀徒及び信徒に對して、佛教の精神に基きて如法に之を修するは、是れ宗教上相應の勤行にして、寧ろ宗教家として檀徒及び信徒に酬ゆる大義務の一といふべきである。尤も、葬祭は宗教家の本職ではない、化導上の一部の法務に過ぎざることは言ふまでも無い。若し葬祭を以て寺院の本職と思うたならば、是れ自ら宗教家たるの天職を沒却したるものと言はねばならぬ。

夫れ葬祭は人道上の大禮である。父母、若くは祖父母、又は家族が一朝にして死す、人情として誰か之

昔は白隱禪師十六歳の時、法華經を拜閲するに、唯有一乘諸法云々の文の外は皆因緣譬喩であるので、卷を掩うて慨嘆し、『此經功德あらば諸子百家謠曲妓典の類も亦功德あらむ』というたが、四十二歳の時、再び法華經を讀み、譬喩品に至りて豁然として省悟し、此より大自在を得たとある。此等の因緣も深く翫味し且つ參究せねばならぬ。

信心清淨ならば卽ち實相を生ず、南無の二字だけでも、之を誦し之を唱ふれば、衆魔便りを得ず、身心共に調適し、信念光りを放ち德性また從つて長養することを得るものである。只だ信念もなく誠心もなく、鉢敲目や浮調子で讀んでは經典を冒瀆するの罪は免かれぬ。誦經者は能く心得置かねばならぬ。

故に禪門としては、經典の心讀法を知らねばならぬ。心讀とは卽ち禪讀である。般若多羅尊者が東印度國王の請に赴かれた時、佛をも禮せず、經をも讀まず、只だ默々として端坐して居られた。國王は大に怪み、なぜ『看經せられざるや』と問はれし時、尊者は『貧道、入息陰界に居せず出息衆緣に涉らず、常に如是の經を轉ずること百千萬億卷』と答へられた。是れ卽ち無字の誦經、卽ち心讀である。常濟大師は

夫れ修多羅を誦すること、必ずしも口に誦し手に取るを以て轉經とのみすべからず、仔細に佛祖屋裡にして徒らに聲色の中に功夫せず無明腦中に行履せず、所々に智慧發生し時々心地開明して須らく修多羅を誦すべし

と御示し下された。是れ卽ち誦經三昧の第一義門を開破せられたのであるから、誦經者は進んで此の心讀

甚だ深きゆゑに、昔し既にありき、今の世になからんや、最も哀れむべし

と御誡めなされてある。されば誦經の時は、一言一句の上にも道眼を注ぎ、佛意を體得せんと心懸くべし。若し經旨を知ること能はざる者は、信心至誠の思ひを凝らして、一字一字が如來の法身なりと觀じて餘念を雜へず妄心を存せず、一向一心に讀誦し奉るべきである。信心と至誠、是れ實に誦經者の生命である。

首楞嚴神咒の如き、多くの天部及び鬼神の名を擧げ、無數の災厄を淨除するの意味があるから、多神的祈禱の如くであるが、その諸天鬼神も皆な佛の威德の化身と觀じ、正法眼を以て之を觀來れば、やはり一大佛心の光明である。故に經には、

十方の如來此咒心に因て無上正徧知を成することを得たり、十方の如來此咒心を執て諸魔を降伏し諸々の外道を制せり、十方の如來此咒心に乘じて寶蓮華に坐し微塵國に應ず、十方の如來此咒心を含て微塵國に入て大法輪を轉ず云々

と說てある。又、大悲心陀羅尼の如きも、其の本經は、どちかといへば密部の事相に屬して、如何にも神秘的なれども、畢竟、觀世音菩薩の威德神通を讃仰し、歸敬の方法を示されたのである。其の陀羅尼の譯語を拜すると無限の妙趣あることが感ぜられる。唯だ大信心を發して佛心に相應し去らば、此の神咒、此の陀羅尼、皆な以て佛陀の靈光と謂ふべきである。

申し傳へてある。宋初の永明延壽禪師などは經呪を誦し念佛をも唱へられたが、是れは無論一般の禪風では無かつたのである。要するに、禪門に於て誦經の盛んになりしは、一面、禪風の衰微とも見ることが出來る。

併し現今に於ては、誦經は佛弟子の常行となつて居るから、最早、達磨時代に復古することは不可能である。又、必ずしも復古すべき理由は無い。故に前に述べたる如き、甚大の功徳を得る樣な意義のある誦經法を修習することが大切である。それで確實なる大信念を獲得して、至誠と熱涙とを以て經典を讀誦せねばならぬ。若し至誠も無く信念も無く、所謂浮の空にて誦經するが如きは、獨り其の功徳を失却するのみに非ず、却て罪過を招くことを免れぬ。故に高祖大師は、

又讀經念佛等のつとめに得る所の功徳を汝知るや否や、唯だ舌を動かし聲を揚るを佛事功徳と思へるいとはかなし、佛法に擬するに轉た遙く彌々遙なり、又經書を披くことは佛頓漸修行の儀則を敎へおけるを明らめ知り、敎の如く修行すれば必ず證をとらしめんとなり、徒らに思量念度を費して、菩提を得る功徳を擬せんとにあらぬなり、愚かに千萬誦の口業を繁りにして佛道に到らんとするは、猶ほ是れ轅を北にして越に向はんと思はんが如し、又圓孔に方木を入れんとせんに同じ、文を見ながら修する道に昧き、それ醫方を見る人の合藥を忘れん、何の益かあらん、口聲をひまなくせる春の田の蛙の晝夜に鳴くが如し、遂に又益なし、況や深く名利に惑はさるゝやから、これらの事を捨て難し、それ利貪の心

佛は、法寶の相續、若くは廣宣流布の方法として、受持と讀誦と解說と書寫との四則を勸示せられて居る。經典を讀誦することは釋尊の時代より行はれて居つたのである。尤も、現に吾々の讀誦する所の經文は、皆な釋尊の滅後に編輯記述したるものであるから、釋尊の御在世には、佛の說きたまへる伽陀・偈・要文・讚仰歌等を讀誦したのである。佛滅後に於て漸く佛及び菩薩方の說法を具體的に編述して、今日傳ふるが如き經典となつたのであるから、一切の經典は皆な佛意の顯現と拜すべきものである。されば吾々佛弟子たる者は、經典の文字章句は、悉く如來の法身舍利として恭敬讚歎せねばならぬ。

誦經の功德には甚大なるものがある。第一は誦經に依つて佛意を領解し、以て自己の信念を培養し修道の指針となす事、誦經に依りて三寶の加被力に浴すること、誦經に依つて罪障を消滅し幽明二界の衆生に佛陀大慈悲の靈感を與ふること等の大功德がある。且つ誦經の時に自己の全身心を佛典の中に投歸し去る時は、誦經も亦三昧である。

禪門に於ては、達磨以後、唐宋に至るまでは幾ど誦經はせなんだやうに思はれる。百丈清規には諷經や祈禱の行法もあるが、是れも臨時の法要であつたらしい。唯だ供養の施主ある時は、その施主の爲めに摩訶般若波羅蜜を念ぜしむる事などがあつたが、普通は打成一片端坐三昧であつたものと見える。

後に僧侶の數も多くなるに從ひ、修行の未熟なる者や道念の乏しき者も追々殖えて來たので、虛く信施の併養を受くるは慚愧の至りであるといふので、眞歇禪師の時、夏中楞嚴會の法要を行なはしめられたと

頂かず、背骨弓の如くなる老軀を意とせず、甎上に苔を乾して居つた。偶々入宋された道元禪師が之を見て、「貴僧は御老體であるのに、何を苦しんで、この炎天のさなかで、苔を干してをられる。そんなことは若者にでもさせたら宜しいでせう」といはれた。道元禪師はこの時二十四歳、學德に於て、究められたところは深かつたが、禪の行履に於ては、未だ徹底しないところが有つたものか、この一言を發せられた。此の時、老僧は禪師を顧みて「他は是れわれに非ず」と言ひ放つた。是は人を使つてやつたのでは自分の務むべき仕事を、つとめたといふことにはならぬ。自分には自分の行ずべき行があり、他人には他人の爲すべき行があるとの意味である。

此の老僧の如き信念と意氣の存する限り、人は二六時中爲すべきを爲し、行ふべきを行ひて、他を羨望し、猜忌し、嫉妬するやうなことはなく、常に玉の如く澄みきつた心持を保持することが出來る。事あれば事あるにまかせて、愈々澄徹した清淨なる行持を保持することが出來よう。「玉は火中に向つて焼くとき轉た潤ふ」とは此の事である。

は、人類乃至宇宙萬有の親であるところの佛の命を縮める所以であるから、時光を空しうしてはならぬと痛く誡めるのである。時光を空しくしないといふことは、從晝至夜、身心に更に餘裕なく、馬車馬が虐使されるやうに身心を虐使せよとの謂でない。休養すべきに休養し、遊ぶべきに遊ぶことは、敢て時光の空費とは云はないのである。

休むことと遊ぶことは、往々にして他人に羨望せらるゝものである。時としては、他人の心を痛くいらだたしむるものである。世には、休養を欲し遊行を望んで、それを爲し得ない人が少くない。燃え上がらんばかりの都市の石疊に水撒きをなす者、交通機關の運轉に從事する者等の如き、他人の避暑納涼の便を計ることには力むるも、自分の避暑納涼の便はこれを得ない人である。休養をほこり避暑を吹聽するが如きは、眞に愼しむべきことである。

禪は常に內面に充實して、外面を追ふものでない。他を望むで己を忘れるといふやうなことは禪者にありえない事である。世の凡ての人が禪的境地を得るならば羨望・猜忌・嫉妬といふやうな惡德は地上より拭ひさられるであらう。羨望・猜忌・嫉妬なき境地は、常に安靜にして苦惱を脫却して居る。世の鬪爭に交つて苦惱なく、天日の威烈に遭うて苦熱を感ぜず、所謂、「心靜かなれば便ち身涼し」で、更に熱惱される所がない。

支那に文化が榮え禪が最も隆盛を極めた宋朝の時代であつた。天童山に一老僧があつて、炎天下に笠も

懶惰にするは大いに戒愼すべきことである。休養のときは休養の法に則とり、その身を苟もせざることは、佛の常に教へたまふところである。一定の規律に從ひ節制を保つことは人の常に忘るべからざる務めである。

節制を保ち規律を守ることは、我禪家の生命である。今日、禪寺に行はれてゐる行持の規範は、百丈大智禪師の『淸規』に記するところであるが、この百丈禪師の生涯は實に規律節制そのものであつた。

百丈が老齡に達し、進退爲に自由を缺くといふやうになつた時、門下の衆が痛く之をきづかひ、禪師が朝夕なすところの洒掃を廢めていたゞかうとして、その器具を他に移し作すことのできぬやうにした。禪師は止むなく、洒掃をせずに、自室にあつて茫然と時を移してゐられた。朝食の時刻になり、侍者は禪師に齋堂（食堂）に入られんことを勸めたが、禪師は之を卻けて起たなかつた。門下の人々は之を憂へて頻りに勸めたが、禪師は之に應ぜず、僅かに言葉を發して『一日不作一日不食』一日爲すところがなければ、その日の食事は取らないと云ひ、一日一時と雖も、作すところなくして徒らにものを空費してはならんといふ聖旨を垂れるところがあつた。

時光を空費することは、古聖先賢の眼より觀れば佛の命を殺すことである。『時光は佛の御命なり』といふことは、古聖先賢の信じて疑はなかつたことである。時光を空費すれば、その時間の中に、獲得さるべき利得が獲得されないといふやうな、たゞ單に利害上の考よりいふのではなく、時光を空しうすること

米國の如きは、日曜學校と圖書館とは宗教會堂に附屬する必須事業となつて居る。各地の佛教會には必ず日本語學校と此の二事業が附隨して居る。基督教に於ては最も盛んに行なはれて居る。我國でも眞宗淨土宗等では、隨分奬勵せられて之を實行して居る向も少なくはない。我が宗にてもポツ〳〵之を實行してゐる樣である。

玉は火中に向つて燒くとき轉た潤ふ

苦熱の眞夏は正に國民的大怠業の季節である。學校は小學より大學に至るまで夏休みとなり、銀行會社は社員交代の休暇を與へられ、國政に參與し國民の安危を一身に擔うてゐる大臣宰相も亦た時に納涼の時日を作り出す。國家を擧げて光陰を空費するの時節である。

身心の疲勞を慮かり、苦熱を避けんがために、特に休暇を作り出すことは、生身を有する人間のまた已むを得ざる營みの一である。此の期に於て、大いに身心を休養し鋭氣を養ふことは『よく遊び、よく働く』の格言よりみるも、當に然るべきことである。或は山に、或は海に、その緣に任せて遊行することも敢て遠慮するに當らないと云へぬこともないが、此の期に於て、休養に言葉を借り、その身心を惰弱にし

念、道徳的思想、家庭及び社會に對する關係等を教訓し、以て品性の向上と道徳觀念の進歩とを圖らば、其の功實に少なからざるべし。各父兄に於ても如何に好便宜を得ることならん。兒童も亦た終には之を樂しみとするに至るべし。斯くして學校との聯絡を取り、學校教育の補助と爲すことを得べし。要するに家庭教育に代はるべきものである。歐米に於て公德の發達する所以は、日曜學校が最も與つて力ありと聞く。此の事は獨り本宗に限れるものではない。佛教各宗全體に渉つて之を實行して貰ひたいものである。町村等に二箇寺以上の寺院ある處にては、前にも申した通り、其の地理や交通や建築物等を對照して、最も適當の處に於て之を設け、他の寺院は共同して之に隨喜するを要す。必ずしも宗派の異同等を論ずべきではない。

二　圖書館を設くるの件――是れも町村等にて二箇寺以上もある處にては、其の便否を比較して、適當の處を擇びて之を設くるが宜い。完全なる圖書館を設くることは容易ならざれど、簡易なる圖書館、又は圖書室を設け、宗教・教育・修養に關するもの、修養の資料となるべき歷史・傳記、又は文學的の圖書、智識の資となるべきもの、其の他有益なるものを備へつくること、雜誌等の類も亦た宜し。是れも漸を追うて完全を期することゝせば、如何なる貧山(貧しき寺)にても實行し得られぬことは無いと思ふ。閲覽は入場閲讀若くは貸出等の方法を設け、成るべく一般に普及を圖るやうに致したいものである。

寺院に日曜學校及圖書館の設置を望む

佛敎は眞俗二諦圓融無礙の法門にして、實に世界人類として無二の法寶であるが、宣傳その宜しきを得ざりし爲め、其の效果未だ顯著ならず其の敎化未だ中外に普及するに至らざるは、實に遺憾の極みである。今や世道人心に敎化最も急務を感ずるに至り、佛敎の住持に任ずる者は益〻敎義の流通に努め、且つ社會人心の指導に力を致すべきである。その事業は多々あるべきも、最も一般的に行はれ易く、且つ必然的に效果ありと認むるものゝ中にて、先づ左の二事を擧げて、之を本宗寺院諸師に希望する次第である。

一　日曜學校設置の件――日曜學校を設けて少國民たる兒童を敎養する事は最も相應しき事業である。市町村とも多數の寺院ある處では、互に申合せの上、地理上、兒童の集合上に便宜の場處を擇び、日曜毎にそのもよりの兒童を集め、適切なる敎育を施すのである。生徒は、小學校生は無論であるが、小學校を卒業したる靑年にも及ぼしたく思ふ。此の事業は物質上多額の資金を要せずとも施行することが出來る。住職自ら敎育の任に當ること能はざる場合、又は手の足らざる場合は、其の地方の敎育家に依賴することが出來る。授くる所は修身其の他適當の科程とす。而して、毎會諄々として眞淳なる信

る。佛とは畢竟和合の意である。僧衆の被着する御袈裟をば和合服とも名け、御袈裟そのものが和合の象徴である。初めは人の抛棄した廢衣や襤褸などを拾ひ聚めて製せられたものであるから、大小長短様々のきれ〳〵をば綴り合せて一枚の袈裟とせられた。吾々の集團も、智愚・賢不肖、老若男女各々相異なるも、慈悲報恩と稱する一筋の絲をもて縫ひ合すれば、其のまゝ一枚の袈裟となりて身に纏ふことが出來る。故に、吾々佛教徒たる者は釋尊の御教に基きて、慈悲報恩の德を養ひ、日に進み日に新なるべき國是を守り、我國の文化を大成することに勇猛精進せねばならぬ。

我が高祖承陽大師は「國家に眞實の佛法弘通すれば諸佛諸天ひまなく衛護するが故に王化太平なり、王化太平なれば佛法その力を得るものなり」と諭され、太祖常濟大師は『汝諸人悉く皆國土にはらまる。一天下國土上悉く是れ國王の水土に非ずといふことなし、然るに家にあれば親に事へ國に侍へれば君に仕ふまつる、是の如くなる時、天地加護ありて自ら陰陽の惠みを受く』と示された。

今や昭和維新の御代を迎ふるに當り、意味深く含蓄多き昭和の新元號に暗示せらるゝ天啓を拜し、吾々佛教徒は我が同胞に率先して、文化的理想の實現と、國民の和合、世界の平和に貢獻するのが、國家に對し奉り、又、佛祖に對し奉りて、必らず當に果すべき一大使命であらうと思ひます。

常なる發展を致し、東洋文明國の首班として世界列國の間に優勢の地位を占むるに至つたのである。されど、仔細に我が國力の内容を觀察しますれば、政治・敎育・宗敎・經濟等、有ゆる方面に於て種々の缺點が認められて居る。而して、其の原因は固より一樣ではないけれども、共通的病根とも謂ふべきものは人心が多く功利本位であること丶思ふ。何事も自己本位で、自己の幸福と慾望の滿足とを維れ事とする所より、職分を盡す上に於て自づと不眞面目になり易い。自己の慾望と他人の慾望と相容れざるばあひ、そこに衝突が起り鬪爭が現はれる。卽ち眼を國家の大局に着けて、擧國一體、共存共榮を圖るの覺悟に乏しき爲めに、人心惟れ同じく民風惟れ和することが出來ないのである。

聖德太子十七憲法に於ても、其の第一條に『和ヲ以テ貴シト爲ス、忤フコト無キヲ宗ト爲ス』と明示せられた。我が佛敎に於て煩惱慾念を制せられたのも、決して人間をして木石の如くなれといふのではなく、不合理なる慾望や利己的私慾を戒められたのである。

凡そ世の中の謂れなき衝突や紛爭は、多くは私慾我見の產物であります。互に慈悲の念を養ひ報恩の志を存し、共存共榮の觀念だにあらば、必ずや昭和の德に歸すべきものであります。よしや競爭が激烈にならうとも、其の競爭等は進步の資糧であり、よしや論爭が强烈であらうとも、其の論爭はやがて中正なる眞理を鑄出する爐鞴である。君子の爭は斯くなければなりませぬ。

釋尊は常に和合の德を奬勵せられ、釋尊の敎團に入る者を僧伽耶と稱した。僧伽耶は和合衆と譯してあ

の如き觀がある。是れ正しく會通の運に際して居るのであるから、彼を知り己れを知りて、長を採り短を捨て、我が國俗國情を基礎として、能く之を取捨選擇し淘汰整理して、最も穩健中正にして完全圓滿なる、理想的文化の更張開展に熱誠を捧げねばならぬ。我國の國是は日に進み日に新にするに在るぞとの御聖詔は、國民の生活が動もすれば浮華放縱に流れ易く、其の思想も動もすれば輕佻詭激に傾き易からんとする今日に於て、恰も一大光明燈を掲げて、永遠の前途までも御照し下されたやうに感ぜられます。眞實、昭和の精神に相應したる協和は、秩序に循ひ中正を執りて、日に進みて息むなく、日に新にして向上し、而して、能く擧國一體共存共榮の理想を實現するに在るのである。

故に次の勅語に於て『夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尚ヒ、模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ、日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ、人心惟レ同シク民風惟レ和シ、汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト、是レ朕カ軫念最モ切ナル所ニシテ丕顯ナル皇祖考ノ遺訓ヲ明徴ニシテ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ實ニ此ニ存ス』と御宣示あらせ給うた。穩健質實を旨として萬邦に卓越する文化を創造し、全國民の精神も一致して、民情風俗も和らぎて、一視同仁の御聖德に浴し四海同胞の情誼を敦くして、所謂『克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニス』ることが『朕の日夜軫念して止まさる所であるぞ』との御仰せである。而して、斯くあるのが新元號なる『昭和』の意義であることゝ拜察するのであります。

我國は、明治維新の御代となりしより既に六十年、明治天皇の御稜威と大正天皇の御盛德とに依て異

邦とは、文運興隆の結果、天下平らかに民人和らぎ、內外の諸國統一和合して眞に能く平和の美果を收むるの意である。要するに、昭明は文化的理想の實現で、協和は之を內にしては民心の親和、之を外にしては世界の平和である。此の昭和こそ新帝陛下の御期待あらせ給ふ所にして、又、我が國家の大理想であらねばならぬ。

朝見式に於ける勅語に『輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趨舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ、此レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ着ケ擧國一體共存共榮ヲ之レ圖リ、國本ヲ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ』と御諭し給はれしは、最も重要なる御教訓であります。世態の變遷に伴ひ、思想の上にも急進主義なるあり保存主義なるあり、經濟上の利害得失も其の立場に因て各々相異なるものあるは當然なれど、眼を國家の大局に注ぎなば、私情や私利に囚はれず、擧國一體、共存共榮の大目的に向つて努力せねばならぬ。殊に次の勅語に於て、我國の國是を御示し給はりて『今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル、則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ、而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル、是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ』と仰せられてある。何と高大深遠なる御明訓ではありませんか。

今や全世界の學術技藝、思想風俗は潮の如く我國に流入して居る。我國は恰も東西兩洋文化の集合地點

昭和改元

八千萬の赤子が滿腔の丹誠を傾けて御祈り申上げたる效も無く、大行天皇には御天壽盡させ給ひ、大正十五年十二月廿五日、俄に御登遐あらせ給ひたるは、哭天慟地、たゞ〳〵哀悼の涙に咽ぶのみである。

是に於てか、今上天皇陛下には、盛典に恪遵して神器を繼紹させ給ひ、萬世一系の寶祚を踐ませられ直ちに元號を改めて「昭和」とせらるゝの詔書を發せられ、昭和元年十二月二十八日、宮中正殿に於て、朝見の御儀を行はせ、親しく優渥なる勅語を賜うたのである。

謹んで其の勅語を拜し奉るに、叡旨の深遠なる、聖謨の宏廓なる言々句々、悉く吾等臣民の拳々服膺すべき最大最高の御教訓と銘肝し奉るのであります。殊に新元號なる「昭和」の文字には甚深の意義が含蓄せられ、且つ明治、大正の御代を承けて、益々國家の光輝を發揚し國民の使命を達成する上に於て、吾々臣民の覺悟すべき一大精神を明示し給はりたるものと拜察し奉るのであります。

昭和の文字は、書經の堯典に「百姓昭明、協和萬邦」とあるを典據とする。百姓昭明とは、大君の御仁政が國の隅々にまで行きわたり、天下萬民は皆な其の御仁徳に化して益々文運の興隆を致すの意、協和萬

錬すれば、盡未來際を期して衆生を濟度し功徳を積聚し、國土社會をも淨化し、世界人類の幸福をも増進し、佛果菩提をも成就せんとの大誓願となるのである。

要するに、自己一分の我見私慾を制して、道を敬ひ法を重じ、義を守り徳を修め、以て國家の爲め人類の爲めに、といふ大信念に據りて活動するのが不戯論行であります。その活動の標準は、先帝が大正十二年十一月十日御煥發の御詔書が唯一の大經である。又、昨年十二月二十八日、今上陛下の賜はりし勅語こそ無二の要道である。『我國の國是は日に進むに在り日に新にするに在り』と昭示せられ、中外の歴史に徵し得失の迹に鑒みて、進むには秩序を守り本末を誤らず、新にするには中庸を失なはぬ用心こそ至要なれとの御昭示は、實に吾々國民の全身心を捧げて服膺し奉るべき御勅諚ではありませんか。此の大信念ありて大菩提心を修得し、能く陛下の赤子たるに恥ぢざる行持あらば、これぞ佛教を心に讀み身に行ふもので、佛教と自己とが一如と爲り去る。太祖大師は此の消息を『人々自己の寶藏を打開して一大藏經を運出せん時、聖教自づから我有なることを得ん』と御示し下された。

吾々は人文更張の機運に際會したるを以て、陛下の赤子として、大日本帝國の臣民として、其の責任の重且大なることを諒し、時弊を淨除して不戯論行の實行を期し去らば、先帝の御恩に酬ひ奉ることも出來て、諒闇中に於ける臣民たるの至誠をも表示することを得るであらうと思ふ。

その人の心に邪見の毒刺があつたり私慾の塵芥があつたりしては、悉く僞善となり妄想となる。此の點は修養上最も心すべきことである。故に吾々は、しつかりとした大信念を確立して、佛の御教を戴き佛の御心に歸し、人類として、國民として、俯仰天地に愧ざる理想の下に、其の職分を守りて自己の責任を果すべきである。是れ即ち不戯論行である。不戯論行の功德は、必ずや美はしき名譽と清き福利を贏ち得るものである。

併し、此の不戯論行の根本たる大信念、是を菩提心とも稱するのであるが、なか〳〵容易に發起し難いものである。なぜならば、何時の間にか、知らず〳〵邪見や利欲が先きに立ちたがつてならぬものである。故に此の大菩提心を發得するには、禪の修養が最も適切である。唯坐一番、一心を調へて一切の妄念邪念を一掃し、所謂沒我の境涯に達しなば、只だ憎愛なければ洞然として明白、自づから清淨無垢なる本心が光輝を放つであらう。

高祖大師も「名利は一國の大賊なり」と仰せられて、人は名利の邪念に信仰も道德も侵掠せられる。だが「名利を頂くせば名利を憐れむべし」と示されて、名利必ずしも放棄すべきにあらず、寧ろ之を善用せよとの御旨意で「名利を夢幻空華と觀すること勿れ、衆生の如く學すべし」と仰せられた。「盜人をとらへて見れば我が子なり」、名利の念も能く之を敎養し訓錬すれば、名を求むる心はやがて名節を重んじ尊嚴を保ち、進んでは、國家の威信を高め父母祖先の名を顯しめぬ覺悟となり、利欲の情も能く之を制御し致

名譽は虚名、其の利益は虚利濁富で、幾ど半文錢の價値も無いものである。悲しい哉、人間の弱點として、多くは名利の奴隷となりて自己を冒瀆したがつてならぬ。

名譽に囚はれる者は、徒らに爭を好みて人を罵り他を蔑にし、自らは傲慢に流れ、名譽の爲め權勢の爲めに、思ひ切た背徳の行爲を敢てすることをも辭せぬが、利を貪る者は、更に之より甚しきものである。古人の語にも『名を求むる者は爲さゞる所あり、利を求むる者は爲さゞる所なし』とありて、名を貪る者は、名譽を保護するが爲めに多少遠慮する場合があるけれど、利に狂ふ人に至つては、欲の爲めに義理も人情も打棄てゝ、奪はざれば饜かずといふ處まで進みたがる。啻に財欲ばかりではない、色欲も食欲も、懶惰も流連荒亡も、皆な自己一身の快樂を求め欲望の滿足を期するのであるから、盡く利慾と見ることが出來る。

後藤子爵は『政治の倫理化』を高唱せられて居るが、政治にしても邪見私慾を超越すれば、必ず倫理化し宗教化する。商業にせよ、工業にせよ、將た農民にせよ、苟も邪見と私慾とが混入すれば不正行爲が起り、紛糾鬪爭が起り、結局は自他の損害を招き社會に害毒を流す様なことになる。此等を總て戲論といふのである。

邪見より出づる活動は亡國の階となり、私慾より生ずる事業は混亂の種となる。よしや少欲知足にして聖者の如く行ひ澄ましても、又、塵俗を離れ正念に住するが如き、高潔なる人格者であらうとしても、

悪思想とか、或は我國の精神を無視し、或は君父を無視し、或は國體の尊厳を傷け人倫の秩序を紊すが如き軽佻詭激の思想である、他は宗教上から見た邪見で、或は神佛の照鑑を無視し、又は三世因果の原則を撥無し、若しくは未來も過去も無きものなりとの斷見、人間は死後も人間となりて再生し、畜類は死後も畜類となりて再來するといふ樣な常見などは、何れも思想見解の錯誤である。

名利といふは名聞と利欲で、共に利己的欲望である。名譽も利益も人生自然の要求であるから、決して否認すべきものでは無い。寧ろ之を奬勵して大に名譽を博し、實益を増殖すべきである。併しながら、人の人たる眞價は斷じて名利そのものでは無い。人として最も大切なるは、能く人倫道徳を修めて人間としての責任を果し、更に進んで、我が佛の御教を奉じて永久不滅の安心を獲得し、至眞至高なる大覺の道に向つて進むことである。道を修め徳を積て息まざれば、名譽も自づから備はり福利も自づから得らるゝのであつて、名利は己れの精進努力に酬ひられたる自然の報酬である。

故に、名譽を得んと欲せば先づ其の徳行を修めねばならぬ。善い事を爲し、人の爲め世の爲めに功績を顯はしなば、名譽の冠は求めずして得られる。利益を得んと欲せば先づ其の職分を盡し、正當の方法に於て勤勉努力せねばならぬ。正しき業に就て勤儉力行せば、利益も亦た招かずして得られるであらう。然るに、其の根本たる職責を打忘れて、單に名譽の爲めに名譽を貪り利益の爲めに利益を漁るが如きは、如何に其の手段が巧妙で其の目的が立派に達成せられたとしても、宗教上、又は道徳上から眺むれば、其の

遠離とは凡夫世界の束縛を離脱して精神的自由の境致に安住せよとの意。
精進とは善法に努力せよとの意。
不妄念とは常に正しき思想を抱き高遠なる理想に立脚せよとの意。
禪定とは一心を安靜にして如何なる場合にも散亂せしめざれとの意。
智慧とは道を明らめ理を究めて迷執妄見を解脱せよとの意。
不戲論とは、戲論は戲言漫語といふに同じく、其の實なきの謂であるから、私慾を制して公道に循ひ、泡沫の如き一時の快樂を貪らずして、公共的なる永久の幸福を目的とし、一切時一切處に於て專ら道を守り義を踐めよとの意である。

此の八條を通じて、釋尊の御懇篤なる御教訓があるが、不戲論の章に於ては『汝等比丘、若し種々の戲論は其心則ち亂る、復た出家すと雖も猶未だ得脱せず、是の故に比丘當に急かに亂心戲論を捨離すべし、若し汝、寂滅の樂を得んと欲せば唯當に善く戲論の患を滅すべし』と仰せられてある。

要するに、妄見邪智と貪名愛利とより發する行動は總て戲論行である。故に、邪見と名利とを超越して、佛の御教聖賢の道に隨順する行動を不戲論行と稱するのであるから、吾々は深く自ら反省して、邪見名利の奴隷とならざるやう修練せねばならぬ。

邪見といふは之を二通りに分けて見ることが出來る。一は道德上から見た邪見である。卽ち忘恩背德の

勅旨の宏遠深厚なる、實に肝に銘じ腑に鏤めて奉體し奉るべきである。「我國の國是は日に進むに在り日に新にするに在り」との御諭しは、國民の精神の前途を御照し下されたる一大光明である。此の御勅旨に副ひ奉るべく、誠心誠意、國民の本務を遂行するのが、取りも直さず、先帝の尊靈を安んじ奉る道であらうと思ふ。是に於てか、釋尊最後の御教訓たる不戲論行が一層有り難く感ぜられる。

釋尊御涅槃のみぎり、特に比丘衆の爲めに最後の御遺誡を垂れさせられたのが佛遺教經である。その中に八大人覺の御教訓がある。大人とは、或は菩薩の稱號とも、又は凡夫世界を超越したる聖者の稱とも見られる。その大人の覺悟すべき八條目とは、少欲・知足・遠離（又は樂寂靜）・精進・不妄念（又は正念）・禪定、智慧・不戲論である。此の八條は中阿含經第十七長壽王品八念經にも說てある。阿含では大人の八念と稱してある。我が高祖承陽大師は、御遷化の年、特に八大人覺の御著述と御親教があり、太祖常濟大師も御入滅の前に八大人覺の御提唱があつた。

八大人覺の條目は、何れも消極的修道法を示された樣であるが、高祖大師は此の八大人覺を以て、直ちに正法眼藏涅槃妙心なりと仰せられた、決して小乘的の法門ではないのである。之を大乘精神に基きて解釋すれば、

少欲とは欲望を制限して合理的ならしめよとの意。

知足とは分に安んじ職を勵み其の宜しきを得よとの意。

身分不相應の生活をせぬ樣に自己の生活を引締めねばならぬ。

常に恩に感じ恩を報ぜんとの觀念に住し、勿體なし有難しと思うて儉約する時は、儉約卽道德である。勤勞もまた同じく道德である。而して『身貧にして道貧ならず』といひし古人の親訓を味ふ時は、儉約の中に、最も豐饒なる精神上の富を貯ふることが出來やうと思ふ。

諒闇

百歲の御寶壽をと願ぎ奉りし大正天皇の、御鳳算四十八歲を以て御登遐あらせ給ひしは、何に喩へんやうも無き哀傷の極みにて、八千萬の赤子は、哭天慟地、只々御奉悼の悲涙に咽ぶのみである。御諒闇中は萬事に就て謹愼の意を表し、先帝の御神靈に對する畏敬の誠を失なはぬ樣にせねばならぬ。さればとて、徒らに哀愁に沈むのみでは、決して先帝に報い奉る所以ではない。

今上陛下の朝見の御盛儀の際に賜はりし勅語には『今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル、則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ、而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ跡ニ鑒ミ進ムヤ其序ニ循ヒ新ニスルヤ其中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ』と御昭示あそばされた

人の知る所である。現在でも道心深き人は、古人にも比すべき儉素を守つて居ることを見聞して随喜に堪へぬ。

古禪僧の節儉を守りし所以は、敢て窮乏の爲めでは無い。全く感恩の誠より出でたものである。一滴の水、一莖の草も、天地の惠みである。一粒の米、一縷の糸も、皆な農夫蠶婦勞苦の賜である。一枚の紙、一錢の貨も、信徒の淨施である、有り難し勿體なしと觀ずれば、粗末に取扱ふことも、贅澤に使用することも出來ぬ譯である。故に、三度の食膳に向うても「一には功の多少を測り彼の來處を計る。二には己れが德行の全缺を計つて供に應ず」等の五條の觀想を爲すのである。且つ、人といふものは驕奢の爲めに德を損じ道を妨ぐる場合が多いから、清貧に甘んじ質素を守るのが道業を策勵するに好便宜である。

無一物中無盡藏で、精神生活が豐饒なれば、心に無形の富を蓄へ、無限の樂しみを感ずるものである。或る山寺に禪僧が客僧の來り訪ふに遇ふも、饗すべき何物も無かりしかば「何をがなまゐらせばやと思へども莊嚴ふとて一物も無し」と詠ぜしに、客僧は直ちに「本よりも賜はらざるを賜ふこそ本來空の妙味なりけり」と返歌せしとぞ、吾人は是の如き妙樂を享受したいものである。

今や我が國の財界は、極度に不安を感じたる爲め、官民一致して勤儉好尚を奬勵してゐる。併し、國民全體が自發的な勤儉力行に努むるでなければ、國力の充實を期することは難かしい。苦しんで儉約するが如きは眞に儉約とはならぬ。儉約を樂しみ儉素を好みて、中心から物事を疎略にせず、無益の費を省き、

を想像するに餘りあるでは無いか。

卍山禪師の嗣の隱之和尙の資たる默山玄轟和尙は、下總國東昌寺に在りて典座の役を奉ぜし時、炊事場の流しに布の袋を張りて、終日、流れ落つる物を受け、その中にて食し得べき物は糞糟菜片を擇ばず、悉く一甑に收め、殘飯を加へて之を沸煮し、以て一日の糧に充てた。和尙の開山所たる武州迦葉院には、一足の足袋が傳承されてある。和尙は生涯一足の襪にて辨ぜし由である。

越後の觀音寺に住せし筏舟和尙の如きも、桃水・良寬の亞流であらう。雲水時代には時々乞丐の群に投じたこともあつた。六十一歲にして觀音寺を退くに當り、親から自分の茶毘式を行ひ、一衣一鉢、飄然として去る。只だ懷中に百金を藏せり。其の日、津川町なる信者の宅に宿し、百金を投じて宿內の遊女全部を一妓樓に集め『汝等は山僧に買はれたる身ぞ、宜く山僧の命に從ふべし』と言ひ渡し、三歸依戒を授け、涙を流して信仰談を聞かしむること約二時間、了りて『さあさあ是れで俺の方は濟んだから、勝手に引取れ』というて暇を與へた。和尙は岩代國飯塚町常泉寺の側に無見菴を構へて閑居し、隨緣敎化をせられたので、世人は稱して伊達の羅漢といふた。伊達は郡名であるが同地方の總稱となつてゐる。羽前米澤に往來するに途中は槪して野宿であつた。晚年、羽前の岩敎寺(山寺)の巖窟に隱れ、七十八歲の正月の末、法華經を讀みながら坐脫せられた。

明治維新後でも、奕堂・楳仙・悟由・穆山・素童等の各禪師は何れも儉素の實を示されたことは、普く

て食はず、財色の二欲を斷ちて苦修練行を事とせられた。偶ま鄕信あり金十餘兩を送り來たれり。圓瑞は之を以て沈香を購ひて大衆百餘員に喜捨しけるとぞ。卍山禪師は圓瑞が餘りに苦行に著するの跡あるを見て『抖擻不臥是れ汝が椅を障ふ、精進禪定是れ汝が慧命を損す、如何ぞ一切放下して任運に時に隨ひ、個の騰々落々無爲無事の人と作り去らさるや』と誡めたことがある。圓瑞は涙を流して拜謝したが、是より精進彌々加はり、苦行また前に倍したとある。

九州松原大願寺開山行巖和尚は、豐後細川綱利の歸崇を受けて廣く敎化を行はれたが、其の行履綿密にして一生絹衣を着けず、麻衣粗布、自ら處すること恬淡を極めたりとぞ。卍山禪師の嗣三洲和尚も機鋒俊邁、九十二歲の終焉まで禪風を擧揚せられた傑僧であるが、非常なる勤儉家であつて、操履嚴正、寒中と雖も爐を擁らず、極熱の時にも扇を弄せず、常に長座を好んで晝夜禪を打し、事に臨みて剛毅、順逆の境に觸れて心を動ぜさりしとある。

有名なる越後の良寬和尚の如きは國上山中に五合菴を結び、米五合あれば生計足れりの意で淡泊の活計に安んじ『千峰一草堂、終身粗布衣、任レ生口邊醭、慵レ掃頭上灰、已無二鄕花鳥一、何有レ當二錢貫一、無レ心レ遂二俗說一、何人呼二癡獃一』と詠せしが如く、常に破袖を着けて寒を凌ぎ、粥を啜りて僅かに飢を救し、菴中一長物なく、唯だ一の擂鉢瓦盆を藏し、米を擂り粥を炊くにも之を以てし、手足を洗ふにもまた之を以てす。『炊く程は風がもてくる落葉かな』、『盜人に取り殘されし窓の月』等の句は和尚の風格

述べて見やうと思ふ。

有名なる桃水和尚の如きは、模倣し能ふべきに非ざれども、其の道念の剛健なることは實に百世の懿範である。和尚は『乞食桃水』と稱せられ、久しく乞丐に伍して、彼等の爲めに濟度の手を垂れられた。九州島原の東向寺や攝州の法巖寺に住持せしも、斷然、寺院を辭して乞丐の群に交はられた。一尼あり和尚の行邊を尋ね廻り、京都の四條磧に於て、和尚が病める乞丐を介抱せるを見、尼は和尚の爲めにとて、自ら織りたる臥具を贈りけるに、和尚は今の身にては用なしとて受けず、尼はせつかくの心盡し、とにもかくにも受けられて如何やうにも處分せられたしと願ひけるに、和尚はさらばとて、それを受けて病める乞丐に打着せけるに、他の乞丐等は痛く驚き、こは活佛ならんとて俄に尊敬しければ、和尚はまた何地ともなく立去りたりとぞ。

和尚が大津の驛にて草鞋を作つて居りし時、法弟の密禪が輿に乗りて通行して之を見付け、輿から飛び出して和尚を拜し、此の輿に乗りたまへと勸めけるに、和尚は『俺はまだ輿に乘る樣な罪は作らぬわい、お前は御大名に可愛がられて居る樣ぢやが、大名酒に醉はぬやうにするが宜いぞ』と誡めつゝ『如是生涯如是寛、弊衣破椀也閑閑、飢餐渇飲只吾識、世上是非總不レ干』といへる一偈を示された。其の他、和尚に關する逸話は澤山にあるが、取りて以て吾人道心錬磨の訓誡ともなすべきである。

卍山禪師の法嗣圓瑞は甲州文殊院に住しけるが、面に瞋色なく口に言語寡く、脇席に着けず、時を過ぎ

りである。聊か師の美徳を追想して恭しく弔意を表する次第である。

古禅僧の節倹

釈尊は三衣一鉢を身具として、樹下石上を住處とせられた。其の衣鉢を相傳してゐられる古禅僧は、何れも節倹の家風を保任せられた。永嘉大師は證道歌の消息を示して「窮釈子口に貧と稱す、實に是れ身貧にして道貧ならず、貧なれば身常に縷褐を披す、道あれば心に無價の珍を藏む、無價の寶は用ふれども盡くること無し、物を利し機に應じて遂に吝まず」と詠ぜられた。

六祖大師は米を碓房に舂く八ケ月、また、藥山禅師が僅かに飯菜を混じたる粥を食して瓔珞粥と珍重されたるが如き、極端に枯淡の生活に甘んぜられたる勝躅は舉げて算へ難い。

承陽大師は一生黑衣を纏ひ、上皇より紫衣を賜はりたるも辭して受けず、勅命三度に及びて、其の叡旨の優渥に感激して拜受せられたが、「永平雖谷淺、勅命重重重、却被猿鶴笑、紫衣一老翁」の一偈を拜呈して、而も是を高閣に收めて、遂に披搭はせられなんだ。常濟大師は枯拄杖破草鞋の姿にて、最後まで教化の爲めに遊行せられた。今は且らく兩祖の見様たる高僧の行持の中に就て、其の一端を

と家風とを其のまゝ繼承して寸毫も之に背くことなく、禪師の御在世中、禪師の許に偶ま來宿さる時の如きは、夜間行者に代りて、禪師の肩をもみ腰脚を按摩し、その按摩中は如何にも愉快さうに面白さうに談話を交換されるのが常であつた。迂衲は禪師に隨行中、幾度か之を實見して隨喜の涙に咽んだことがある。其の篤孝と敬順とは實に萬世の龜鑑と稱すべきである。

去る四月の總持寺大遠忌には燒香師として上山せられ、又、十四日、十五日は法定に依り宗會議員として參列せられ、其の際、單獨相見しけるに、師は迂衲の病弱を案ぜられて、約二十分間も、大遠忌後の靜養を勸めらるゝこと切なるものがあつた。十四日には、恰も久邇宮殿下の御參詣ありしゆゑ、師は獨逸留學中より殿下の知遇を受けられし因緣に依り、大森禪戒師と與に拜謁せられたが、殿下は迂衲に對して、『福山は予が獨逸に在りし時、伯林にて修學せしが、常に日本食の精進にて通したる珍らしき清僧で、予は一二回日本食で饗應を受けたこともあつた』との御物語りがあつた。

師は迂衲の健康を心配して居られたのに、別後二週間にして遷化せられしとは、實に夢の中に夢を見るが如き心地して、轉た人生の無常なることが痛感せられる。殊に師は篤孝密行に優れたるのみならず、溫厚にして謙遜、身を處すること質素を極め、而も世事に對して頗る淡泊、其の境界また如何にも禪僧の眞骨頭を有して居られた。

今、此の人を失ふは獨り豐川閣の一大不幸たるのみならず、實に宗門の一大損失にして、哀悼痛惜の至

篤孝の君子妙厳白鱗師を悼む

師は去る（大正十四年）四月三十日突然腦溢血に罹り、百方手當の效も無く遂に遷化せられたり。迂衲は思ひ懸けなき此の凶報に接し哀惜の情禁ずること能はず、たゞ〳〵悲嘆の涙に咽ぶのみであつた。迂衲の師に於ける道交實に三十餘年、其の人格心操ともに崇敬する所なりしが、中に就て、師の篤孝と行履とは、實に現代稀有の道人として嘆仰措く能はず、正に是れ宗門の儀標として推重すべきものと思ふ。

明治二十五六年の頃、慶應義塾に通學せられたが、常に麁布の法衣を纏ひ、白色の大黒頭巾を被り、如何なる場合にも葷肉に親しむことがなかつた。塾長福澤諭吉先生も深く其の志操に感じ、御兩親の命日などには、特に師を招き上座に請じて、讀經を依頼せられたことも一再では無かつた。

師は其の後渡歐して獨逸に留學せられたが、數年に亘る留學中も、全く日本食の純精進であつたのである。歸朝の後は、故福山默童禪師の後席として、東海の名刹妙厳寺に住職せられた。師の禪師に於ける其の親密は父子にも勝りて、傍の見る目にも羨ましく感ぜられた。且つ師の篤孝なる、何事も禪師の意志

身心を以て、煩惱の容れ物とか罪惡の器などと思うてはならぬ。『幻化空身卽法身』で、此の身心は直きに道の器である、智と德との母體である。是を煩惱の容物としたり罪惡製造の器械としたりするのは、身心の濫用であつて、恰も百萬長者の身を以て非人の群に落ちて居る樣なものである。

そこで了菴禪師は『白雲斷ゆる處明月を見、黃葉落つる時擣衣を聞く』と答へられた。月の體は玲瓏にして皎潔なるも雲の爲めに昧まさる。昧まさると雖も月の本體には些子の變動も無い。吾々の身心も亦是の如く、迷執妄想の白雲斷ゆる處、忽爾として自己本面目の明月を見ることを得べし。又、秋風寒み黃葉の落つる頃は『うたゝねに夜や更けぬらんから衣うつ聲高くなりまさるなり』とあるが如く、氣も澄みわたりて擣衣の聲もはつきりと聞え一層秋の心を催すもので、一心安靜にして萬境もまた閑寂なる時にこそ、宇宙の琴線にも觸れ大道の妙趣をも味ふことが出來るのである。只此の身心が情意の奴隷となる時は凡夫界に墮落す、情意を調御する時は此の身は佛身にして此の心は佛心なるべし。故に禪の修養は全く自己に返照して、本來の性德を啓發するを原則とせねばならぬ。

國家の上より見るも亦是の如く、內憂外患交々逼るの現時に於ては、先づ以て脚下を照顧して、國家の實力を發揮し、國家の品位を高め、國家の信用を厚うすることに全力を盡さねばならぬ。若し然らずして、單に他を責るのみであつては決して根本的解決を見ることは出來ぬ。衲は此の意味に於て、有ゆる方面に向つて脚下を照顧せられんことを切望するのである。

明治天皇の御製を拜するに「己が身は省りみずしてともすれば人の上のみいふ世なりけり」と御嘆きあそばされ、「天を怨み人をとがむることもあらじ我が過ちを思ひかへさば」と御諭し下され、「世の中を思ふたびにも思ふかな我が過ちのありやなしやと」御述懐あらせ給うてある。

大圓常濟大師六世の法孫、月江文禪師は群を拔んでたる學匠であつた。或時、相州を巡錫して隨處に講演を試みしが、一日、講演了りて聽衆は悉く散退せしに、一老婆ありて立ちも去らず、さめ〴〵と泣いて居る。師は怪みて其の仔細を尋ねしに、彼の老婆は「貴師は大善知識となるべき素質を有したまふ御方であるが、只だ義學に止まりて未だ師匠の域に達したまはざるが如し、願くは最乘寺了菴禪師の如き本分の宗師家に參じて、眞個の大善知識と爲らせたまへ」と申した。師は深く老婆の忠告に感じ、直ちに大雄山に上て了菴禪師の爐鞴に投じた。

一日、上堂の時、師は禪師に問うて「舊時行履の人を改めず只だ舊時行履の處を改む、如何なるか是れ舊時行履の人」と問うた。舊時行履の人とは只今の此の身心である。佛法は人々の脚跟下に在り、道は平常の上に存す、此の身心を離れて、外に佛法ありと思うてはならぬ。迷ふが故に三界城悟るが故に十方空、邪惡の衆生には娑婆も牢獄であるが、淸淨の道人に於ては娑婆即淨土である。故に從前行履の人を取替へるには及ばぬ。只だ從前の生活を一新することが大切である。だが、師は從前行履の人といふは果してどういふ人であらうか、といふ疑團を抱かれた。即ち、此の身心は畢竟何物ぞとの研究である。此の

がある。國民平等の精神が不徹底である。英米に對しては人種差別の偏見を攻撃して居るが、支那や朝鮮人に對しては依然として差別的待遇の弊が認められる。是の如きは深く自ら反省して、先づ己れより之れが革新の實を擧げなければならぬ。

米國に於ける今次の排日問題の如きは、其の横暴なること言語道斷であつて、實に許すべからざる非人道的行爲であるから、飽まで其の非を責むべきであるが、之れと同時に、我が國民もまた大に脚下を照顧する所が無ければならぬ。

我國政界の現狀は如何、國民生活の狀態は如何、教育・宗教・經濟・產業・風俗の臧否如何と顧みよ。吾人は多くの點に於て甚しき缺陷を感ずるのである。

我國は今や文化の峠に登りつゝある途中であるから、決して油斷することは出來ぬ。設ひ路に巖石の横はるも荊棘の妨げあるも、之を突破して、嶮岨を冒し難關を越えて驀進せねばならぬ。然るに現代人の多くは餘りに無反省の樣に思はれる。徒らに他を責むることを知つて自ら改むるに吝である。故に進む事にのみ焦りて守る所を忘れ、權利を主張して義務を閑却し、本能の滿足に力めて献身犧牲の精神を等閑にするに至る。口に生活難を訴へながら自らは奢侈に趨り、他に信念を勸めながら自らは不信に陷り、政界の革正を叫びながら自らは黨弊に囚はれ、德性涵養の要を唱へながら自らは修養を怠たる、陷々たる天下多くは此の過失を免れぬ。誠に情け無きことに非ずや。

とか、禪堂とか非禪堂とかいふやうな分別は無い。所謂それになり切て大法輪を轉ずるのである。苟も宗教的禪的安心に住して職務に從事する場合は、大乘佛教の大功德を鑊頭邊に拈取する底の活機輪が無ければならぬ。

脚下を照顧せよ

禪家にては常に脚下を照顧せよと敎へてゐる。卽ち足元に氣を注けよといふことである。此の語は實に修養上暫時も忘るべからざる格言である。人を責めんと欲せば先づ自ら責めよ、人を誡めんと欲せば先づ自ら誡めよ、小にしては一身一家の問題より、大にしては國家及び國際上の問題に至るまで、每に脚下を照顧する樣にせねばならぬ。

我國の文化は、明治維新の頃より急激に發展したるが爲めに、其の進步の成績に頗る不調和の嫌ひがある。比較的智育は發達しても、情意の訓練が之れに伴はぬ。物質文明は進展しても精神文明が缺けて居る。一面には非常に新奇を競うて居るかと思へば、他面には舊習に拘泥して、今猶ほ正月が三回あつて然も三通りあるといふ始末、國際的に人種平等を高唱するかと思へば、國內に於てすら水平社運動の必要

呼び、仙北方面の人も亦同じことを言うて居る。其の時、私は『鳥海の山靈に聞たなら何と答へるであらう』というて笑うたことがある。表といひ裏といふ、皆な人爲の稱であつて、鳥海その物はその樣な議論を超越して居る。法に依て善惡はあるが、法體は善惡超越である。時に依て苦樂はあるが、時そのものは苦樂超越である。卽ち超越的靈體である。深く此の理を悟了すれば、古人が『森羅萬象古佛の家風、碧落青雲道人の活計』といひしが如く、一切法一切時皆な靈體の妙相である。

　黃山谷は露柱兒を生ずるの語を以て、此の大眞理を試問したのである。すると本權は『是れ男か是れ女か』と反問した。佛教は哲學ではない、禪は決して理論ではない、空卽是色というたとて何等の價値も無い。露柱の生んだ兒は男性か女性か、大勇か大愛か、さあどうぢや、自分が露柱兒として活躍せねばならぬ。色だの空だの實在だの現象だのと解說するとも、畫餅の如くにして飢充すには足らぬ。さあどうぢやと問着せられて、流石の黃山谷も一寸答辯に躊躇した。すると拳頭を揮て撲りつけた。甚だ亂暴なやうだが、當時の禪風では珍らしい事ではなかつた。何しろ黃山谷は大官であるから、晦堂も『無禮をするな』と注意した。すると本權は『這の木頭打たずんば更に何れの時をか得ん』こんな無感覺な人間は、撲きでもしなければ、何時までたつても氣のつくことはありますまいと申したので、黃山谷も大に笑うたとある。

　此等の道人は、農業勞働に從事する時は一種の三昧境に安住するので、その勞働に價値があるとか無い

の如きも、單なる作業に非ずして實に是れ道業である、佛行である。自利々他の功德も是より生じ、興國弘道の功德も亦是より生ず。吾々は至誠神祇祖の聖業を拜して、一層農業の神聖化に努むべきである。

漳州保福本權禪師といふは、有名なる晦堂の法嗣であつた。悟道の後、寺務を輔けて水田を開拓して居つた。其の頃、晦堂に在りて太史に職たりし、學者にして且つ禪者たる黄山谷が、一日、晦堂を訪ひける折「此の頃、與に語るべき人物は誰れなるや」と問ひしに、晦堂は「保福の本權こそ其の人ならん、今は人夫を監督して水田の開拓に從事せり」と答へた。そこで、晦堂と共に開田の地に到りしに、本權は汗を絞つて勞役に服して居た。黄山谷は直ちに本權に向て「直歳還て露柱兒を生ずるを知るや」と問うた。直歳とは本權の役名で、專ら寺院や田園や修營などを掌る役目である。一年交代に勤務する邊から直歳と稱した。貴僧は露柱が兒を生んだことを知て居るかといふ奇問である。露柱とは丸裸の柱であるが、今は善惡とか迷悟とか貴賤とか貧富とかを超越したる靈能を指したのである。維摩經には「無住の本より一切の法を立す」とあり、般若心經には「空即ち是れ色」とあり、天地萬象も其の根元を究むれば超越的靈體より出現したるものである。

私が先年羽後の國に遊びし時、同國には有名なる鳥海山といふ山がある。巍然として中天に聳え、西方の裾は日本海に浸れて居る。東方の仙北郡より眺むれば、恰も富士の如くであるから仙北富士の稱がある。秋田縣本莊方面の人は鳥海の表は此の方なりといひ、山形縣酒田方面の人は鳥海の表は此の方なりと

き國家の重大事件であると思ふ。是れ一は農業勞働を卑しき務め、價値なき務めと思ふ所より生ずる結果ではあるまいか。尤も、農村振興方策としては、科學の應用を盛んにして農業收益の充實を圖り、農村士女の敎養及娛樂機關の設備等多々あるべきも、官吏も公吏も、富豪も學者も、一般に農業勞働を尊重し、且つ之を保護し扶助することが太切である。

至尊の御親耜に鑑みて、地主と稱し富豪と稱せらるゝ人々も、自ら鋤鍬を把て勞業に親しみ、上下心を一にし貧富相和して農業の發展を圖る樣に致しなば、農村の振興も期して待つべきものと思ふ。聖德太子十七憲法の第十六には『民を使ふに時を以てするは古の良典なり、故に冬月には間あれば以て民を使ふべし、春より秋に至る農桑の節民を使ふべからず、其れ農らずんば何を食せん桑らずんば何を服せん』とある。

水戶黃門光圀卿は西山に隱栖して親ら農作に從事せられ、大西鄕は晚年挂冠の後、鄕里に還りて自ら鋤鍬を把て百姓をせられた。禪門に於ても、支那の六祖大師は黃梅山に上り、碓房に在りて八ケ月の間米搗をせられ、臨濟の法嗣灌谿志閑禪師は末山比丘尼の處に在りて、三年間園頭の役に當られた。永平道元禪師は、大淸規の中に志閑の因緣を擧げて『園頭の一職は最難極苦なり、道心ある者勤め來るの職なり道心なき人充つべからざるの職なり、常に菜園に在りて時に隨て種栽す、佛面祖面、驢胎馬脚、農夫の如く田夫の如し、終日鋤鍬を携へて自ら耕し自ら鋤き、屎を擔ひ尿を擔ふ』云々と示されてある。農業勞働

大商となり、農其の郷に一なれば穀足る工其の郷に一なれば器足る商其の郷に一なれば貨足る』というて居る。工業も商業も農業を基とせねばならぬ。

されば繼體天皇元年の詔には「朕聞く、士當年に耕さゞる者あらば則ち天下或は其の飢を受けん、女當年に績がざる者あらば天下或は其の寒さを受けん、故に帝王躬ら耕して農業を勸め、后妃親く蠶ひて桑序を勉む、況や厥の百寮萬族に暨るまで農績を廢棄して殷ひ富むに至らんや、有司普く天下に告げて、朕が懐を識らしめよ」と宣らせ給うてある。山鹿素行の中朝事實には「凡そ天下の人物未だ嘗て其の事業なくんばあらず、既に事業あり則ち其の成敗必ず勤怠に繫る、農以て天下の饑を養なひ、桑以て天下の寒を防ぐ、人一日之れ無くんば則ち害なり、故に、聖主賢后親ら耕り親ら蠶し、備さに稼穡の艱難を嘗め天下の黎元を勉めしむ」というてある。此の如きは實に歴朝作主の大御心にてあらせ給ふ。至尊陛下には、親しく是を御親耕あそばさせ給うたので、吾々國民は、陛下の御動作其の儘が聖經賢傳にもまして、畏くも亦た有り難き御事と深く感激し奉るのであります。

私が曾て新潟縣中頸城郡の某村に至りし時、村長及村内重立てる人々の談話中に「此の地方には最近にして小作爭議と稱する如きものはありませんが、小作爭議よりも猶ほ憂ふべきは耕作人の減少です、青年士女の如きも小學校または高等女學校を修業すると、一般に農作を嫌厭して都會に走り去る者が多いので、僅少なる田畑までも遊ばして置くといふ始末である」といふことがあつた。此等は實に由々し

下には御運動服の御裝ひ輕やかに、畏くも親ら水田に下り立たせられ、御手足は泥土にまみれさせられ、お汗を拭ひも敢へず苗束を御握りあそばし御熱心に挿秧せられ、服部廣太郎博士を始め河井侍從次長・土屋・甘露寺兩侍從、生物學研究技手等六名の人々が御相手申上げ、御挿秧は同三時過迄、約三時間に亘る農作勞働の御體驗を積ませられしとの事である。

私は此の記事を拜して、覺えず合掌して聖德の偉大なるに感激したのである。是れぞ至尊陛下が常に農民の勞苦を思召さるゝと、農業を御重視あそばさるゝその大御心より出でたる事にして、其の御聖德の博大なる、御仁德の寬厚なる、頌し奉るべき言辭も無き程の尊き御作業であつて、知らず〳〵の間に七千餘萬の臣民に偉大なる御教訓と御懿範とを賜はりたるものと感激し奉るのであります。初の御朝見の御勅語に『汎く一視同仁の化を宣べ永く四海同胞の誼を敦くせんことを』と仰せ給はりし御叡慮を、事實の上に御示し下されたものと拜するのである。

天照大神の神勅に依り、皇祖皇宗が我が大八洲を御統治あそばされ、神武天皇に至り帝都を中國に移し『上は則ち乾靈國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然る後、六合を兼て以て都を開き八紘を掩ひて宅と爲し』以て仁德を施したまひてより、列聖相繼ぎて善く教化を敷きたまひ、臣民を視ること赤子の如く、上和下睦して君民一體の懿風をなしたのである。殊に農業に重きを置き給ひ、崇神天皇の　詔　にも『農は天下の大本なり』と仰せられた。六韜に太公は『國に三の寶あり大農と大工と

術は前記の如き信願ありて、之を實現するは佛教徒として現代に處すべき道なることを信じて居るから、更に一歩を進めて佛教各宗と與に提携して、大聯盟の下に教化の普及を圖りたく企圖して居るが、先づ以て其の前提として、増上寺と提携するに至つたのである。

増上寺法主及幹部の方々も、公明正大の態度をもたれ、肝膽相照して此處に至りたるものなれば、我が宗の寺院及び檀信徒諸氏も此の意を諒せられて、各地方に於ても顯淨提携の誠意を示されんことを希望して止まないのである。

至尊の親耕

本年(昭和二年)六月十五日の新聞にて承るに、天皇陛下には豫て人口食糧問題、經濟問題等を深く御研究あらせられ、殊に國の大本たる農業には一段と御心を寄せさせられ、畏くも御親ら農作の實際に當らせられたき思召を以て、先月初め赤坂離宮御内苑の一部に服部廣太郎博士御指導の下に苗代田を設けさせられ、各國の優良種子「神力」「愛國」「龜の尾」等御播種になりしが、六月十四日午後一時より、約一畝歩に亘る水田の準備を整へ、本田移植を取行はせられた。當日は八十度にも昇る暑さでありしが、陛

ぬ。是は衲の甚だ遺憾とする所である。

我が國は、佛教渡來より幾ど一千五百年、その長き年月の中に佛教の感化は津々浦々に及び、今猶ほ我が國は純佛教國たるの觀を呈して居る。然るに、國民の佛教に對する理解力甚だ乏しく、智識階級の人々にも全然無宗教を自稱して居るのを見受くるほどである。從つて、佛教に對する誤解も頗る多く、佛教徒の中にも驚くべき迷信すら行なはれて居る。是の如きは佛教々化の不徹底と怠慢とに起因するものと謂はねばならぬ。國民思想が動搖して居るとか惡化して居るとか叫ばるゝのは、其の責任を佛教家が先づ自ら之を負はねばなるまいと思ふ。

近頃、各宗ともに教化に努力する者が追々增加して居る樣なれど、まだ／＼現代人を首肯せしむるには至らぬ。そこで衲は、此の際各宗が聯盟して大々的傳道を試みて全國民の注意を喚起し、各宗聯盟の下に世界的文書傳道の機關をも設けなければならぬと思ふ。併し、即時に之を實現することは不可能であるから、先づ以て增上寺との提携に多大なる贊意を表したのである。

東都に於ける大本山は、各宗の中にて唯だ增上寺あるのみである。橫濱方面に於ては當寺がとにかく代表的なる大本山である。此の二大本山は、或る意味に於て佛教信仰の中心勢力とならねばならぬ。增上寺が三十年來、布教傳道に力を致して居らるゝことは衲等の常に敬意を表する所である。況や今の法主道重僧正は衲の舊知己であるから、今後は兩寺提携して國民教化の天職を盡さんとするは自然の要求である。

である。

端坐一番、心を物外の天地に安住する時、人々個々壁立萬仭なることを得ん、此の修養は決して知識階級や禪堂裡の人ばかりではない。如何なる者でも、内省の力があつて之れに禪的訓練を施せば、本心具有の剛健性が油然として發動するものである。此の剛健性を以て國力の培養に力めなば、國民的信用が高まり、國家の品位も向上し、産業も發達し、生活も安定することであらうと思ふのである。

増上寺との提携

今回淨土宗大本山増上寺と當總持寺との間に提携問題が起り、兩寺の幹部も親く協議を交へ、私も亦た増上寺法主道重僧正と往復し、今後、兩寺は宗意安心の問題と經濟問題に觸れざる範圍に於て親く握手し、國民思想善導の方面に就て、出來得る限り提携すべきことを約したことである。

私は從來、佛教聯合會の事業を布教方面に發展して、各宗聯盟の下に大學傳道を爲すを以て宿題として、曾て之を各宗管長及び管長代理の列席の處に提案したことがあつた。其の際は滿場一致して賛意を表せられたりしも、翻々之を實行する段になると、種々の問題が起つて、容易に實現することが出來

めに役せられ、信念も無く、志操も無く、雅量も無く、忍力も無い人々の少なからぬことが感ぜられる。是れ皆な精神の軟弱より發するものである。此の軟弱なる精神の陽性なる者は謂はれなき紛擾を起し、或は他を殺傷し他を憎惡し、其の甚しきは詐僞・恐喝・掠奪等の罪惡を犯すに至る。また其の陰性なる者は自暴自棄に陷り、或は自殺を圖り情死を遂げ、然らざるも亦た神經衰弱病に囚はれるのである。社會面に現るゝ種々の不祥事件は多く此の軟弱性の産物である。

吾々國民は世界の大勢と國家の現狀とに鑑みて、各自宜く大に內に省る所が無ければならぬ。我等は人間であつて斷じて畜類ではない。野合的戀愛などは口にするだも愧ぢねばならぬ。我は日本國民である。斷じて露國民でもなければ米國民でもない。國家を忘るゝ者は己れを忘れるのである。己れを忘るゝ者は精神的の自殺者である。政治家が民心を惑したり、實業家が私利を圖つたり、宗敎家が信念を失うたり、敎育家が危險思想を傳播したり、筋肉勞働者が怠業を企てたり、婦人が虛榮熱に犯されたりしたならば、民心は益々軟弱となり、遂には國家を支持するの力も無くなることであらう。

內憂外患は吾々國民の頭上に落下して居る。頭燃を救ふべき一大時機である。吾々は內に自ら省みて、能く國民たるの義務を守り、人類たるの德操を守らねばならぬ。內に省みれば外物輕し。如何なる難問題も之を解決するを得べし、如何なる魔障も之を退くることを得べし。石人身上に毛を生ぜず、剛健なる精神は何物も之を侵すことが出來ぬ。但だ能く回光返照して、邪智惡見、妄想亂思を降伏すべき

一日半時も安心して居るべき場合ではない。我が國力は英米に比較して、到底同日の論に非ず、文化の程度も歐洲先進國に比して、甚しき遜色あるを免かれず、若し我が國民が、遠大なる理想も無く卓越せる氣慨も無く、徒らに一等國と稱し、世界の三大強國とか五大強國とか稱して居たならば、殆ど誇大妄想狂に等しきものと言はねばならぬ。

英國は廣大なる版圖と國力とを以て、米國は豐厚なる富力を以て、佛國は美術を以て、獨逸は科學を以て、夫々世界に威力を示して居る。我が國は何を以て世界に臨まんとするや。内にしては天然の資源に乏しく、外にしては過剩なる人口の流通口に苦しみ、國民の生活は種々の點に於て脅威を受けつゝあるに非ずや。東洋に於ける文明の代表國たる實力は果して那邊に在るや。吾々國民は擧國一致、獻身的に國力の培養に盡さねばならぬ。實に重大時機と謂ふべきである。

古賢は「人皆患を救ふの術を務むれども、能く患をして生ずる無からしむることを知る者なし」といへり。國家の憂患を根本的に掃除する道は、實に國民精神の剛健なるに在りと思ふ。剛者は私欲に克つ故に節操を變ぜず、健者は進んで止まず故に責任を全うす。進むを知るも守る所を忘るゝは剛者に非ず、智に長ずるも德に乏しきは健者に非ず。現代人は動もすれば、放縱を好み僥倖を求め、虛榮に傾き享樂を望み、役々として小功名を貪ぼり、屑々として小利權に志し、徒らに物質欲に囚はれて内に自ら省ることとを知らず、僅かに意に逆ふことあれば、忽ち怒り、忽ち恨み、忽ち失望し、忽ち反抗し、常に外物の爲

近來は都會でも地方でも力を布教に盡し、又は修養や兒童教育等に勵んで居る人々が次第に多きを加へて居るが、實に喜ぶべき現象であるが、併し全體の上から見れば、布教事業は決して普及しては居らぬ。法獨り弘まるに非ず必ず人に依て弘まる、昨臘も東京に於ける國民向上會が、市內各方面に於て十夜の間屋外傳道を試みしに、聽者市をなせりといふ。衲は之を聞て淚の流るゝほど喜びたりき。

法輪の轉ずるところ食輪亦轉ず、骨山なりとも躊躇すべからず、貧寺なりとて放過すべからず、今是れ何の時節ぞ、國家としては國民教化に焦眉の急を感じ、佛教としては民衆教化の如何に依て、消長盛衰をなすべき分岐點に在り、決死の覺悟を以て奮勵努力すべきの秋である。然れども此の事たるや、決して教育家・宗教家にのみ委ぬべきものには非ず、苟く教育宗教を普及徹底せしむることの急務なるを信ずる上は、擧國一致、互に相扶け相勵まして、之れが實行を期せられんことを切望するのである。

內に省れば外物輕し

我國の現狀は治亂興廢の分岐點に立つが如き觀がある。內憂外患交々相逼り、國民は常に不安の氣に襲たれつゝあるが如し。國際關係は益々親善を加へつゝあるが如くなるも、之を內面より見れば、決して

宗教育を施し、或は敬老會を開いて慰問を與へ、一般布教の如きも成るべく數多く之を開催し、少くとも月に一回又は二回位は教筵を開く様に致したい。

葬祭の如きも、單に終りを慎み遠きを追ふ所の道徳的行持であるのみならず、佛教に於ては、先亡の冥福を資助し其の報土を莊嚴すべき報恩行であるから、決して之を輕んずべきものではない。其の儀式は極めて嚴肅にして、信仰と至誠との充實を期せねばならぬ。從つて之に伴ふ饗膳の如きも、精々質素清潔にして、追孝追福の誠意を損ぜぬ様に注意し、若し如法ならざる惡風習ある時は、速かに改善を施されたいのである

宗教の生命は國民の教化に依て存立するのであるから、社會に一人の不良者あり、國家に一人の不敬漢あるも、皆な宗教家の責任なりと感ずる程の覺悟が無ければならぬ。因習の久しき、寺院は專ら檀家の葬祭に當り、生者に對する教化の如きは、第二の事業の様に感じて居る様な趣がある。然らずとするも、布教の習慣が付て居らぬ爲め、偶々教筵を開いても參詣者が來てくれぬ。檀信の方でも、教筵に參詣することは恰も閑人の所爲の如くに感じて居る向もある。偶々參詣しても、説教なり法話なりが、餘りに舊式にして其の意に適さなんだりする處から、自然に衰微を來すといふ有様である。故に今日の宗教家は、時代教化の上に於て新紀元を作るの覺悟を以て、困難を忍び勞苦を辭せず、懸命に努力して國家に報效し佛恩を報謝し奉るべきである。

前に百倍する堅實性を有せねばならぬ。此の國民の思想の訓練は教育と宗教とに依るの外は無い。『三つ兒の魂百まで』の諺がある、國民的大精神は幼少の時から完全に薫陶せねばならぬ。教育に從事せらるる人々の如きは、身を以て忠孝の範を示し、國民道德の種子を自己の信念中に植つける樣で無ければならぬ。家庭に於ける父母、社會に於ける長者も亦皆、或る意味に於て教育家であるといふ覺悟を以て、子弟を率ゐ後進を導かねばならぬ。況や宗教家の如きは、一層、自己の大責任として國民精神の涵養振作に努力すべきである。それが實に其の一大天職である。

是に於て、私が廣く滿天下に訴へて相共に奮闘せんことを期し、特に我が宗門の寺院諸師に切望する所以のもの他なし、我が宗は禪定に依りて身心を鍛錬し、佛戒に依りて道德を實踐し、感應道交の信心に依りて法喜禪悦の境地に進み、眞俗不二の行持に依て利生報恩の功德を成ずるのが教義の大綱である。時代教化に於ては最も適順の法門と稱すべきである。

教化普及の方法は、其の寺院内に於てすると寺院外に於てするとを問はず、信仰を基礎とすべきは當然であるが、今日に於ては出來得る限り、教育會・青年團・軍人分會・消防團・婦人會・戸主會等に對しても其の訓練と發達とを翼贊し、進んで自治及び救濟慈善の事業にも貢献せねばならぬ。又、直接布教としては舊型にのみ拘泥せず、或は禪學會を興して禪道を鼓吹し、或は佛教青年會を起して教を布き、或は佛教婦人會を開きて法を說き、或は佛教少年傳道・處女傳道・日曜學校・幼稚園等を開設して少年子女に宗

が國恩に浴したる臣民の中に、斯る惡逆者を出さんとは夢想だもせざる所にてありし。幸ひにして、殿下の玉體、些少の御恙もあらせ給はず、神色自若として議會開院式に臨ませられ、御還啓の後も、少しも平日に變りし御態度はあらせ給はなんだと承はる。其の御勇氣の豪邁にして御胸襟の廓落たる、國民の齊しく感仰し且つ景慕し奉る所である。

我が國は世界五大強國の一と稱するも、陸海軍を除きては、何れの方面を見ても英米等の實力には及ぶべくも無いが、只だ世界の一大雄邦と稱すべき實質は、萬世不易の國體を有し、君臣一致して國民平等に義勇奉公の觀念に富み、君國の爲めには萬死猶ほ辭せざる精神に在るので、此の精神が忠孝道德の源泉となり、國運發展の根幹となり、正義人道の大本となるのである。然るに輓近に至り、國民思想上に動搖を來し、外來の思想風潮に感染して玉石相混ずるの嫌ひあり、爲めに危險と認むべき思想を抱く者あるに至る。是れ國家の爲め大に警戒せねばならぬ所である。

尤も、我が國民性は、古今を一貫して根強きものがあるから、彼が如き不敬漢ありたればとて、國民思想の反映であるなどと斷ずることは出來ぬが、假ひ一個でも半箇でも、斯る狂暴者を出したるは國民の一大恥辱であるから、吾々國民としては大に反省して、今後益〻健實に國民性の訓練に努めねばならぬ。

封建時代の日本は、恰も湖水を航行する樣なもので、極めて坦々たるものでありしが、世界の表舞臺に乘出したる今日は、恰も船を大洋に浮べたるが如く、如何なる狂瀾怒濤が襲ひ來るかも知れぬ。從つて從

小作も、相共に深く衆生恩といふ事を感じたならば、自づと根本的協調に實が擧ることであらうと思ふ。權利義務の論爭に耽つて居ては、何時までたつても精神的に調和の功は奏せられぬ。若し夫れ三寶の御恩に至つては、佛教を信ずる人でなければ一向にその有り難味を感ずることは出來ぬが、一たび佛の慈光に觸れなば、正しく吾々に生活の根本力を與へ、永劫不退の大安心を授けたまふのは、佛の御恩德であつて、實にかたじけなさに涙こぼるゝのである。

今日、國民思想が動もすれば惡化し易い傾向のあるのは、外來思想の影響とはいひながら、其の本は報恩的觀念の頹廢が起因を爲して居るものと思ふのである。佛教有緣の方々は率先して報恩行を營まれたきものである。

大不敬事件の勃發に鑑みて

先年、我が國に勃發せる大不敬事件は、實に空前の大不祥事にして、光輝ある帝國の歷史に拭ふべからざる一大汚點を留めたるもので、恐懼措く能はざる所である。

仁慈雨露の如き帝室に對し奉り、聖德圓滿珠玉の如き攝政宮殿下に對し奉り、我が國に生れ我

予は又、兵庫縣加東郡河合村慶德寺河合眞英師の、其の師僧に至孝なりしことを聞て隨喜に堪へなんだことである。其の師僧は慶德寺の前住で一傳眞乘和尚といふのであつた。和尚は志操行法ともに堅固な人であつて、徒弟に對するには、時としては頗る嚴格に過ぎた振舞もあつたさうである。不幸、肺患に罹り明治三十九年七月二十二日、四十二歳にして遷化せられた。眞英師は曹洞大學卒業後、暫時永平寺に安居し、尋で大雄山に招かれ、專ら雲衲教育の任に當りしも、師僧の病氣心に懸り、明治三十九年三月頃歸省しけるに、和尚の病益々重り行くので、從晝至夜、殆ど寢食を忘じて看護せられた。和尚を寢臺に移してからは、六七月頃の暑さにも拘はらず、毎夜、寢臺の下に臥して、暫くも和尚の身邊を離れなんださうである。和尚の病症が肺患であつたから、師の兩親は非常に傳染を恐れ、近侍看護を止めさせやうとするので、師は寺務や買物に出るにもなるだけ實家の前を通らぬやうにし、兩親に顏を合さぬやうにし、一身を捧げて看病に努めたのであつた。和尚の遷化後、其の跡を繼ぎて慶德寺に住職したが、自ら據つて師僧は四十二歳の入寂なれば、自分も四十二歳までは師僧在世の想ひをなして、自ら主位には立つまじと思ひ、十有餘年の間、結制の西堂や授戒の戒師に請ぜられても決して南面せず、師僧を客位に置き、自分では侍者の席に坐臥したといふことで、その行持は恰も孤雲禪師の承陽大師に於ける、峨山禪師の常濟大師に於けると同じであつたのである。如何に有り難き心操ならずや。

勞働問題や小作爭議の多い今日、最も勞資協調の必要を感ずるのであるが、資本主も勞働者も、地主も、

併し、それには君主と父母との御恩を感謝して、自分一己の欲望を先きとせず、專らその御恩に報いんとの觀念を主とせねばならぬ。かくしてこそ、其の人の行動全部が自然に純化し淨化するのである。人といふ者は、その眞情よりして君父に對し尊敬の念深き時は、他人に對しても自づから敬意を存するものである。又、君父に對して親愛の情厚き時は、他人に對しても必ず慈愛を存するものである。而して、それがやがて自己の人格を大成する以所であることを知らねばならぬ。

申すも畏きことながら、曾て攝政宮殿下（今上陛下）が神奈川縣大雄山最乘寺に御成りの節に、予に忝くも拜謁を賜はり、暫時、大雄山の歴史等の御尋ねに御答へ申上げ、それより諸堂を御案内申し上げた。殿下には御孝心最も深くわたらせたまふことを漏れ承はり、一層、敬仰の念を傾け居りしが、此の日は箱根御用邸より御徒歩にて、里程三里に餘る明神ケ嶽の嶮路を超えさせられしにも拘はらず、御疲勞の御樣子もあらせられず、御靴の如きも御附き人の手を假らず、皆な御自身にて穿かせられたまひ、御下山の時も、關本まで御徒歩にて御下りあそばされ、途中、十人二十人の奉迎者や參詣人が處々に整列して居りしに、一々御脫帽あらせられて敬禮を受けさせたまひ、寺人足の路傍に整列せるに對せられてまでも御脫帽あらせたまうた。その御叮嚀なる御態度には、一同が思はず感涙を禁じ得なんだのである。予も深く感激し、その御仁慈と御謙讓の御德を稱へ奉ると同時に、御孝心の如何に至厚にてあらせたまふかといふことを深く拜察したことであつた。

衆生恩　人は社會の恩惠に依りて生存し衆生相互の扶助に依りて活動す常に深く此の恩力を感じ正義人道を履み和敬博愛を旨とし世務を開き公益を廣め以て社會の福利人類の慶運を増進せんことを期すべし。

三寶恩　佛法僧の三寶は信仰の標準にして敎化の中心なり其の體は大慈悲心に歸す常に深く此の慈恩を感じ惡に遠ざかり善を樂しみ心を淨ふし道を奉じ一切の行動皆な慈悲報恩の誠より出で以て佛陀の恩德に報謝すべし。

報恩主義の内容は最も廣く且つ深くして、所有道德を含蓄して居るのであるが、從前は單に、臣民として大君に報い奉り、子として父母に報い、衆生界の一人として犠牲的精神を遂行することのみとして、頗る狹義に取扱はれることが多かつた樣に思はれる。我が國民道德の基本たる忠孝觀念も、亦た頗る狹義に考へられて居た樣である。が、敎育勅語に「我が臣民克く忠に克く孝に」と仰せられたる忠孝の二道は、吾々國民としての道德的大本である。忠というても、單に君主に對し奉りて忠節の誠を捧げ國民の義務を果すのみをいふのではない。孝というても、單に其の父母を恭敬して其の老に奉ずるのみをいふのではない。先づ第一に日本國民たるの責任を自覺し、人の人たる道を修め、進んでは國家を愛護して文化の向上と國力の充實とを圖り、退いては家系を尊重して生活の基礎を固め、父母の心を安んじ祖先の譽れを揚ぐるのが、眞の忠なり孝なりである。

個人としての自覺は、釋尊が第一に唱道し指導せられた者で、彼の『一切衆生悉有佛性』といひ『此の法は平等にして上下あること無し』と仰せられたるは、實に堂々たる權利の主張ではあるまいか。されど、此の權利を完全に獲得するには、必ず報恩行の實踐に依らねばならぬ。然らざれば、却てその權利を放棄しその人格を毀損して了ふものである。故に智度論には『恩を知るは大悲の本、善業を開くの初門なり、人に愛敬せられて名譽遠く聞え、死して天に生ずることを得て終に佛道を成ぜん、恩を知らざる者は畜生よりも甚し』と說いてある。

釋尊は心地觀經に於て世間・出世間の恩に四種ありと說き『一に父母の恩、二に衆生の恩、三に國王の恩、四に三寶の恩』を擧げられてある。併し、我が國民道德の上からいへば、寧ろ其の順序を變更して見る方が適當の樣に思はるゝので、予は常に、一に君主の恩、二に父母の恩、三に衆生の恩、四に三寶の恩と說いて居る。嘗て某氏の爲めに左の如き略辯を書いて上げたことがある。

四恩辯

君主恩　深く大君の鴻恩を畏こみ　皇祖　皇宗の遺德を感じ忠誠を傾け私心を去り國憲國法を守り國民の本務を盡し大に民力の伸暢を圖り以て國家の光輝を中外に宣揚せんことを期すべし。

父母の恩　深く父母の大恩を思ひ祖先の餘慶を喜び誠を盡して敬養し身を修め家を齊へ智を磨き行なひを正ふし子弟を敎養し職業に勉勵し父母の心を安んじ祖先の靈を慰め以て家門の隆盛を期すべし。

寶殿に奉掲せらるゝに及んでは、殿下親しく御上山あらせ給うてゐる。

また、明治天皇頌德記念觀世音菩薩大銅像の開眼大供養の日には、賀陽宮大妃殿下、並に山階宮大妃殿下御上山あらせ給うてその法會に臨ませられた。畏くもまた畏いことである。總持寺の光榮實にこれに過ぐるものが無い。

聖上陛下の優渥なる恩命を拜するに當り、予は特に開山常濟大師の垂誨を思うて恐懼に堪へぬ。

四恩の辯

佛教の道德は一貫にして之を云へば報恩主義である。報恩といへばとて、個人の人格・自由・權利を沒却したるものではない。寧ろ此の報恩行に依りて、完全なる個人の人格も現はれ、眞正なる意味に於ける獨立自由をも得られ、且つ其の天賦の權利をも全うせらるゝのである。如何となれば、佛教に所謂報恩道德は、決して下より上に對してのみ行ふべきではない。上下貴賤、老若男女の別なく、一般に共通するものである。凡そ個人としての人格及び其の權利は、道德の實行に依てのみ完全に得らるゝのであるから、眞の獨立自由も亦た道德實行の上に成立すべきものである。

が、六百年後の今日いやが上にも輝いてゐる。明治天皇が、大師に『常濟』の號を賜つたのは、畏きことながら、此の間の意味を酌ませ給うたのではあるまいかと拜察し奉る。

かけまくも畏いことであるが、常濟大師が、歴朝の天皇、並に各宮殿下の御崇信を受けさせられたことは、筆舌に盡くされぬものがある。

後醍醐天皇が、大師に十條の法問を御降下あらせ給ひ、その奏對を特に嘉納あらせられて、總持寺に勅額の御下賜があり、また『勅願の道場に補任す』との御綸旨が下つて以來、歴朝天皇が大師を御崇信あらせられ、後村上天皇は大師に『佛慈禪師』の號を諡り給ひ、總持寺に『皇圖の長久を萬春千秋に祈り奉るべし』との綸旨を下し給ひ、後奈良天皇・後陽成天皇・後光明天皇よりは、『曹洞宗の本山、勅願の道場たる本分を全うせよ』との綸旨を下し給ひ、後桃園天皇は、大師に『弘德圓明國師』の號を追謚し給ひ、明治天皇は『常濟大師』の號を下して偉德を讃へさせられてゐる。

總持寺が、帝都近郊の此の地に移轉することに決定したのは、明治四十三年の七月で、今日に至つて纔かに二十年である。が、この間、一再ならず優詔を拜し、再三、宮殿下の御上山を忝うしてゐる。

明治天皇が『常濟大師』の號を下し給うたのは、明治四十二年九月八日で、御內帑を御下賜あらせ給うたのは、明治四十五年の二月二十四日である。總持寺伽藍の略ぼ竣成を告げた大正十年には、伏見宮殿下より『紫雲臺』の額を御下賜あり、同年また、久邇宮殿下より『鎭護國家』の大額を賜はり、大額の大雄

て燃え水が下に向つて流るゝよりも、猶ほあたりまへのことである。が、この當り前のことを閑却してしまふ人があるので、大師は夙に之を誡め、「何をもてか、父母生成の恩を報じ、何をもてか、國王水土の恩を報ぜんや」と仰せ下されてゐるのである。

後醍醐天皇の正中元年、大師御入寂の前年、法子法孫の遵式として、總持寺に十條の龜鑑をお定めになつた。その第一條に、「皇詔一たび下るに及びて朝家萬年の功德所と爲り、是より山中稍く贍足る。予が嗣法の門人、今より百千年の後に到るまで當山を仰いで本寺となし、輪次住持し、以て寶祚長久を祈り奉るべし」とある。

大師が最も深く我等兒孫を誡し置かせられた事は、寶祚の長久を祝禱せよといふこの一事である。總持寺を本寺となして、輪次に住持してと仰せになつたのも、その主眼は寶祚長久を祝禱することにある。故に大師の法子や法孫が、九州・中國・東海・東山・奥羽と、日本全國に亙つて寺院を開き、そこに住山して法化を盛んにするに當つても、先づ住山第一の式典に寶祚の長久を祝禱し、また毎月の一日・十五日には必ず祝禱の儀を行ひ來つてゐるである。

寶祚の長久を祝禱する道は、その祈禱會にばかりにあるのではない。祈禱會は佛天の加被力を仰ぎて信念の純淨を期する道である。既に純淨にされた信念の力は發して偉大なる行蹟を現はす。大師はこの信念の力によつて各地に行化し、諸所に寺院を建立して大法燈をかゝげさせられた。その信念の大法燈

賜あらせ給ふたことは、實に有り難き極である。皇恩を感佩せらるゝことの厚き我が開山常濟大師は、大寂定中、感泣して、叡慮を畏み三萬の法孫、七百萬の檀信が、臣子の分を全うするに於て、萬遺漏なからんことを御照鑑になつてゐることゝ恐察する。我等大師の法孫たる者は、この光榮を悦びて大に精進する所がなければならぬ。

大師が三十三歳の時、御示しになつた御誨に、

汝諸人、悉く皆國土にはらまる、一天下、國土上、悉く是れ國王の水土にあらずといふことなし、家にあれば親につかへ、國に侍れば君につかへまつる、如是なる時、天地加護ありて、自ら陰陽のめぐみをうく、然もなまじいに、佛法にねがはんと號して、可仕親にも仕へず、つかふまつるべき君にもつかふまつらず、なにをもてか、父母生成の恩を報じ、なにをもてか、國王水土の恩を報ぜんや。

と仰せられてゐる。『家にあれば親につかへ、國に侍れば君につかへまつる、如是なる時、天地加護ありて、自ら陰陽のめぐみをうく』我等が本分を全うする所に、天地の加護があり、陰陽の惠がある。經濟上の問題や、政治上の問題が、こんがらかつてゐる現代は、實に難しい時代で、動もすれば臣子の大本を見失つてしまふ向もあるやうであるが、大に戒愼しなければならぬ。

禪には『柳は綠、花は紅』といふ語がある。柳は柳らしく、花は花らしく、人は人らしくといふのである。人には人の踏むべき道があつて、臣としては君に仕へ、子としては親に事ふ。これは焰が上に向つ

師の德風宣揚のために、幾度か綸旨を下し、禪師號・國師號・大師號を追諡し給うた。實に勿體ないことである。塔尾陵前に詣でゝこれを思ひ感涙の滂沱たるを禁じ得ない。

歷朝の皇恩により帝都近く鶴見に移轉した總持寺が、開祖六百年大遠忌法會を修する本年四月を機として、寶祚の長久を祝禱し、精神主義興隆のために大に精進する所あらんとしてゐることは、臣籍に連る緇侶が纔かに面目を持ち得る所以である。

　常濟大師六百年大遠忌法會を修するに先だち、歷朝の天皇、特に七朝天皇の鴻恩を追ふために、昨十三年の十一月二十八日、伏見桃山に明治天皇御陵を、深草法華堂に後奈良天皇・後陽成天皇の御陵を、東山泉湧寺に、後光明天皇・後桃園天皇の御陵を拜し、三十日に大和畝傍山に神武天皇御陵、吉野山に後醍醐天皇御陵を拜し、翌一日に河内の檜尾山に後村上天皇の御陵を拜し、二日、伊勢の大廟に參拜したのであるが、後醍醐天皇御陵前に於ける感慨の聊かその一端をこゝに拜記した次第である。

勅額の御降賜

我が總持寺開山常濟大師、六百年大遠忌法會の第一日、聖上陛下より優渥なる思召を以て、勅額の御降

頼朝に深くその舊功を賞せられ、武勇絶倫、誠忠無比と讃して能登國能登郡を授けられ、後また鳳至郡等を加賜されて、子々孫々相繼ぎて頗る勢あるに至つた人である。長谷部信連の此の誠忠武烈が、後醍醐天皇の嘉納したまふ所となつたことは、畏くも拜察するに難くない。

とまれ、元亨元年、當時、長谷部信連の後裔の最も勢力を張つてゐた鳳至郡にある櫛比の總持寺住持人たる瑩山禪師(常濟大師)に、十種の勅問が下り、總持寺の三大文字の勅額を御下賜になつた。翌年の八月二十八日には、また『總持寺は日本無二の禪院で曹洞第一の上刹であるから、紫衣法服を著して、寶祚の長久を祈り奉るべし』との綸旨を下された。天皇の讓を受けさせられた後村上天皇も亦た正平年間に一再ならず、總持寺へ綸旨を下されてゐる。然るにも拘らず、長谷部信連の正嫡たる盛連が、加州大聖寺の戰にわづかに軍功を奏したるのみにて、多く取り立てゝいふほどの忠烈殊勳なく、その後に於ては、子孫多く足利氏に心を寄せたるは、その罪、長谷部一族にありと雖も、また、總持寺にも教化上幾分の責が無いとはいはれない。少くとも、寶祚の長久を祝禱するに於て、十二分の本分を全うしたとはいはれない。今、總持寺住持人として後醍醐天皇塔尾陵にぬかづいてゐる衲は、思うて玆に至り、誠に慚愧に堪へぬものがある。

しかも皇恩の鴻大無邊なる、臣臣たらずと雖も君君たらざるなき我が歴代の天皇、殊に、後醍醐・後村上・後奈良・後陽成・後光明・後桃園・明治の七朝の天皇は、總持寺興隆のために、また、開祖瑩山禪

天皇が英明の君主にあらせられたことは申上ぐるまでもないが、私は特に天皇が、護國の要諦、治世の樞機を、神佛の冥助と道義の精神とにおかせられたことを尊く有り難く思うてゐる。悲しいことには、神佛の冥助を障ぐる魔障が深く、道義の精神を蔽ふ翳霾が跳梁してゐた爲めに、天皇の叡旨はその光輝を發揚するに至らなかつた。これは我が總持寺としても最も恐懼に堪へざる所である。

言ふまでもなく、總持寺は後醍醐天皇の勅願道場である。天皇よりその綸旨を拜受したのは、元亨二年八月二十八日であるが、この元亨の初年頃より、天皇は蒼生の上を特に御軫念あらせ給うて、旱魃飢饉で困つてゐる京都の貧民を賑すために、富豪の貯藏米を出さしめたり、記錄所へお出ましになつたりして、大に民をいたはりたまひ、執權北條高時・管領高資等が酒色に耽り、私事これ事としてゐるのを深く憂ひたまひて、王政維新の方策を種々立てさせられることゝなつた。

その頃、京童の口さがに、『保元の爲朝、治承の信連』と謳ふ一事があつたといふ。治承の信連とは能登の守護長谷部宿禰信連のことである。曾て『平家にあらざれば人にあらず』といはしめた時代に、後白河天皇の第二の皇子以仁王が、平氏の討伐を企てたまひしに、治承四年の五月、事洩れて、却つて平氏の軍勢に、以仁王の三條高倉宮が取り圍まれ、甚だ危急に瀕した。その際に、ひとり踏み留まつて、縱横奮戰し、以仁王の落ちさせたまふ御行を安全にし奉り、自らは刀折れて立つ能はざるに及びて、捕はれの身となつたのが信連である。信連は後わづかに死を免れて信州に黥竄し、源氏の天下となるに及んで、

功を莊嚴すべく離苦得樂の白法でありますれば、御追孝の御爲めに御淨寫を賜はりしことは、佛意にも冥合し經旨にも相應すべき大功德行と信ずる』旨を申し上げて御暇乞致したことであつた。

親王といひ、殿下といひ、珠玉の如き高潔なる御信念、金鐵の如き剛健なる忠孝の御誠德、甘露の如き潤澤に富める御恩情を有したまふ爲め、皇太子妃殿下（現皇后陛下）の如き坤德深き御子さまを有たせたまうたものと拜察し奉る。從つて、俔子妃殿下も世に勝れたる御孝德にましますことは御跋文の上にても窺はれ、優に妙なる御水莖の跡にも察せられて最も貴き限りである。

後醍醐天皇陵にぬかづきて

後醍醐天皇が崩御あらせられたのは延元四年八月十六日で、今（大正十三年）を距ること五百八十六年前である。天皇の叡旨が天下に隈なく行き亙るのには、實に長い年月を要した。明治の維新を待つて始めて、後醍醐天皇の叡旨は率土の濱にまで及んだのである。こゝに至る五百二十餘年のその間は、天皇が御怨恨をはらさせたまふ日とては一日も無かつたことであらう。左に法華經を把り、右に寶劍を按じ、山鳩色の法衣を召し、北向して入定あらせられた御相を想見し奉りて、私は實に恐懼に堪へぬ。

ことは左の御歌にても偲び奉ることが出来る。

葵。

ことしより神のみ山のあふひ草かざしてまたもわけのぼらばや

社頭紅葉

春日山もみちをぬさとたむけつる赤きこゝろは神ぞしるらむ

伊勢神宮御造營御落成のおり奉納

萬代もながれたえせぬ五十鈴川さやかに神のかげもみゆらむ

久邇宮邦彦王殿下は親王の第三子にて、御生母は泉亭萬喜子の方にてあらせらる。殿下には御孝心殊に深くおはしまし、曾て總持寺の爲めに、御親ら大般若經第一卷を御書寫くだされ、私を御召になりし時の仰せに、「予の生母は予九歳の折に歿した、爾来、既に四十年を過ぎぬ、予は一日も生母の恩を忘るゝ間とても無いが、幽明境を隔つれば孝養の道とてもあらじ、此の經を書寫したらんには冥福に資することもあらんかと思ひ、筆硯を清めて淨寫したり、然るに、大般若は御祈禱の經典ぞと言ふものありき、さすれば菩提を弔ふ爲めにては經意に違ふやも知らざれど、俗人のことなれば恕してくれよ」との仰せであった。その時、殿下の御目には玉の露を浮ばせたまひしやうに拜した。私は謹で拜受し、『大般若は釋尊所證の眞諦を開示したまへる大智慧の法門なれば、獨り現在に於ける轉迷開悟の妙典たるのみならず、永

浮雲のいかにみそらをおほふともつひにはてらす秋の夜の月

河越重幸が武士の御事に事あらむ時の心得をとひければ

君のためやたけごゝろの梓弓はなたばなどかあたらざるべき

題しらず

浮雲を吹き拂ふべき風もがなとよあし原の中ぞらの月

親王の正論直言は幕吏の忌む所となり、屢々不遇の地に幽居し給へることありしは、實に御同情に堪へぬことである。爲めに御寂寥を感じたまふと同時に、一層、宮廷及び國政に對する御憂慮も深かりしと拜察する。

八月十六日京師出立の折

あだしの〻露ともきえむ身なれどもしばしはかゞむあきの宮島

都へかへらむことを神佛にねぎて

神佛おのがまごゝろしろしめさば都にはやくかへしたまはね

述懐

うき身にも似たるものかな蘆田鶴はいつもたびにて年をつみつゝ

此等の尊詠を拜すれば、當時の國狀も思ひ遣られて暗涙の滴るを覺ゆ。親王が御信念の最も深く在せし

子とならせたまひ、十三歳にして佛門に入りて一乘院主となり、後、興福寺別當に補せられ、誦經の餘暇深く文武の兩道を究め、更に天台座主に補せられたまひき。當時、內憂外患並び起り國步最も艱難、時代は親王の身を永く緇苑に留むるを許さず、四十歳の御時、勅を奉じて還俗したまひ、專ら皇猷を贊し御身を犧牲として親ら國難に當り、其の結果として幾度か危險の御身に逼れることもあり、數々罪なくして配所の月を觀たまひしこともあらせられた。

四十五歳の御時に明治の御代を迎へ、維新回天の鴻業茲に成り、五十二歳の御時、命ありて久邇宮と稱し神宮祭主に任ぜられ、五十五歳の御時、眞親會を組織して神・儒・佛の三道を和衷協同せしめられ、常に國運の發展を以て念とせられ、或は興福寺の再興を謀り、或は保勝會を設くる等、世道人心の爲めに盡させたまひし御功績實に鮮少ならず、明治二十四年十月二十四日、六十八歳を以て御薨去あそばされた。

親王が國事を深憂したまへる貴き赤誠情と、回天の偉業を翼襄したまへる雄大なる御壯圖とは、吟詠の中に湧溢して居るやうに拜せられる。

世の中の靜ならさるよしをきゝて
いちはやくこの村雲を拂ひませと神に祈らぬ日はなかりけり

十五夜

青蓮歌集を拜覽して

昨臘末、久邇宮家より青蓮歌集一部を下賜せられて、恭しく拜讀し奉るに、是れは久邇宮殿下の御父君朝彦親王の三十年祭に當り、親王の御尊詠を集めさせられたものである。

卷頭には伏見宮貞愛親王の御筆にて『松雪』の御題字あり、次には朝彦親王の『松不改色』の題にて

　あら玉のとしのはじめもいろかへぬときはのまつをきみはめづらむ

の御尊詠色紙あり、卷中收むる所、安政五年以前よりの御尊詠一百九十四首、皆な俔子妃殿下の御筆にて寫され、終りに妃殿下及び邦彦王殿下の御跋文あり、更に朝彦親王の略年譜を添へさせられ、如何にも敬虔の御心を籠めたまひし莊嚴なる珍籍である。

妃殿下の御跋を拜すれば『御歌の百の中より一つをえりいで摺り卷とし近く仕うまつりし御うちのかたがた、さらぬも親しき御方あたりにわかちおくり給はんとて』云々とあれば、これは親王御尊詠中の一部を御集錄遊ばされしものである。

惟みるに、朝彦親王は文政七年正月の御誕生、天資英邁、幼にして儒教佛典を學び、仁孝天皇の御養

しかりしやも知らされど、俗人の事なれば恕しくれよ」との有り難き御言葉であつた。

僕は謹で之を拜覽せしに御筆蹟の雄健にして渾雅なるは言ふまでも無く、その御跋は長編の御作にして、言々句々、御孝心と御信念の流露ならざるは無し。僕は感激の涙に咽びつゝ、御要務御多端の御身にてあらせたまふを知りながら、大般若第一卷の御書寫を願ひ奉りしは甚だ恐懼の至りなれど、縱ひ一字なり一行なり御筆の跡を留めたまはゞ本山の光榮、宗門僧俗の喜びと存じ居りしに、第一卷の全篇を御書寫したまはるのみならず、御孝情を傾けての御筆は實に錦上に花を敷くものにして銘肝の極みであります。孝順は至道の法とは釋尊の吾等に示したまふ所、幽明並び救ふは佛敎の靈德なるを以て、跋辭に於て叡意を御識したまひたることは、一層有り難き御思召にて只々感激の外なし」と申上げたことである。

御跋詞を拜しても、「我が丹心は卽ち眞如の泉、吾が彼岸は忠孝の德の實現に在り、吾は此の道を以て中堅と爲す」と仰せられしは、釋尊が「孝順は至道の法なり」と御示しになりしと同軌にして、信仰と道德、眞諦と俗諦との一如を述べたまひしものであることは、跋詞の全文を熟讀賞味すれば最も明らかである。殿下が御信念の深く御孝心の厚く、且つ御身を以て道德の範を示したまふことは誠に有り難きことである。

久邇宮殿下の御孝徳

久邇宮殿下の御聰明にして武勇に秀でさせられ、且つ忠孝慈悲の御心殊に深くあらせられ、常に御身を以て道德の範を御示し下されつゝあることは吾人の瞻仰措く能はざる所である。

大正十年四月には『鎭護國家』と大書あそばされたる額を當本山に賜はり、大正十一年四月十二日には妃殿下・若宮殿下・良子女王殿下・信子女王殿下御同伴にて當本山に成らせられ、諸堂御巡拜の後約三時間も御休息、樣々なる御物語りあつて御機嫌麗はしく御歸還あらせたまひしが、翌年五月二日、衲が御召に依りて宮邸に伺候しけるに、殿下には豫て當本山より御手許に差上げ置きし大般若經の第一卷を御書寫あそばされて親く御下賜になり、其の際、殿下には勿體なくも御涙を浮べたまひて仰せられけるには『予は九歲の時不幸にして生母に別れたりき、爾來年を閱すること玆に四十餘年、其の間暫くも其の恩分を忘るゝことは無いが、幽明境を隔つれば孝養を盡すべき道とてもあらじ、大般若は釋尊苦心の轉法輪と承はれば、之を書寫し奉ることは悲母の冥福を資助する功德ともならんと思ひ、誠信を捧げて第一卷を淨寫したのである、幸に餘白もありければ跋辭として其の志しを識し置けり、かやうなものを書き添へては惡

を立派に認められた。要するに、言行一致の君子人なることが十分に感ぜられしは、一層ありがたきことであつた。

嗚呼、居士は實に我が佛教界の大恩人である。是の如き大德は、一日でも一時でも一刹那でも、此の世に在ることを祈り居りしが、不治の難症に罹り、更に急性感冒の侵す所となり、七十四年を一期として、遂に白雲を踏破して玄路に上程せられた。併し、居士の大願力は永く淸淨身として我が國家を擁護し、我が正法を住持せらるゝことであらう。維摩經の中に「以二大精進一摧二伏魔軍一常求二無念實相智慧一行二少欲知足一而不レ捨二世法一、不レ壞二威儀一而能隨レ俗、起二神通慧一引二導衆生一得二念總持一所聞不レ忘善別二諸根一斷二衆生疑一以二樂説辯一演説無レ閡」とあるは、移して以て居士に對する贊詞となすべきである。我が佛教界に於て、居士を失うたは大なる損害である。否、我が國家に取りても、大なる損害と謂はねばならぬ。

殊に私の感ずる所は、居士の然諾を重んずることである。豊橋の龍拈寺主久我方丈は、毎彼岸に居士を聘して佛教講話をして貰はれた。居士は、二十年前より發病の當時まで此の契約を履んで、毎年春秋の彼岸には、必ず之を勤められたといふ。各地の巡回に日も亦た足らざる居士が、出先の都合にて、彼岸毎に豊橋に行くには、隨分無理な遣り繰りをせられたこともあらう。それでも居士は、二十餘年一日の如くに勤められた。久我方丈も亦た同轍であつた。どちらも感ずべきことで、中々出來ぬことである。居士の志操と願行とは此の一事に徴しても解るであらう。」

物語られたことがあつた。居士は殊に是の如き觀察眼を有て居られたのであらう。

衲は、居士と相交はること三十餘年なれど、親く居士の家庭行狀を見たことが無い。尤も、居士が家族と與に行なはれた食時の儀とか、その勤勉の樣子などは、親く居士よりも聞き、また、居士に接近せる人々からも聞て居るが、大正三年、居士發病の年の七月、仙臺市に於て曹洞宗青年會の講習會があつた。其の時、衲は居士と與に講師となつて參り、同じ旅館に宿することゝなり、而も其の室が襖一重を隔つるのみであつた。暑さの烈しき爲めその襖を取除き、まるで同室同樣で五六日間居り、短かき同居ではあるが、晝も夜も喫飯も喫茶も殆ど同席であつたから、此の間に聊か居士の平生を實驗することが出來た。

第一に感じたのは居士の謹嚴なる態度である。言葉使ひも起居動作も、如何にも謹直で少しも戯論の振舞が無つた。每朝床の間に向つて靜坐幾十分、食膳に對しては合掌默誦して後に箸を取られた。且つ衲に對して『私は師の如く精進料理の方が寧ろ結構である、別に註文もせぬ、又、どんな御料理でも決して不平は言はぬことを誓うて居る、食物に向て妄りに小言をいふのは全く勿體ないことである』と言はれた。又、訪問の客が來ると、何人に對しても快談して、少しも厭ふ色が見えなんだ。入浴は御好と見えて、暑い時である爲めでもあらうが、一日に二回も三回も沐浴せらるゝことがあつた。浴後には必ず水を浴びられたやうに思ふ。夜分なども蚊のしげきのに、夜の十時までも十一時までも、讀書をしたり、手紙を書いたり、原稿を作つたりして居られ、非常に勤勉であつた。而して、何事の上にも一大信念の存在

的でありしゆゑ、居士は非常に興味を持て居られたらしい。維摩は小乘の道俗を彈呵して大乘に誘引せられた。居士亦た自ら維摩を以て任じて居たかも知れぬ。又、東坡の『廬山烟雨浙江潮、未到千般恨不消、到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮』是れ居士の行履であつた。承陽大師は空手還郷を高唱せられた。此の見知に住すればこそ、生死の中に於て生死に著せず、諸々の淨國嚴飾の事を以て己が佛土を成ずることが出來たのである。

又、居士は衲に對して、「維新以來各宗の高僧に接するに、各々特色あり、師表と爲すに足るもの多き中に就て、何となく奥深く感じたるは、行誠上人と悟由禪師である」と歎稱せられた。行誠上人の深信と無我、悟由禪師の淡泊と超絶、居士の眼には別段の趣味を感ぜられたものと見ゆる。

居士の人を見る、必ずその信仰と道念とを尊重せり。嘗て衲に語りて曰く、「常州某寺に於て素堂禪師の授戒會のありし時、禪師に相見せり。時、恰も戒弟の午時飯臺の始まる所であつた。此の時分、禪師は午時の飯臺に臨場せられた。もはや雲版も打ち大擂鼓を鳴す時に相見したのであつた。禪師は平生に似ず、一その素振が違ふ樣に感ぜられ、變だと思つたが、その中に「ヘ、ア飯臺に出られる時が來た爲めだな」と感づいたので、匆惶御暇を乞うた。禪師は直ぐ上殿せられた。戒弟飯臺ぐらゐ代人を立てゝも宜しかるべきに、此の勤めを重んぜらるゝこと是の如くなるを見て、私は『禪師の禪師たる尊さは此處にも現はれて居る』と感じて、何んとなく有り難く思うた。人天の導師、殊に禪門の長者はかうありたきものぞと

說法は實に偉大なる轉法輪であつた。居士は實に、或時は地水と作り、或時は復た風火と作り、劫中に疾疫あれば身を現じて諸々の藥草と作り、劫中に饑饉あれば身を現して飲食と作り、劫中に刀兵あれば之が爲めに慈悲を起す底の大機大用があつたのである。試みに居士の文疏を見よ、老婆禪に過ぐる程に通俗的說明をして居らるゝが、その間に些かの怪談奇說を挾まぬではないか。

大正三年の秋、永平寺に上りて不治の病に襲はれたるは、千秋の恨事であつたが、幸にして居士は筆と舌とを失はなかつた。衲は幾度も東京の病室に相見したが、左半身が絶待的に不隨なるにも拘はらず、筆を執る手と舌頭とは中々健全であつた。衲は『先生は此の二つの利器を以て法敎に盡されたから、此の病に罹つても此の利器を奪はれぬは、三寶龍天が先生に許すに筆と舌とを以てせられたのである。未來も亦た是を以て活動せられよ』というて共に笑つたこともあつた。而して居士は、平生景慕する永平寺開祖の膝下に詣して發病せられしことを、何等かの因緣なるべしとて、寧ろ大に喜んで居られた樣である。信仰深き居士として好い慰めであつたらうと思ふ。

釋尊は、居士の信仰の中心であつたことは言ふまでも無いが、次には聖德太子を非常に信仰して居られたと思ふ。太子は實に居士の理想的大聖であるからである。また各宗の祖師は總て尊敬して居られたが、居士の信仰的經歷上、最も承陽大師に歸依して居られたと思ふ。古昔の居士林中の人傑たる維摩と東坡とは最も居士の先達でありしならん。維摩は居士中の大居士だから當然であるが、東坡は其の見地如何にも禪

護國に回向した。尊皇を離れては居士なく、奉佛を捨てゝは居士なし、尊皇奉佛の四字是れ實に居士の生命であつたと思はれる。私は居士に相見し、談、偶々國民思想の問題に及ぶと、居士は殆ど涙ぐんで現代思潮の弱點を憤慨するのが極りであつた。居士の舌は常に尊皇の爲めに動き、居士の筆は常に奉佛の爲めに動いた。

居士の足跡は殆んど海内に周ねく、而して、未だ曾て遊山翫水の爲めに杖を呼ばず、演壇に立つこと幾千萬回、居士の長廣舌に依りて尊皇報國の志操を鍛錬せし者幾千萬人、居士の國家に對する努力は恐らくは國家の元勳にも讓る所はあるまじと思ふ。此の意味に於て、居士は實に國家の大忠臣である。又、國民の大恩人とも謂ふべきである。國家としても、國民としても、居士に對しては相當の敬意と待遇とを致すべきものと思はれる。

居士の說法は多くは卑近であつた。極端に通俗的であつた。併し、居士の說法には迷信的の分子が無い。非常に實際的であつて、而して、正直に佛教の秘奥を闡明するに努められた。故に、能く居士の說明を玩味すれば、此れに高尚なる大乘佛教の精神が動いて居る。そこで私は居士の說法を稱して『最卑近の最高尚』と謂ふのである。即ち平凡なる哲人であつた。

居士の禪戒論や眞相積論や拂塵囊論中には、私に未だ首肯し難い點もあつて、兩三回、直接に討論を試みたこともあつたが、佛教の深義を愚夫愚婦に領解せしむるまで、嚙み碎いて說明せられし居士の慈悲

宗に對して拔群の努力を拂はれたことは世間周知の事實である。故に、知らぬ人は、居士を以て洞門の僧侶と思うて居た程である。且つ居士は筆と舌とを以て一世の木鐸となつたばかりでない、或る意味に於ける堂々たる事業家であつた。新聞も起せば活版所も造る、學校も建てれば團體をも組織する、餘りに多方面であつた爲め、居士一人の事業としての大成功も無かつたか知らぬが、幾多の事業に於ける其礎工事だけは立派に成し遂げて居られる。而して其の經營一切が、總て護法の目的に向つて貢献せられた。是れが居士の最も尊貴なる點である。故に衲は居士を以て佛教界の大恩人と稱するのである。

居士の大生命は尊皇奉佛の四字であつた。居士は盡忠報國の觀念最も厚く、尊皇と奉佛とを銷融して忠心卽佛心主義を鼓吹せられた。此の理を推し擴めて眞俗一如の法門を開き、王法佛法一賽兩彩の妙趣を說き、正法を護持して國家を擁護することを畢生の事業とせられた。居士は此の大思想を搭取して隨處に傳道し、或は涙を流して時弊を慨し、或は卓を打つて惡習を誡め、邪を排し妖を碎き小を斥し偏を彈じ、殆ど痒處に搔在して遺漏なきを見る。彼の尊皇奉佛大同團を起したのも全く此の大思想の實現であつた。該事業は有終の美を濟すに至らなかつたが、居士生涯の努力は實に尊皇奉佛主義を以て一貫したのである。

居士の說法は極めて實際的であつた、極めて現實的であつた。尤も、大乘の極則、禪門の宗乘を縱橫說破する所ありしも、その歸する所は平常心是道であつた。而して、一切の法門一切の行願盡く尊皇

實心求道七十四年、其の全生涯を通じて佛法の護持に任ぜられたるは、實に我が青巒居士であらう。護法の大士も決して少なくはあるまいが、その中に最も偉大なる大德は青巒居士であらう。

皇政維新の後、排佛棄釋の聲天下に喧しく、佛教は空前の大厄難に襲はれた。加之佛教の內部は積年の弊習に縛せられ、內憂外患競ひ起り、累々乎として其れ危しといふ狀態であつて、此の時に當り、居士はまだ一青年の身であつたが、敢然挺身して自ら護法を以て任じ、或は筆を以て降魔の劍となし、或は舌を以て闢邪の陣を張り、實に目覺ましき活躍をなされたものである。

明治十二三年頃に於ける居士は、その年齡は而立（三十）に達したばかりであつたらうが、帝都新聞界の文士論客としては、福地源一郎（櫻痴）氏などに亞ぐ程の重きを置かれたものであつた。佛教演說に至つては、神原精二居士など交互聯鑣して、實に一方の雄將であつた。殊に天性、頭腦明晰、才氣縱橫なる居士は、詩を能くし、書を能くし、佛典に通じ、世典に達し、何でもござれといふほど多藝多能で、その辯舌は流暢明快、一世を風靡するの槪があつた。而して、禪門に出入し眞宗に遊び、各宗の高僧に接し天下の名士に交はり、實に花々しき活動振であつたのである。

その學術は、一身を委ねて研鑽したといふ科目も無かつたであらうが、天稟の學才は、佛教各宗の教理、和漢東西の學說に通じ、博覽強記、世間稀れに見る所の大才能を有せられた。此の才智識量のあらん限りを盡して、我が佛教界の爲めに破邪顯正の勞を執られたのである。中に就て、種々の因緣から、曹洞

施せば家庭の和樂を倍增し、之を社會に施せば社會の福利を增進し、之を國家に施せば能く富强の實を擧げ、之を世界に施せば能く平和の基を開く、處として通ぜざる無く時として行なはれざる無し。然るに今日の所謂禪なるもの、恐くは進步なきの禪にはあらざるか、今の所謂戒なるもの、恐くは手脚なきの戒にあらざるか、達磨の面壁は益々其の靈機を撥轉して、靑原の拂となり、黄檗の棒となり、轉々窮まり無し。靈山の戒傳は彌々其の妙德を活運して、曹溪の波となり、吉峰の雲となり、運々極まり無し。然るに、今日は禪風未だ研究の跡少なく、戒傳亦た運用の道開けず、蓋天蓋地の佛法も僅かに一部分に其の氣息を通じ、旋乾轉坤の大道も僅かに一局部に其の生命を存するの觀あり。我が正法眼藏の弘通せざること宜なりと謂ふべし。而して是の如きは、知らず是れ誰が罪ぞや。

是に於てか、迂衲等が我が大學生諸賢に期待するもの益々多大ならざるを得ず、胸中の感慨迸りて遂に不遜の言辭を弄す、罪過彌天、謝する所を知らず。希くば諸賢の寬大なる、其の言を採らずして其の意を存ぜられなば、迂衲の幸榮復た之に加ふること無し。

り、其の學風益々高實に向ひ、其の思想亦た益々堅實に進みつゝありと聞き、迂衲等の期待するところ遂に虚しからざるを認め、快心の禁じ能はざるを覺ふ。是に於てか學生諸賢に對するの希望も、亦た一層の大を加へざるを得ず。

有安老人、曾て迂衲に告げて曰く「現代の僧俗、徒らに學殖の多量のみを期して人格の莊嚴を養ふことを知らず、才能の浮華なるを是として品性の高潔を作ることを輕んずるに似たり、是れ甚だ慨すべきことに屬す、僧は三寶の一にして佛祖の形相なり、須らく佛意を體し法敎に順じ、以て身心に佛法を行持して弘法利生の任を盡すべきなり。果して能く是の如くならば、庶幾くは三寶の一數たるに辜負せざらん、子等宜く此の意を以て後生を誘引せよ」と、迂衲聞て感激の襟を霑ほすを覺えたりき。

蓋し、法は孤り弘まらず必ず人に依て弘まる。故に、佛敎の盛衰、祖道の隆夷は、繋りて僧寶に在り、僧寶の存するところ法敎行はれ人心歸す。僧寶の存せざるところ佛德昧く宗風熄む。然れば則ち、若し僧寶の光輝なくんば、伽藍の莊嚴も、圓頂の多數も、遂に佛祖の生命を紹繼すること能はざるべし。

禪宗に禪なしとは嘆息の聲に非ず、滔々たる天下、眞淨の禪風を舉揚する者果して幾許かある。偶ま禪道を鼓吹するあるも、未だ鷲嶺の花香を薰發し少林の景趣を描寫し得たりとは思はれず、多くは是れ樣に依て胡廬を畫き遂に半錢の分なきが如し。禪は戒に依て其の妙用を發揮し、戒は禪に依て其の妙德を圓成す。禪は能く八宗を綱紐して其の淵源に徹底し、戒は能く衆德を培養して其の美果を成熟す。之を家庭に

故に、法敎を護持するは國家の文明を進展する所以であつて、眞正なる護國は護法に依るに非ざれば能はじ、その護法こそ雜誌『護法』刊行の大理想である。是に於てか、予は今後『護法』が從前に比して更に一段の勢力を擴張するの必要を感ずるのである。今後の『護法』は益々其の羽翼を伸ばし、我が國の精神界に向て大光明幢と爲ることであらうと思ひ、深く其の前途を祝福して止まないのである。

曹洞宗大學の移轉

紅塵の街衢を避けて閑雅なる淨地に轉じ、校舍の造營其の全きを得、敎育の設備亦た整頓を告げたる、我が宗門の最高學府たる大學は、玆に移轉式の慶典を擧行せらるゝに至る。迂衲等豈に滿腔の喜悅を以て之を祝賀せざるべけんや。

惟ふに、敎育は宗門の命脈なり、命脈の源泉なり。人材の養成、宗義の發揚、化導の樞機、濟生の資料、皆な是に依らずんばあらず。明治の初年より、其の學則と面目とは倶に幾多の變遷を歷、其の內容と學風とは自づから推移すること鮮からざりしと雖も、佛祖の身心を陶冶し鍛鍊して、他日、人天の導師、祖道の紹隆に任ずべき英材を敎養するの目的に至ては終始一貫、些子の變動あるべからず。近年に至

くのである。

以上の十界生活を標準として、現在の吾々の生活狀態を批判して見たならば、如何であらう、上級の人士にして地獄生活や餓鬼生活に墮落して居る者もあらう、又、赤貧者にして聲聞生活や菩薩生活に類似して居る人もあらう、餓鬼の樣な富豪もあらう、卑しき大官もあらう、此の邊は能々考究して、内面的生活の向上を圖らねばならぬ。是ぞ精神的文明の源泉を開くのである。而して、此の精神生活の向上を圖ることは、黄金の力でも權勢の力でも出來ぬ。全く宗教を經とし教育を緯として、信仰と知識と交互圓融して、始て理想的生活に向て進取の態度を取ることが出來るのである。

「下醫は藥を以て毒と爲し、上醫は毒を以て藥と爲す」とあれば、若し解脫以上の精神訓練を積み來らば、道義の觀念も高尚なる佛教的行持となり、名譽も亦た神聖なる人格の價値を造り出し、奮鬪も亦た剛健なる信仰の精神力となるのである。斯くなる時は、前の地獄の瞋恚は君子の勇と變じ、餓鬼の貪求は菩薩の歡樂と化し、畜生の痴暗は向上の知見と作り、三毒を轉じて三德と爲すに至るべきである。「無明の實性卽佛性、幻化の空身卽法身」而して精神は厲行の主であるから、精神生活の向上は、自づから、物質・形象の上に其の美德を發揮し、政治・法律・商業・工藝等の上にも偉大なる力を與へ、世間の所有物をして盡く、眞・善・美の域に進ませしむるものである。佛教は此の目的を實現する所に其の教化的效果が生み出される。

ぐ、果報を望まず名譽を求めず、勝處に生ぜんことを求めず、利益を求めず、但一切衆生を救護せんことを欲し、衆生を攝取し、饒益せんことを欲し、諸佛の本行を學ばんと欲し、諸佛の本行を受持せんと欲し、諸佛の本行を顯現せんと欲し、一切をして苦を離れ樂を得せしめんと欲す』とあるは、菩薩的生活の上乘なるものである。

第十は宗敎的生活、是れ卽ち佛界の生活で、最高圓滿なる理想的生活である。佛陀は此に覺者と譯し、自覺々他覺行圓滿の謂である。併し、佛陀の境界といへばとて、決して特殊のものではない。要するに、前の解脫と知識と慈善との三生活が調和圓融して、自覺と覺他、自利と利他とが自然に調熟して、渾身が解脫となり、渾心が慈悲となり、萬行盡く智慧の光明を發揮し、任運騰々その威德を宣揚恢弘するに至らば、實に理想的なる宗敎的生活に入ることを得るのである。尤も、吾々お互が現身に、釋尊や彌陀佛の如き萬德圓滿の大聖となることは、理論上可能とするも、實際上は、到底、一般人の企及し能はざる處である。が、三日月も亦月である。圓滿ならずとも一分の光明を發揮して、疑ひも無い月光を放ちつゝあるのである。吾々も信念堅固にして、煩惱の爲めに囚はれず生死の爲めに迷はされず、人生の間に處して超然として解脫の德を成し、自己の本性を明らめ未來永久の方針を確立し、而して、通身の慈光を發揚し、無爲にして萬生を利益し、無心にして萬物を愛護するに至らば、正に是れ佛陀一分の大光明を放つたので、三日月佛である。既に此の位置に昇りなば、任運流入薩婆若海で、漸々に滿月の佛地に近づ

第七は解脫的生活、是れは聲聞的生活である。人生、觀じ來れば恰も夢の如く、競爭奮鬪も多くは是れ蝸牛角上の爭に過ぎぬ。朝の紅顏も夕べの白骨、樂は苦の種、何をか執るべき。足ることを知れば藁席の上にも天界の樂みあり、分を知らざれば金殿玉樓にありても猶ほ不平の聲あり、思へば人間の心ほど愚かなるものはない。かく諦らめて名利にも縛られず、美色にも心を移さず、財欲をも離れて、百花叢裡を行て一葉身を濕ほさゞる底の人となる。村田了阿は隱居して三百店に身を安んじ『世を安く佛の道や阿耨多羅三百店に墨染の袖』と詠じ、諸大名の御召をも辭して『三膳の飯を二膳にするとても五膳〳〵と諂ふはいや』と讀んだ。一茶は『なんのその百萬石も笹の露』というた。啻に外界の爲めに誘惑せられざるのみならず、內心も亦た澄然として更に妄想を生ぜざる者である。

第八は知識的生活、是れは解脫境より更に一步を進めて、人間の本務を自覺し、生死の緣由を覺了し、因果の原則を明らめ、神佛の實在を認め、佛教に所謂因緣の理を觀察覺了して、未來永遠の目的を確立する者で、卽ち緣覺的生活と稱すべきものである。

第九に慈善的生活、是れぞ菩薩の生活である。前の解脫と知識とは自覺の根柢であるが、百尺竿頭進一步して大慈悲心を發し、普く人類及び生物を救濟し利益せんと期するのである。解脫と知識との二大根柢が無いと、慈善的行爲も自づと偏頗に流れ易く、若しくは報酬を貪ぼるの念を生じ、爲めに慈善の神聖を失墜するに至る。華嚴經に『菩薩は大施主となりて、一切のものを等しく衆生に施して悔ゆることとな

家の如きは、大に深く愼まねばならぬ。越後の俊傑と稱せられし河井繼之助の語に『無くてならぬ人となるか、有つてはならぬ人となれ、沈香もたけ屁もこけ、牛羊と爲て人の血肉に化せずんば、豺狼と爲て人類の血肉を啖ひ盡せ、身を棺槨の中に投じ、地下千尺の底に埋了したる以後の心に非ずんば、與に天下の經綸を語るべからず、道義道德も夫からの事だ』とある。是れ人生の無爲を戒めたる慷慨の語であるから、深く味へば意義ある言なれども、淺く聞き取らば、恐るべき奮鬪一偏の激勵となる。それではならぬ。

第五に榮譽的生活、一身の光榮と芳譽とを目的とする生活である。前の如き奮鬪一偏でなく、相當の順序を履みて一身の富貴を圖り、それが爲めに勤勉し、忍耐し、節制して、壽命長久、子孫繁榮を期するのである。卽ち眞面目に勤めて耻かしからぬ者となるので、是等は普通人の目的とする所であるから、十界中の人間的生活と稱すべきである。

第六に道義的生活、是れは天上界の生活である。天上というても樂をして美衣美食の中に日送をする事ではない、卽ち人間普通の義務を盡し、必要なる道德は之れを守り、人間としては稍や完全なる生活を爲すのである。以上第四より第五までの生活は、能く調和して行けば實に結好ではあるが、未來の觀念も無く、高尙なる信念も無いのであるから、其の心中はやはり名利の雲に蔽はれ、我見の暗路を辿りつゝあるのであります。

第二には貪慾的生活、是れは現在の餓鬼道である。貧窮にして貪ぼる者あり、是れを無財餓鬼といふ。有福にして猶ほ貪求飽く無き者あり、是を有財餓鬼と称す。貪婪とは非理に貪ぼり、非道に求むる利己主義行為である。人の此の世に於けるや、必ず希望あり欲求ありて、進み進んで止まざるが故に、無限に向上するのである。名といひ利といふ、決して否認すべきには非ず、唯だ守るに道あり、行ふに法あり、然るに、欲望の奴隷となつて道を忘れ、法に悖り、仁に戻り、義に反く時は、最も恐るべき貪慾となる。「欲に目なし」の諺に漏れず、遂に親子・夫婦・兄弟の義理をも忘れ、国憲国法すらも犯して顧みざるに至る。是れ貧者のみの所為でなく、堂々たる上流の人、富豪を以つて誇る人に却つて有財餓鬼の方が多いかも知れぬ。是れは最も卑しき生活です。

第三に酔狂的生活、現在の畜生道です。酔漢が夢中に飛んだり跳たりする様に、世の中を面白く愉快に暮さうといふ連中です。それも確乎たる方針があれば宜いが、情慾や食慾や睡眠慾を満足せしめんが為めに、一時の楽を好みて永久の苦因を作るに過ぎぬ。金持の息子の馬鹿遊び、虚栄婦人の道楽、博奕打や賤業婦などは此の生活の尤なる者で、無価値の生活と謂はねばならぬ。

第四に奮闘的生活、是れは他に後れを取らぬやう、百難を排して自己の目的に猛進するのであるから、現代に於ては缺くべからざる生活である。併し、唯だ勝負のみを継れ事として、理非の如何を顧みざる時は野猪の猛進するが如くにして、其の勇や嘉すべきも其の暴や恐るべきものである。政党員の如き、商業

の轍でないと、完全なる効果は現はれぬ譯である。

酒池肉林の豪奢を極むる人が、勤儉力行を鼓吹しても効は無い。信仰稀薄なる宗教家の信仰鼓吹は、何の役にも立たぬ。朝寝坊の主人やハイカラ的の奥さんが、子弟に修身を勧めたとて、恰も自動車に乗つて徒歩主義を説て歩く樣なものである。我が國現在の狀態は是れが多い樣に思はれる。風教の振はざる亦宜なる哉である。是に於てか、今後益々正法を護持して佛陀の福音を宣揚し、以て上下一般に、精神的生活の向上に勇猛精進致したきものであります。

精神的生活の狀態を凡そ十種に分けて見ることが出來る。即ち一心十界に依て分類して見たのである。第一は怨嗟的生活、愚痴が深く嫉妬の念が強く、癇癪持ちで、邪推が多く、何事にも不平と不滿が離れず、怨恨憎嫉、泣言ばかり多い人です。『六阿彌陀嫁のうわさの棄て處』、御信心も泣言にまぜかへされて了ふ。心邪まに氣狹く、見る物聞く物に不滿を抱く人ほどあわれな者は無い。斯ういふ人は終には『世の中は四尺五寸になりにけり五尺のからだ置き處なし』廣き天地の間に安身の地を得ること能はず、獨り煩悶憂苦の爲めに囚はれて、淺ましき生涯を送る樣になるものです。是れ全く現在の地獄界であります。斯る人はどちらかといへば、富豪の家の御隱居や、家族の多い老夫婦などに多い。若年の折にこんな精神が繫がれて居る者は、到底、長命も出來ず、健康も保たれず、罪なき人を恨み、咎なき者を叱り、生涯、惡まれ通しに惡まれて、慘憺たる終りを遂げるものであります。

を忘れ、恰も錦に泥圖を包むに至る無きを保せず。況や、俗惡なる物質主義、不徹底なる民本主義、直譯的なる個人主義などが、其の勢力を增進する事あれば、終には我が帝國の安危にも關する程の大事を惹起す事あるやも知れぬ。實に恐るべきことである。是を以て上は内閣諸公より一般國民に至るまで、大に之を憂慮して種々の方便を運らし、風教の改善、民心の指導に腐心して居らるゝのであるが、なか〳〵以て安心の出來る樣な成績は擧つて居らぬ樣に思はれる。是に於てか吾々佛教家は、非常なる覺悟を以て世道人心の開發に奮勵せねばなりませぬ。而して護法の目的は全く是に在るのであるから、今日以後は從前に比して、更に幾層倍の擴張を企圖するのであります。

敎化の普及を圖るの最大捷徑は、國民指導の任に當るべき者が、各々身を以て範を示すより善きは莫い。上の好む所、下、之れより甚しきは無し。君子の德は風の如く風のゆくところ草自づから偃す。上位に在る者、若しくは指導の任に在る者の實行的模範は、幾千萬言の教誨訓導よりも感化の力あるものである。政治界の德義を進めんと欲せば、先づ内閣諸公や高等官の方々が、身を以て德義の範を示さねばならぬ。教育界の道德を向上せしめんと欲せば、先づ教師自づからが道德を實行せねばならぬ。宗教界の信念を普及せしむるには、僧侶や牧師が信仰の標本たらねばならぬ。軍人の德性を涵養せしむるには、將校自からが典型とならねばならぬ。工夫や工女の精神を訓育するには、工場主や役員が立派な精神にならなければならぬ。子弟の修身を奬勵するには、父兄たる者が御手本を書て見せねばならぬ。總ての事が此

わが法を護りし文のいさをしを三十年の春にあふぞうれしき

三十年あまり花さく文の林こそみのりを護る寶なりけり

併し、我が帝國の狀勢と我が佛敎の現狀とを觀察すれば、『護法』今後の責任は從前に比して一層其の重きを加へ、『護法』發展の必要は益々切實を感ずるのである。如何となれば、正法を護持するは取りも直さず國家を愛護する所以であるからである。

今や世界の形勢は、懼るべき方向に向つて進みつゝあるのである。萬般の施設行動は殆ど盡く利害關係に依て行はれ、宗敎も、道德も、率ね其の施設行動を辯護するの道具に使はれて居る樣な姿である。露骨に之を評すれば、慾望を先にして道理を後にし、利益を先にして名分を後にし、本末を誤り主客を顚倒するが如し。之を歐洲戰亂に觀よ、露國の革命に觀よ、隣邦の動亂に觀よ、又、之を我が國の黨爭に觀よ、商業狀態に觀よ、社會現象に觀よ、念うて是に至れば、民心の歸嚮するところ杞憂に堪へざるもの無き能はず。人文の進步、世運の發展は駸々として止まざる今日に於て、一面精神界に於ける趨勢に斯くの如き缺點あるは、頗る矛盾せるが如くなるも、鹿を逐ふ者は山を見ず、目的を達せんとするに急なるが爲めに、手段を愼むの餘地なきに至るもまた免れ難き勢であるかとも思はれる。

されば、一面、物質的文明の進展に努むると同時に、一面、精神的敎化の普及に盡さねばならぬ所以である。然らざれば、滔々たる天下多くは沐猴にして冠するが如く、徒らに其の外觀を美にして內實の醜

返照の端的豁然として嵩山の月光に照れ、身心脱落の當處驀爾として少林の花心に接す。轉じて活潑の靈機となり、發して祖徒の精華となる。是れ即ち達磨禪たり。

今や寺にして『達磨禪』の出現に遭ふ、吾、汝を待つこと久し。庶幾は達磨を拈捉し拈弄して純一無雜の禪風を進て活地たらしめんことを。至囑々々。

「護法」の三十年を迎へて

「護法」を刊行以來既に三十年、今や益々發展の機運に向ひつゝあるは、佛法の爲めに慶賀の至りである。

「護法」發刊の當時は、我が佛教界も種々の障道と障碍とを被むり、内、教是の見るべき無く、外、不信なる社會の空氣に包まれ、今日より顧みれば、最も寂寞の感に堪へなんだ時代であつた世間に於て、「護法」は、大内青巒居士を始め、幾多の高僧碩學の保護の下に生れ、困難を排し窮乏を凌ぎ、堂々として法教護持の指揮を振へし、佛教信仰の指南車となり、信念開發の鼓吹者となり、三根を攝し群機を統べ、終始一貫、以て今日の盛運を見るに至りしは、吾人の中心感謝して止まざる所である。故に、祝辭に代ふるに左の詩歌を以てせり。

て自ら禪界の王者を以て任ず、彼の誇大妄想狂と擇ぶ所なし。故に苟も來機に接すれば、直ちに胡喝亂棒を弄し惡罵妄叱を試み、以て天下に敵なしと思へり。嗚呼、禪機果して其れ是の如きものなるか、高祖曰く

佛佛の大道つたはれて綿密なり、祖祖の功業あらはれて平展なり、是故に大悟現成し、不悟至道し、省悟弄悟し、失悟放行す、是れ佛祖家常なり

と、此の祖誥に通曉せざらんには未だ禪機を知らざるなり。

其の他、禪界に於ける種々の弊風、蓋し少々に非ざるべし。故に、或は非常識に偏して奇人の如く變人の如く、更に人天の師表たるべき容儀を存せず、或は行持を忽諸に附して、左右逢原、何の修行か之れあらんといふが如き見知を弄して得々たり。是を以て禪に參ずる者、動もすれば其の平生を愆まり、其の實德を喪するに至る。然らざる者は、禪を以て風流韻事の資糧となし、又は人生々活の熱惱を消する一時の清涼劑の如くに見做し、甚しきは禪を以て好事家の翫具と爲す。尤も、中には大道心を以て禪道を鼓吹するの宗師明匠も之れあらん、蓋し群鷄の一鶴のみ。多くは是れ噇酒糟の漢たるを免れじ。

抑も禪は佛法の總府なり、智德の源泉なり、行持の中樞なり、八萬法藏の要機なり、如來禪といひ、祖師禪といひ、曹洞禪といひ、臨濟禪といふ、總に是れ空裡に花を點じ水上に像を描く。禪は佛敎の全藏なり、豈に宗派の執すべき者あらんや。禪は自己の眼睛なり、豈に妄想の窩窟に墮すべけんや。故に回光

揮て減却せんとす。日清・日露の役後、人心漸く眼を靈界に注ぎ禪道を喜ぶ者日を逐うて其の數を加ふ。然れども、禪者の之れに應ずる、果して能く禪道の精華を發揮して國民的大精神を訓練せしめ得るや、吾人疑ひ無き能はず。

一類の禪者は、直ちに授くるに公案を以てし、一案を透過すれば更に一案を與ふ。幾十則の公案を透破するを待て其の見性を印可す、透未透を檢するの法は、多くは彼等の修得せる常用手段に依る、恰も謎を解くと一般、謎じ來つて遂に沒意義に了る。一女子あり禪味を喫すること數歲、曾て試に一老漢の室に入り、一擧して三十餘則を透過し老漢をして喫驚せしむ。露刃劍の公案に至つて一蹶す、是れ其の伎巧に慣はざるが爲めのみ。彼の女は人に語て曰く『若し劍舞の伎を知らば必然露刃劍を透過し得べし』と、言ひ訖て大笑せりき。嗚呼、禪門の公案なる者果して是の如くならば、禪道恐くは今日に至らじ。高祖は現成公案の卷に於て

人はじめて法をもとむるとき、はるかに法の邊際を離却せり、法すでに己れに正傳する時すみやかに本分人なり

と、此の祖訓に徹底するに非ざれば、未だ以て公案を譜るに足らず。

一類の禪者は妄りに我慢幢を竪て、會に誇り悟に驕り、井底に蛙踞して世界の大なるを知らず、些子の見知に拘束せられ、眼正法に觸るゝも覩る能はず、耳正語に接するも聽くこと能はず、天下人を罵倒し

識の一着を留めて遠く嵩山に遁る。道ふ莫れ、栖々去國の人と。此の一着子、能く舊來名相の纏縛を截斷して、直指見性の玄路を開通し、支那佛教に一大革新を施されたり。曹谿大師、黄梅の碓房に舂くこと八箇月、此の間能く敎田の糟糠を排除して、純一の宗風を徧法界ならしめたり。唐末宋初より混沌に眉を描きて五家各々其の長を爭ひ、天下の衲僧得失相半ばし、遂に禪弊百出するに至る。芙蓉楷祖深く之を悲み、示すに祇園の正儀を以てし、乃ち曰く、

木馬長鳴。石牛善走。天外之青山寡レ色。耳畔之鳴泉無レ聲。嶺上猿啼。露濕二中宵之月一。林間鶴唳。風回二清曉之松一。

是れ則ち禪天禪地の風景、王三昧の活計を明示せるなり。又曰く

山僧今日向二諸人面前一說二家門一。已是不レ著レ便。豈可下更去、陞堂入室、拈鎚竪拂、東喝西棒、張眉怒目、如二癇病發一相似上。不三唯屈二沈上座一、況亦辜二負先聖一。

と、涙は實に痛腸より出づ。而して當時禪門の狀態亦推定するに難からず。宋末に至りて益々甚しきを加ふ。是に於てか宏智古佛正傳の宗旨を擧唱し、眞歇囊祖亦大に禪道の神髓を弘通するに努められたり。然れども、魔強く法弱くして怨害頻りに起る。天童淨祖卓爾として禪界に獨步し、正傳の三昧を提示して、是を我が高祖に面授せらる。高祖超倫の聖資を以てして幾度か虎穴に出入し、遂に正法眼藏を荷擔して日域に宣傳す。爾來、龍象續出、宗風洽く寰海に振ふ。近代に至るに及び、祖林寂寞、高祖純密の家訓、地を

今や、太平洋問題は世界の重要案件として、列國の研究に附せられて居る。日本も米國も互に國家の自衛を保障し得る範圍に於て、誠意ある協定を圖るべきである。併し、各國民の精神が眞に能く平和を熱望するに非されば、如何なる協約も一時の小康を贏ち得るに過ぎぬ。平和的精神は我が佛教の大慈悲力の實現に待たねばなるまいと思ふ。

私は米國を巡錫して物質文明の發展には驚歎せざるを得なんだが、我が佛教の感化を受けざることを氣の毒に思うた。米國人にして能く佛教を知り佛教を信じたならば、如何に幸福にてあらんかと感じたことが數々あつた。之れと同時に、吾々が大乘佛教國に生れて佛陀の大慈悲に浴することの有り難さを痛感したことである。私が觀世音菩薩の尊像を大統領に獻じたのも、一は佛教の世界的精神を御紹介する爲め、一は佛縁を結んで戴きたいと思うた爲めであつた。これにつけても日本國民なる我が同胞は、深く佛教を信認し厚く佛教に歸依し、以て道徳の根柢を養ひ恒久の幸福を獲得せられたいものである。

「達磨禪」を迎ふ

『達磨禪』何ぞ其の名の單調なるに似て而も蘊蓄の甚深なることよ。達磨西來、梁武に金陵に見え、不

來なんだ。殊に佛教に對しては頗る敬意を抱いて居ることが認められた。そこで私は、彼地の人々に佛教を紹介したいとの觀念が益々强まつて來たが、遺憾ながら言語不通の爲めに、纔かに片言隻語だけ、それも通辯の舌を借りて宣傳したくらゐに過ぎなんだ。

思ふに、米國とは政治部面に於ては色々の問題も起るが、赤裸々なる日人と米人との間では、漸次に親密の度を加へて來たやうである。太平洋沿岸には、日本人の勞働階級に屬する人が白人の間に交つて居るから、生活の程度や實力の比較上、多少低級者扱をされて居るやうであるが、東部に至ると、白人以外には、有ゆる人類中一番日本人を尊敬して居るやうに思はるゝ。市俄古の如き、大學附近の下宿屋では、白人の學生よりも日本人の學生を歡迎するさうである。故に今後、日本國民としては、益々品性を高うし實力を蓄はへ、道德的改善を圖りて世界に臨んだならば、必ずや世界的に敬意を拂はれるやうになるであらう。

所謂政治屋の所爲は別問題として、普通の白人より嫌はれる所以は、日本人の生活が不規律・無節制であるといふにある。不規律・無節制・無責任では日本人同士にも嫌はれるであらうと思ふ。此の邊は十分に注意せねばならぬ。又、米國人が佛敎に對する知識は極めて幼稚なやうに思はれる。是れ日本の大乘佛敎が彼地に紹介されて居ないからである。將來は、是非、外國語に熟練なる開敎師を養成せねばなるまいと思ふ。

の衷心より賛成の意を表する所であります。故に、今回、特に迂衲をして日本佛教各宗派を代表し、親く閣下に謁して其の希望を訴へしむる所以であります。願ふに、貴國と日本との間に於て互に誠意ある親善を圖り、延て之を他の列國に及ぼすに非されば、世界の平和は得て望み難かるべし。抑も佛教は慈悲を以て生命と爲し、一般人類を有ゆる束縛より解脱せしめ、以て眞正なる智德を開發し、自由の境致に達せしむるを以て目的として居ります。故に、向後益々中外に宣傳して民衆を敎化し、以て人類の幸福に貢獻せんと志さして居ります。閣下、冀くば日本佛敎各宗派の眞意を諒し、將來益々親好を賜はらんことを」、氏は大に滿足の意を表せられ『日本佛教にして是の如き誠意ある同情を注がるゝは、實に世界の幸福にして、自分の感激措く能はざる所であります」との御答へであつた。

最後に衲は、觀世音菩薩の畫幅を獻上し『此の菩薩は佛陀大慈悲の權化にして、平等に衆生を救濟し幸福の國土を實現するを誓願とし給へり、是れ實に博愛の儀相、平和の表象たり。閣下の大精神も亦た此の菩薩の行願に外ならざるべし。依て恭しく之を獻上せんと欲す』。氏は深く喜ばれ『實に絕好の記念、永く之を護持して厚意を忘れざるべし」と述べられた。そこで、再び握手して御別れしたが、氏は四名の我が隨行員にも一々握手せられたことである。

米國巡錫中に感じたことは、新聞社でも、基督敎會でも、大中の學校でも、普通の米國人でも、我等を遇するに最も敬意と親切とを表せられたことである。いづくに參つても侮蔑らしい態度を見ることが出

氏を御依頼した。場所は白亞館の隣りなる大統領事務室であつた。ハーヂング氏は起立して椅子を離れ、進むこと數歩、溫顏を以て握手を交換せられた。

私は『日本佛教各宗派を代表して、閣下に謁見することを得たるは、私の最も光榮とする所であります』と申せしに、氏は最も愼重なる態度を以て『自分は佛教に對しては多少の研究を試み、世界的大宗教として常に最大の尊敬を拂つて居ります。今、貴僧の來訪を得たるは、自分の最も欣幸とする所であります。』

私は更に『日本の佛教は多くの宗派を有すと雖も、何れも大乘系の佛教に屬するを以て、其の究竟する所は毫も異なる所はありませぬ。佛教の日本に渡りてより殆ど一千五百年、各宗の高僧碩德は、何れも一切衆生悉有佛性の教義に基づきて、人類平等の理を示し、原因結果の法則に據りて、人類智德の增進と社會文化の發展とに努力して居ります。日本近代の文化は、貴國に負ふ所固より少なからず、從つて日本國民は、常に平和を以て國是と爲し、正義人道を以て世界に臨まるゝ貴國を尊敬して居ります。是を以て歐洲戰亂中は、特に日本佛教各宗派代表者をして、前大統領に謁して日本佛教徒の希望を開申し、又、佛國に於て講和會議の開かるゝや、日本佛教各宗聯合會は、遙に文書を裁して列國代表者に意見を陳述致しました。前後五ヶ年に亘れる歐洲戰亂の慘禍は、一般人類をして世界恒久の平和を希望して止まざらしむ。此の秋に當り、閣下は近く軍備縮少の會議を開き、大に列強に謀り給はんとす。是れ日本佛教徒

年壯年の子女が、酒の爲めに病を招き身を害し、精神を狂はし品性を傷け、遂に不治の患者となり、若くは手のつけられぬ放蕩者となるの實例は日々の如く暴露されて居る。酒癖ある子弟を有する家庭ほど不安なものは無い。酒癖ある主人を有する家庭ほど苦惱多きは無い。

新潟縣中魚沼郡中條村醫士杉本周德氏は稀有の篤信家で、殊に愛國盡忠の志し深く孝順慈悲の念に富みたる完全な人格者であるが、常に禁酒を奬勵し、且つ最も僧侶の酒に親しむを歎かれつゝあるが、此の頃、金澤來誠氏の著作に係る『禁酒大觀』を讀みて深く感激せられ、特々私の處に寄贈せられ、且つ當本山佛堂・曹洞宗大學・雲洲庵佛堂にも寄贈せられた。私も之を一讀せしに、金澤氏が熱涙を絞つて著作せられたもので、全篇悉く有益なる文字である。願くは我が宗の道俗諸氏は深く思ひを茲に致し、相共に規律を重んじ風教を護持し、身心共に健全ならんことを期すべきである。

米國大統領に謁見して

私は我國佛教聯合會の御依囑に依り、去る(大正十年)九月二十八日、午前十時三十分を以て米國大統領ハーヂング氏に謁見し、約三十分餘、談話を交換することを得た。通辯には紐育日本人會幹事角田柳作

身心倶に健全なれ、健全なる精神は健全なる肉體に宿る。健全なる肉體は健全なる精神より養なはる。身心元來不離であるから、苟も人格を大成せんとする者は、常に身心倶に健全ならんことを期すべきである。此處に謂ゆる肉體の健全といふは、單に病氣をせぬとか腕力が強いとか言ふのみではなく、身體內外の組織機能が平均に發達したるを指すので、精神の健全といふも、知・情・意の三者が完全に發達したるを言ふのである。國民身心の健全なるは實に國力培養の基礎である。

釋尊は常に身心不二の原則に基きて其の健康を奬勵したまうて居る。彼の飮酒を戒め沽酒を制するが如きも、要するに身心の健康を主眼として說かれたものであり、長阿含經に酒の六失を擧げて、『一には財を失ふ、二には病を生ず、三には鬪爭す、四には惡名流布す、五には恚怒暴かに生ず、六には智慧日に損ず』とある。抑も飮食物は身體の榮養が第一の目的である。然るに飮食物の爲めに身體の健康を害し、更に精神までも攪き亂さるゝといふは實に淺ましきことである。禪刹の門頭に『葷酒の山門に入るを許さず』といふ禁碑石のあるのは、道場の淸潔と神聖とを保持し、其の綱紀を擁護するの必要より出でたものであるが、是を個人的にいへば身心の健康を保全せしむるが爲めである。

然るに近世に至り、此の尊嚴なる禁碑石も徒らに莓苔の蒸すに任せ、公然、酒類を用ゆるに至りたるは最も悲しむべき惡弊である。殊に佛事法要の席に飮酒するの結果、佛事の神聖を傷け法要の規律を損ずることも少なからぬやうに見受けられる。故に衲は常に、せめては佛事禁酒を勵行せよと勸めて居る。青

鐵砲の玉きはる命にもかふべきや此の道』と詠じたとある。細川幽齋は歌道を重んじて命をも惜まなんだ。況や人の人たる道に於てをやである。

明治天皇は常に御心を國政と國民との上に注がせられて、避暑避寒をあそばさず『己がじゝ務めを了し後にこそ花の蔭には立つべかりけれ』の御製さへありて、御花見すら御意の儘にはあそばされなんだのである。是れまた道を重んぜさせらるゝ大御心である。吾々も道には絶對に服從するの觀念を抱きて、私意私慾を放下し、此の淨く直ぐなる心を以て、我が御佛に歸依し奉らば、始て正しき信仰を獲ることが出來るであらう。信仰の下には滿足があり、歡喜があり、安心があり、法樂がある。而して、佛の大慈悲光を十分に戴くことが出來るものである。

以上の六德は互に聯絡して離るべきものではない。此の六德を涵養すれば、自から至柔の美德が得られる、是れ即ち無我相である。此の大無我こそ剛健性を發揮し、精進力を增進すべき原動力である。故に吾の生活には必ず至柔の德性を忘れてはならぬ。

佛事禁酒

要素としては、慈愛に富むこと、義務に忠實なることが大切である。

慈愛といふは眞情より出でたる親切である。長上を敬ひ、幼弱を憐れみ、人を護り、他を救ふ事に於て、絶對の滿足を感ずるのが親切の大なる者である。また權利と義務とは離るべからざる關係を有するが、神聖なる權利は義務に對する賞與である。義務を閑却して權利を獲んと欲するは無錢飲食も同じことで、放逸無慚と謂はねばならぬ。

また人の人たる所以は眞理に服從するに在る。吾々の最も尊重すべきものは眞理である。佛は眞理を悟りて成佛せられ、仁人君子は眞理に隨順して其の德を修められた。その眞理が人類型に現はれたのが人道であるから、正義も慈善も、平等も自由も、忠孝も信義も、悉く眞理の分體である。此の人道を守りてこそ、人間に生れたかひがあるので、若し此の人道を無視して、不正不義の振舞があつたり、不忠不孝の行動があつたりしては、人間としての價値が無くなる譯である。

昔、歌道の達人と稱せられし細川幽齋が、石田三成の兵に圍まれて、但州出石に籠城した折、三成の大軍に攻め立てられて甚だ危くなつた。時の天皇は歌道の亡びんことを憂ひたまひ、三條公を勅使として出石城に赴かしめ、勅旨を傳へ、相當の時刻を定めて休戰せしめ、細川幽齋に面會して歌道に關する物語りをせられた。既に定められたる時刻が經過したから、敵は忽ち鐵砲を打込んだ。其の彈丸が公と幽齋との間を通りぬけた。公は思はず色を失ふたが、その時、幽齋は泰然自若、莞爾として『こゝをさして擊つ

生存することは出來ぬ。縦ひ親子兄弟夫婦の間たりとも、決して自分の思ふ通りになるものではない。思ふ通りにならぬからとて、一々捩り嫉ひをして居ては、その結果、喧嘩したり、鬪爭したりせねばならぬことゝ爲る。それも家門の安定とか、國家の治亂に關する大問題なれば格別であるが、根も葉も無い樣な事に、反抗したり、敵視したりするは、偶ま自分の人格を卑く且つ陋くして、繩なき繩に縛られる樣なものである。

或人が元日に、雑巾が床の間にあつたとて、非常に氣に懸けて煩悶して居た、知り合の狂歌師が之を聞て「雑巾をあて字で書けば蔵に金あちらふく〱こちらふく〱」と詠みければ氣嫌が直りて、雑巾をばめでたがりしといふことである。氣にかけるも愚痴であるが、喜ぶのも格別の意味をなしては居らぬ。同じことならば、喜ぶ方がどんなに幸福であるか知れぬ。

或人が御友達の家に婚禮がありしと聞き、お祝ひに參りし處、先方の花嫁が變な目つきしたとて、大そう怒つて歸つたが、後で聞けば、其の花嫁が眇であつたさうな。心の狭き者は詰らぬ事に心を苦しめて、罪を造ることが多いものである。

苟も大國民たる者は、是非とも雅量を有して、猜忌や嫉妬や邪推などの低級なる感情に捕はれず、却て自ら己れの感情を調節して、忍耐力を養ふことが必要である。僅かな事に腹を立てる樣な人は、決して人格を高めることは出來ぬ。忿怒は平和の敵であつて、交際上最も恐ろしい妨害者である。また柔德の

て來た樣に思はれる。之れが爲めに些々たる事に鬪爭を釀したり、つまらぬ事に神經を惱ましたりして、『心から心に物を思はせて身を苦しむる我が身なりけり』といへる歌の如く、益々煩惱の淵に沈みて、雅量と忍耐力が乏しくなる。

また一面には外界の事物に誘はれて、利己的欲望が烈しくなる所から、慈愛の念が薄らぎて、冷酷になり易く、次第に溫情が薄らぎ且つ溫情を輕視する樣になつた。其の結果として、權利の主張にのみ力を注ぎて義務を盡すことに忠實ならず、物質や位地權勢を重んじて眞理に對する服從觀念が弱くなつた。『朝に道を聞いて夕べに死すとも可なり』といふ意氣が日々に衰へて來るかと思はれる。何事も一身の利害より打算して解決せんとするが如きは、信念に乏しい爲めである。

至柔の美德といふは愛の力である。慈悲の心である。卽ち人間の良心に具有する眞情が發露して、思ひ遣りとなり、親切となり、愛憐となりて、人に對しても、動物に對しても、器物に對しても、水火に對しても、草木に對しても、圓通無礙に活動を起すのが至柔の德である。此の美德が存すれば、他人の生命に危害を加ふることも、他人の財物に損害を與ふることも、他人を欺くことも、苦しめることも、迷はすことも、悲しましむることも、出來るものではない。故に愛は道德の大本で、慈悲は萬行の源泉である。此の美德を發揮するには、先づ以て雅量を養はねばならぬ。

元來、人生には種々の缺陷があつて、不如意なものであるから、大度量が無ければ安んじて此の世に

老子に「天下の至柔は天下の至堅を馳騁す」といふ語がある。是れは極柔らかなる者は極堅き者を使役するの力あることを言うたもので、柔能く剛を制するの意である。水は至つて柔らかなる物なれど、巖石をも砕き、砂礫をも推し流す力あり、大船巨艦をも浮べ、種々の機械をも自在に運轉する。女性は柔軟の徳を有するを以て、却て能く剛強なる男子を制するの力がある。故に吾人は眞に剛健なる精神を振作せんと欲せば、必ず至柔の徳を涵養しなければならぬ。至柔といふは内に守る所があつて、外に我意我慢を存せざる美徳である。體力の脆弱なる者や、意志の薄弱なる者や、決斷力の乏しき者や、引込思案ばかりする者などは、所謂怯弱、柔弱、劣柔の方であつて、至柔ではない。

至柔とは雅量を有すること、忍耐力を有すること、慈愛に富めること、義務に忠實なること、眞理に服從すること、信念堅固なること、此の六徳を有する人が眞の柔徳者である。故に至柔は必ずしも消極的、退嬰的、保守的心情ではなく、積極的、活動的、進取的精神の根本力である。此の根本力が發生してこそ、内、綱紀の肅正をも期すべく、外、強敵をも征服すべく、また以て百難をも排すべく、萬行をも全うすべきものである。

人文の發達に伴ひて、社會の事象は益々複雑となり、人間の知識は日々に進歩する所から、一般に神經が過敏になりて、刺戟を感ずることが強い。之れが爲めに、動もすれば度量が狭くなつて、物毎に感情が激し易くなつて來るものである。故に今の世の人は、概して氣をもみ過ぎる風があり、從つて短氣になつ

汚濁の生活に苦しむこと、恰も無價の寶珠を抱いて貧苦を訴ふるにも似たり、如何にも不愍さ遣る方なく、悲觀に依りて衆生の苦惱を拔濟し、慈觀に依りて幸福安樂を與へたまふのである。

明治天皇の御盛德は實に聖中の至聖とも申し上げ奉るべきもので、御一代の御事業は皆な大智大願大勇の融合したる、大慈悲力の神通妙用にてあらせたまふ。昔、聖德太子は觀世音菩薩の御化身と稱し奉りしが、明治天皇の盛德鴻業は、實に觀世音菩薩の大慈悲光明の顯現とも仰ぎ奉るべきものであるから、故石川禪師は、その御聖德を紀念し奉る爲め、菩薩の大銅像を造立せんと御發願あそばされたのである。

今や幸に此の御遺志を滿足し奉ることを得たり。願はくは、東海の功德聚として信心を凝らし歸依を捧げ、感應道交して、皇風永く扇ぎ帝道遐かに昌んに、佛日輝きを增し法輪常に轉じ、三松壽色を加へ鶴山瑞氣を添へ、國家の文運を進暢し國民の福利を增進し、智德の月光り圓かに福聚の海無量ならんことを。

至柔の美徳

身に作せばいつか菩提に入合の鑑」といへる歌は、觀世音菩薩の御悟なる、聞・思・修の三慧を評じたものである。

次に他の方面からいへば、普門品に釋尊が無盡意菩薩の問に答へて「若し無量百千萬億の衆生ありて諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞て一心に名を稱せば、觀世音菩薩即時に其の音聲を觀じて皆解脱することを得しめん」と説きたまひし如く、世の衆生が菩薩の名號を稱し、若しくは其の希望を訴へる音聲を觀じて、直ちに濟度の手を垂れたまふのである。猶ほ觀世音菩薩は、普門品に「名を聞き及び身を見、心に念じて空しく過さずんば、能く諸有の苦を滅じたまふ」等とありて、恰も太陽が國土を照したまふが如く、所謂不請の友となりて、進んで法界の群類を攝取して漏すことは無いのである。

普門品には「眞觀・清淨觀・廣大智慧觀・悲觀及び慈觀、常に願ひ常に瞻仰すべし」とあるが、此の五觀が菩薩の大德の基である。前の三觀は自覺で智慧門に屬し、後の二觀は覺他で慈悲門である。眞觀とは平等一實の眞理を究めたまふ御悟りで根本智である。清淨觀は其の眞理より顯現せる森羅萬象の諸法を照觀したまふ差別智である。萬法唯一心諸法悉く實相であるから、菩薩圓通の眼を以て觀れば、此の世界は皆な清淨土にして一切衆生は本來成佛である。故に、一塵一法の上にも眞如實際の妙理を示して無上菩提を莊嚴し、平等即差別、差別即平等にして、色空一如の眞理を顯彰するのが廣大智慧觀である。此の大智慧を以て法界の群類を照したまへば、一切衆生が道中に在りて道に迷ひ清淨界中に在りて

立には觀世音菩薩がある。其の圓滿なる容姿、慈愛に豐かなる面貌、閑雅にして優美なる風彩は畫像を瞻ても木像を拜しても、自然に拜する者の心地を淨化し美化して、暗默の中に絶大なる感化を與へられる。其の御德の偉大なるに驚かざるを得ぬ。

迂衲の如きも、幼少の頃恐怖病に罹りて時々人事不省に陷ることがあつた。父母は之を憂へて觀世音菩薩に祈念を凝らし、父は旅行の折も常に十句觀音經を讀誦し、母は淺草觀音に心願して、自らは月六齋に茶を絶ち『此の子をして十五歳までには必ず淺草の御堂に參詣を致さすべし』と誓うたのである。それが緣となつて、明治八年の十月に菩提寺なる興國寺の如禪方丈に托して、迂衲が十二歳の時上京して淺草觀音に參詣した。其の時は曹洞宗議會を始て開かれた時であつた。迂衲は子供ながらも議會を傍聽し、且つ環溪禪師や奕堂禪師に拜謁したのが緣となつて、出家の志を起し、父母の許をも受けずに剃髮して髮毛を淺草寺に納めた。故に、迂衲が出家して佛弟子になりしは、正しく觀世音菩薩の御指圖だと今日でも感じて居ることである。

觀世音菩薩の御德は甚深廣大であるが、之を自覺と覺他との兩方面に分けて見ることが出來る。自覺の方からいへば、般若心經に『觀自在菩薩、深般若波羅密多を行ずる時、五蘊皆空なりと照見して一切の苦厄を度したまふ』とあり、楞嚴經には耳根圓通の法門がある。要するに、世の音聲を聞きて、觀智を以て眞理の源を究め、遂に一切の煩惱を斷じて圓通無礙の境地に達せられたのである。『耳に聞き心に思ひ

法明如來が、衆生濟度の爲めに菩薩の身を現じたまふとも說いてある。要するに觀世音菩薩は、大智大願大力の上に發現したる大慈悲光明である。此の大慈悲光明は、隈として在まさゞる無く、物として照さゞる無きを以て、三世十方の諸佛諸菩薩の大慈悲を綜合したる大功德佛であると參究すべきである。

觀世音菩薩と我が宗門とは、また御因緣が實に深い。支那禪門の第一祖達磨大師のことを、寶誌公は梁の武帝に、觀世音菩薩の化身なりと說いて居る。永平開山高祖承陽大師は常に觀世音菩薩を信仰せられ、支那より御歸朝のみぎり、海上にて暴風雨に遇ひたまひし時、觀世音菩薩を念じたまひしに、菩薩は一葉の蘆葉に搭して、海面に姿を現はしたまひしが、俄に風も和ぎ波も靜まりぬ。高祖は其の時感見せられし御姿を寫して之を贊したまうてある。又、總持開山太祖常濟大師の母君は深く觀世音菩薩に歸依せられ、その御姙娠中、毎日普門品を讀誦すること三十三卷、菩薩を禮拜すること三百三十三拜、といふ驚くべき御熱心なる信仰であられた。大師もまた御一生を通じて觀世音菩薩を守本尊とせられた。當本山の創立も觀世音菩薩の靈告に依られたものである。故に、當本山に於ては御開山以來、放光菩薩と稱し、觀世音を勸請して御供養致して居る。

斯る因緣の有る爲めに、我宗古今の祖師一人として菩薩を歸仰せられざるは無い。獨り我が宗のみならず、觀世音菩薩は佛敎各宗を通じて崇敬の對象となつて居る。西國・秩父・阪東の觀音は最も著名なる靈場であるが、日本全國、津々浦々に觀世音菩薩を奉安せられざるは無い。淨土門の如きも彌陀如來の御脇

との大願を發せられ、弘誓會を組織して普く縁を十方篤信の道俗に募りたまひしが、未だ其の功を收めざる中に御遷化あそばされた。依て迂衲は其の御志を繼ぎて廣く深信の士女の助縁を乞ひ、工學博士伊東忠太氏を顧問に請じ、斯道の大家たる新海竹太郎氏の妙手を煩はし、丈六の御尊像を建立することゝなり、幸に多數の御助力と、兩氏の御丹精とに依りて竣工を告げ、玆に除幕式を擧げ、開眼供養を修行するに至りたるは、迂衲の歡喜雀躍に堪えざる所にして、伊東・新海兩氏の御丹精と、御賛助を賜りたる道俗諸氏に對し、滿腔の誠意を捧げて深く感謝し奉る次第である。

抑ゝ觀世音菩薩は、大智慧と大慈悲と大誓願と大神通と大救濟力とを具有したまふ聖者にして、此の娑婆界には最も因緣深く在ませり。佛敎の大藏經には無數の菩薩を擧示せられてあるが、觀世音菩薩が最も多く說かれてあつて、凡そ大乘の諸經文に觀世音菩薩の御名號の現はれざるは無い程である。楞嚴經には二十五菩薩が各々圓通の法門を說かれたるも、釋尊は特に觀音の圓通を御推奬なされてある。六百卷の大般若經も觀世音菩薩が開會の本尊である。般若心經の敎理も觀世音菩薩の大行を示されたるもので、その初めに觀自在とあるが、その觀自在菩薩とは觀世音菩薩のことである。法華經には特に觀世音菩薩普門品がありて、此の菩薩の名號を受持し、乃至、一時も禮拜し供養せば、十二億恒河沙の菩薩の名字を受持し形を盡すまで供養し奉る功德と同一なるぞと仰せられた。南嶽大師は『昔靈山に在りて法華と名け、今西方に在りて彌陀と名け、濁世末代に觀音と名け、三世利益同一體』と言はれてる。又、過去に於ける正

す、火の熱し、水の湿よ、古今に通じて誤まらず、中外に亘りて悖らず、所謂「天眞の妙用」にして、毫も人力の安排を許さない。吾々にして、胸臆裏に一點の虚僞も私情も無ければ、自づから天地の大德と合し、宇宙の大道に隨順する。是に於てか、至誠の光輝は吾々の身心に發揮して縱橫無礙となるであらう。是を大心の現前ともいふのである。

然るに、現代の人心は、果して如何なる狀態であらう、言行相反し、知行合一ならず、詐僞虚妄の空氣は殆ど都鄙に充滿し、智いよ〳〵高くして德却て低く、理いよ〳〵明らかにして行ひ却て昧きの憂なき能はず、是を以て、徒らに外面を飾り、虚榮を貪ぼり、役々として名利の巷に奔走して日も亦た足らざるの觀がある。洵に情け無いことではないか。

故に、吾々は、大正の二字を以て一大公案となし、從晝至夜、眞參實究せんことを期したきものと思ふ。而して、國民道德の美果も雑道莊嚴の行持も、皆な之れより得らるゝものと信ずるのである。

觀世音尊像の建立

當本山前住石川素童禪師御在世中に、明治天皇御聖德紀念として、聖觀世音菩薩の大銅像を鑄造せん

か博愛同情とかいふのも、畢竟、此の宏量より流出し來れる德相である。また先帝の御製に

あさみどりすみわたりたる大空のひろきをおのがこゝろともがな

おのが身をかへりみずして人の爲めつくすや人のつとめなるらむ

と詠じ給ひしは、正しく寛容博大の御修養と察し奉るのである。

夫れ是の如き大心を得んと欲せば、必ずや其の正を守らさるべからず。前にも述べし如く、正とは、內、偏邪を離れ、外、中道に順ふの謂である。とかく吾々は偏邪に陷り易いものである。理に迷うて斷見・常見を起し、事に迷うては三毒・五欲を生ず、是れ皆な偏邪である。理にも事にも迷惑せざる時、中道始て現はる。中道とは宇宙の眞である、佛性の美である、道德の善である。而して之を統一したものが至誠である。

然れば、正の正たる所以は實に至誠に外ならぬ。法華には諸法實相といひ、起信に眞如といひ、唯識に圓成實性といふ。みな至誠の本體、妙德に名けたものである。禪門に本來の面目といひ、如是の法といふも亦た至誠の妙體に名けたものである。此の至誠の德が一たび現はるれば、自づから忠となり、孝となり、仁となり、義となりて、人道茲に立ち、覺道茲に通ずるのである。

然るに、悲哉、吾々凡夫はとかくに至誠の眞體を昧まし、妄想顚倒して觸處に乖違を致すのである。佛祖之を憐れみ、聖賢之を憂ひ、敎を垂れ法を設け以て群蒙を啓發し給うたのである。天の覆ひ地の載

一身たることを忘れてはならぬ。況んや、佛教々理の示す所に依れば、一卽一切、一切卽一である。此の一身を長養して國家の至寶とも爲すべく、此の一身を鍊磨して世界の奇珍とも爲すべし、國運の大に亨る所以は一身の剛健篤實に由る。故に、一身の大なるは、やがて國家の大を爲す所以たることを忘れてはならぬ。

一身を大にするの道は他なし、高祖大師の所謂『大心とは、其の心を大山にし、其の心を大海にし、偏なく黨なき心なり』がそれである。大山といふは不動の德である。雲に聳ゆる高嶽は、八風來り襲ふとも更に動ずること無し、吾々も亦是の如く、縱ひ緊那・迦陵が讃歎の音聲を聞くも夕べの風耳を拂ひ、縱ひ毛嬙・西施が美妙の容顔を見るも朝の露眼を遮る、超然として聲色の繋縛を被むらざるに至つたのが不動の境界である。深入禪定の正當時は、佛見・法見にも轉ぜられぬ。況や順境・逆境をや。兀々不動とは卽ち是れである。先帝(明治天皇)の御製にも

くろがねのまと射し人もあるものをつらぬきとほせやまとごゝろを

と仰せられてあるが、是れ正しく不動心の修養を御示し下されたものと見奉ることが出來る。

次に其の心を大海にすとは、洋々たる巨海は渺々として涯際なく、百川萬江、交々入り來るも曾て之を拒むこと無し、吾々も亦是の如く、常に寛宏なる度量を養ひ、萬機に接して厭はず、群類に對して嫌はず、大千界の廣きをも方寸の裏に收め、一切衆生の多きも能く慈念の中に攝せねばならぬ。公共的道德と

といふやうな道德も行はれて、かゝる嚴肅な忠告者・審判者・責罰者である原理を認めない向きもあるが、その快樂說も、漸次修正に修正が加へられ、つひには、この消極的指導原理を重んずる所の道德が、先覺の間に行はれやうとしてゐるのは、祝慶すべきことである。

大正の二字

功は八紘に徧ねく、德は六合に充つ、是を大といふ。內、偏邪を離れ、外、中道に順ず、是を正といふ。大正の二字は、吾人が修養上の一大公案ではあるまいか。易に『大亨以正天之道也』とも『剛健篤實、輝光日新其德剛上而尙賢大正也』ともある。何れもめでたき文字なれども、今は此等の詮鑿に涉らず、驀直に大正の公案に參究せんと欲するのである。

吾人の一身は、之を國家の大なるより觀れば滄海の一粟に過ぎずと雖も、此の一身の得失は、時として國家の禍福にも關する場合がある。我が帝國も、世界の大なるより觀れば九仞の一簣に過ぎざるが如くなるも、帝國の盛衰は自づから世界の治亂に大關係を有して居る。さすれば、吾人の一身は正に是れ世界の

とはいへないが、相距るものではない。經濟や政治の問題が白熱してゐる今日、道德上の問題や宗教上の問題をいへば、何處か縁遠い世界の話でも聞くやうに感ずる人があるかも知れぬが、然し、どんな人でも、善をなして喜び惡をなして不安を感じないでゐるといふことはあるまい。縱し目まぐるしい生活を營んでゐて、氣づかずになした惡事でも、心靜かに眞夜中にでも反省し回顧して、おひへずにゐる人は恐らくあるまいと思ふ。この惡事に對して不安を感じおびへる心、これが即ち道心である、良心である、菩提心である。

この道心、菩提心が如何にして人間にあるのであるかといふに就ては、神佛から授けられたのであるとか、自然に具はつてゐるのであるとか、祖先から遺傳してゐるのであるとか、教育や宗教の力で各人の心の中に作りあげられるのであるとか、議論は樣々であるが、ともかくも、人にはこれが具はつてゐることは疑ふことの出來ぬ事實である。これが具はつて、人が生活を營む上の忠告者となり審判者となり處罰者となつて作用いてゐるのである。旣に忠告者であり、審判者であり、處罰者であるがゆゑに、積極的に生活開展の指導者とはならない、生活開展が合理的に行はるゝ際には決して細出しをしない、飽くまでも消極的の原理である。

かやうに消極的指導の原理を說明すれば、その原理が自分の內界に儼存することに誰しも思ひ當ることであると思ふ。が、この消極的指導原理が、今日重大視されてゐないのは誠に遺憾である。世には快樂說

て、人文の開けた今日これがあるところから云へば、人生不安は所謂『教育の普及』に因縁があるといへないことはない。更にまた、封建制が行はれ、大義名分を重んじ聲譽を尙ぶ武人が、社會階級の上位にあつた時代には人生不安の叫びがなくて、士農工商の最下級にあつて、道義とか聲譽とかいふことには最も淡泊であつた實業家が、社會の中樞となり覇權者となつた現代に人生不安の叫びが喧しいとすれば、人生不安は所謂『實利主義』といふことゝ因果關係があるといふことが出來る。かくの如く、觀ずれば觀ずるに隨つて、人生不安の來由は樣々に現はれて來る。一概に『道心これ微』なるがゆゑにとは云はれない趣きがある。が、この考察を更に深く進むるほど、道心が微でなかつたならばと思はれる節々に到達する。結局は『道心微なるがゆゑに』といはなければならなくなるのである。

古往今來、その生活を豐潤にし向上進歩せしめたいと思はぬ者はないであらう。物質生活に於ても、精神生活に於ても。が、その生活を豐潤にして向上進歩せしめるに積極・消極の二方面の指導を要することに氣のついてゐる人は少い。卽ち、その生活を積極的に指導しゆく所の目標、理想、欲求を要することは知つてゐるが、その目標、理想、欲求の外に消極的の指導原理を要することを知らずにゐる。否、その消極的指導原理の存することを知らず、その原理の聲を耳にも入れずにゐることが多い。

然らば、その消極的指導原理とは何ぞやといふに、これが前來いふところの道心であり、一般道德界に於いていふところの良心である。また、佛教にいふところの道心、卽ち菩提心は、これと全然同一である

に大なる距離がある。見やうによつては、兩者は相容れないものである。が、その兩者がともに人間といふことに歡びを感じ、そこを堅く踏みしめてゐるところがおもしろい。實に、限りなく向上しやうとするも人間、向上を阻止するやうな氣持ちを起すも人間、人間には聖的の心と獸的の心とが與へられてゐる。この二つを程よく按排し指導するところに人生の至福がある。然るに「道心これ微なり」で、聖的の心はとかく其の發動を阻害され、獸的の心ばかりが其の勢ひを恣にしやうとする。かくて人間生活はその安寧を失ふのである。

然し、今日天下に滿ちてゐるところの人生不安（人心不安といふべきであるかも知れぬが、概念の混淆を避けるがために人生不安の文字を用ゐる）の叫びを、一言以て「道心これ微」なるがゆゑにといつたのでは、餘りに抽象に失する嫌ひがあるから、しばらく具象的事項について考察するに、人口稀薄、行くところとして物資の調達せられざるなしといふ時代には、人生不安の叫びがなくて、人口激増して、一片のパンを食ふにも骨肉相食むといふ時代に近づいた今日、人生不安の叫びが隨處に起つたとすれば、人生不安は所謂「生活難の問題」に基因すると見ることが出來る。また井をほりて飮み田を耕して食ふ、衣食住のすべてが自給自足であつた時代には人生不安がなくて、分業的專門的に業務が行はれる、所謂産業革命以後に人生不安の叫びがやかましくなつたことから觀ずれば、人生不安は所謂「資本主對勞働者の問題」と關聯してゐるといはなければならぬ。また、目に一丁字なき人々の多かつた時には人生不安の叫びがなく

外國の眞似や他人の眞似ばかりしてゐるのは褒めた話でない。自分といふものは全く成つてゐない。倶胝のやうな人がゐたら、指どころか、首まで切られてしまはなければならぬかも知れぬ。お互 幸に自重して『首』にならぬやうにいたしたいものである。

人心これ危し

嘗て『人心不安』の題をかゝげて、平日感じてゐる所の一端を述べたことがある。が、この人心といふことが問題にされ出したのは遠く古代に始まつてゐる。書經には『人心これ危なり道心これ微なり』とある。これは舜帝が禹に帝位を讓らうとするときに誡めていつた言葉の一節で、その解釋は樣々になつてゐるが、要するに、その人心とあるのは人間の欲求のことで、道心とあるのは人間の道義的精神のことである。いふを得べくんば、人心とは獸的の心で、道心とは聖的の心である。

明治の末年であつたかと思ふが、青年の間に『自分たちの欲する所は聖でない、人間である、人間でありたいのである』といふ叫びが盛にあげられた。が、その叫びに先きだつて、遠く昔から行はれてゐる敎條には『人は獸でない、人間は獸的であつてはならぬ』とある。青年のあげた叫びと古來の敎條と、その間

これが指一本で、といつては餘りに馬鹿にした話のやうであるが、然うでない。人には機緣といふものがある。つまりハヅミである。針の尖端で突いたほどのことから、天下の大事件も勃發する。大きなことゝいふものは、何かのキツカケに起る。倶胝は天龍が竪てた指一本をキツカケに悟を開いたのである。指一本で、暗黑から光明に引出され、混沌から組織へ引上げられたのである。而してその指一本は倶胝には忘れやうにも忘れることは出來ぬ。

いつてみれば指一本が倶胝といふ全一體の頂點になつてゐる。倶胝といふ大人格の頂點になつてゐるのである。であるから、若し倶胝に誰かゞ「自分自身をまる出しにして見せろ」といへば、倶胝は自分自身をそのまゝに提示する氣持ちで、指をニヨキツと竪てるのは當然である。果して倶胝は、然うした場合には何時も指を竪てた。これを禪門では「倶胝一指頭の禪」といつて、その當時から推重したものである。

ところが、そこに眞似好きの小僧がゐて、御當人は何等の悟も經驗もない癖に、人が何かといへは、小さい指をチヨンボリ竪てゝ見せた。指一本を竪てるところは倶胝も小僧も變りはない。が、それによつて現はされるところのものには、提灯と釣鐘との差よりももつと大いなるものがあつた。

倶胝は、小僧が經驗もなく組織もなく實感もなくて、全くの人眞似から、そんなことをやつてゐるのを知るや、呼んで、いきなり小僧のその指をぶち切つてしまつた。これは實に親切な提撕である。現代には斯ういつた親切な人はゐないやうだが、斯ういつた小僧は澤山ゐる。

らぬほどの廢物はあるまい。一切の間違ひは悉くこゝに發すといつてよい。緊縮方針によつて、馘首といふことが流行るやうであるが、若し馘首すべきものがあるとすれば先づ斯かる人より初むべきである。

自分を知らないで、酷いめにあつたことでは、禪門に痛快な話がある。支那に倶胝といふ和尚があつて、或る寺に住職をした。すると一人の比丘尼があつて、和尚を訪ひ、禮を厚うして『お側に侍してお悟りを承りたいと存じまするが』といつた。眞實の悟りを開いてゐれば、二つ返事で承諾が出來るのであるが、この時和尚は未だ悟が十分でないものであるから、何とも返事が出來ないで、どぎまぎした。比丘尼は見くびつて去つてしまつたが、和尚はこゝに大に激勵されるところがあつて早速寺を捨てて修行に出かけやうとした。

ところへ運よくも天龍といふ名高い和尚が來たので、挨拶もそこ／＼に、斯く／＼と話をした。天龍はこれを聞きもあへず、一本の指をニューッと竪てた。何のことかさつぱり分らぬ。が倶胝は天龍が竪てた一本の指を見て豁然大悟した。頭の中のむしやくしやが一時に霽れてカラッとしたのである。自分といふものが眞實に分つたのである。

アポロの神殿に『汝自身を知れ』と書いてあるといふが、其の『汝自身』が分つたのである。更にいへば、自分といふものが、如實に組織されたのである。幽靈のやうな自分でなく、切れば血柱たてゝ血をふき出す活氣の横溢した現實のこの自分といふものが、本當に分つたのである。この大悟、この自己究明、

義的感情生活、殊に報恩主義の感情生活が蘇へるのである。虚堂和尚が囚はれて怨まず、釋かれて天恩に感激した心情も味はれ、聖武天皇が畏くも大佛の御前に禮拜して『三寶の奴となりて』とまでに佛法僧の三寶の徳を讃へ、その恩光を感知あそばされた叡慮の一端も窺はれ、海山の深き高きも比とするに足らぬ父母の恩澤を感得することも出來、社會共濟、社會奉仕といふことを、單なる經濟上や政策上からでなく、感謝報恩の赤心から行ふことも出來るのである。

佛經には『父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩、この四恩は一切衆生平等に荷負す』とあり、『恩を感知し、恩に報いざるものは人にあらず』といつてあるが、道義的感情の鈍痲し倒錯してゐる人は、この語を聞いて嗤笑するといふ今日である。が、思うて悲歎惜く能はず、敢へて言辭を弄した次第である。

首にせらるべき人々の群

是も非もない、何んでも外國の眞似、人の模倣さへしてゐればいゝと思つてゐる人がある。かゝる人は全く自分といふものを知らぬのである。凡そ世に廢物が多いといつても、人間として自分といふものを知

說かれた。即ち坐禪定を修して心を平靜にし、先覺の指導によりて智慧を研くことを敎へて下されたのであるが、今日はその定慧を双修しなくとも、大忙生といふことのために無我になりさうになる。（釋尊の說かる丶無我になりさうになるのでは勿論ないが、我といふもの丶失はれる氣持ちに似通うた所がある）この無我になりさうになる氣持ちを、釋尊の如き大人格に導かれて、親船に乘つた氣持ちで味つてゐれば、それが歡喜であり勵みであるのである。が、大忙生のために無我になりさうになつた氣持ちは、思へば思ふほど、消えてゆくやうなわびしさを感じさせられて、その我に戀著したくて仕樣がなくなる。何とかしてこの我を取りとめたいとあがく。換言すれば、家とか國とか社會とかいふ大組織の中に融合して、有機的の大行をなすといふことが出來なくて、ちつぽけな自我といふものに屈托し、封建時代の根性を出して、小さくたて籠り縮かまらうとする。これが病根の一であるのである。

これを要するに、道義的感情の鈍痲や倒錯の根源は、所謂現代生活の繁忙より來る、當惑失神と誤れる自己防衛との二つにあるのである。既に病源がこ丶にあるとすれば、これを治癒するの法もまたこ丶に講ぜられなければならぬ。

それには禪に於て最も尊重する所の、寂靜と解脫とが必要となる。即ち寂靜によりて當惑失神を治癒し、解脫によりて自己防衛の謬想を撤廢することが焦眉の急である。寂靜が當惑失神に打勝ち、解脫が自己防衛の謬想を撤廢するとき、道義的の感受性は目醒め、道義的の發動性はその力を得て、所謂の道

り、家を呪ひ、國を滅し、社會を害うて喜んでゐるといふ病氣に罹つてゐる人がある。實に嘆かはしい次第である。

今こゝに道義的感情の鈍痲や倒錯を摘發するのは、徒に悲憤慷慨を事とするためでない。その病症の由つて來る因由を檢討し、その治癒を希ふことの切なるものがあるからである。

病因の檢討については、見る人によつて分れるであらう。經濟的にも、政治的にも、宗教的にも、其の他各種の立場から樣々に檢討することが出來るであらう。隨つてまた、その治癒の方法についても一樣とはいはれない。が、こゝには禪意よりこれを質さうとするのである。

禪門本來の施設よりすれば、一刀兩斷的、否、更に適切にいへば一刀一斷的で、現代人の言ひ草に隨へば、頗る理解のない高飛車なやり方であるのであるが、しばらく世に倣うて迷路にこれをすれば、今日の道德的感情の鈍痲や倒錯には、凡そ二因がある。その一は、人間生活の外的交涉が餘りに繁忙になつたといふことである。外的交涉が日に日に繁忙で、禪に所謂大忙生であるが、内的の心情はそれに伴はないで、當惑する、失神する、さながら深更火を失した女中さんのやうであるからである。生命が大事なのか、鐵瓶が大事なのか、着物か下駄か、衣類か炭取か、その見さかひがつかなくなつて、火の中にうろうろしてゐるやうな情況にあるからである。それから他の一因は、前にいふ大忙生のために、滅茶苦茶になつた自分といふものに戀着することである。釋尊は無我を說き、無我になる工夫として定慧双修を

坤に滿ちて夕陽の日ざしも心を淸々さする。これを味ふにつけても、有り難きは優渥なる天恩である。この有り難い天恩に何を以て報答すべきか、暗雲に曇らぬ聖德の天壤と窮りなきことを祝禱して、洪恩の萬一にも酬いやうといつた。その勝躅は實に芳しいものである。今日は、罪あつて囚はれても憤恨の色をなし、大赦の恩澤に浴しても、當然のことのやうにいふのが普通となつゐる。

一體、人には、色を見るに眼があり、聲を聞くに耳があり、香を嗅ぐに鼻があり、物を食ふに口がある如く、恩を感じ本務を感ずるに心情があつて、五官的感情とか道義的感情とかいふ術語まである。世が畸形的に發達したからだとでもいはうか、五官的感情のみは時を得がほに羽ぶりをきかし、ガタ馬車が鐵道馬車となり、鐵道馬車が電車となり、電車が自動車となり、乘り心地といひ、速さといひ、その便利なことは話にならぬほどであるに拘はらず、五官的感情は尙ほも滿足しないで、自動車では腰が痛むとか何とかいつてゐる。一方の道義的感情はといへば、これはまた問題にならぬ。道義的感情といつても、快樂說あたりでいふ道義的感情ならば多少は顧られもしやうが、東洋、殊に佛敎の特徵である所の報恩主義の道義的感情に至つては、全く度外視されてゐる。紅燈綠酒に浸つて五官的の快味を逐ふ人は多いが、道義を行うてその法悅に與らうとする人は、曉天の星よりも尙ほ稀である。卽ち現代人は道義的の感情鈍痲に罹つてゐる。鈍痲に罹つてゐるだけならばまだしも、道義的感情倒錯といふ病症にすら憑かれてゐる。哀悼の意を表すべきときに內心ひそかに快哉を叫び、尊崇の禮をなすべきに蔑侮して痛快が

又、生活改善は先づ以て、上位にあらるゝものより其の範を示すにあらされば、徹底的效果は望みがたいと存じます。男女長幼相よりて家庭をなし社會をなす。女子幼童をして其の道を得しめんとするには、男子及び長者が率先して自覺の範を垂るゝ事を要すると存じます。

道義心の振作更張

天下に善政を布かうと努めたといふので、有名な北條時頼が、最明寺に隱居し、破笠一杖の行脚僧になり、寒村僻地を經巡つて民情を視察してゐたその頃に、支那の佛教界には虚堂といふ和尚がゐて、大山名刹に歷住し、盛に禪法を擧揚してゐたが、會々官仕の小人の忌諱に觸れ、その讒訴に遇うて縲絏につながれる身となつた。が、行雲流水のそれの如く、境遇の順逆に心を移さぬ禪的修養の十分な和尚は、自若たるものであつた。それを面り見た皇帝は頗る心を動かし、直に釋放の宣旨を下し、その不明を恥ちた。釋放された和尚は感淚滂沱、一時を詠じ『去る時曉霜煩暑を消し、歸日秋聲夕陽に滿つ、恩濃うして重重何を以てか報いん、無雲の嶋を望んで天長を祝す』、囚へられて寺から出てゆくときには、殘暑の節で、まだ暑苦しくはあつたが、露多い候であつたがために樂であつた。釋放されて歸るときは、秋氣乾

す。其の健全なる宗教の存する處こそ、千古萬古動かすべからざる絶對の眞理にして、一切の聖賢神佛の體現し給ふ道であります。此の宗教を信じ得れば一面如何なる境遇に處しても、滿足と感謝とに充足し得ると共に、一面、前途無限の大光明を認めて、奮闘し突進して止まない生氣潑剌たる勇氣が起て參ります。それは事實であります。決して引込み思案や意氣地なしにはなれませぬ。現代の我々國民は、かゝる先決問題を全く忘れ居る樣に思はれてなりませぬ。方今、多少、政府當路者・教育者の方にも、宗教の必要を認められる樣になり來つた事は、國家の幸福であります。まだ〳〵一般に眞劍味を缺いて居る事が感ぜられますが、本縣知事閣下の此の生活改善問題につきて廣く縣內の御婦人を御集めになりました事は、誠に時期に適せられたる感謝すべき御開催と存じます。

曩に、愚見を提出致しましたのは、ほんの此の問題につきてその大略に過ぎませぬ。只だ熱心のあまりに、つまらぬ大略をはづかしき事ながら、幸に國家的婦人の考へとお笑ひ下さるやう願ひます。おふせのまゝ大急ぎに認めました。

尙私は胎內教育も大切な事と存じます。此の事は實際をあげて申上げたい事は山々に御座いますが、此の紙上に認めます時間なき事を遺憾に存じます。

眞によく生活改善を擧るには、婦人の精神教育が大切と存じます。宗教的信念あつて始めて報恩の念、內に發し慈愛の德外にあらはれます。

精を叫ばねばならぬと思ひます。

然るに現代人は、男女の別なく、都鄙の別なく、心的生活の如何を顧みず、只物質生活の改善のみに力を入るゝ傾きあるは、實に遺憾に存じます。勞多くして實の割合の擧らぬは不思議なしと存じます。其の枝葉の繁茂を欲すれば先づ其の根幹を培ふべしと申したいのであります。是百年千年の長計と存じます。

精神生活は、一は廣く科學上の智識を養ふべきは申までもありませぬが、特に社會學上の智識、二は經濟上の理解、三は道徳上の觀念、四は哲學上の概念、五は宗教上の信念の五種と分ける事が出來ると思ひますが、今、私の述べますのは、此の第一でも第二でも第三でも第四でもありませぬ。實に第五の宗教上の信念の一事であります。何となれば、健全なる宗教は吾人の精神生活の根本原動力にして、また一切の思想の基礎であります。且つ日用行動の樞軸でありますから、其の健全なる宗教は何を敎ふるものかと云ふ大問題は、淺學非才の私など說明し得べきものではありませぬが、要領は一であります。曰く絕對を敎ふるものにて、其の唯一絕對價値を三分して說明すると好いと思ひます。吾人は滿徳の本性を所有することを信ずる、二は深く因果必然の理を信ずる、三は神佛の慈悲を照覽まします事を信ずる。健全なる宗教は直ちに哲學や倫理學や經濟學や社會學などの根本精神ともなるものではありますまいか。此の健全なる信念の基礎に立つにあらざれば、何學の思想にも生命はありますまいと存じます。隨時思想上の或程度までは宜しいかも知れませぬが、其の基礎觀念がなければ眞の實行の心にはなれない樣に思はれま

宗教家・教育家の一致協力の態度に出づるにあらざれば、效果をあげられぬと存じます。

世界の形勢、國家の現狀に鑑み、國民生活の當面の問題として、大々的宣傳を施して、自覺を促進せしめなければならないと存じます。

自覺の要點は、國民としての婦人の覺悟、家庭整理改善に關する婦人の責務、社會に對する婦人の本分、生活上に於ける婦人の力、此等を根本問題として、精神的及物質的に生活改善の標準を表示し、之を通俗的に說明して普及宣傳を圖る事を要します。

然れども、現在の國狀に鑑みて、婦人の自覺を有效ならしむるには、男子の婦人に對する態度を改善せねばならぬと思ひます。少しく此の點に立入りて申せば、先づ生活とは何ぞや、曰く物質生活、曰く精神生活の二大部分にして見ねばならぬと思ひます。而して精神は主にして物質は伴になります。換言すれば肉體は伴にして心靈は主であります。何故なれば肉身は心靈のまに〳〵進退するもの故、生活改善を計らんとせば、身心生活の改善向上を計るのでありますが、先づ精神生活の大改善を計るのが先決問題であると思ひます。

精神生活の改善向上を捨てゝ、物質生活の改善向上にのみ眼をつければ、應急手當としては止むなき事ながら、今日の如く思想も發達し、人格の自由をも相當に認めねばならぬ現代人を導くには、却て反撥心を起して面白からぬ結果に到らざるやを心配致します。先づ精神生活の改善向上を促しつゝ物質生活の改

爲めに、常に後輩の指導的任務を帶び、老齢にして時間の餘裕ある人々は、社會公共事業（託兒保育事業等）に應援する様務むる事としたい。

三、最も改善を急務とする事項。

一、婦人をして社會的・經濟的の地位を正確に知らしめ、貯蓄精神の向上を計り、日常の服裝の如きも、婦人美を損せざる程度に節約簡易ならしむる事、而して其の實行方法は、先づ各地の上流婦人實際に着用して一般に表示する事。

二、最も衞生的で單純化されたる勝手臺所の模型を造り、各地方に移動展覽會を開き、地方婦人に其の智識を與へる事。

三、我國の女性は社會を有せずと云ふも敢て過言ならざる現在の狀勢に鑑み、現代婦人をして社會改善に力を盡し、舊來の社會の惡弊を改善せしむる第一歩として、慶弔贈答等の虛禮虛飾を廢し、或は集會時間の勵行等交際社會の一般の惡弊を、婦人の力にて矯正せしむる様申合せる事。

四、婦人參政權の實現も時期の問題なれば、婦人に對しても政治智識を與へる機關の設置、或は各修養團體にて時々適當の人々の講話を聞く事。

倘右について說明を加へますと、

婦人の自覺は焦眉の急に屬するも、多くの婦人はまだ眞に注意を拂ふに到らず、故に此の際官公吏及び

が、曾て山形縣知事主催の婦人の生活向上に關する打合會に出席して發表せられたる意見は、大に見るべきものあるを以て、左に之を抄錄することゝなしぬ。

（以下とめを女史の意見）

一、生活改善に關し如何にせば婦人の自覺を促し得るや。

現代婦人は思想的に多少自覺しつゝありと云ふ聲あるも、過渡時代の今日、其れが爲め思想的犧牲者の多き事も見逃す事は出來ません。之れは現代宗教の餘りに形式的に流れ、精神生活を看過せし爲め、舊來の婦人道德が現代婦人に無價値に感じ、其れに代るべき新道德の基礎の確立がなき爲めと信じます。故に、現代の婦人を自覺せしめんとせば、科學や物質文明にのみとらはれざる樣、宗教的信念の確立を期せしむる修養團體を各地に設置し、縣としては、生活改善、婦人の自覺に係はる記事の圖書を、少なくも一年二回位各團體に配付し、之れを實行せしむるやう宣傳する事が、現代として、最も良き方法と考へます。

二、如何なる方面に婦人生活の改善を行ふべきや。

我國の婦人はとかく家事の智識にも社會的智識にも乏しきが爲に、貴重の時間を近所の人々と空談雜話にふける嫌あり、其れが爲、國家經濟的には勿論、社會的・家庭的に頗る惡影響を及ぼすものなれば、婦人と雖も各人其の立場によりて、終生、自己の使命を忘れざるやう努め、家庭の圓滿を期せしめんが

まふといふので、有司の人々が危険がありてはと思ひ、機械の運轉を禁じたりしに、氏は甚だ怒られ「吾れ巨額の社費を投じて此の擧に及ぶ、萬危険なきを保したりき。然るに運轉を禁止せんか、我れ何の面目ありて會社員諸君に見ゆべけん。吾は唯だ死ある耳」といはれた。有司大に驚き且つ懼れ、早速機械を運轉せしめたので、氏は感極つて泣かれたといふ。又、氏が東京市會議員たりし時、偶ま飛鳥山の西麓を削りて電車を通さんとの議があつた。氏大に驚き「飛鳥は東都の名所である、今軌道を設くるに何ぞ必ずしも山麓を削つて勝地を傷つくべけんや」と痛論せられた。衆議費用の多寡を以て之を爭うたが、氏は極力抗辯して、遂に其の議を翻へされた。

氏は柔和の中に勇氣あり、温情の中に理路あり、常恒不斷に佛心に歸仰し、信を以て萬行の基となし、進退動靜、佛心の實現に精進せらるる。實に肉身の菩薩と稱すべきものである。

筒井女史の婦人生活改善意見

筒井とめを女史は端陽と號し、山形縣飽海郡松嶺町の人、曾て率先して總持寺直轄の松嶺佛教婦人會を創立し、自ら幹事として經營の衝に當り、且つ、常に同地各方面に佛教信仰の鼓吹に精進して居らるゝ

代、邸内に長岡孔子祭典協議會を開き、碩儒高橋茂一郎氏等の賛助を得て毎年釋奠を擧行することゝなり、氏は特に聖像・神龕・並に基金等を寄附し、地方教化の上に偉大なる感化を與へられた。又、東京帝國大學佛教青年會が本郷區内の有志を構内山上御殿に招きし時、氏は合掌しながら、列席諸氏に會館建設の援助を請はれ、其の後專心、會館建設の事に奔走せられた。

又、氏は觀世音菩薩を理想的本尊として信仰せられ、邸内に六角形の觀音堂を建て高屋肖哲畫伯が刻苦三年の靈筆に成れる千手觀音の畫像を安置せられた。同像の作製せられし頃、彼の大震災に遭はれしが、罹災兒童千名に衣服を頒與せんと思ひ立ち、有志の寄附を募集せしに、五六千枚の衣服が集まりしかば、令夫人、主となりて女學生等の應援を得て、之を洗淨し改裁して罹災兒童に施し、寄附者に對しては『千手觀音』と題する美麗なる書冊を編輯して之を提供し、其の厚意を謝せられける。又、氏は郷里長岡市に數學研鑽の資として金二千圓を寄附せられた。曾て母堂御逝去の時、本郷喜福寺に於て葬儀を執行せられしが、其のをり會葬者一同に、釋尊御涅槃の折の遺訓たる八大人覺を和譯印刷して施與せられた。斯の如き淸淨純潔なる行持は幾ど枚擧に遑あらざれど、氏は恭儉にして少しも之を誇ること無く、寧ろ其の及ばざるを恐るゝが如し。

前の東京帝國大學講師日下寛先生が、大正九年の十月、漢文もて氏の略傳を叙せられたるが、末尾に於て二箇の逸事を錄せられた。其の一は氏が瓦斯館を博覽會内に設けらるゝや、聖上陛下が御臨幸あらせた

されしかば、富田知事に抜擢せられて、水道係長となられた。氏は一百餘日を費して上水敷地を實測し、經營苦辛の上、水道の根本的改善を施された。明治三十一年、澁澤子爵・大橋新太郎兩氏の推薦に依り、東京瓦斯會社の支配人となり、尋で取締役に榮進し、精勵十有七年に亘り、資本金百萬圓の會社をして二千萬圓に增資するに至りしとぞ。後、郷里長岡なる寶田石油會社より請聘せられて專務取締役に當られ、在社六年、病を以て辭職せられしが、健康も頗る回復せられければ、今は聖堂の復興、斯文會の擴張等に從事し。傍ら佛教の普及、儒道の興隆、國民道德の奬勵、その他社會公益の事業に精進せられて居る。氏は謙讓と慈愛とに富み、一言一句、一擧一動も至誠の迸りならざるは無い。而して、忠君愛國を經とし敬神崇佛を緯とし、以て東洋文化の開發に渾身を捧げられて居る。

氏が曾て駒込西片町に居られし頃、佛教の名士にして縮刷大藏經の功勞者たる島田蕃根翁と隣りせしが、翁の子息の經始せる下谷谷中初音町の日本女子美術學校が經營困難に陷りしを見て、氏は之を引受け自ら校主となりて整理に力を致し、六年有半校務に盡されたが、東京瓦斯會社の業務繁劇となりし爲め、積立金二千圓を添へて、右女學校を東京市へ寄納せられた。又、長岡寶田會社の專務取締となられし時の如き、同會社重役以下社員四十餘名と與に、越後一の宮國幣中社彌彥神社に詣し、其の大前に平伏し、相共に誠を盡して社務に當るべきを誓はれた。又、氏は孔夫子の祭祀を復興するに力め、現に斯文會理事として德川會長を援け、同會をして今日あるに至らしめられた。大正八年氏が寶田會社專務取締の時

余が多年親炙し且つ敬重する東京本郷區駒込神明町福島甲子三氏は、實に肉身の菩薩とも稱すべく、佛敎信者の龜鑑、國民の手標と謂ふべき人格者であると思ふ。氏は晩晴居士と號し、其の住居を洗心庵と稱す。今年は七十歲であるが、鋭氣矍鑠として京成電氣株式會社取締、聖堂復興期成會理事、斯文會理事會幹事等に推薦せられ、氏が平素の報恩主義を以て盡瘁して居られる。氏は越後長岡の人。

父は鬼頭平四郎、後に少山と改む。文武兩道に長じ、武術師範として藩侯に事ふ。四男一女ありしが氏は其の三男である。明治戊辰、長岡は官軍に攻められ、惡戰苦鬪の後遂に陷落し、叔父熊次郎は戰死す。氏は時に年甫て十歲、母に伴なはれて難を避けしが、三歲以上の男兒は皆な殺戮せらるゝとの噂に驚き、兄弟齊く女裝して十數里を距てたる妻有鄕（今の中魚沼郡）に逃れ、氏は船山の龍源寺に入り、兄悌次郎は深見の大龍院に入り、慈母は增子・玉江の二兒を率ひ、同村の地藏堂に入りて迹を晦ました。亂後、父君は始て兒女を迎へられ、鄕里に在て專ら育英の事に從はれしが、後、東京駒込曙町に老を養はれた。令兄悌次郎は農商務省參事官に任ぜられ、更に總領事となりて各國に轉任せしが、辭職後、横濱同仲會社長となり、幾も無く病歿せられた。

氏は明治六年、長岡病院の創設に當り藥局生となり、後、東京府士族福島家を繼ぎ、明治十六年四月、千葉縣の衞生課に奉職せられた。時に氏は自ら誓て曰く『吾れ才學に乏しきも、今後只至誠を以て其の職に當らん』と、明治十八年、東京府に轉任するや、清白を重んじ節義を守り、溫恭恪勤、克く其の職に盡

る。買物をするにも、同じく金錢に依賴の言葉を添へて遣るのであるが、「金錢は物品として取扱ふべきものではない。天賦の賜物を粗末にしては、自身が金錢より愛想をつかされて、物品同樣にさるゝ懼がある」とは氏の持論である。

かゝる日々の行持は、實に現代には珍らしき人として推賞するに憚らぬ。加之、氏は第一日曜には、高德を講し、或は自身が修養上の法話をして、一同に聞かしめるのであるが、言々句々、悉く慈愛の淚である。恰も親が我子に對する如く懇情至らざるなき態度には、使用人一同も慈父の如くに欣慕うて、如何なる勞をも氏の爲には辭せぬと云ふ有樣である。

現に去る試驗の際には、東京近在には珍らしき大雪が降つた。其の時に方り、車力二人でも道中が覺束ない泥濘の中を、倉吉氏の使用人のみは「一人で充分です」と云うて、孰れも二人分以上の働きをしてくれたとの話であつた。

希くは、修養に志す人々は、何とぞ倉吉氏の行持を以て自己の行持とせられんことを望む次第である。

肉身の菩薩

倉吉氏は一面德に於て、斯くも崇高偉大なる感化を與へつゝあると共に、他の一面に於ては、實に現代實業家の模範となすべき人物である。國家經濟に重きを置き、凡そ國益になるべきものは、たとひ一塵たりとも粗末にはしない。彼の烟草を入れて來る箱には多くの釘が打たれて居る。倉吉氏の支配をする以前は、悉く使用人の手によつて棄てゝ了はれたのであつたが、昨年七月以來は一々注意をして、必ず一定の箱に拔釘を貯へしめた。塵も積れば山となるのたとへ、遂には幾百目幾貫目の多量になる。氏は之を賣つて使用人の救濟金に當て、其の家族等に於て病人の出來た場合は、直に其の金を以て見舞金とする慣習を付けたので、使用人一同の喜びは此の上もない。從前は僅かの賃銀から、各自が共濟的に醵金をして不意の用意をして居つたのが、是より其の心配はなくなつた。

かくのごとくにして、釘一本たりとも粗末にせぬと云ふ氏の德性は、總て品物全體を鄭重にする樣になつて、從前は箱を開く際に、よく包裝を切つて製造元に逆輸送をしたものだが、目下は絕えて其れが無いとのことである。

倉吉氏について更に感ずべきは、金錢に對する氏の考慮である。日々幾千幾百圓の大金を取扱つて居ることゝて、午後四時までの入金は必ず銀行に自ら持參して、決して手元に止置かぬ。而して、四時過の金は一々金庫に入るゝのであるが、恰も人に物言ふ如く金錢に向つて『今日は時間が遲れて銀行は間に合はぬ、窮屈ではあらうが、何ぞ今夜だけ我慢をして貰ひたい』と、丁寧に言葉をかけて禮をして金庫に納め

る後に、一同に幾許の金を配與する。一事が萬事で、實に近代には珍らしき心掛と謂はねばならぬ。

しかしながら、使用人は多く勞働者である。随つて無教育の者が多い。從前には、家庭に歸つても絶えず喧嘩がある。一日働いて家に歸つて見ると、妻は湯にでも行つて不在であると、其の歸宅を待つて小言を云ふ。二言目には鐵拳が飛ぶ。妻君も負けては居ない。益々言ひ募つて、終に一場の修羅界を現出すると云ふ有様であつたらしい。

倉吉氏は早くも、かゝる勞働者の家庭を善良にすることが第一であると考へた。夫には先づ使用者自身を、温厚なる性格にせねばならぬ、短氣な殺伐な氣風を改善せねばならぬと、種々苦心焦慮の結果、自宅に湯殿を設けて、一日の業務を終り、夕頃、今將に歸宅の途に就かんとするに方り『今日は皆様實に御苦勞であつた、定めて疲れたことであらう、先づ湯に入つて塵埃を落し、お茶でも召上つて歸つて下さい』と丁寧に會釋をして、其の勞を慰める。決して主人らしい態度を取らない。其の懇切の情、溢るゝ如き慈愛の德には、誰一人として感化されぬ者はないと云ふ有様。

随つて、上を見習ふは下の常、宅に歸つても、從前の如く粗暴ではない。既に入浴して一日の勞苦を洗ひ落して、身心共に爽かなる彼等は、其の妻に對する態度も全く變つた。妻の方でも、夫の氣質の和ぐと共に、凡てが温順になつて、氣隨氣儘の擧動は無くなる。かくて、倉吉氏の人格は、使用人三十名の家庭悉く感化するに至つたのである。

勞はす。すると、如何に我慢強い者でも、老人の前には頭が自ら下る。互に一歩も讓らぬと云ふやうな問題でも、老人が一言を入れると直に解決すると云ふ風に、誠に人格の高い人であつた。氏は其の第一子である。

其の感化を受けた一子倉吉氏は、幼年時代より信仰が厚く、神道ではあるけれども、一事一物、必ず神と云ふ觀念を離れない、現在三十餘人の勞働者を使用して居るが、氏は如何なる態度を以て、かゝる勞働者に臨みつゝあるであらうか。余の氏を修養上の模範的人物として推奬する所以は、其の日常の行持にある。

最近の一例を擧ぐれば、去年の年末に際して、使用人一同に對し應分の慰勞金を配與した。倉吉氏は平素より、金錢に於ける考へが常人と異つて居る。假令、自分の財産であらうとも決して一個人のものではない、金錢には金錢の德がある、特に『自分が無事に業務を勵續することの出來るのは、偏に祖先のお蔭である』と信じて居るので、歲末の慰勞金を配與するにも、先づ第一に神棚に金錢を供へて、神に報告をする。恰も人間に物言ふが如く、『今日、斯の如く一同に慰勞金を配布することの出來るのは、偏に一同が毎日忠實に勉勵に働いてくれた賜物である。此の金を配布するのも決して自分がするのではない、皆な神樣がしてくれるのである。御國の爲に働いてくれた爲に御國が報酬をしてくれるのである。今後も尙且つ一同が健全に業務を續けてゆかれるやうに、伏して神の照鑑を仰ぐ』と云ふ風に祈禱を捧げて、然

難しい所説を要するのであるが、平易に解すればまたこれくらゐ平易なことはない。つまり聖胎とは聖を産出する母胎の義で、佛種子のことである。佛の玉子といふことである。佛の玉子を破らないやうに溫めてかへして雛にし、漸次大きく養育してゆく、これを聖胎長養といふのである。

佛とは萬德圓滿の大人格のことである。この萬德圓滿の大人格となるのには、我等が人間として與へられてゐる所のものを悉く包攝し、それを統一し純一にして行かなければならぬ。人間として一切を統一し純一にして行くのには、俗に所謂「いのちあつての物種」で、我等が攝生專一でなければならぬは申すまでもないことである。

端的にいへば、攝生專一なる所、そこが萬德圓滿の大人格の顯現、佛の顯現であるのである。

德行の薫化

横濱市煙草專賣局の元賣捌を擔任して居る植村倉吉と云ふ人がある。親は神奈川縣の煙草産地として有名な秦野に住して居たが、非常に德望の高い人であつて、村内の紛擾事は、公私共に氏の前に持つて來る。一寸した家内の不和、夫婦喧嘩があつたと云つても、若い衆の口論があつたと云つても、必ず老人を

ふ一概なことはいふまいと思ふ。佛教の教徒、これらの人々を『何のために』に偏して『如何にして』といふことを閑却してゐると、如何していふことが出來やうか。

それはともかく、佛教で、この攝生について『如何なる方法で』と、所謂方法を說き明したものは隨分澤山にある。殊に禪の如きは、たゞこの攝生法の敎であるとさへ、一部の人々からは思はれてゐるほどである。禪が攝生法として行はれてゐる範圍は實に廣い。世に所謂攝生法なるものに、禪、少くとも禪味乃至禪的所行を加味しないものは絕無であると云つてもよいほどである。が『何のために攝生をするのであるか』といふことを示してある說敎の方は、殆ど世に忘れられてゐるやうである。

扨て人は何のために攝生をするのであらうかといふ問を世に提出するに、素朴的な人はいふ『體が大切だから』と。利己的な人はいふ、『自分の體が大切だから』と。更にまた利他的な人はいふ、『人樣に對して相濟まぬから』と。而して眞の佛者はいふ『聖胎長養のために』と。

思ふに、利己的の人が、『自分の體が大切だから』といふのも一面觀であり、利他的の人が『人樣に對して相濟まぬから』といふのもまた一面觀である。如實には『自分の體が大切であるからでもあり、同時にまた人樣に對して相濟まぬからでもある』のである。

佛者は常に如實の立場にあるものであるが、その立場からは『自分のためといはず、他人のためといはず、聖胎長養のために』といふ。この聖胎長養の文字、これには深遠の意味があつて、專門的にはかなり

何のための攝生

今日は「何のための攝生」といふやうなことは流行らない。今日の時代は「何のため」といふやうなことを考へてゐる餘裕がない。今日の問題は「如何にして」といふことにある。今日の人は目的を知らんとするのでなく、方法を知らんとするのである。

攝生が何のために貴いのであるか、必要なのであるか、そんなことは餘りに判り過ぎてゐる。また、縱し判り切つてゐないにしても、そんなことは今日の人々の問はんとする所でない。「どういふ方法を以てすれば攝生が十分に出來るか」これが知りたいのであると、言ふ人はいふであらう。

いかにも今日は、目的論の時代でなくして、方法論の時代である。これは殆ど凡ての人のいふ所である。攝生のことをいふにしても「如何にして攝生をなすか」といふことを問題とすべきで「何のために攝生をなすか」といふことを問題にするのは、時代錯誤の感がないでもない。

然しながら今日は「如何にして」の時代であつて「何のため」の時代でないといふやうなことを說くのは、西洋ものを主として見てゐる人の云ふことで、東洋の宗教道德を知る人であるならば、恐らく然うい

自分の懷中へ入れつくさうとした。すると他の一人がおさまらぬ。あゝかうと大喧嘩を始めた。そこへ御幣を捧げた男が現はれ、裁く裁かんといひさま『見よ見よこの御幣を、この御幣が額にぴつたり付いた人の所へその百兩は納まるのだ』と、御幣を振り振り、自分の額にぴたつと付け『さあ百兩百兩、百兩をこちらへ』といふに、二人は『金、金は、ウーン、まだ拾はぬのだ、拾つたらやまわけにと騷動してゐるのだ』と、三人思はず顏見合せて『アツ』といつたと書いてあつたやうに思ふ。この物語は一體何かといふに慾張りの人達か、拾つたら拾つたらといふ迷妄から、本具淨妙の心を硬化し、堅い隔壁をたてたがために、愚にもつかぬ狂態を演じたのである。然しこれは人ごとゝして嗤笑し去るべきでない。これに類同した、否、より以上、而も複雜な狂態を、聖者ならぬものは誰しも行つてゐるのである。

月かげの至らぬ里は無けれども眺むる人の心にぞ澄む――、月かげとは佛光明である、慈光である。これを主觀に卽していへば、本具淨妙の心である。世はこの月かげ、佛光明、淨妙の心の蓋天蓋地である。が眺むる人が、迷妄の隔壁をたてまはしてゐるために、その光りを見ることが出來ぬのである。が、先きにいふ所の撼天動地の金剛力を出すならば、その隔壁は一時に碎破される。碎破されて佛光明の新天地が體驗される。

年窮歲盡の處には新なる乾坤が打開される。迷妄隔壁の碎破される處には、慈雨に潤ひ、新光に暖かなる別乾坤が打開される。この別乾坤こそは、我れ〳〵の最も憧れる所のものである。

はしもなく、坐禪をするのには、四條五條の橋の上でども行るといふ強い心がなくてはならぬ。

何事でも逃げ歩いてゐるのでは仕方がない。逃げないで、逐ひ來るものを逆に使ひこなすといふ力を出さなければ、人間らしい人間とはいはれたい。使はれないで使ひこなす、これが禪の一徳である。禪家では、使得十二時といふことが貴ばれてゐる。即ち、十二時に使はれないで十二時を使ふといふのである、もう何時になつた、もう何日になつたと時に引張られて行くやうなことは、大の禁物である。

石衣和尚といふ人は、嚴冬の寒夜に坐禪をしてゐて、體が氷のやうに冷え切つて來ると、大きな石を抱へて草庵の周圍を驅け歩き、以て體を溫かにして、また坐禪をしたといふことである。暖を取るべき火も無かつたからでもあらうが、斯うした意表の外に出て、その生を開拓してゆく、そこに『使はれないで使ひこなす』といふ偉大なる人間の力が現はれてゐる。石衣和尚のこの防寒術のやうな行爲を評して、人は禪機があるといふが、いかにもその評は當つてゐる。禪的修養は、人間の人間らしい力を發揮する工夫である。環境に虐げられ、物欲に蔽はれて、萎縮してゐる人間の本心に、撼天動地の金剛力を出さしめるのが禪の修養である。

何かの書にある話に、二人の人がゐて、その中の一人が、「この百兩をどうしやう、さうだ、やまわけがよい」と五十兩を先づ懷中へ入れて、殘りを二つに、二十五兩を懷中へ入れて、その殘りの二十五兩を二つに十二兩二分を懷中へ入れて、その殘りを二つに、またその殘りを二つに、また二つにと、殆ど全部を

世が初春になれば、心が長閑になる、身の置き處が清淨になれば、心が清淨になる。四圍の狀況、身の置き處といふものは、實に偉大な力を人間に及すものである。孟子には『居は氣を移し、養は體を移す。大なる哉居や』とあるが洵に環境といふものは大切なものである。

であるから、古來、道に志す人は、境を擇び居り場所に注意したのである。道元禪師が京都から越の山深くお入りになり、瑩山禪師が能登の奥へ奥へとお入りになつたのは、此の意味を以ても拜察することが出來る。

が然し、居は氣を移すといふことを知つて、氣が居を移すといふことを知らなければ、禪語にいふ一方向きの擔板漢で、一面觀に墮著したものといはなければならぬ。或る人が市街に棲んで、その喧騷に堪へず、郊外に移つた。郊外も良くないといふので、片田舎へ移つた。更に山里へ移つた。更に山の奥深くへ、鳥も通はぬ奥山へ。それでも猶ほ木の葉が戰ぐ、清水の滴る音がする。騷がしい騷がしいと、遂に往き處がなくなつて死んでしまつたといふが、死んでも火の車の音や何かで、さぞ騷がしいことであらう。そんな風では仕方がない。

或る人は『坐禪すれば四條五條の橋の上往き來の人を深山木に見て』といつたら或る人が『坐禪すれば四條五條の橋の上往き來の人をそのまゝに見て』と訂正したさうである、往き來の人を深山木に見ないで、そのまゝに見てゐて、それで果して坐禪が出來るかどうか、庸人にはむづかしからうと思ふが、それ

雑煮、昆布、黒豆、見るもの聞くもの、爲すこと、すること、何から何まで、昨日とは打つて變る。初春となれば、人の心もおのづから初春らしい氣持になる。その和いだ靜かな光景に浸れば、心の翅は遠く二千年三千年の昔の長閑な御代にも舞ひもどつてゆく。

元日や何は無くとも親二人——平生は生活に追はれて、或は經濟に、或は政治に、或は學に、或は技に、各々その職とする所に忙殺せられ、父母の在すを歡ぶその心をも打忘れ、動もすればないがしろにもしかねぬのであるが、長閑な初日を迎へて、忙殺の世界、物慾の世界を超脱し、神佛を拜み父母に事へ、祝膳づくしの淡泊な食膳について、互に無事息災のほぎことをすると、兩親のお顏が俄になつかしくなる。その懷に駄々をいつた往事が蘇つて來る。おゝ父母……と麗はしい情緒がこみあげて來る。

熊坂長範は名代の大賊で、政府の誡めや、捕手に畏ぢる男でなく、金輪際改心の見込みは立たぬのであつたが、一日、逐はれて高野山に逃げ込み、とある坊舍の縁の下に深く潜んでゐると、森閑たる高野の山の谷々からは山氣が襲ひ來る、六根清淨の鐘の音は耳邊に鳴り響く、長範、初めは、この山氣この梵聲にも心挫ぐ樣子は無かつたのであるが、夜が更け時が經つて、山氣が深み鐘聲が沈んで來ると、何時とはなしに、長範の迷妄が薄らぎ、本具佛性の光が現はれて、胸に渡る峰の風、靜かに響く鐘の音、長範には罪障消除の大慈風とも感ぜられたのであらう。『高野山峰のあらしの激しくてこのはをかくも後の世のため』と、白晢の強い齒を嚙み碎いて轉迷開悟、全くの善人に立ち返つたと傳へらる。

へてしくれたその功績を思はず、社會が受用せしむる物資を遠慮なく受用して、社會同胞の白汗の勞苦の結晶であることを思はず、會々その不心得を難ずる人があれば、『なアに代價を拂つてある』といつて濟ましてゐる人があるやうである。が、これは洵に淺はかな考である。拂ふべき財貨が嚢中にうなつてゐたところで、欲するところのものを提供してくれる社會衆人がなかつたら如何であるか、思うて見るがよい。需めるに隨つて供給せられるといふことは、代價を拂ふ拂はぬに拘らず、大に感謝に値することではあるまいか。一方また、我等の性能を社會が必要としてそれを發揮せしめてくれるといふことは、前にもいふ通り、大に感謝して然るべきことであるのに、やゝもすればその功に誇り、剰へ不當の代價をさへ要求する人があるやうである。誠に誡しむべきことである。

供給せられては感謝してこれを受け、需要せられては感謝してこれに應ずる、これが佛教にいふところの社會に處する道であり、また社會の恩に感じ社會の恩に報ゆる道である。

乾坤ために新たなり

元日や神代のことも思はるゝ――除夜の鐘が鳴る、初日が昇る、お屠蘇を祝ふ、社寺詣、廻禮、賀狀、

有することが出來ぬ。實に社會は我等が受用し得る一切の供給者である。我等の發する言語は社會の言語である。社會先覺の努力の成果である。我等が食ふところの米麥は社會の米麥である。社會衆人の膏血であり自汗である。社會先覺の遺德に培はれず、社會同胞の恩惠に養はれなかつたならば、我等は如何して一日を暮すことが出來やうか。

我等が衣食は父母が下さる、我等の智德は師長が啓發して下さる――と子供はいふかも知れぬ。が、綿綿を製し米麥を作る社會の存在がなかつたら如何であらう、思想を傳へ經驗を敎ふる社會の先覺がなかつたら如何であらうか、社會は實に我等が享有受用し得る一切の供給者である。

更にまた、社會は我等が實現し得る一切のものを實現さしてくれる。社會が若しなかつたならば、我等にどんな天賦の性質が有つたところで、それを如何することが出來やう。或る學者のいふところによれば、人は生れたときに狼の群の中へ入れられゝば、狼そつくりになつて成長し、狼の中に入れゝば狼になつてしまふといふ。して見ると、我等が人格を具へ人としてその性能を發揮するのは、全く社會あるがためである。社會が我等に求めこ、我等の性能を發揮せしめるのである、我等の自我を實現せしめるのである。

斯樣に考へて來ると、社會は洵にありがたいものである。社會の恩は實に洪大なものであることが感知される。然るに世には、社會が享有せしむるところの文化を恣に享有して、社會先覺が流血の辛酸を敢

貰つたのでは、自分のつとめを果す以所とはならぬのである。『他はこれ我れに非ず』この一言甚だ簡なりと雖も、噛むに隨つて味ひの津々として盡きない言句である。

誰かこの惠潤に浴せざる

恩といふ考は、東洋思想、殊に佛敎に於て最もよく宣揚されるところである――と、斯界の學者によつて言はれてゐる。恩といふ考が佛敎特有のものであるか否かの論は別として、佛敎でこの恩に感じ恩に報ゆることを說くは、極端過ぎるほどである。が、實に徹底したものであることを、佛敎徒一同は信受し、有りがたく頂戴し奉行してゐるのである。それを委曲に申述べたならば、佛敎については一知半解もない全くの門外漢でも、成るほどと諒承し下さることゝ思ふ。が、今は限られたる頁でそれをする譯にゆかぬ。で、こゝには佛敎で敎ふる恩の中の社會の恩といふについて、而も佛敎の術語を避け、たゞ意を酌んで簡單に述べやうと思ふ。

我等は、何から離れてゐることが出來ないといつても、社會から離れてゐることが出來ないのに勝るものはない。社會を離れては一時半時も存在することが出來ぬ。先づ第一に社會がなければ我等は何一つ享

「貴僧は御老體であるのに、何故こんな暑い炎天でお働きになりますか、人夫にでもやらせなされば、およろしいでせうに」と仰せられたところが、その老僧は「他はこれ我れにあらず」他の人を使つてやらせたのでは、それは他の人の奉仕であつて、私の奉仕とはならぬ。私の務めを勤むるといふことにはならぬ。私は斯うして、私の務めを勤めさして頂いてゐるのを、有りがたいことに思つてゐるのである。どうしてどうして、他の人に頼んで、自分は休んでゐやうなどといふことが出來ますものかと云つたので、大師は大に解き且つ悔いて、自分はよい年をしてゐながら、この趣きが、今が今まで分らなかつた、氣付かずにゐたと仰せられた、と傳へられてゐる。

これは實に貴いことである。何事もたゞ打算的にばかり行つて、自分のつとめとか責任とかといふことに就いての考へが薄らいでゐる今日、斯うした人の氣持を味ふといふことは最も大切なことである。我等が仕事をするのは、パンを得る方便ではない。仕事をするのが仕事であるから仕事をする のである。こゝの所を單なる理屈からでなく、情操の上から會得したい。

こゝに一つの仕事があるとする。その仕事がたゞそこにあるといふのならば、誰でもそれを仕了せさへすればよい譯であるが、我等の立場よりいへば、仕事がこゝにあるとすれば、必ずそれは誰かゞなすべき仕事としてそこにあるのである。隨つてそれは、「これこそ我が仕事なり」と信ずる人が、一切の不純たる欲念を離れてこれをなさなければならぬのである。であるから、他はこれ我れに非ず、他の人にやつて

たものには、何處か力拔けのした所があつて、我等の生活をビシ〳〵と律し行く力とはなりにくい。

そこへ行くと、古聖先賢、乃至、匹夫野人の一言一行が、案外の力を持つて我等の生活を動かすに役立つものがある。もとよりその言行には、組織があるの、理がつんでゐるのといふではないが、何かしら、我等を實際に動かすのが妙である。

で、我等は、自分の生活規範を求むる上にも、人とそれを談ずる上にも、成るべく具象的なもの、實際的なもの、まざ〳〵と目に見える底のものを以てすることが必要であると思ふ。この意味に於て私は、古禪僧の行履を自らも學び人にも談ることを好んでゐる。此の頃社會で、理論的のものばかりでなく、人格的のもの、嘉言善行的のもの、例へば親鸞とか老子とかいふものが歡迎されるのは、大に祝慶すべきことである。

私は親鸞上人や日蓮上人と共に、現代の日本の宗教界に最も偉大なる貢獻を致されてゐる道元禪師、並に瑩山禪師、即ち曹洞宗の高祖承陽大師と太祖常濟大師、この兩大師の盛德事蹟を仰ぎ、また世に紹介することを務めとしてゐる。その承陽大師が入宋中のことを一つこゝに述べて見やう。

承陽大師は、二十四歳で支那に行かせられたのであるが、彼地へ上陸して、天童山といふ山の大寺院へ上らせられると、一日、暑い土用の眞晝中に、脊骨の弓のやうになつた老僧が、笠一つかむらず汗をダクダク流しながら、菌か何かを一生懸命で乾してゐる。それを御覽になつた大師は、氣の毒に思はれて、

け加へたものは一切取り擲つてしまつた全く裸一貫で、貴いのでなければ、眞の意味に於て貴いのではない。

今日の青年は、特にこの装飾のない、赤裸々を好むのは非常に結構なことである。然し、赤裸々の藝術品に對して、本當にその赤裸を味ひ、不純の感じを持たずに鑑賞する人が幾人あらうかと思ふが、全くこの赤裸といふものは味ひにくいもので、得て邪道に陷り易いものである。

赤裸の人格、これは我等の最も崇敬する所であり、何處までも溫い親しいものである。が、その眞の貴さを味ふことは難しい。難しくても、好む所には引きつけられる。我等が最も好む所の赤裸の人格、その人格の精髄を味ふことに、精進しなければならぬ。

他はこれ我に非ず

我等が生活の規範を如何にするか——といふことは、現代人の前に提示されてゐる一大公案である。この公案の解決次第で、我利我利亡者にもなれば、偉人傑士にもなる。生活の規範を究理的に築き上げることは、新時代にあつて、殊に望ましいこと、是非やらねばならぬことである。が、究理的に新に築きあげ

にまた、大師がこの寺を非人乞食に與へて、その屯所にしてしまはれても、異存はありませぬ』といつてある。これは實に驚くべきことである。苟も一世の大善知識で、その德化が六百年後の今日に及び、現に一萬數千の寺院と數百萬の信徒を有してゐられる大師への寄進狀に、持戒破戒を問はずとか、非人乞食に與へられても異存がないとか、その他樣々の不吉に見えるやうなことを陳してあるのは、蓋し他に類例のないものだらうと思ふ。然し、この寄進狀のこの文字こそは、誠に大師の大師たる所以を示すもので、また今日我等の讃仰措く能はざる所である。

某々は持戒淸淨であるから貴いとか、王侯貴族の緣者であるから有り難いとか、曰く博學多識、曰く定慧雙修、曰く何、曰く何、所謂曰く付きで貴ばれるのは眞に貴いのではない。人格として人間として貴いのでなく、たゞ一方面的一部分的に貴いのである。假令一方面でも一部分でも、貴くないよりは貴い方がよいにはきまつてゐるが、我等はもつと〳〵貴いものを要求してゐるのである。卽ち全體として貴いものを要求してゐるのである。

禪語に『身に寸絲をつけず』體に何一つ着けてゐない、裝飾は無論のこと、着物一枚腰卷一つつけてゐないといふことがあるが、この『身に寸絲をつけず』して貴いのでなくてはおもしろくない。俗にいふ『裸一貫』でゐて貴いのでなくては眞に貴いのではない。

附屬物や裝飾品の貴い人は多くあるが、地位とか身分とか位階とか、勳等とか何とか乎とか、外から付

に、好日でない日が何處にあらうか。

赤裸の人格

南北朝の初めに、南朝の軍勢が互に入り亂れて戰鬪をつづけた場所は澤山あるが、その中の一として加能越の地をあげることが出來る。隨つて、この地が南北朝になる前、即ち鎌倉時代の末期に、既にその萠芽があつたであらうといふのは、無理からぬ想像であり、また、實際にその萠芽があつたのである。が、さういふ史論めいたことはともかく、その當時、その地の道俗を化導して最も盛譽あつた高僧に、常濟大師がある。常濟大師に就いていふべきことは、數限りなくある。我等日常の規範として仰ぐべき德行が無數にあるが、今その一端として、大師は誠に「赤裸の人格」の御方であつたことを述べやうと思ふ。

常濟大師が建立になつた寺の一に、能登の國の永光寺がある。この寺は酒井の地頭である滋野信直夫妻の開基であるが、夫妻のその敷地寄進状に『我等は唯だ大師が一時の御住所にこれを寄進するのであるから、何等の條件もつけたくはありません。將來この寺が榮えやうと廢らうと、そんなことは問題でありません、また大師が、持戒堅固であらうが、破戒の比丘であらうが、そんなことにも一向頓着いたしませぬ。更

である。

一體、人が日の善し惡しをいふとか、世間の浮雲にも比すべき利譽に心を勞するのは、その人の內心の不充實を示すものである。內に燃ゆる信條がなくて、人が行動をするときには、必ずや、その行動はのらくらする。大河の一時に決するが如く、やむにやまれぬ力強いものが、內より發する行動であるならば、のらくらしてはゐられない。人がのらくらした行動をするのは、要するに內心が充實してゐないからである。

內心の充實してゐる人の行動は、竪の行動である、深刻である。內心の充實してゐない人の行動は、橫の行動である、淺薄である。竪の深みある行動、これぞ實に切れば血を噴く活き活きした行動である。佛語を以つていふならば、これこそ眞に佛作佛行である。各人の衷心より迸り出づる行動である。何千年何萬年以來の歷史を體得し、更に一時一時、刻々に歷史を作り行くところの生きた行動である。

この行動をなすとき、日々はこれ好日、人々悉く道器といふ眞の味ひが出て來るのである。人はいふ『每日每日、牛馬のやうに使はれ機械のやうに働かされてゐては、日々これ好日もないものだ』と。これ洵に思はざるの言句である。

百草頭上無邊春、一草一木の微と雖も、生氣中に發すれば、繚亂の春の景色の一分に與かられる。況してや靈妙なる魂を惠まれてゐる人に、生命の發揚が何で出來ないといふことがあらう。意義發揚の前

した人に、我が常済大師がある。大師は大正十三年が滅後六百年であつたのだから、大師が『日々これ好日』の提唱をされたのは、今から六百何十年も前で、日を占ふといふやうな、迷信的なことの最も流行してゐるたゞ中に於てゞあつた。

大師は『身心徒らに放捨すること莫れ、人々悉く道器なり、日々これ好日なり』と提唱された。この前の句は「日々これ好日」といふこととの裏書きをしたものと見ることが出來る。

大師にしても、六百何十年の昔の人であるから、日の善し惡しを感じられぬでは無かつたに相違ない。今現にその跡をとゞめてゐる文書すら殘存してゐる。が、併しそれは大師を小にする所以のものでなくて却つて、その德を大にする所以のものであると思ふ。

大師は「道業いまだ成ぜず、身命たもちがたし、何ぞ後日を期せん」といひ、「行ふべきことを行はずして、徒らに日夜を過すは、口惜しきことなり、たゞ思ひ切りて、行ふべきを行ふべし、明日の活計なくば、飢え死もせよ、寒え死もせよ、今日の一日道を守り佛意に隨うて、行ふべきを行はん』といひ、更にまた『行ふべきを行ふことはおのづからその人あり、我がことに非ずといふは、愚劣の中の愚劣なり』といひて、道のためには身命を拋つて精進し、人にも切にこれを慫慂されてゐる。『行ふべきことのためには身心を放捨して精進する』といふ大師のこの信條、この信條の前には、日の善し惡しも何もない。熱鐵寸毫を立せずといふが、大師の白熱してゐる信條の前には、世のあらゆるものが燒きつくされてしまふの

我等は現代文化の光明によりて、また古聖先賢の教説によりて、世に氣まぐれな超人的の力や、氣まゝ勝手な運命の神があつて、我等を愚弄するやうなことは斷じて無いのであると諒知することが出來た。我等が今日謂ふ所の運命なる言葉は、未開不文時代の人の用ひた言葉と、言葉は同じであるけれども、意味には黑白霄壤の差がある。我等のいふ運命とは我慢氣儘な超人的存在のことでなくして、我々自身の行爲の力そのものであり行爲の光そのものである。この行爲の力、行爲の光、これこそは實に我々の現當を左右する鍵である。行爲の光、これを益々淸澄にし、至純に強盛にして、以て俯仰天地に慚ぢざる大成果を獲得するやうに驀進しなければならぬ。これが最も眞面目なる意味に於いての運命開拓であると思ふ。

日月に好惡なし

一生の大事件が決行されるときには、大事に大事を取つて、今日は日が惡い、明日は日が好いといふやうなことをいふ。これは何千年來の傳統であるから、かなり科學に心醉してゐる人たちでも、いざとなると躊躇する。これは洵に止むを得ぬことである。

『日々これ好日』といふことを提唱して、日の善し惡しをいふやうなことは、これを迷信として極力排斥

その無表業（動力）が、如何なる働きをするものであるかといふ點にあるのである。

然らば、如何なる働きをするのであるかといふに、先づ例で話すが判りがよい。こゝに人があつて手習ひをするとする、手習ひを十分なり一時間なり致せば、次に字を書く時分に巧く書ける、これは何故であるかといふに、大抵の人は、當りまへのことだといつて、何とも思はぬが、思つて見れば實に不思議な次第で、今、手習ひしたからといつて、次に字を書くとき、巧く書けなければならぬといふ理由はない。然るにも拘らず、巧く書けるといふのには、何か仔細がなければならぬ。そこを佛敎では說いて、前に謂ふ所の動力の働き、卽ち無表業の働きであるといふのである。而もこの無表業は、人の限られたこの一生に於いてのみ働くのでなく、永劫の未來にまで働くのである。で佛敎では、今世に於て爲した所の行爲（業）が、現世に於て報いられなくとも、次の世に、また次の世に、何時かは必ず報いられる。振りあげた鐵槌は大地を打ち誤ることがあつても、善惡の行爲が報いられないといふ事はないといふのである。

予はこの業の敎說を徹頭徹尾信受してゐるものである。而して予は常に思つてゐる、世の人々が眞にその幸福を欣ふならば、本氣にその永生を欣ふならば、何故にこの見易い業の道理を信受しないのであらうか、これを信受し精進して、善業を積まないのであらうかと。今、運命開拓の原理はと意見を徵せられるに當つても、予は「この業こそ」と答へる外に何もない。釋尊の說示し給ふ業こそは、實に運命開拓の原理である。

が非常に熾烈となつて、もはや閻魔の審判を俟たなくとも、人々各自はその爲す所の善惡に報いられ、善行は必ず善果を、惡行は必ず惡果を招くものであると確信せられ、世に善者の賞せられず、惡者の罰せられぬものがあるやうに見えるのも、それは善因善果、惡因惡果を此の短い一世に限つて見るからのことで、若しも三世を通貫してこれを見るならば、善惡の應報に寸毫の疑ひを挿む餘地もないのであるといふに至り、所謂超人的力の云爲、卽ち運命といふものがあるといふ信仰は、殆ど無くなつてしまつたのである。殊に釋尊が、『業』の思想を徹底的に說示あそばされるやうになつては、運命の信仰は全く業の信仰に換骨脫胎してしまつたのである。

　業の教說は、釋尊によつて創唱されたのではないが、最も合理的に、これを大成せられたのが釋尊である。業には表業と無表業との二つがある。表業とは要するに行爲である。但し佛敎にいふ行爲は、身の行爲のみでなく、口の言語も、意の念慮も、皆な等しく行爲と云ふ中に入るのである。この身・口・意の行爲が、既に行爲となつた以上、必ずそこにはその行爲によつて惹起される所の勢力といふものがある。この勢力、これを無表業といふのである。であるから、この無表業は、定義して、身・口・意の行爲によつて惹起さるゝ所の勢力で、これは誰れの目にも表示されることの無いものであるといふことが出來る。然し、これでは未だ無表業を十分に定義したとはいはれない。これだけでは、その勢力なるものが如何なるものかを說いてない。卽ち無表業を說く上に、一番肝腎な所が說かれてゐない。無表業の一番肝腎な所は

非常に明るい氣持を有つてゐたものらしい。殊に何といつても未だ素朴的で苦がないから、運命といふことに付いても深くは考へてゐなかつたらしい。が、閻魔（ヤーマ）といふ神のあることを信じ、この神は一切のことを決定するのであるから、この神を敬ひ、この神に犧牲を供へて、その歡心を買ひ、自分たちの幸福をいやが上にも幸福にし、死してはこの神の御前に召され、そこに樂しい〳〵生涯を始めやうぐらゐに考へてゐたやうである。

所が彼等の文化が更に進み、その居住地も恒河の方に移り、所謂中天竺の文化をなすに至つては、社會制度が固定し、諸般のことが爛熟し、總てがよくなつて來た譯であるが、一面また甚だ窮屈になつて來た。そこで彼等の間には、世は苦なり火宅なりといふやうな考へも出るやうになり、一方また道徳心が大いに目ざめて、責任觀念も強まつて來たので、以前には何事も閻魔の意のまゝで、ときには氣まぐれも依怙もあるかも知れぬぐらゐに考へてゐたのであるのが、何時の間にか、閻魔は公平なる審判の神とせられ、人の善惡の所行は、閻魔の淨玻璃の鏡に照される、人はまた其の裁きのまゝに、善人は光明の國に、惡人は暗黑の國（この世をも含む）に行くのである、と信じられるやうになつた。即ち人の吉凶禍福は、超人的力のでたらめや勝手氣儘で決まるのでなく、人々各自が、自分の行つた所の行爲の善惡によつて、恰現たゞしく決まるのであると信ずるに至つたのである。

それから更に印度文化が進んでくると、或る一部の賢者、殊に釋尊の御意の中には、道徳的の責任觀念

る、人の成功した道は己れの失敗する道となる、人の名をなした所以は己れの辱しめられる所以となる、善行必ずしも報いられず、惡行はまゝ過分に嚴罰される。人の身の上のことなどといふものは、全くでたらめのもので條理があつて決まるものではない。北歐の物語に、ノルネといふ三人の巫女がゐて、その紡ぎ出す所の絲で、出たらめに人を縛く、うまく好い絲で縛かれたものは幸福せとなるが、まづく縛かれたものは不幸せとなるのだといふ事があるが、實際そんなものかも知れぬといひたいほどである。幸福せの人は文句をいふまいが、不幸せになつた人は其れでは收りかねる、ここに問題が起る。善良な人、眞面目な人が問題を起すことになる。大正十二年の新年に『運命開拓號』が出る所以もこゝにあるといふべきであらう。

昔から、かうした問題については、樣々に考へられてゐる。一體、運命とは何であるかといふに、素朴未開の人は素朴未開の人らしい考へをしてをる。哲學的の人は哲學的の人らしい考へをしてをる。宗教的の人は宗教的の人らしい考へをしてをる。が、大體、運命とは人の吉凶禍福を支配する不可思議な超人的な力であると見る點に於ては、一致してゐるやうに思はれる。予は予の信奉する運命について述べたいのであるが、然し順序として、佛教に最も因緣の深い印度古代人の運命觀の一分を述べてみやうと思ふ。

印度には、今から三千數百年前、既に相當の文化があつたのであるが、當時の人は北印度即ち印度河の流域に棲んでゐたので、土地は豐饒であり氣候はよし、風景は絶佳であるといふので、その人たちは勢ひ

運命開拓の原理

凡そ世に何が愚であるといつても、「寶の山に入りながら、手を空しうして歸る」くらゐ愚なことはないが、世の多くの人は、その愚をやつてゐる趣きがある。今では世界の大動力となつてゐる所の石炭の如きも、昔の人は、取つて以て利用することを知らずにゐた。世界の大光明である所の電氣の如きも、昔の人は、恐ろしい惡魔の怪光であると思つてゐた。「一莖草を拈じて丈六の金身となす」といふ禪語があるが、全くその通りで、路傍の枯草や落葉からでも、どんな貴いものが見出されるかも知れぬ。曾ては邪魔物としてゐた所のものを、取つて以て生活を豊にする、曾ては恐ろしいと避けてゐた所のものを、取つて以て生活を潤澤にする、これが即ち現代人の運命開拓である。

然し、この運命開拓は容易いやうで却々容易くはない。何百年何千年の人類生活の成果を、一つ所に積みあげて眺むればこそ、運命開拓も大いに出來たやうにも見え、殆ど天意的のものまでも、やす／＼手に入つたやうに思へるのであるが、人類生活といふやうな大きな上のことでなく、我れ／＼自身のことだけについて考ふるならば、却々運命の開拓は容易でない。豫期は常に裏切られる、不意撃ちの事件は飛出す

含經はに『凡夫は自在を以て樂しみとするが佛は不自在を以て樂しみとする』とある。釋尊のやうに大自覺のある方は、凡夫の考からは不自在のやうに見えることが、却て樂しみであり、我等のやうに自覺の乏しいものは、實は不自在であることを自在のことであるやうに思つて、それを樂まうとし却て苦しむ。藥山禪師は常に節約放下で、日々瓔珞粥を喫してゐられたといふ。瓔珞粥といへば如何にも綺麗な名であるが、菜の入つた粥のことである、匙で粥をすくふと、菜葉がヒラ〳〵動くから、この名があるのである。

芙蓉楷祖はまた實に簡素な活計をいたされ、山を下らず請に赴かず、一歳の收穫を三百六十分し、日にその一分を取りて食事を辨じ、人の多少によりて增減せず、飯となして足るときには飯となし、飯となして足らざるときには粥となし、粥として足らざるときには米湯となし、米湯となして足らざるときには、更にそれに水を加へてこれを辨ずるといふ有樣であつた。それでも、楷祖を慕ふ多くの學人たちは樂しんでそこで修行をした。

極端なこともよろしくないが、自分の經濟狀態を顧みて、適當の節約放下をするがよい。孔子は『高うして能く下り、滿ちて能く虛に、富んで能く儉に、貴にして能く卑に、智にして能く愚に、勇にして能く怯に、辨にして能く訥に、博にして能く淺に、明にして能く暗に、是れを損じて極めず、能く其の道を行ふと謂ふ』と言はれた。我等も能くこゝの意味を咀嚼して、節約放下を學ぶべきである。

下は各人の心掛次第で、自由實行することが出來る。

この頃は都鄙を通じて虚榮熱が盛んになつて、社交も、學問も、藝術も、その心事を點檢すれば、多少虚榮的實質を帶びてゐないものはないといはれるほどである。が、この虚榮ほど恐るべきものはない。虚榮は人間を空虚にし、道念とか良心とかいふものを全く消滅させてしまふものである。

新津運輸事務所長が曾て鐵道五十年祝典の日に、五節といふ準則を管内各驛に配布されたが、それには、一、心を節して無駄なことを考へるな、二、言葉を節して無駄なことを言ふな、三、行ひを節して無駄なことをするな、四、時を節して無駄に過ごすな、五、物を節して無駄に使ふな、といつてある。これは、洵に適切な、節約訓といふべきである。

當龍先心禪師は節約放下といはれたが、その放下とは、これを專門的に解釋すれば難しい意味もあるが、つまりは無駄を省くの意である。

然しこの節約放下も、生活難のために辛抱して節約するとか、財貨を貯蓄するがために我慢して放下するとかいふのでは、苦痛に感じられて仕方があるまい。また、この節約放下のために、吝嗇な醜劣な行動を取るやうになることもある。が、それでは困る。節約放下が、樂んで而も正當に行はれるのでなくてはならぬ。

尤も、凡そ修養とか積徳とかいふことは、眞の自覺のない人には可なりの苦痛であり不自由である。阿

に聞えるかも知れぬが、決して詭辯でもなければ言葉の遊戯でもない。禪でいふことは常に體驗體得の上のことである。實際上のことである。

禪語に『玉は火中に向つて燒くとき轉た潤ふ』といひ、『今日見來れば火裏の蓮』といひ『鑊頭爐炭に清風起る』といひ、『心頭を滅却すれば火もまた涼し』といふは、皆これ苦熱の時には苦熱になり切つてしまへ、不平の時には不平になり切つてしまへ、なり切つてしまふ所に解脱の道が開けてゐる、否、成り切つた所が既に解脱であるといふことを說き示してゐるのである。」

生活難を救ふ道

黃龍死心禪師は『節約放下は最も入道の捷徑なり』と言はれた。今日は殊に節約放下を習ふことが必要である。世の中が一般に生活難を叫ぶその聲は、今日の社會の形勢では容易に息む時は來まいと思ふ。元來難きものは生活であると覺悟するが宜い。

生活難を救ふの道は二つある。一は生活を脅威する障礙物を除くこと、二は各自に節約放下を實行することである。生活を脅威する障礙物を除去することは、善良なる社會政策に待たねばならぬ。が、節約放

宗教の立場から、殊に禪の立場からは、この低氣壓、この爭議を如何するかといふ、それは極めて簡單である。不平があれば不平を觀じ、爭議があれば爭議を觀ずるまでゞある。更にいへば、何か不平なことが感ぜられゝば、その不平な事そのことは問題にしないで、その不平を感ずる心そのものを觀ずるのである、見つむるのである。

不平なことのある場合に、その不平なことを問題にしないで、その不平を感ずる心を觀じたとて、それが何になる、と難詰する人があるかも知れぬが、そこは實に「觀」の妙であつて、不平の心を觀じてゐると、その觀が深まるに隨つて、不平の心は消滅し、全く跡も形も無くなつてしまふ。つまり不平が不平でなくなり、不滿が不滿でなくなるのである。即ち解脱してしまふのである。

政治家や經濟家の立場からは、人が不平に感じ不滿に思ひ、問題を起すにも至らうとするやうなことに對しては、制度や政策によりてその禍根を除去するに力めなければならぬのであるが、宗教の立場からは、然ういふ外的の施設でなく、内的の力に訴へて一切の禍根を斷じ盡すのであるを以て急務とす。

天日熱し地氣燃ゆ、この苦熱は誰れにも苦しい。この苦しみを除去するには政治家等の立場よりは樣々の外的の施設をなして、風通しをよくしたり、休暇を制定したりしてゆくのであるが、禪の立場からは、苦熱のときには苦熱になつてしまふのである。

苦しいときには苦しいになつてしまふ、熱いときには熱いになつしまふ、といへば、何か詭辯のやう

天日熱し地瓦燃ゆ

苦熱の眞夏が來た。市内に出ると、屋根瓦といはず、鋪石道といはず、炎を吐いてゐるか、と思はれる。その熱氣を受けた、屋内の熱苦しさは言語に絶してゐる。海へ山へと、時間と金とに餘裕のある人たちが出かけるのは、無理からぬことで、一途に批難すべきではないと思はれる。が、時間や金に餘裕のある人は極少數で、市民の十中九分九厘までは、その苦熱と戰ひつゝ業務を致さなければならぬ。こゝに不平不滿の低氣壓が起る。

苦熱は獨り都市のみに限らぬ。農家の人々が田畑で勞作をする、その田畑は天日の熱を受けて足のひらが燒けつくほどに熱してゐる。その中で朝から晩まで筋肉勞働をやらねばならぬのであるからたまらない。農業は割が悪い、勞力に對して報いられる所が甚だ輕微であるといふやうな考も起り、大地主と小作との爭議も起る。

低氣壓が起り爭議が起る。これには道理はある、言ひ分はある。政治や經濟のその局に當る方々の一層の攻究を願いたい。

成る程、今まで資本主の奴隷であつた労働者が、労働者としての立派な位置を有するものであることが認められた、今まで大地主の牛馬の如くであつた小作人が、小作人として誰に憚るところもない、堂々たる小作人であるのだといはれるやうになつた、といへば、如何にも他人から縛られてゐた縄が解かれ、踏みつけられてゐた泥が洗はれたやうに見える。見えるは見えるが、然し、今日謂ふ所の解放とか自由とかいふことは、そんな皮相なことをいつてゐるのではないはずである。

真の解放、真の自由といふものは、これは他人相手の問題でなく、自分相手の問題でなければならぬ。他人が外から縛る縄がいくら緩んだところで、自分の心が、心の迷の縄で縛られてゐたらば、こんな不自由はまたとあるまい。

古来、苟も人の道に志したる人、少くとも宗教に救ひを求めた人は、何よりも先づ第一に、この心の縄目を解くことを冀うたのである。心の縄目を解くとは、各自の精神生活が一つの大組織を得て来ることである。心が有機的の統一體となることである。心が雑然として不統一の状態にあるときには、心と心とがこんがらがつて、糸がむすばれるやうな状態になる。これがほぐれて整然となる、これが真の解放である。而して、自分の心が真に解放せられ自由になるといふことは、やがて自分が他人より解放せられ自由になることであり、また同時に、自分が他人を解放し自由にすることである。この境地に至る時その人の眼は常に親しみに潤み、人の心を潤ほす。

眼は心の窓といはれてゐるが實に然うである。心が怒つてゐるときには、眼も怒りの焔に燃え、心が和らぎてゐるときには、眼も柔和の色を示してゐる。世が段々にせち辛くなり、問題が多くなると、人の眼が段々、冷くなり凄くなり恐ろしくなる。止むを得ぬといへば、それまでゞあるが、お互は然ういふことのないやうに愼まなければならぬ。

我等凡人の世の中であるから、種々の問題が起り、色々と心のいら〳〵し、憎惡することが多く出て來るのは、致し方がないといへば致し方もない、が、そこは、致し方のあるやうにして行くのが、人の人たる所以である、人の道である。

これが人の人たる所以である、これが人の道であるといふ、この言葉を、一種の脅迫のやうに感ずる人があるが、決してこれは脅迫ではない。これが脅迫の語と感ぜられるやうでは、まだ〴〵その人は、眞の文化を知る人とはいはれない。

現代人は自覺した、解放された、奴隸ではない、自由を愛する、とは能く叫ばれる言葉であるが、この自覺した解放された奴隸ではないといふ言葉が、動もすると對他的のことにばかり取られて、對自的のことにも適用さるべきものであることが忘れられてゐるやうである。解放されたとか奴隸ではないとかいふことは、何も他人から縛られてゐた繩が解かれたとか、他人に踏みつけられてゐたのが、今は然うでなくなつたとかいふのではない。

實行から流れ出た釋尊や孔孟の教說、それですら、動もすると人を誤ることがある。言辭言說といふものは、それほど不完全なものであるのである。そこで禪では「不立文字教外別傳」といひ「一丈を說得せんよりは一尺を行取するには如かず、一尺を說得せんよりは一寸を行取せんには如かず」といつて、文字の言說よりも行を重んずる。

行はこれ天下の法たり。行ひによりてのみ、不安定なる我等の生活は深められ、あわたゞしい我等の生活は落着きを見出し、一步一步、長安の大道を踏みしめて、所謂安心決定を得るのである。

青眼を以て人を見よ

親しい眼で人を見る、青眼で人を見るといふことは、實に望ましいことである。此の頃の勞働爭議とか階級爭鬪とか、學校騷動とか協會紛擾とか、新聞紙上を賑はしてゐる問題中の人々は、恐らくは互に見合ふのに青眼を以てしては居まいと思ふ。白眼を以て睨み合ひ、血走つた眼で恨み合うてゐるやうに思はれる。が、果して然うであるとすれば、實に悲しむべきことである。何時如何なる場合に於ても、親しい眼で人を見、青眼を以て人を見るといふことを忘れてはならぬ。

が幅をきかす時代になつた。

社會の樣々の問題などでも、『議論の時代ぢやない』と云はれてゐるやうであり、また所謂直接行動といふやうなことが、盛んであるやうに見える。『言論ぢやない實行だ』といふことが、一の標語になつてゐるやうな氣がする。この言論ぢやない實行だといふことは、東洋は最初からこれだつたので、歐米文化輸入の或る時期に、實行よりも言論が、偶々重んぜられたまでゞあるに過ぎぬ。

それはともかくも、東西兩洋、軌を一にして、言論よりも實行、更にいへば、抽象知の偏執よりも具象的の體驗、といふことに大勢が傾いて來たといふのは、大に祝すべきことである。

言論といふものは、とかく、一方に偏し易い。一局部に偏執して全體を輕忽にする傾きがある。勞資問題・農村問題等に就ての言論を見るに、殆どすべてが、一面的な抽象的な見方である。この言論に立脚して事を起せば、うまく行くはずが無い。畸形的となり、跛行的となる。かくて自他ともに、安定を贏ち得ないで苦まねばならぬ。

釋尊の教說、孔孟の教說、皆これ言辭ではあるが、それは皆な實行に裏書されてゐる。實行から出た言辭である。であるから、それが一見したところでは、抽象的な一面に偏した片手落ちをした言辭のやうに見えても、その實なか〳〵深い趣きを藏してゐる、全體性を負つてゐる。その言辭によりて、自己一身の生活は勿論、他の生活も一樣に深められてゆく所のものである。

行はこれ天下の法となる

司馬溫公といへば、水甕へ落こちたお友達を救ふために、水甕を打割つてゐる、かはいゝ唐子の溫公を思ひ出す。溫公は實に幼いときから奇才のある人であつたらしい。この溫公が中年になつて、禪に心を寄せ、禪のことを詩に詠じたものゝ中に、「言は百世の師となり、行は天下の法と爲る、久々掩ふべからず、これを不壞の身と名づく」といつてゐる。

言が百世の師となることは、今日、何百年何千年の昔の君子聖人の言が、格言金言として珍重されてゐるので能く分つてゐる。がこの頃のやうに言論の華ばかりが咲く時代の言で、百世の師範たり得るや否やは、頗る疑はしい。言論中毒とでも云はうか、今日では、多くの言論は殆ど顧みられなくなつて來た。顧みられないのは、舊いからとか、新らしいからとか、樣々理窟はつかうが、何れにしても、言論が重く見られないことだけは確かであるやうに感ぜられる。

ところで、「行」の方は、今日なか／＼に、その權威が認められて來た。善い意味に於ても、惡い意味に於ても、いな、穩健な方面に於ても、過激な方面に於ても、行が重く見られて、所謂實行家といふもの

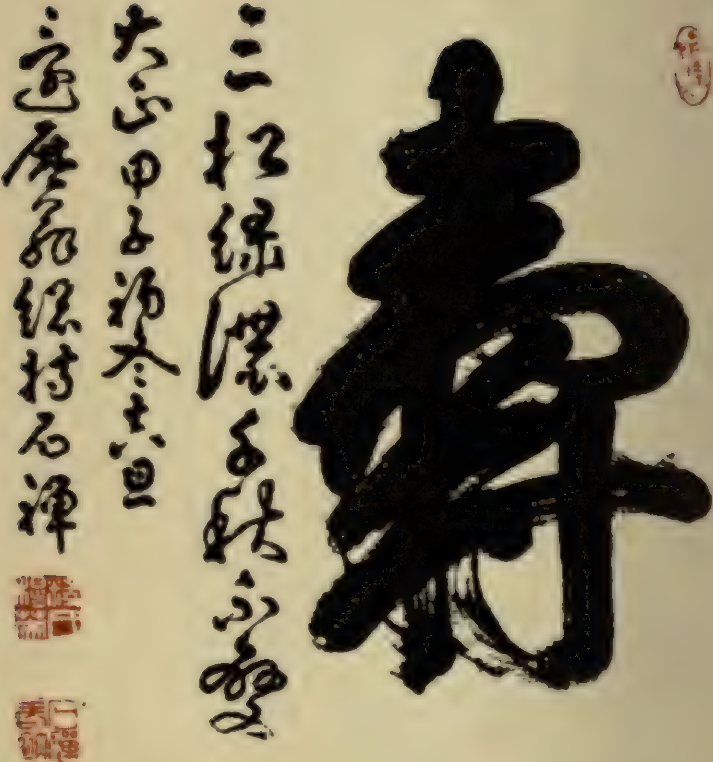
隨感隨想篇

禪榻茶話篇

目次

隨感隨想篇

目次


壽
三松綠濃千秋永壽

新井石禅全集

